

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13

平成 8 年度発掘調査報告
(第 1 分冊)

平成 9 年 3 月

鎌倉市教育委員会



若宮大路周辺遺跡群



下馬周辺遺跡

序 文

鎌倉市教育委員会
教育長 米 倉 雄二郎

市街地の都市化・再開発が急速に進む近年、鎌倉の街は古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に対して影響のある工事も多くなっています。このため、本市では昭和59年度から、個人専用住宅等については、国・県の補助を受け教育委員会が直接発掘調査を行うようにしてきました。

郷土の文化財を守るということは、現在に生きる国民の責務といわれていますが、本市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に、市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様のご理解とご協力をお願い申しあげる次第です。また、工事計画の策定に当たっては、できるだけ早い時期から当委員会との協議を行い、文化財保護の方策をつめていって頂きたいと思います。

本書は平成8年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した個人専用住宅・店舗併用住宅等に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするために少しでも役立つことを祈念するとともに、調査の実施に際してお世話になった調査員・事業者・工事関係者をはじめ多くの方々に、心からお礼申しあげます。

例　　言

- 1 本書は平成8年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係わる発掘調査報告書（2分冊）である。
- 2 本書所収の調査地点及び所収分冊は別表・図及び日次のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。
- 4 出土遺物及び写真・図面等の資料は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査内容の詳細は、各々の報文を参照されたい。

総 目 次

(第1分冊)

序文	III
例言	IV
平成8年度調査の概観	IX
1 天神山城 (No.384) 山崎字宮廻760番地点	
第一章 遺跡の概観	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第二章 調査概略	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 方眼設定方法	7
第3節 調査経緯	9
第4節 堆積土層	9
第三章 検出遺構と出土遺物	13
第1節 近世	13
第2節 中世	16
第3節 平安時代	23
第4節 古墳時代前期	26
第5節 その他の出土遺物	28
第四章 まとめ	32
2 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 御成町788番3外地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	53
第二章 調査の概要	56
1. 調査の経過	56
2. 調査方法	56
3. 測量軸の設定	56
第三章 検出遺構と出土遺物	59
1. 層序と生活面	59
2. 出土遺物の概要	59
3. 一面の遺構と遺物	60
4. 二面の遺構と遺物	62
5. 三面の遺構と遺物	74
第四章 まとめ	79

3 極楽寺旧境内遺跡 (No.291) 極楽寺三丁目320番1地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	102
第二章 基本層序	102
第三章 検出遺構・遺物	104
第四章 まとめ	111
4 台山遺跡 (No.29) 台字西ノ台1627番地点	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	126
第二章 調査の経過と堆積土層	128
第三章 検出された遺構と出土遺物	130
第四章 まとめ	133
5 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座三丁目364番1外地点	
第一章 調査地点概観	145
1. 位置と地勢	145
2. 歴史的環境	147
第二章 調査の概略	149
1. 調査にいたる経緯	149
2. 方眼設定方法	149
3. 調査の概要と経過	150
第三章 調査結果	151
第1節 概要	151
1. 層序と遺構面の概略	151
2. 出上遺物の概要	151
第2節 検出遺構と出土遺物	151
1. 井戸	151
2. 竪穴建物	151
3. 墓集中部	156
4. 方形土壙	156
5. 土壙	156
6. 柱穴様小落ち込み	166
7. 包含層その他からの出土遺物	168
第四章 まとめ	184
6 永福寺跡 (No.61) 二階堂字獅子舞603番1地点	
第一章 調査の経過	204
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	204
第2節 調査地の設定	206
第3節 層序	206
第二章 検出された遺構	206
第1面	206
第2面	207

第3面	207
第三章 出土した遺物	211
第1面	211
第2面	211
第3面	211
第四章 まとめ	217

(第2分冊)

7 極楽寺旧境内遺跡 (No.291) 極楽寺三丁目355番3地点

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	6
第二章 検出遺構・出土遺物	9
第三章 調査所見	11

8 建長寺旧境内遺跡 (No.397) 山ノ内字白黒小路1489番1外地点

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	22
第二章 調査の経過	25
第三章 検出された遺構と遺物	26
第1節 試掘出土遺物	26
第2節 1、2次掘り下げ時出土遺物	26
第3節 1面検出の遺構と出土遺物	29
第4節 1面包含層出土遺物	33
第5節 2面検出の遺構と出土遺物	34
第6節 2面上包含層出土遺物	39
第7節 トレンチ調査	40
第四章 まとめ	52

9 十二所福荷小路遺跡 (No.321) 十二所字宇佐小路740番2外地点

第一章 地理的・歴史的環境	64
第二章 調査の概要	65
第三章 検出遺構	66
第四章 出土遺物	68
第五章 まとめ	70

10 若宮大路周辺遺跡群 (No.242) 由比ガ浜一丁目118番7地点

第一章 遺跡の歴史・地理的環境	87
第二章 調査の経過と基本層序	89
I 調査の経過	89
II 基本層序	90
第三章 検出した遺構と出土した遺物	92
I 方形堅穴建築址	92

II 大形土壙状 遺構	97
III 土壙	101
IV 井戸址	110
V 遺物包含層中出土遺物（中世）	110
VI 遺物包含層中出土遺物（近・現代）	113
VII 中世基礎層直上出土遺物	113
VIII 表探遺物	113
IX 自然遺物	114
第四章 まとめ	115
11 下馬周辺遺跡（No. 200）由比ガ浜二丁目107番1地点	
第一章 環境と立地	145
I 歴史的環境	145
II 地理的環境	147
第二章 調査の概要	149
I 調査の経緯と経過	149
II 調査の方法	149
III 調査結果の概要	150
IV 堆積土層	150
第三章 検出された遺構と遺物	152
· 1面の遺構と遺物	152
· 2面の遺構と遺物	154
· 3面の遺構と遺物	158
· 土壙40構造部材計測表について	166
· 他遺構外等出土遺物	174
第四章 まとめ	179
附 編 下馬周辺遺跡の花粉化石	180
12 宇津宮辻子幕府跡（No. 239）小町二丁目361番1地点	
第一章 調査地点概観	214
位置	214
歴史的環境について	214
宇津宮辻子幕府跡の調査事例	215
第二章 調査の概要	217
調査経過とグリット設定	217
調査概要	217
第三章 検出した遺構・遺物	224
第四章 まとめ	237
附 編 宇津宮辻子幕府跡の花粉化石	240

平成 8 年度調査の概観

平成 8 年度の緊急調査実施件数は前年度からの継続を含め、19 件で、対象面積は 1,252.93m² であった。前年度の 13 件、1,099m² と比較し件数、面積ともに増加しており、いわゆるバブル経済崩壊後では、件数、面積とも最も多かったものであった。

調査原因の内訳は、専用住宅建設と店舗併用住宅に関するものが各 7 件で調査原因の過半を占め、他には診療所併用住宅及び専用住宅に係る車庫造成が各 2 件、共同住宅併用個人住宅が 1 件であった。

専用住宅に関するもののうち、土地の有効利用を図るために地下室を設置しようとするものが 3 件、耐震性を考慮して地盤改良を行おうとするものが 3 件あり、このような調査原因による発掘調査は今後も増加していくものと予測される。

本年度は若宮大路周辺の調査例が多く、大路の東側で 3ヶ所、西側で 2ヶ所の調査が実施された。いずれも大路の側溝及びその周辺の遺構が検出され、大路・側溝の構造、及び大路周辺の都市像の把握に寄与する多くの資料が得られた。特に後述 4 の北条時房・頼時邸跡で発見された大路と直行する道路と側溝に架かる橋の発見は注目されるものである。また、11 の北条小町邸跡からは若宮大路側溝造営に係る木簡も出土している。他に円覚寺旧境内遺跡において同寺の創建に合わせ前面の河川の付け替えが行われたことが判明したこと、大倉幕府周辺遺跡群において弥生時代の大規模な集落址が確認されたことなどが本年度の特記事項としてあげられる。以下各地点の調査に至る経過と調査成果の概要を紹介する。

1 名越ヶ谷遺跡 (No. 231)

名越ヶ谷の中央部、花ヶ谷東側の山裾に位置する。調査地は逆さ川の南岸、川から 3m 程高い平地で、調査地前面で大谷に入ってきた道が祇迦堂切通（トンネル）に向かう道と谷奥から名越切通に向かう道とに分岐している。平成 7 年 9 月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下 80cm 以下に地業層が確認された。このため、事業者と協議し、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成 8 年 2 月 15 日から 7 月 1 日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、工事掘削深度までの深さに 13 世紀末から 14 世紀中頃にかけて 8 面におよぶ生活面が確認され、掘立柱建物、板壁掘立柱建物、井戸などが検出された。なお、第 8 面の下にも包含層があることが確認されたが、工事による掘削が及ばないため、調査の対象外とした。

2 宇津宮辻子幕府跡 (No. 239)

若宮大路の東側、二ノ鳥居から 180m ほど鶴岡八幡宮寄りに位置する。平成 7 年 2 月診療所併用住宅建築の事前相談があり、鉄筋コンクリート造 5 階建てのケイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 75cm 以下に遺構面が確認された。これにより工事の実施による遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業計画が整った後、自己用住宅区域を対象として平成 8 年 3 月 18 日から 4 月 9 日にかけて発掘調査を実施した。

調査地は水田耕作による削平を受けて遺存状態は良好ではなかったが、13 世紀から 14 世紀にかけての若宮大路東側側溝とそれに伴う埠跡、土壙などが検出された。

3 米町遺跡（No. 245）

鎌倉中心部の平地の南側、大町四ツ角の南側、逆さ川の南岸の砂丘の北側斜面に位置する。平成7年11月に自己用店舗併用住宅の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下30cm以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議したが設計変更等が不可能であり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業計画が整った後、平成8年3月19日から7月1日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、方形堅穴建築址、板壁掘立柱建物、井戸、据え凳遺構等が検出された。このうち2棟の方形堅穴建築址の床面からは錢がまとまって出土しており、本遺跡の性格を暗示するものかもしれないと考えられる。

4 北条時房・顯時邸跡（No. 278）

若宮大路の西側、鶴岡八幡宮から南に約200mの位置に所在する。平成7年3月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として、平成8年4月15日から7月22日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、中世若宮大路の西側側溝が検出され、3回の造り直しが確認された。また、大路と直行する土丹敷きの道路が検出され、道路が側溝と接続する部分に側溝に架かる橋脚の礎板が発見されている。さらに、この道路と側溝に沿ってL字状に並ぶ塀の柱穴が、また、その塀に囲まれた敷地に掘立柱建物跡が検出されている。中世遺構面の下に平安時代中期の生活面が確認され、溝や柱穴が検出されているが、若宮大路とは全く方位が異なっていた。

5 北条小町邸跡（No. 282）

若宮大路の東側、鶴岡八幡宮から南に約150mの位置に所在する。平成7年12月に店舗併用住宅の事前相談があり、基礎掘削が深いところから、隣地の発掘調査の結果により工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し文化財保護法の手続きを経て、自己用区域を対象として、平成8年4月22日から5月14日までの間発掘調査を実施した。

調査により、近世若宮大路とその側溝及び中世若宮大路東側側溝等が検出されている。中世の側溝は何回かの造り直しが認められ、その変遷が把握できるものである。また、基礎掘削より下は遺跡が残されるため、調査の対象外とした。

6 佐助ヶ谷遺跡（No. 203）

鎌倉駅の西方、佐助ヶ谷の開口部に位置する。平成7年12月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であるため、本来であれば試掘調査を実施して協議するところであるが、後述8の事前相談に伴う試掘調査を西隣地で実施しており、その結果地表下70cm以下に遺構面が確認されていたので、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを行い、平成8年5月20日から8月5日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中頃から15世紀前半にかけて5期にわたる生活面が確認され、井戸、溝、柱

穴などが検出されている。井戸からは人の頭蓋骨が発見された。西隣の調査地と比べ遺構の密度が低く、明確な建物の跡も検出されなかったことから、隣地で検出された建物の裏手の部分と考えられる。

7 円覚寺旧境内遺跡（No. 434）

円覚寺門前の北側、小袋谷川の東に位置する。平成8年2月に専用住宅の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下60cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成8年5月24日から7月13日まで発掘調査を実施した。

調査により、円覚寺創建以前の埋没河川と創建後から14世紀前半にかけての生活面が検出された。このことから、円覚寺創建に伴い小袋谷川の流れが改修されたことが確認された。また、創建後から14世紀前半にかけての生活面から検出された掘立柱建物は瓦や磚を礎板に転用しており、雜舎等円覚寺に関連した遺構と考えられる。

8 佐助ヶ谷遺跡（No. 203）

前述6の調査地の西隣に位置する。平成7年11月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認され、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成8年6月10日から8月5日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、13世紀中頃から15世紀前半にかけて6期にわたる生活面が確認された。掘立柱建物・板囲い建物等多くの遺構が検出され、かなりの規模を持つ屋敷、もしくは寺院の一部ではないかと考えられる。出土遺物も多く、6の調査地の遺物と接合できるものもあり、両者が同一の遺跡であることを物語っている。

9 極楽寺旧境内遺跡（No. 291）

江ノ電極楽寺駅から西南方向約300mの月影ヶ谷に位置する。平成7年10月に専用住宅建設の事前相談があり、地下室を作る設計であったため試掘調査を実施したところ、地表下110cm以下に遺構面が確認された。事業者と協議したところ、埋蔵文化財に対する影響が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、平成8年6月17日から8月6日までの間発掘調査を実施した。

調査により、14世紀中頃から15世紀代にかけて3時期の土丹地業面を確認し、礎石建物、掘立柱建物等を検出した。

10 大倉幕府周辺遺跡群（No. 49）

大倉幕府の前面、金沢道の南側の滑川北岸段丘上に位置する。平成8年1月に共同住宅併用個人専用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、自己

用区域を対象として、平成 8 年 8 月 1 日から 12 月 5 日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、中世金沢道に沿った屋敷地が確認され、金沢道と道の南側側溝及び掘立柱建物、溝、横列、井戸等が検出された。また、中世造構面の下には弥生時代中期から後期にかけての集落があり、堅穴住居址 13 軒が検出されている。

11 北条小町邸跡 (No.282)

若宮大路の東側、鶴岡八幡宮から南に約 170m の位置に所在する。平成 7 年 12 月に店舗併用住宅の事前相談があった。クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果により工事の実施により造構の損傷が避けられないものと判断されたため、事業者と協議し文化財保護法の手続きを経て、事業者の準備が整った後、自己用区域を対象として、平成 8 年 8 月 12 日から 10 月 11 日までの間発掘調査を実施した。

調査の結果、鎌倉時代前期の若宮大路と平行する溝、鎌倉時代中期から後期の数時期の若宮大路東側の側溝が良好な状態で検出され、大路及び側溝の構造と変遷が把握された。また、大路側溝からは普請に伴い幕府が御家人たちに課役したことを示す木簡も出土している。

12 横小路周辺遺跡 (No. 259)

岐れ道の東、滑川の北岸に位置する。平成 8 年 6 月に専用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 60cm 以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであったため、文化財保護法の手続きを行い、平成 8 年 9 月 6 日から 9 月 20 日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の生活面が確認されたが、造構は希薄で、滑川に向かって下がる傾斜地であったことが判明した。

13 長谷小路周辺遺跡 (No. 236)

江ノ電由比ガ浜駅の北側に位置する。当該地は平成 2 年度に開発計画に基づき発掘調査が実施されているが、事業者が中断し、平成 8 年 9 月に新事業者による診療所併用住宅建築の事前相談があった。クイ基礎の計画であり、前回の調査の範囲外に及ぶものであったので、その部分については造構の損傷が避けられず、文化財保護法の手続きを行い、自己用区域を対象として、平成 8 年 10 月 28 日から 11 月 19 日までの間発掘調査を実施した。

調査は前回調査の範囲外 4 ヶ所に分かれ、いずれも小面積であった。発見された中世の造構は前回の調査でその一部が検出されていた方形堅穴建築址、道路、溝等の続きであった。一方、中世造構面の下からは前回確認できなかった古代の堅穴住居址が確認された。

14 円覚寺門前遺跡 (No. 287)

北鎌倉駅の北西側約 150m、小袋谷川沿いの西側に位置する。平成 8 年 8 月に専用住宅の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 100cm 以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により造構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成 8 年 11 月 6 日から 11 月 29 日まで発掘調査を実施した。

調査の結果、中世の遺跡は擾乱が多く、若干の土壌と一部包含層を確認したにとどまった。また、下層の調査により、前面の小袋谷川が中世以前はもっと西側を流れており、弥生時代以降に流れを変え、現在の位置になったことが、出土遺物及び土層観察の結果判明した。

15 明王院門前遺跡（No. 440）

市域の東部、十二所の六浦道の南側に位置する。平成 8 年 7 月、自己用住宅に係る車庫造成の事前相談があり、掘削深度が深いため試掘調査を実施したところ、地表下 50cm 以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議し、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業者の準備が整った後、平成 8 年 11 月 28 日から 9 年 1 月 10 日まで発掘調査を実施した。

調査対象地は狭小であったが、工事掘削深度までの深さに 13 世紀末から 14 世紀にかけて造成された数枚の地業面が確認され、それに伴う掘立柱建物跡やかわらけ溜まりが検出された。なお、工事掘削深度以下にも包含層が続くことが確認されたが、工事による掘削が及ばないため、調査の対象外とした。

16 若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

鎌倉市街地の中心部小町二丁目の扇ガ谷川の東に面して位置する。平成 8 年 6 月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 120cm 以下に埋蔵文化財が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、事業者の準備が整った後、自己用区域を対象として、平成 8 年 12 月 21 日から 9 年 1 月 27 日までの間発掘調査を実施した。

調査対象地は狭小であったが、14 世紀代の生活面を確認し、柱穴列や土壌が検出されている。

17 若宮大路周辺遺跡群（No. 242）

鎌倉駅の西隣、若宮大路を中心として大きく広がる当該遺跡の西端近くに位置する。平成 8 年 11 月に店舗併用住宅の事前相談があり、地下室を設置する計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下 80cm 以下に遺構面が確認された。このため、事業者と協議したところ、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成 9 年 3 月 10 日から発掘調査に着手した。

18 北条時房・顯時邸跡（No. 278）

若宮大路の西側、鶴岡八幡宮から南に約 220m の位置に所在する。平成 8 年 1 月に店舗併用住宅の事前相談があり、クイ基礎の計画であり、隣地の発掘調査の結果から工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、発掘調査の実施を前提に事業者と協議し、文化財保護法の手続きを経て、調査実施方法等の協議が整った後、自己用区域を対象として平成 9 年 3 月 12 日から発掘調査に着手した。

19 宝蓮寺跡 (No. 374)

鎌倉駅の西方、佐助ヶ谷の奥の一支谷に位置する。平成8年12月に専用住宅建設の事前相談があり、地盤改良のクイ基礎計画であったため試掘調査を実施したところ、地表下70cm以下に遺構面が確認された。このため、設計変更を含め、事業者と協議したが設計変更等が不可能とのことであり、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたため、文化財保護法の手続きを行い、平成9年3月17日から発掘調査に着手した。

平成 8 年度発掘調査地点一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
1	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1736番2外	個人専用住宅 (車庫造成)	都市	182.00m ²	H8.02.15 ~07.01
2	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目361番1外	診療所併用 住宅	官衙	31.00m ²	H8.03.18 ~04.09
3	米町遺跡 (No.245)	大町二丁目391番1	店舗併用住宅	都市	140.00m ²	H8.03.19 ~07.01
4	北条時房・顯時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目272番	店舗併用住宅	城館	110.00m ²	H8.04.15 ~07.22
5	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目370番1	店舗併用住宅	城館	68.00m ²	H8.04.22 ~05.14
6	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番24	個人専用住宅	都市	80.06m ²	H8.05.20 ~08.05
7	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字瑞鹿山509番1 の一部	個人専用住宅	社寺	59.52m ²	H8.05.24 ~07.13
8	佐助ヶ谷遺跡 (No.203)	佐助一丁目450番25、27	個人専用住宅	都市	61.56m ²	H8.06.10 ~08.05
9	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目348番2	個人専用住宅	社寺	30.45m ²	H8.06.17 ~08.06
10	大倉幕府周辺遺跡群 (No.49)	雪ノ下四丁目620番5	共同住宅併用 個人専用住宅	都市	126.29m ²	H8.08.01 ~12.05
11	北条小町邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目369番1	店舗併用住宅	城館	45.43m ²	H8.08.12 ~10.11

No.	遺 跡 名	所 在 地	調査原因	種 別	面 積	調査期間
12	横小路周辺遺跡 (No.259)	雪ノ下五丁目557番1	個人専用住宅 (二世帯)	都 市	18.00m ²	H8.09.06 ~09.20
13	長谷小路周辺遺跡 (No.236)	由比ガ浜三丁目228番2の 一部外2	診療所併用 住宅	都 市	11.45m ²	H8.10.28 ~11.19
14	円覚寺門前遺跡 (No.287)	山ノ内字藤源治951番2	個人専用住宅	都 市	63.62m ²	H8.11.06 ~11.29
15	明王院門前遺跡 (No.440)	十二所字積善952番6	個人専用住宅 (車庫造成)	都 市	12.00m ²	H8.11.28 ~9.01.10
16	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	小町二丁目28番3、5	店舗併用住宅	都 市	9.13m ²	H8.12.21 ~9.01.27
17	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町123番5	店舗併用住宅	都 市	46.40m ²	H9.03.10 ~05.20
18	北条時房・顯時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目273番4	店舗併用住宅	城 館	94.82m ²	H9.03.12 ~06.19
19	宝蓮寺跡 (No.374)	佐助二丁目897番11	個人専用住宅	社 寺	63.20m ²	H9.03.17 ~04.30

本誌所収の平成7年度調査地点一覧

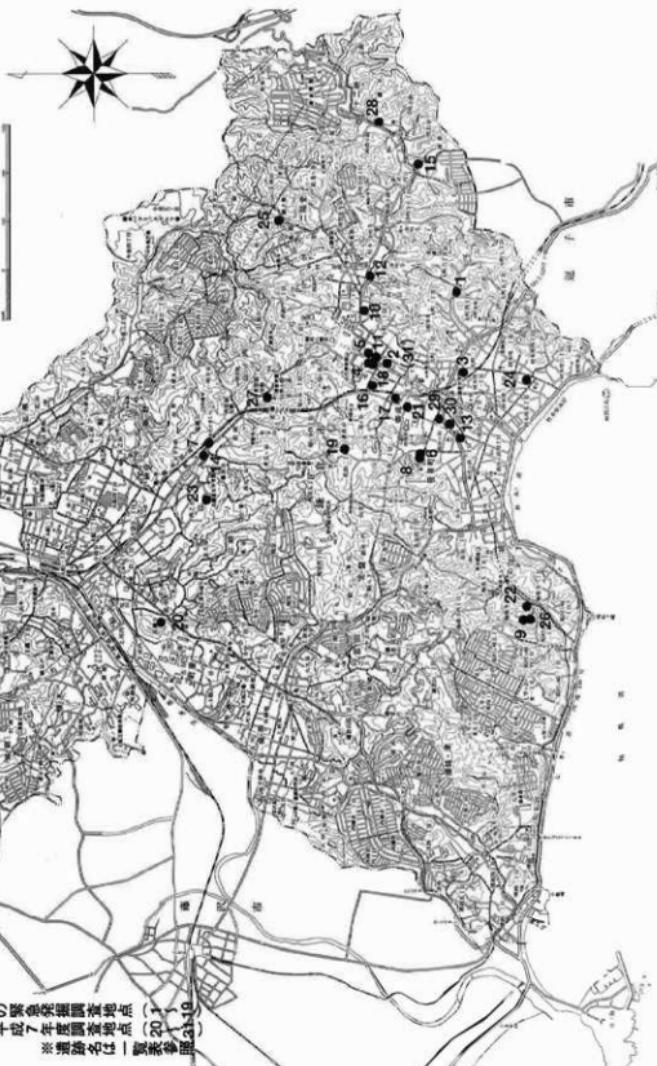
(調査実施順)

No.	遺跡名	所在地	調査原因	種別	面積	調査期間
20	天神山城 (No.384)	山崎字宮廻760番	集合住宅 (専用住宅)	城郭 散布地	120m ²	H7.02.13 ~08.31
21	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	御成町788番3外	店舗併用住宅	都市	68m ²	H7.03.09 ~04.15
22	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目320番1	個人専用住宅	社寺	100m ²	H7.06.12 ~06.30
23	台山遺跡 (No.29)	台字西ノ台1627番	個人専用住宅 (車庫造成)	集落跡	56m ²	H7.06.19 ~07.06
24	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目364番1外	個人専用住宅	都市	100m ²	H7.06.19 ~07.29
25	永福寺跡 (No.61)	二階堂字獅子舞603番1	宅地造成 個人専用住宅	社寺	128m ²	H7.07.07 ~09.22
26	極楽寺旧境内遺跡 (No.291)	極楽寺三丁目355番3	個人専用住宅 (車庫造成)	社寺	30m ²	H7.07.19 ~08.02
27	建長寺旧境内遺跡 (No.397)	山ノ内字白黒小路1489番1 外	個人専用住宅	社寺	107m ²	H7.07.20 ~09.13
28	十二所稲荷小路遺跡 (No.321)	十二所字宇佐小路740番2 外	個人専用住宅	都市	54m ²	H7.08.04 ~08.26
29	若宮大路周辺遺跡群 (No.242)	由比ガ浜一丁目118番7	個人専用住宅 (車庫造成)	都市	15m ²	H7.12.18 ~12.29
30	下馬周辺遺跡 (No.200)	由比ガ浜二丁目107番1	店舗併用住宅	都市	40m ²	H7.12.11 ~8.1.14
31	宇津宮辻子幕府跡 (No.239)	小町二丁目361番1	診療所併用 住宅	官衙	30m ²	H8.03.18 ~04.09

※は8年度に調査が継続した地点

鎌倉市全図

1 : 50,000



平成8年度の緊急避難調査地点
本着場観測の平成7年度調査地点（一）
※調査名は一覧表参照

てんじんやまじょう
天神山城 (No. 384)

山崎字宮廻760番地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市山崎字宮廻760番における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる自己用住宅部分の報告である。
2. 発掘調査は共同住宅建設に伴う原因者負担事業分と並行して行われた。遺跡の全発掘調査期間は平成7年1月6日から平成8年2月5日まであり、国庫補助事業分は平成7年2月13日から8月31日まで行われた。
3. 本報告は全調査面積2180m²のうち、国庫補助事業分に関わる120m²分の調査報告である。そのためこれに含まれる遺構、遺物については記載したが、国庫調査区外になる部分の整理作業はまだ途上である。そのため全調査面積分の報告書作成の際には今回掲載した出土遺物以外に同一遺構において実測遺物の数量が増すであろうことをお断りしておく。
4. 国庫調査区は二分されるため、北側のものをA区、東側のものをB区と称する。
5. 発掘調査団の構成は以下のとおりである。

調査担当者　田代郁夫

調査員　松山敬一朗　浜野洋一　土屋浩美

調査補助員　渡辺王夫　高橋健一郎　岩崎卓治　本田礼　橋本勝正　小川綾美子　小針恵子　小屋抄子　島雄幸　高山章子　武田典子　水戸裕子　上田求実　森かおり　犬塚知孝

調査協力　杉沢　博　安田ヒデ　青木綾子　穂山千恵子　荒井ソノ　石井ちず子　岩田節子　蒲谷山利子　成田サキ　根本公　安田信男　川村四志男　福本寿夫　管野五郎　鈴木英次　安藤種夫　赤木泰彦　出川清次　沼上三代治　吉本脩三　藤枝政義　岸親男　池田義春　田口農　村田浩通

6. 本書の第2章2節を浜野洋一が執筆し、その他の項の執筆および編集作業を松山敬一朗が行った。遺物実測、トレース、図版作成を松山敬一朗、深尾義子、早野慈子、鈴木豊美、佐藤節子、小屋抄子、笠原さやかが行った。
7. 中世遺構全景写真は木村美代治（鎌倉考古学研究所）がリモコン式高所撮影装置を用いて撮影した。その他の遺構写真は松山敬一朗が撮影した。遺物写真的撮影は上田求実が行った。
8. 発掘調査及び報告書作成に際しては下記の方々よりご教示、ご協力を賜った。記して深く感謝致します。

上田薰（神奈川県教育委員会）、大上周三、服部実喜、高村公之（かながわ考古学財团）、松尾宣方、玉林美男、永井正憲、小林康幸（鎌倉市教育委員会）、大三輪龍彦（鶴見大学教授）、手塚直樹、河野真知郎、齐木秀夫、宮田　真、宗臺秀明、大河内勉、福田　誠、原　廣志、木村美代治、宗臺富貴子、菊川英政、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）、桜井准也（慶應義塾大学助教授）、岡本直久、河合君近（瀬戸市埋蔵文化財センター）、荒川正夫（早稲田大学本庄考古学資料館）、中三川昇（横須賀市教育委員会）、大塚真弘（横須賀市人文博物館）、佐藤仁彦（逗子市教育委員会）、鎌倉市高齢者事業団、藤和不動産、大成建設、都実業、湘和総合開発

火山灰分析及び地形、地質についてのご教示を上本進二（県立旭高校）にいただいた。

現地発掘調査、整理作業に関して沢田大多郎（日本大学講師）に多大のご協力をいただいた。

目 次

第一章 遺跡の概観	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第二章 調査概略	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 方眼設定方法	7
第3節 調査経過	9
第4節 堆積土層	9
第三章 掘出遺構と出土遺物	13
第1節 近世	13
第2節 中世	16
第3節 平安時代	23
第4節 古墳時代前期	26
第5節 その他の出土遺物	28
第四章 まとめ	32

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	6	図15 8号溝状遺構出土遺物	21
図2 調査地点と周辺遺跡	7	図16 地業面および1号掘立柱建物址	22
図3 地理的位置図	8	図17 1号土坑	22
図4 堆積土層	10	図18 平安時代および古墳時代前期遺構配置図	23
図5 調査区全測図	11	図19 16号・17号溝状遺構、同出土遺物	24
図6 近世遺構配置図	13	図20 18号溝状遺構	25
図7 水田址および6号溝状遺構	14	図21 216号土坑、同出土遺物	25
図8 5号溝状遺構	15	図22 1号土器溜り出土遺物	26
図9 炭焼窯	15	図23 2号土器溜り	26
図10 中世遺構配置図	16	図24 2号土器溜り出土遺物	27
図11 池状遺構	18	図25 215号土坑	27
図12 池状遺構(等高線配置図)	19	図26 3号土器溜り	28
図13 池状遺構出土遺物	20	図27 3号土器溜り出土遺物	29
図14 7号・8号溝状遺構および 1号・2号道路状遺構	21	図28 その他の出土遺物	30
		図29 瓦	31

表 目 次

表1 1号道路状構周辺ピット観察表.....	21
表2 1号掘立柱建物址柱穴観察表.....	22
表3 出土遺物観察表.....	33

図 版 目 次

図版1 1. 調査前状況 2. 堆積土層（水田址・池状遺構） 3. A区・B区近世全景.....	39
図版2 1. 5号溝状遺構 2. 炭焼窯 3. 炭焼窯煙道部.....	40
図版3 1. A区・B区中世全景 2. 池状遺構.....	41
図版4 1. 池状遺構 2. 1号掘立柱建物址.....	42
図版5 1. A区・B区古代全景 2. 16、17号溝状遺構.....	43
図版6 1. 2号土器溜り 2. 216号土坑 3. 3号土器溜り	44
図版7 出土遺物 池状遺構・8、16、17号溝状遺構・216号土坑	45
図版8 出土遺物 1、2、3号土器溜り	46
図版9 出土遺物 その他の出土遺物・瓦	47

第一章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

天神山城遺跡は鎌倉市山崎字宮廻760番に所在する。本遺跡は鎌倉市の北西部にあたり、JR大船駅から南西へ約1.5kmの地点にある。三浦半島の付け根部分にあたる鎌倉市域には半島から続く広範囲な、侵食の進んだ丘陵地帯が占めており、低地部は旧市街地を流れる滑川流域と、市北西部を流れる柏尾川流域にほぼ限定される。遺跡は丘陵地帯の北西先端部、標高約63mの天神山の南東部にあたる。この天神山は現在は市道及び京浜急行モノレールにより分断されているため独立した丘陵のように見え、柏尾川左岸に広がる沖積地に突き出る形となっている。調査地点から柏尾川までは約500mの距離にある。天神山の東側には幅、奥行きともに約300mの比較的大きな谷戸が形成されており、調査地点はこの谷戸の南西隅の幅約80m、奥行き120mの小支谷に立地している。正確には調査地点はこの小支谷内の東側半分とその前面部の一部である。調査区は南北に標高約30mの尾根、西側に天神山東側斜面に三方を閉まれる形となっている。

調査地点の標高は、沖積地から連なっている東端で約13m、西端で約17.5mを測る。

第2節 歴史的環境

遺跡は遺物散布地として早くから周知されている。『鎌倉市史』考古編によれば天神山山上で縄文時代早期の遺物が採集されている。また天神山の北東山裾では古墳時代後期の祭祀関連と考えられる多量の遺物が採集されている⁽¹⁾。周辺にも幾つかの遺跡が存在しているが、その大部分は天神山の南東側一帯に広がる丘陵地帯のものである。遺跡の南側の富士塚一帯は、縄文時代の集落が存在したと言われ、この南側で現在調査中の寺分富士塚遺跡でも山上から縄文時代の土器片が検出されている。そして時代は下るが、遺跡の南東約400mには山崎横穴墓群、約600mの地点には垣根谷横穴墓群が存在し、遺跡から約1.5km東の台峰一帯にも同時期の集落が存在していたようである⁽²⁾。遺跡周辺での発掘調査事例は殆ど行われていなかったが、近年になって数箇所で発掘調査が行われている。『倉久保遺跡』は遺跡の南東約400mの地点で、奈良時代前半の住居址1軒と古墳時代前期の住居址5軒が検出された⁽³⁾。『水道山遺跡』は遺跡から東へ約800mの丘陵上にあり、ここでは平安時代後期の住居址12軒が検出された。前述した台峰地区でも4箇所の調査が行われており、弥生時代から平安時代に及ぶ住居址が検出されている。なお、天神山の南西側山裾部でも調査が行われているが、少量の土師器片が検出されたにとどまり、遺構は検出されていない⁽⁴⁾。

調査区南隣の小支谷には14世紀中葉に開かれたとされる宝積寺という禪宗寺院が存在したと言われている。天神山の山上にある北野天神社はかつての宝積寺の鎮守であったとも言われており、境内には応永12年銘の宝篋印塔が遺存している。

(1)菊川英政「天神山採集の古墳時代後期土器」「鎌倉考古」No.33 1995.

(2)「台山藤源治遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」1, 4, 8 1985, 1988, 1992

(3)「倉久保遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」12 1995.

(4)「山崎天神山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」10 1993.

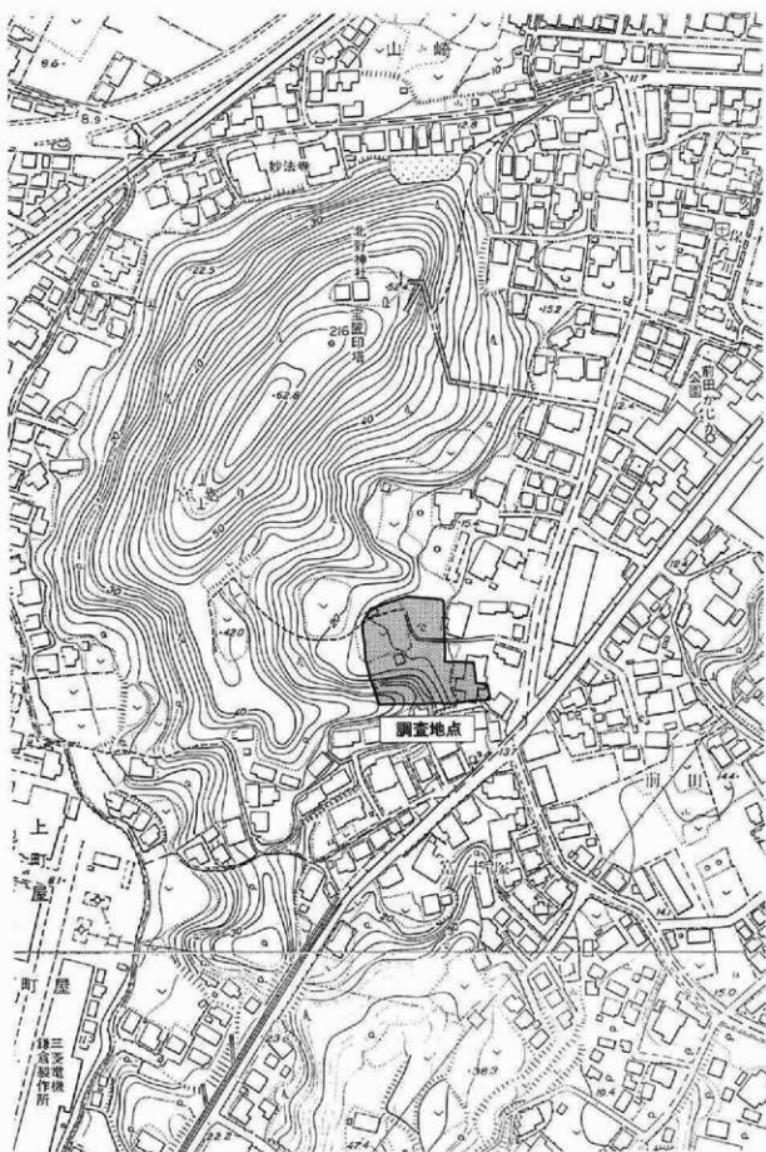


図1 遺跡位置図 (1:2500)



図2 調査地点と周辺遺跡 (1:20000)

1. 山崎天神山遺跡(1993年調査)
2. 倉久保遺跡(1994年調査)
3. 水道山遺跡(1995年調査)
4. 寺分富上塚遺跡(1996年調査)
5. 台山藝術源治遺跡(1985, 1988, 1992年調査)
6. 山崎横穴墓群
7. 坡根谷横穴墓群
8. 倉久保横穴墓群

第二章 調査概略

第1節 調査に至る経緯

平成5年9月、共同住宅建設等を含めた開発申請に伴う事前相談があり、このため鎌倉市教育委員会が試掘調査を実施した。この結果表土下約60cmに遺物包含層、その下層に中世期の溝状遺構を始めとする遺構の存在を確認した。事業者と鎌倉市の協議を経て、平成7年1月6日より平成8年2月5日まで発掘調査が実施された。調査面積は2180m²であるが、これには自己用住宅部分約120m²が含まれており、この部分は国庫補助事業分として平成7年2月13日より8月31日まで調査が行われた。

第2節 方眼設定方法(図3)

調査区の形状に照らして全域に4mメッシュを設定した。当調査地点において、地理学的位置データを明確にするためにトラバース測量による基準点移動作業を行い、調査区のほぼ中央に位置する「I-6グリッド」杭に国土座標地、及び地理学的緯度経度の算出を試みている。成果は以下のとおりである。

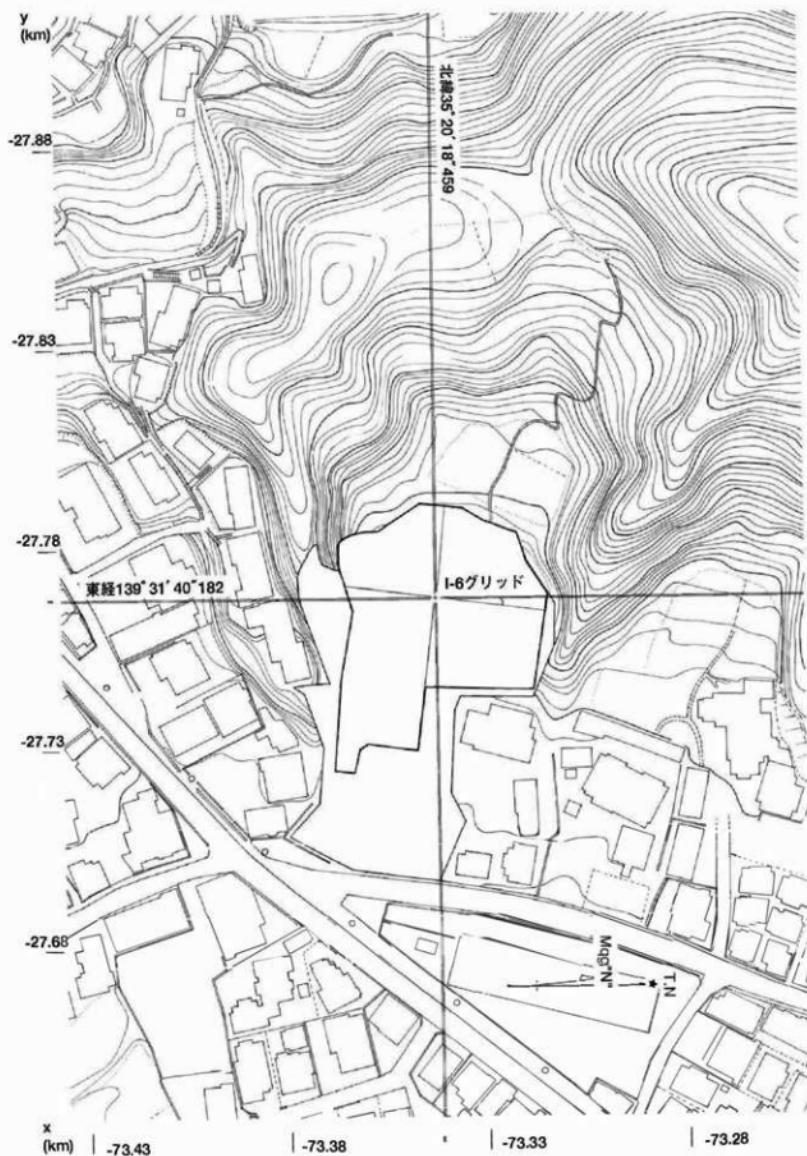


図3 地理的位置図 (1 : 12000)

国土座標地（第9座標系） X -70448.061 Y -35380.541

地理学的緯度 度分秒 北緯35度21分51秒503 東経139度26分38秒205

また、6ラインの子午線偏角差は、ライン北向延長線が、真北より6度42分61東偏する。これらの成果については図3にもまとめられているので、併せて参照していただきたい。

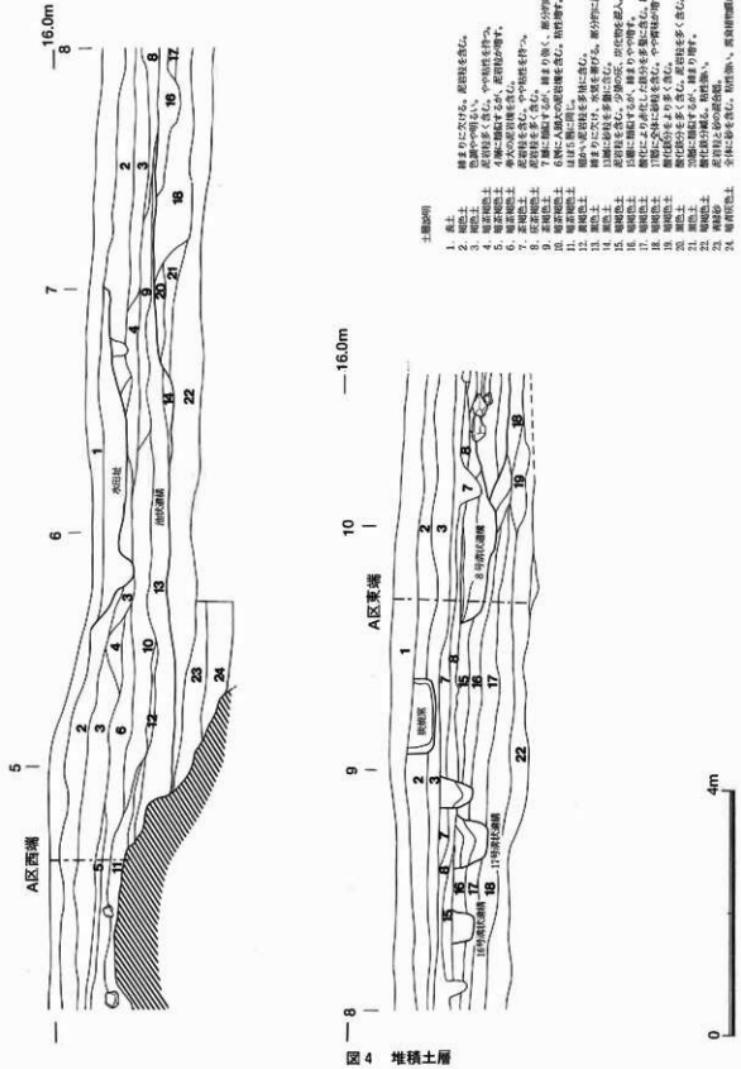
第3節 調査経過

発掘調査は基本的に原因者負担分と国庫補助事業分が平行して行われた。原因者負担分は平成7年1月6日より開始し、国庫分は2月13日より行われた。調査は重機および人力による表土の掘削から開始し、順次近世遺構面、中世遺構面、古代遺構面の検出作業を行った。国庫事業分は平成7年8月31日に、原因者分は平成8年2月5日に調査が終了した。以下に両者を合わせた検出した遺構を時代別に列挙する。

近代	礎石建物址1棟、室状遺構1基、溝状遺構5条等
近世	溝状遺構4条、水田址、炭焼き窯1基、ピット約20基
中世戦国期	やぐら1基、井戸址1基、溝状遺構5条、掘立柱建物址1棟
中世初頭	池状遺構、溝状遺構3条、掘立柱建物址1棟、道路状遺構、地業面、土坑15基
平安時代後期	溝条遺構4条、遺物集中箇所2基
平安時代中期	竪穴住居址6軒、建物址1棟、井戸址1基、土坑・ピット40基、遺物集中箇所2基
奈良時代前半	竪穴住居址4軒、遺物集中箇所1基
古墳時代後期	竪穴住居址2軒
古墳時代前期	竪穴住居址5軒、土坑約20基、遺物集中箇所3基

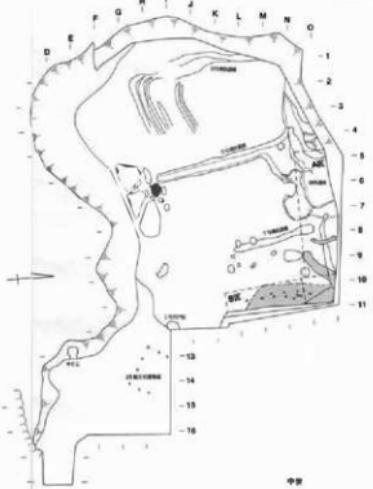
第4節 堆積土層（図4 図版1）

本調査区は小支谷に立地している故に堆積土層には小支谷奥側と南北の尾根からの土砂の流入と流失を繰り返した形跡が多く見られる。また開口部側は沖積地に連なるため粘性の強い土壤となっている。よって本調査区の堆積土層は一様に述べられるものではない。A区、B区では褐色土で構成される近世層、茶褐色土の中世層、粘性の強い青味を帯びた黒色土の古代層に大別される。これらの上層は東側に向かって緩やかに傾斜しているが、中世前半の段階ではこの軟弱な地盤を補強し、また水平に保つ地業面の形成が見られる。古代黒色粘質土の下には青緑砂層が50cm程堆積している。これは谷戸奥側では赤褐色を呈しており、酸化の度合いによる色調の違いと見られる。これらの砂層は谷戸中央部程厚く堆積している。本層の形成時期は弥生時代後半と考えられる。





东区



中区

图5 漢城汉代图



第三章 検出遺構と出土遺物

第1節 近世

A区で検出された遺構は水田址、6号溝状遺構、炭焼窯、B区で検出されたものは5号溝状遺構である。

水田址（図7 図版1）

L～O-6～10グリッドで検出された。A区に北側の約1/3が含まれる。A区内での規模は幅約4.7m

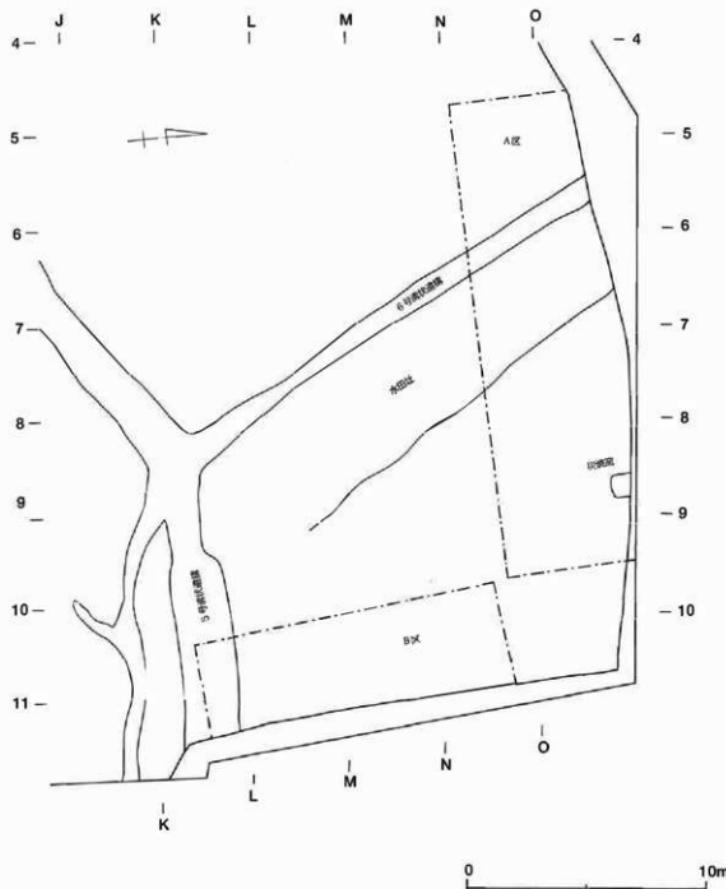


図6 近世遺構配置図

から4.9m、深さは最大42cmであり、帯状の落ち込みとして検出された。5号溝状遺構が重複している水田址西側では約40cm程度の深度を持つが、東側は10~20cm程度であり、東側の方が浅くなっている。標高は水田址底面で約14.2mである。覆土は締まりに欠ける褐色土である。本址の底面は多少の凹凸はあるが、基本的には平坦で、南に向かって緩やかに傾斜している。走行方位はN-25°-Wを示す。

前述したようにこの遺構の覆土は締まりに欠ける褐色土で、水田址の覆土とは考えにくいものであった。しかしこの帶状の浅い落ち込みを水田址と名称しているのは、施主の家に残る江戸時代末期と考えられる、この小支谷の地割りを記した古絵図に基づいてのことである。この古絵図には3号、4号、5号溝状遺構、水田址と見られるラインが描かれており、特にこの帶状の部分には水田と記してある。この古絵図とこれら近世遺構の配置、位置関係がほぼ等しいことから、この帶状の落ち込みに対して水田址という名称を与えていている。ただこの遺構が実際に水田として機能していたのかは疑わしいところである。おそらく一時的に水田として利用された時があったとしても、大部分は小支谷内部での排水目的に利用されていたと思われる。

遺物の大半が混入した土師器、須恵器細片である。A区外では18~19世紀代の陶磁器が検出されているが、水田址底面直上からはガラス等の近代遺物も検出されている。構築時期については古絵図に記されていることから近世末期としておく。

5号溝状遺構（図8 図版2）

J~K-9~12グリッドで検出した。B区に東端の一部のみ含まれる。この5号溝状遺構は3号、4号溝状遺構の交点から東に向かい、調査区外へ延びていく。走行方位はN-5°-Eを示す。遺構の規

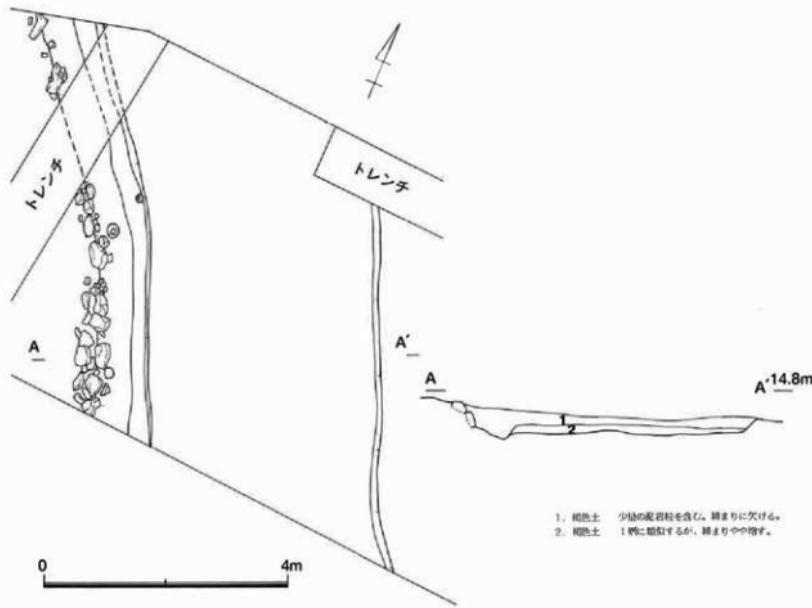


図7 水田址および6号溝状遺構

模は東端部で幅約240cm、深さ10~15cmで、また南壁寄りには幅約15cm、深さ約20cmの狭い溝が重複している。これらいずれの溝状遺構も縦まりに欠ける褐色土を覆土としており、ほぼ同時期の所産であると考えられる。

B区内での出土遺物は混入した微細な土師器片のみである。層位、覆土から考えて近世末期~近代のものであると見られる。

6号溝状遺構(図7)

K~O-6~9グリッドに位置し、北側の1/3がA区内に含まれる。水田址の西壁際を北西から南東方向に走っている。規模はA区内で幅約90cm、下場は約20~30cmである。走行方位はほぼ水田址と同じでN~25°~Wを示す。覆土は縦まりに欠ける褐色土で水田址のものとほぼ同じである。本址の西壁上場部分には泥岩片が据え置かれている。また本址内にピットが2個あり、このようなピットはA区外にも多数見られることから、構列等の存在が伺える。

A区内での出土遺物は混入した土師器片のみであった。層位、覆土から水田址等とほぼ同時期の所産と見られる。

炭焼窯(図9 図版2)

A区、O-9グリッドで検出した。遺構の一部が調査区外へ延びるため、全容は不明である。検出した範囲での規模は南壁は140cmで、東壁は116cm、西壁は135cm残存している。深さは最大で42cm、底面はほぼ平坦である。南壁には径15cm程の貫通した穴が開けられており、煙道と思われる。遺構の壁面は真っ黒に炭化している。覆土は褐色土を基本とし、多量の焼上ブロック、炭化物を含んでいる。遺構の周囲50~250cmには薄い焼上が広がっているが、これは実際の近世遺構確認面よりは約30cm上層である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明であるが、層位から判断すると近世末期~明治時代のものであろう。

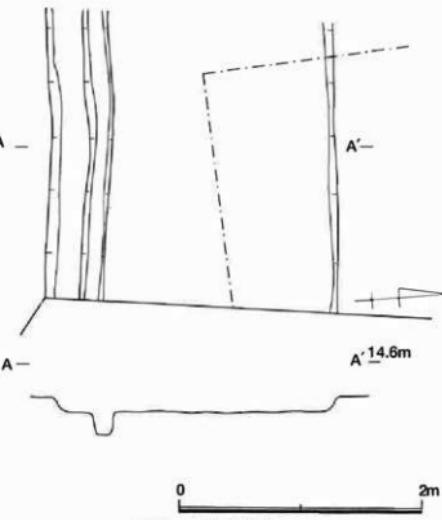


図8 5号溝状遺構



図9 炭焼窯

第2節 中世

A区で検出された遺構は池状遺構、7号溝状遺構、8号溝状遺構、1号道路状遺構、2号道路状遺構、1号土坑であり、B区で検出された遺構は1号掘立柱建物址、地業面である。

池状遺構（図11、12、13 図版3、4、7）

M～O - 5～8 グリッドにおいて検出した。A区にはその半分以上が含まれる。検出された範囲での規模は南北に最大9.8m、東西に最大14mで、池状遺構はさらに調査区外へ延びていくと見られる。

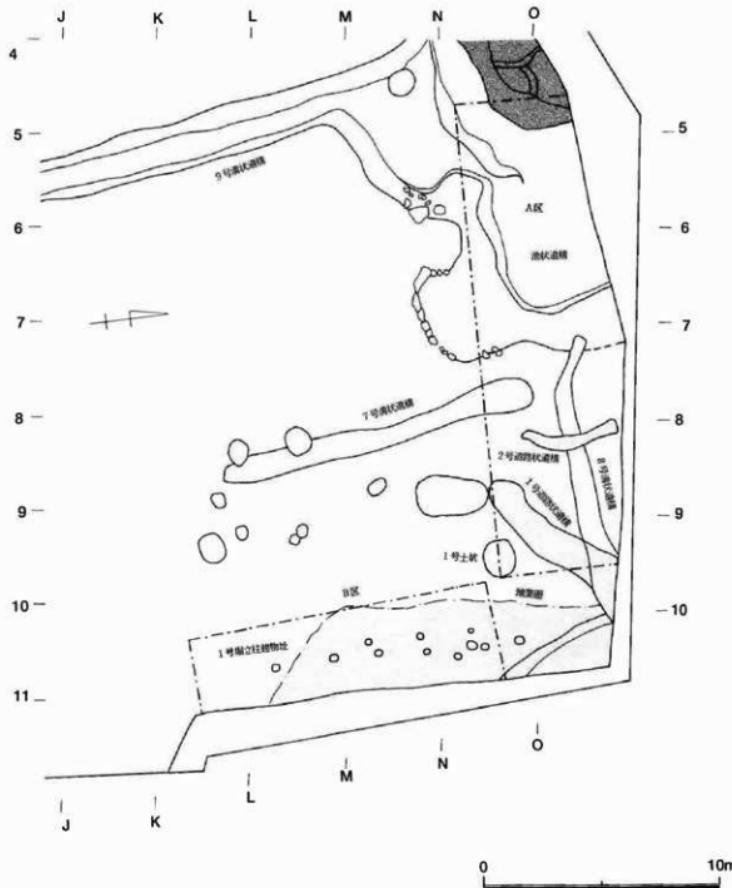


図10 中世遺構配置図

全体の形状は瓢箪形を呈すると考えられる。東側汀線部分の一部は中世後半以降に削平を受けているため良好に残存していない（図面上では推定されるラインを点線により書き加えている）。深さは最大で52cmを測るが、壁の立ち上がりは全体に緩やかである。なお池状遺構の北西隅では北側丘陵の裾部分の岩盤が露出している。池状遺構はその西端で9号溝状遺構と重複している。また露出している岩盤に沿うような形で幅最大2m30cm、長さ約5m、深さ最大50cmの沢状の遺構が検出されており、その延長と考えられる浅い落ち込みが池状遺構の西側で幅約1m50cm～2m、長さ7mに渡って検出されている。池状遺構の南西部には泥岩片により縁どられた径4～5mの一段浅い落ち込みが検出されており、この部分の深さは約20cmである。池状遺構の覆土は締まりに欠け、水気を帯びた黒色上で、全体に30cm以上堆積している。部分的に薄い砂層が認められる。また丘陵裾側では覆土中に人頭大の多量の泥岩塊が落ち込んでいた。

遺物はかわらけ、国産陶器、貿易陶磁器等が出土しているが、量は少ない。完形のかわらけが若干みられるが、いずれも単体で投げ込まれるような形で出土している。1から11は池状遺構覆土中から、12から17までは底部から、18から20までは南東部の浅い窪地から出土したものである。1は山茶碗系のこね鉢で、器壁内面は摩耗している。2、3は口径12～14cm代の大きい部類の手捏かわらけ、4～7は口径8.5～9.0cmにまとまる、やや小ぶりの手捏かわらけ、8は口径12.2cmでロクロ成形、9～11はやや小ぶりのロクロ成形のかわらけである。12は青磁小壺の口縁部～頸部の破片で、器面内外面には淡灰緑色の釉が施されているが、口唇部のみ露胎している。13は褐釉小壺と見られる胴部片で、胎土は緻密で、粘性があるものである。14～15は手捏かわらけ、16～17はロクロ成形のかわらけである。18～20はいずれも手捏かわらけである。

これらの遺物は多少時期的なずれを持つものもあるが、おおまかには13世紀前半代の様相を呈している。

7号溝状遺構（図14 図版3）

A区、N～8グリッドで検出した。北端部のみA区に含まれ、溝全体はここから南に延びていく。A区での規模は、幅約1m20cm、深さ約15cmで、N～8グリッドほぼ中央で立ち上がっている。覆土はやや粘性を帯びた茶褐色土で、拳大の泥岩塊を少量含んでいた。

出土遺物は混入した微細な土師器、須恵器のみである。

8号溝状遺構（図14、15 図版3、7）

A区、O～8～11グリッドで検出された。O～8グリッドで池状遺構の東側汀線部分から始まり、調査区北東コーナーにまで延びている。規模は西側先端で幅45～60cm、深さ10cm、A区東端部では幅130cm、深さ55cmで、東側に向かうほど規模が大きくなっている。断面形状は緩いV字形である。覆土は締まりに欠ける茶褐色土で、一部には上層に灰、炭化物の層が見られた。

出土遺物は混入した土師器、須恵器の細片が大半であり、実測できたのは1点のみであった。1はロクロ成形のかわらけで、覆土最上層からの出土である。このかわらけは15世紀代のものと見られるが、覆土最上層の出土であり、本址の構築時期に伴うものではないと見られる。本址はその位置から判断して池状遺構からの排水目的を果たしているように思われるが、その時期的関係については現時点では不明瞭である。

1号道路状遺構（図14 図版3 表1）

A区、N～O～9～10グリッドにおいて検出した。西側先端部の極一部と東端部はA区外となっている。O～9グリッドにおいて8号溝状遺構と重複し、この上に構築されている。幅は1.3～1.5mであり、

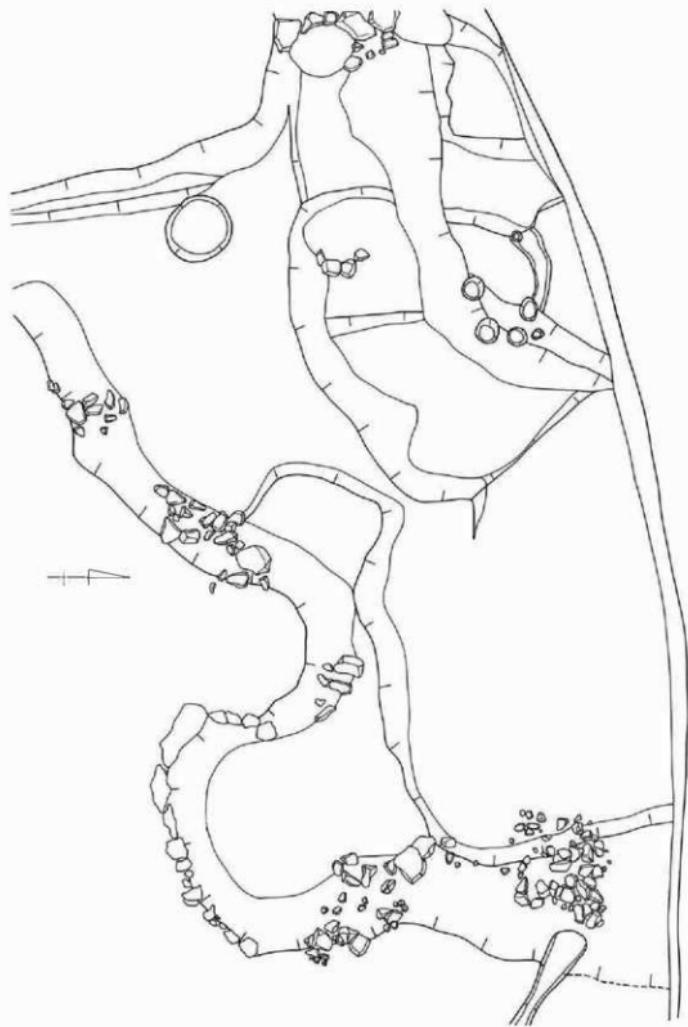


图11 池状遗構

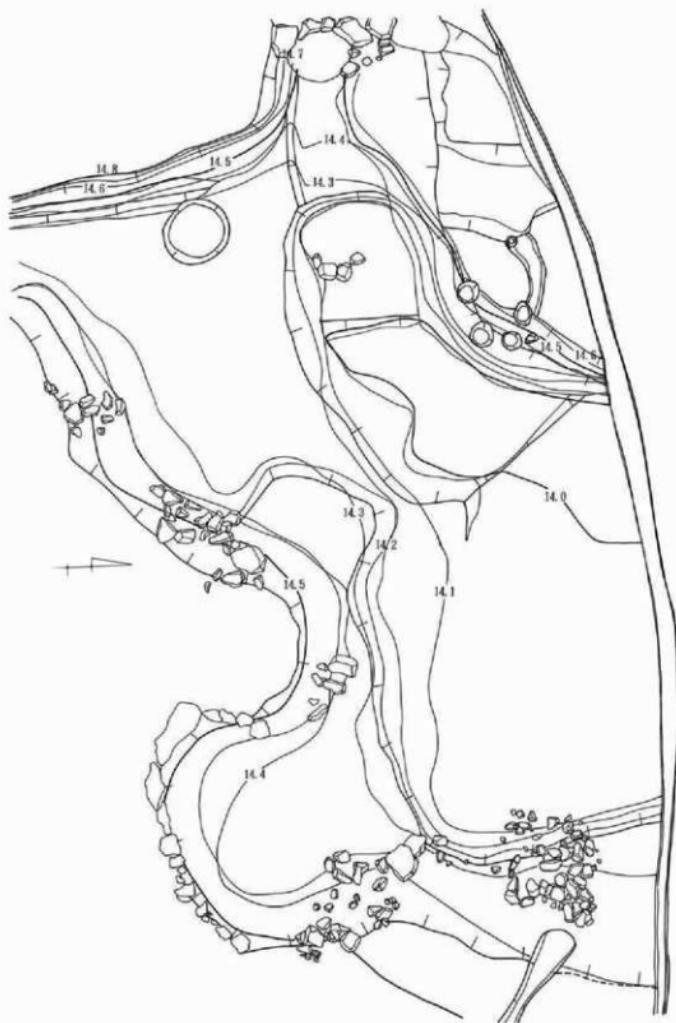


図12 池状造構（等高線配置図）

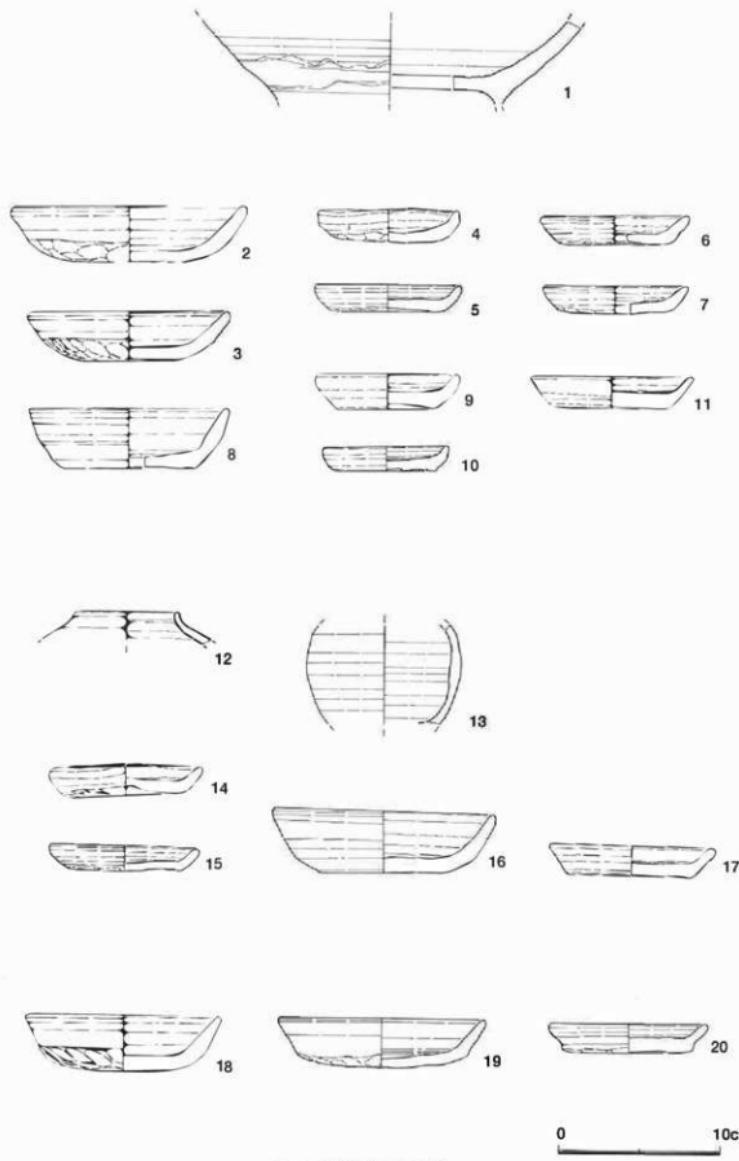


図13 池状構造出土遺物

表1 1号道路状造構周辺ピット観察表

No.	長軸	短軸	深さ	覆土
16	28	26	16	茶褐色上 泥岩粒を含む
17	25	19	13	・
18	40	15	8	・
19	20	19	11	・
20	30	18	28	・
21	46	42	18	・
22	40	35	16	・
23	45	36	36	・

版築の厚さは5~10cmである。走行方位はN-32°-Eを示す。版築は軟質な泥岩で構築されており、全体の縮まりはあまり強固ではない。また本址上には幾つかのピットがあるが、その性格は不明である。

本址上での出土遺物はいずれも微細なものであり、図示し得る遺物はない。

2号道路状造構(図14 図版3)

A区、N~O-9グリッドにおいて検出した。規模は幅50~70cm、長さ4.3mで、緩やかに湾曲して南北方向に走っている。版築は拳大の泥岩を基本に構成されており、1号道路状造構よりは強固に造られている。8号溝状造構をみたいで構築されている。

地業面(図16)

B区、L~O-10~11グリッドにおいて検出した。B区の約2/3を占め、調査区東壁4m前後に沿って広がっている。7号溝状造構、1号道路状造構との関係は調査区北東コーナーにある掘り込み遺構のため不明瞭であるが、ほぼ同時期のものであると思われる。この地業面は鎌倉市旧市街地の発掘調査で一般的に検出される泥岩を大量に使用した地業とは異なり、微小な泥岩粒子を含む、やや縮まりの強い茶褐色上で構成されている。B区周辺では古代までは東側に緩やかに傾斜する地形であったのが、この地業により水平に保つ造成を行っていることが伺える。

面直上の図示し得る良好な遺物はなかったが、その構築時期は池状遺構が機能をしなくなった段階、13世紀後半から14世紀ではないかと見ている。

1号掘立柱建物址(図17 図版4 表2)

B区、K~N-11グリッドで検出した。大半が地業面上に位置する。P4からP11まで(P6のみはずれる)と、P12からP14までの二列が検出され、P12~P14はその位置、柱穴規模からP4~P11の柱穴列の底ないし縁側とみられる。それぞれの芯間距離はP4~P5が54cm、P5~P7が200cm、P7~P8が196cm、P8~P9が188cm、P9~P10が206cm、P10からP11までが190cmを測る。またP

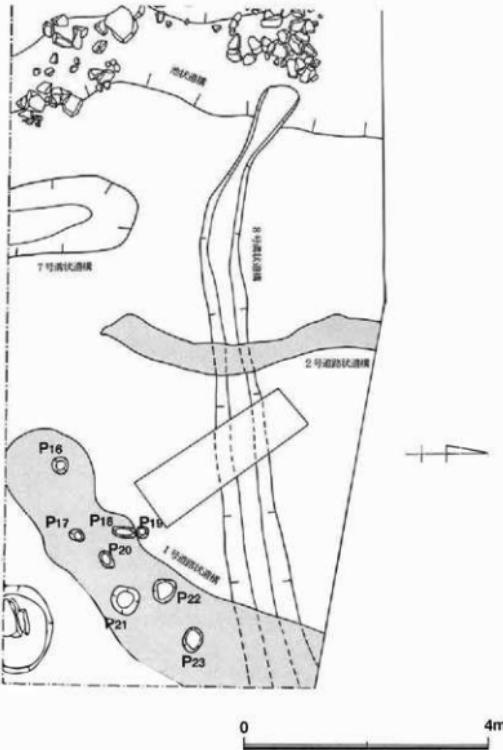


図14 7号・8号溝状遺構および1号・2号道路状遺構



図15 8号溝状遺構出土遺物

0 5cm

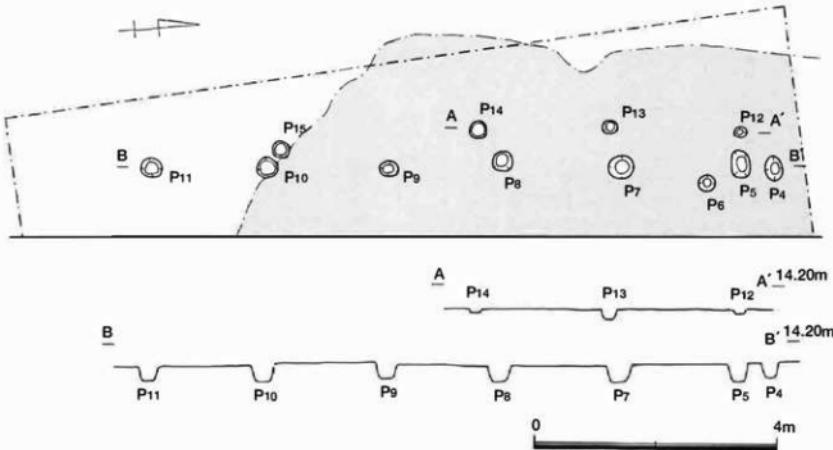


図16 地表面および1号掘立柱建物址

12からP13までが215cm、P13からP14までが222cmを測る。P4～P11までの柱穴はいずれも径38cm前後、深さ30cm前後のものであり、覆土も泥岩粒を含む茶褐色土で統一されている。P12～P14も同様で径20cm前後、深さはP13のみ20cmであるが、他は10cm前後の浅いものである。覆土はP4～P11と同じものである。

出土遺物は微細な土師器片が少量あるのみである。

1号土坑（図17）

A区、N-10グリッドにおいて検出した。ちょうど半分がA区に含まれる。規模は南北に138cm、東西に148cmで、やや形の崩れた円形を呈している。深さは最大22cmである。覆土は泥岩粒子、炭化物粒を含む茶褐色土である。土坑の底部には数個の泥岩塊があるが、いずれも投げ込まれたものであろう。

遺物は青磁、かわらけ等が少量出土しているが、いずれも微細なもので図示し得るものはない。

表2 1号掘立柱建物址柱穴観察表

No.	長軸	短軸	深さ	覆土
4	41	28	25	茶褐色土
5	44	30	30	泥岩粒を含む
6	28	27	24	
7	41	39	28	
8	33	30	26	
9	31	25	26	
10	35	33	27	
11	35	31	24	
12	20	15	7	
13	25	22	17	
14	28	26	6	
15	28	25	20	

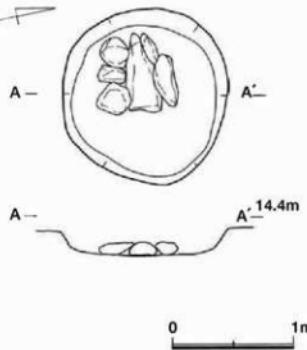


図17 1号土坑

第3節 平安時代

A区において検出した遺構は16号・17号・18号溝状造構、216号土坑、1号土器溜りで、B区において検出した遺構は2号土器溜りである。

16号溝状造構（図19 図版5、7）

M～O-9グリッドに位置し、A区にその大半が含まれる。17号溝状造構のすぐ西側を流れしており、N-9グリッドにおいてこれと重複している。また1号土器溜りを切っている。A区内での本址の規模は幅40～55cm、深さ最大40cmである。走行方位はN-5°～Wを示している。覆土はほぼ同一層で締まる。

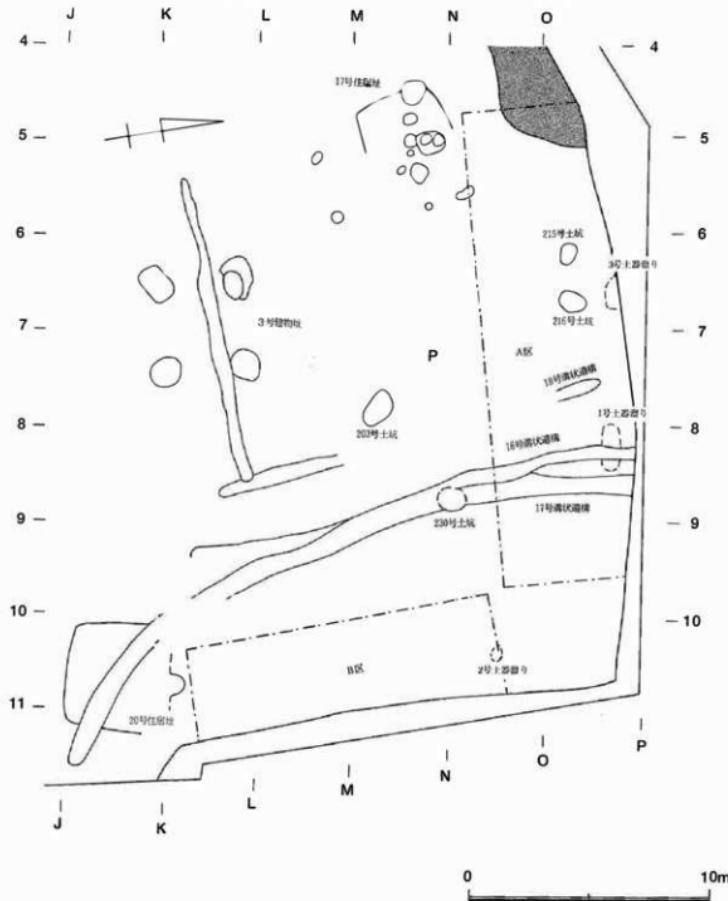


図18 平安時代および古墳時代前期遺構配置図

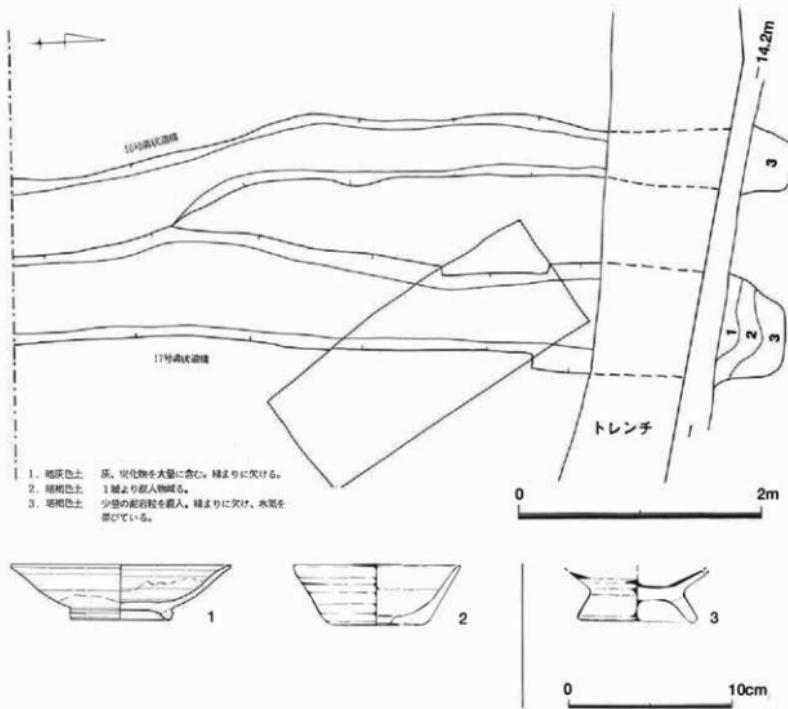


図19 16号・17号溝状遺構、同出土遺物

りに欠け、水気を帯びた暗褐色粘質土である。16号・17号溝状遺構はN-9グリッドにおいて交わった後、L-10グリッドで再び分岐するが、西側の溝状遺構が16号溝状遺構に対応するかは不明である。

出土遺物は微細な土器器片が大半である。1は灰釉皿で全体の約1/3が残存している。口径は13.8cm底径は6.0cmで、体部内外面に横け掛けにより施釉される。重ね焼きで、ヘラケズリ調整は行われていない。折戸53窯式期のものと考えられる。2はロクロ成型の土器器坏である。全体の約1/3が残存している。回転糸切り後無調整で、色調は暗橙褐色を呈している。本址の時期を示す遺物の量が少ないので、構築時期は不明瞭であるが、11世紀代かと思われる。

17号溝状遺構（図19 図版5、7）

J-0-9-12グリッドに位置する。A区にその北端部がかかっている。本址は調査区東側を渦曲しながら流れおり、230号土坑、20号住居址を切っている。A区での本址の規模は幅75-88cm、深さ最大52cmで、16号溝状遺構より一回り大きい（一部を試掘坑により破壊されている）。走行方位はN-3°-Eを示し、N-9グリッドにおいて16号溝状遺構と重複している。基本となる覆土は16号溝状遺構と同じで、縦まりに欠け、水気を帯びた暗褐色粘質土であるが、一部にはその上層に灰層が検出されている。

出土遺物の多くが混入した土師器片である。図示し得たのは1点のみである。3は土師器高台付壺の底部である。底径は7.4cmを示す。底部は回転糸切り後、高台部を貼り付けている。色調は橙褐色である。

本址の構築時期は出土遺物が少ないために不明瞭であるが、10世紀前半とされる230号土坑を切っていること、10世紀中葉と考えられる20号住居址を切っていることなどから10世紀後半～11世紀代と思われる。

18号溝状遺構(図20)

A区、O-8グリッドで検出した。規模は幅約35cm、深さ最大15cmで、北側は緩やかに立ち上がって消滅し、215cmの長さが検出された。走行方位はN-14°-Wを示す。この南側は検出されなかったが、約10m離れたK-L-10グリッドで走行方位をほぼ同じくする溝状遺構が検出されており、本址はこれに対応すると見られる。覆土は締まりにかけ、水気を帯びた暗褐色粘質土である。出土遺物は微細な土師器片のみであり、図示し得る遺物はない。

本址の構築時期は16号、17号溝状遺構とはほぼ同じ、11世紀代が考えられる。

216号土坑(図21 図版6、7)

A区、O-7グリッドで検出した。南北に116cm、東西に70cmを測り、隅円長方形を呈している。深さは最大で32cmで、北側へ緩やかに傾斜している。覆土は締まり欠ける暗褐色土である。

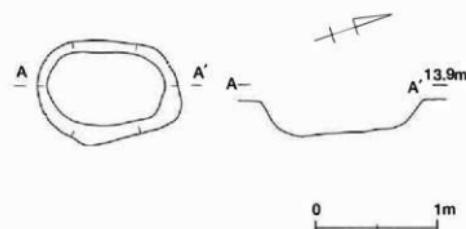


図21 216号土坑、同出土遺物

灰釉、須恵器、土師器等の破片が出土しているが、細片が多く実測できたものは少ない。1は須恵器壺で、口縁部～体部の一部のみ残存していた。口径は12.0cmを示す。口唇部が肥厚している。2は須恵器高台付壺の底部から体部の一部である。底径は6.8cmを測る。底部は回転糸切り後、高台部を貼り付けている。3は土師器壺である。口縁部から底部の約1/6が残存している。口径12.7cm、底径5.6cm、器高3.5cmを示す。体部には二段のヘラケズリがなされている。

これらの遺物から本址の構築時期は10世紀前半が考えられる。

1号土器灌り(図22 図版8)

A区、●-9グリッドで検出した。遺物は東西に長い約2mの中から散在して検出された。16号溝状遺構に分布のほぼ中央を切られている。遺物は破片が多いが、完形の状態で出土したものもある。

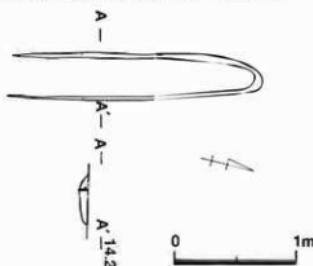
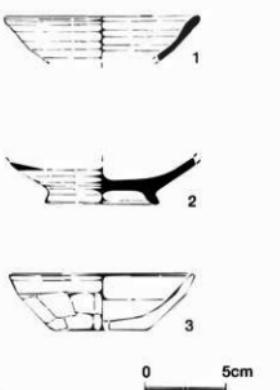


図20 18号溝状遺構



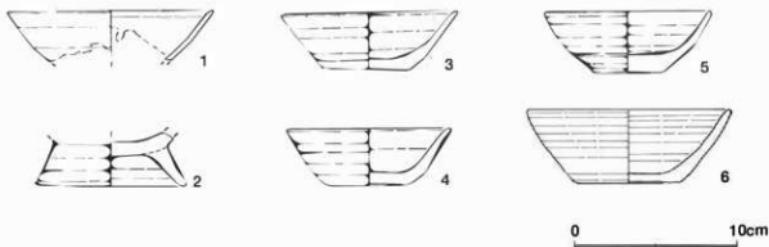


図22 1号土器溜り出土遺物

1は灰釉碗である。口縁部から体部の約1/6が残存している。口縁部から体部の上半に漬け掛けが施されている。2は上師器高台付碗の底部である。底径は9.4cmを測る。碗部内底面および高台部外表面の一部がススけている。3～6はロクロ成形の上師器坏である。3から5はほぼ同様の法量を持つが、5は底部がやや突出している。3、4は多量のススが付着し、またタール状の物質の付着も見られる。6はひとまわり法量が大きい。これらの遺物は11世紀代の様相を呈している。

2号土器溜り（図23、24 図版6、8）

B区、N-11グリッドで検出した。一部はB区外へ延びている。約1mのせまい範囲に須恵器碗、坏、上師器坏、甕の破片が集中して出土していた。

1は須恵器碗である。口縁部から体部の約1/8が残存している。口径は17.0cmを測る。2は須恵器碗である。口縁部から底部の約1/4が残存している。口径15.3cm、底径6.4cm、器高5.5cmを測る。口縁部がやや外反する。3は須恵器坏である。口縁部から体部の約1/6が残存している。口径は12.2cmを測る。口縁部は外反し、肥厚している。4は須恵器高台付皿である。全体の約1/2が残存している。口径13.6cm、底径5.8cm、器高2.8cmを測る。口縁部が強く外反し、高台はハの字状に開く。5はロクロ成形の上師器坏である。底部のみほぼ完存している。底径は7.0cmを測る。底部は回転糸切り後、無調整である。色調は橙褐色を呈している。6、7は上師器坏である。6は全体の約3/4が残存している。口径は13.1cm、底径は6.9cm、器高は3.8cmを測る。体部は二段のヘラケズリである。7は全体の約1/4が残存している。口径は11.8cm、底径は6.5cm、器高は3.8cmを測る。体部下半にはヘラケズリが一段施され、体部中位には指頭調整を残している。8は須恵器長頸甕である。体部から底部の約半分が残存している。底径は8.9cmを測る。体部の下半にはヘラケズリが施されている。9は土師器甕である。全体の約1/3が残存している。体部外面はナデ調整、体部内面は指頭調整ないしハケ目調整後ナデ調整を施している。口縁部内外面は横ナデ調整である。

これらの遺物からは若干の時期的なずれが見えるが、須恵器碗、高台付皿などから10世紀前半代の年代が考えられる。

第4節 古墳時代前期

215号土坑（図25）

A区、O-7グリッドで検出した。216号土坑の約1m西側に位置する。規模は南北に82cm、東西に80cmを示し、不整形である。下場も不整形で、北側には径約20cmのピット状のも



図23 2号土器溜り

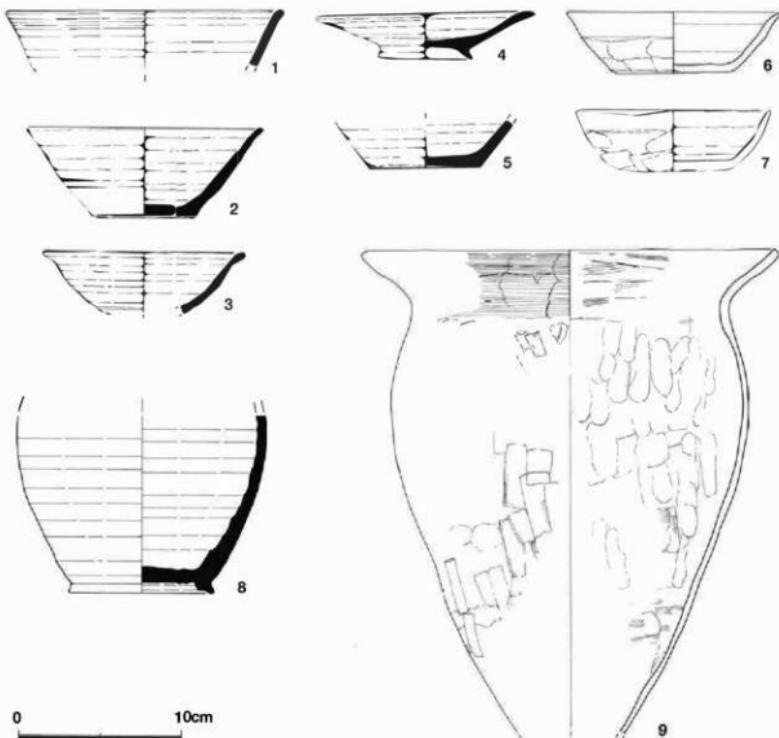


図24 2号土器窯より出土遺物

のが見られる。覆土は綺麗に欠ける暗青灰色土である。

出土遺物がないため本址の詳細な構築時期は不明であるが、覆土から類推すると古墳時代前期が考えられる。

3号土器窯 (図26、27 図版6、8)

A区、O-7グリッドで検出した。一部が調査区外へ延びると見られる。上器は約2mの狭い範囲で出土している。ただ甕2、3とその他の遺物は若干間をおいている。広口壺6、7、小型鉢8のみ完形品である。

1はS字状口縁台付甕である。破碎した状況で出土したが、ほぼ完形に復元された。体部上半は斜方向のハケ目、体部下半は上半とは逆方向のハケ目が施されている。口縁部径は17.5cm、胴部最大径23.0cm、器高27.2cmを測る。2は甕形土器である。全体の約1/2が残存しているが、頸部は遺存していない。胴部最大径は24.4cmを測る。体部外面にはヘラミガキ、体部内面下半はハケ調整、上半はヘラナデ調整

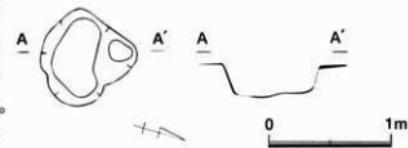


図25 215号土坑

である。3は壺形土器である。全体の約1/3が残存している。胴部最大径は19.9cmを測る。体部外面上半はハケ調整、下半には叩きを施していると見られる。体部内面はヘラナデ調整である。4は瓶であると思われる。全体の2/3が残存している。底部には径1.5cmの穿穴がある。体部外表面はヘラミガキ、内面はハケ調整である。5は手握土器である。全体の3/4が残存している。体部内外面は指頭により調整されている。6、7は小型広口壺である。両方とも体部外表面はハケ調整後、指頭調整を施している。いずれも体部の一部が二次焼成によりススけている。

8は小型鉢である。完形品である。体部の調整にはハケ、指頭調整が施されている。

これらの遺物は古墳時代前期のものであろう。

第5節 その他の出土遺物（図28 図版9）

ここで取り上げる遺物は包含層中及び遺構出土遺物の中で明らかに混入と見られるものについてとりあげた。

1は同安窯系青磁小皿である。B区中世地業面下の包含層出土である。釉薬は暗緑色で、貫入目立つ。胎土は緻密で、灰色。2は同安窯系青磁小皿である。B区地業面上の包含層の出土である。釉薬は淡緑色で、貫入目立つ。胎土はやや気孔が多く、灰白色である。3は青白磁碗である。B区地業面上包含層出土である。釉薬は淡水青色で、貫入や目立つ。胎土は灰白色で、結晶状である。4は白磁玉縁碗である。B区地業面下包含層の出土である。釉薬は淡灰白色で、体部外間に小孔多い。胎土は白色で、緻密である。5は砥石、仕上げ砥で、石材は硬質砂粒凝灰岩である。B区地業面上包含層出土である。両端は欠損している。使用による摩耗が激しい。6は土師器高台付坪である。B区地業面下包含層出土である。坪部はロクロ成型で、底部にハの字に聞く厚みのある高台を貼り付けている。焼成は比較的良好で、暗橙褐色である。胎土には白色針状物質が少量含まれる。12世紀代のものと考えられる。7は須恵器坪である。池状遺構の覆土中出土である。G25窯式期のものと考えられる。8は土師器壺である。A区、O-7グリッド出土である。全体の約1/2が残存している。体部外表面の口縁部際は横方向、これより下は縱方向のハケ調整、内面はヘラナデ調整で、口縁部は横ナデである。胎土には粗砂粒が多量に含まれる。色調は口縁部及び体部上半は暗黄褐色であるが、体部下半は灰茶褐色で、体部内面はススけている。9は土師器壺底部片である。8の周辺で出土し、同一個体と見られる。成形、胎土、色調はほぼ8に同じであるが、底部外表面は木葉痕が残り、橙褐色である。

瓦（図29 図版9）

本遺跡では多量の古代平瓦、丸瓦片が出土している。平瓦は凸面縄目叩きで凹面に布目压痕を、丸瓦は凸面はナデ調整、凹面は布目板を持つものが大半である。その出土状況は散漫ではあるが、調査区全域の近世、中世および古代末期の包含層、遺構から出土しており、その総数は破片点数で200点を越すと見られる。遺構から出土したものは少ないが、現在の所見では230号土坑におけるG5窯式古段階の須恵器碗との共伴が最も時期的に遡上れるものであり、これらの瓦が使用された時期は10世紀前半段階と考えている。

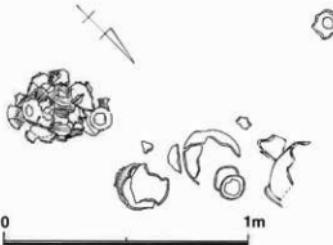


図26 3号土器窯

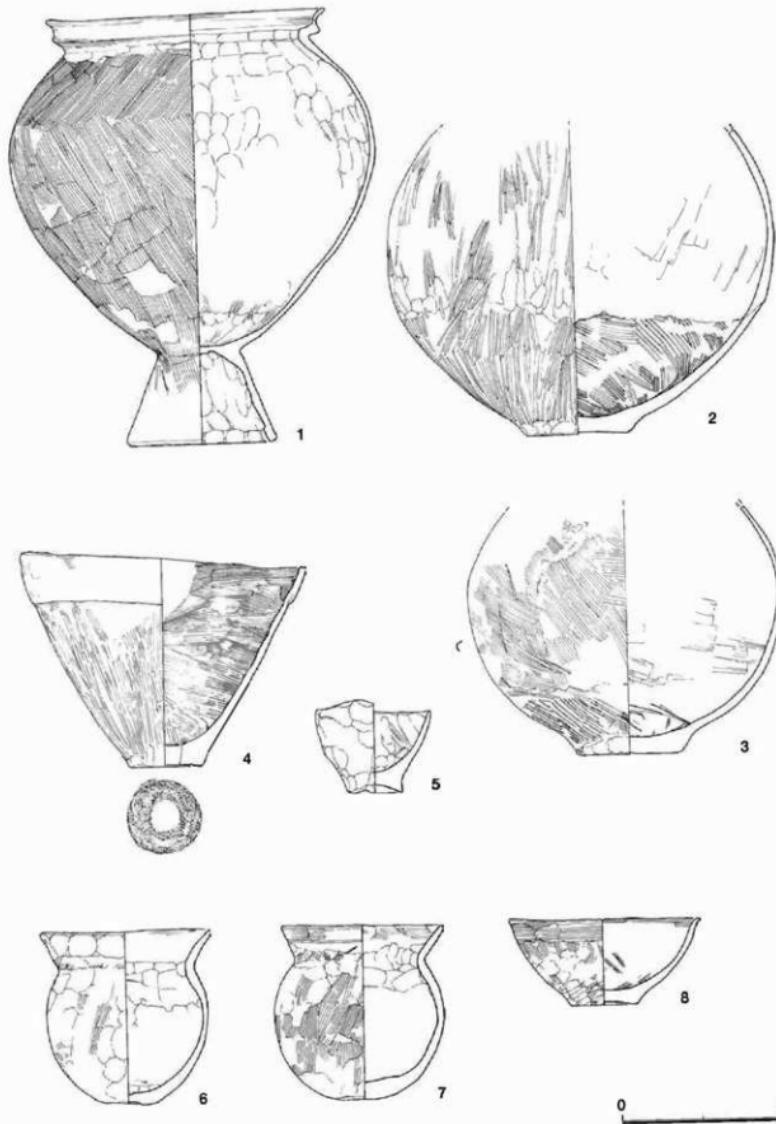


図27 3号土器窯より出土遺物



図28 その他の出土遺物（1）

1から4は丸瓦、5は平瓦である。1は17号溝状遺構覆土中からの出土である。胎土は灰白色で、焼成はやや軟質である。2は池状遺構覆土中からの出土である。胎土は灰色で、砂粒を多く含み、焼成はやや硬質である。3はA区古代末包含層中からの出土である。胎土は灰色で、焼成は硬質である。凸面の一部には自然釉が見られる。4はB区中世包含層中からの出土である。胎土は灰褐色で、焼成はやや硬質である。凸面には二条の沈線がある。5は池状遺構覆土中出土である。胎土は灰褐色で、砂粒を多く含む。焼成はやや硬質である。

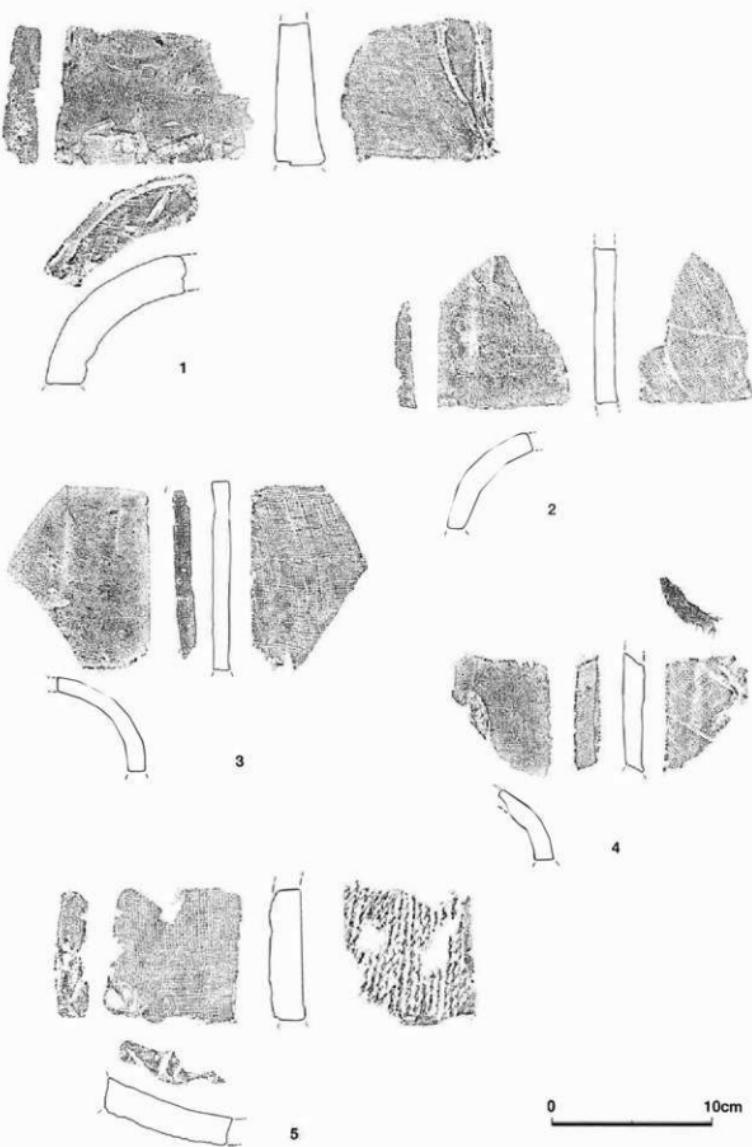


图29 瓦

第四章　まとめ

今回の報告は2180m²の調査区の内、国庫補助事業分にあたる120m²分の調査結果である。そのためこの報告は極めて限定的、断片的なものとならざるをえなかつた。よってここでは今回の報告により得られた成果にプラスして、国庫調査区以外での明らかになっている事を添え、天神山城遺跡の概要を簡略に述べることとする。

本遺跡では縄文早期爪形文土器片や弥生中期の土器片等が検出されているが、確實に人間の生活の痕跡を見いだせるのは古墳時代前期からである。住居址は山裾近くに構築され、また遺物を意図的に集積させたと見られる上器溝りが3箇所検出されている。この中には北陸系の装飾器台等が含まれるものがあり、祭祀的な意味合いを持つものもあると考えられる。次に生活空間として利用されるのは古墳時代後期になってからである。本期に位置付けられる竪穴住居址は2軒のみであるが、包含層中からは遺物が多数出土しており、また天神山北東裾では祭祀遺構が検出されていることから⁽¹⁾、当該期には天神山一帯に集落が形成されていたことが伺える。

奈良時代、8世紀前半の竪穴住居址4軒が検出されている。1号住居址からはほぼ完形の円面鏡、土師器蓋等が検出されている。平安時代、9世紀末から10世紀前半においては1間×1間であるが、径約40cmの柱を使用した3号建物址、檻板組の構造で黒漆塗りの小箱を検出した2号井戸址などが検出され、また包含層中から多量の瓦が出土したことなどからは寺院址等の存在を強く匂わせる。続く11世紀代と考えられる溝状遺構群は小支谷内部を区分けするように走っており、周辺に何らかの施設が存在したことと類推させる。

中世前半には池状遺構、地業面、1号掘立柱建物址等が構築される。しかしこの池状遺構は比較的短期間でその機能を失い、9号溝状遺構は池状遺構に重複しながら構築されている。池状遺構、9号溝状遺構の遺物はあまり時期差を持たず、13世紀前半代のものと見らる。地業面、1号掘立柱建物址の形成も9号溝状遺構と同時期ないしそれにやや遅れる時期のものであると考えられる。このような短期間での遺跡の変容が何に起因するのかは今後の検討課題である。また調査区は宝積寺谷に隣接し、これに関連した中世後半の遺構の検出が期待されたが、やぐら以外には特にそれと強く結び付けられるものは検出されなかつた。しかし調査区外となつている小支谷最奥部にはやぐらと見られる埋没した岩穴が2、3確認できることからこの部分に寺院址に関連した遺構が存在する可能性がある。

近世から近代の時期には谷戸部は耕作地に利用され、開口部側が居住空間としての機能を果たしていたようである。5・6号溝を始めとして検出した多くの溝が谷戸の排水目的に利用され、水田址も実際にはこれと同じような機能をしていたのであろう。土地所有者の西山家には江戸時代末期のものと見られる古絵図が残されており、検出された遺構と古絵図に記された地割はほぼ位置関係を等しくするものであった。これら遺構には近世後半のものも含まれるので、近世後半の地割が近代にまで踏襲されていたことが伺える。

このように天神山城遺跡を概観した時、特に平安時代から中世前半にかけては一般集落とは異なる様相を呈していることが分かる。これらの時期の遺構群が果たして連続性を持つのであるのかどうかは今後の重要な検討課題である。

(1) 第1章註1参照。

表3 出土遺物観察表

池状造構出土遺物

法量の単位はcmである。() 内は復元数値

器種	観察内	ダ合	
		数値	復元数値
1 山茶碗系捏鉢	覆土中出土 残存率 底部の一部 せいけい ロクロ成形 脱土 長石多量に含む 色調 灰褐色		
2 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(14.4)cm 底径(6.8)cm 器高3.5cm 残存率 底部～体部の1/8 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 体部外面指頭調整 内底面横ナデ 脱土 白色針状物質 焼成 良好 色調 橙褐色		
3 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(12.2)cm 底径(6.0)cm 器高3.5cm 残存率 底部～体部の1/4 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 体部外面指頭調整 内底面横ナデ 脱土 白色針状物質 雪母 焼成 良好 色調 暗褐色		
4 かわらけ	覆土中出土 法量 口径8.5cm 底径6.0cm 器高2.0cm 残存率 完形 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 脱土 白色針状物質少量 焼成 やや良 色調 橙褐色		
5 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(8.9)cm 底径(6.6)cm 器高1.7cm 残存率 全体の約1/2 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 脱土 長石 雪母少量 焼成 良好 色調 橙褐色		
6 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(9.0)cm 底径(6.4)cm 器高1.8cm 残存率 全体の約1/3 せいけい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 脱土 長石 雪母 白色針状物質少量 焼成 良好 色調 明橙褐色		
7 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(8.6)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 残存率 全体の約1/4 せいけい 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 脱土 長石 雪母少量 焼成 やや良 色調 橙褐色		
8 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(12.2)cm 底径(8.2)cm 器高3.7cm 残存率 全体の約1/3 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 底部内面一部横ナデ 脱土 細砂多量 雪母多 焼成 やや良 色調 暗黃褐色		
9 かわらけ	覆土中出土 法量 口径(8.6)cm 底径(6.1)cm 器高2.2cm 残存率 全体の約4/5 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 脱土 泥岩粒多雪母 長石 少量 焼成 やや不良 色調 暗黃褐色		
10 かわらけ	覆土中出土 法量 口径7.6cm 底径6.1cm 器高1.5cm 残存率 全体の約3/4 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 底部スノコ状圧痕 脱土 細砂 泥岩粒多 白色針状物質 雪母少量 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色		
11 かわらけ	覆土中出土 法量 口径9.8cm 底径6.6cm 器高2.0cm 残存率 ほぼ完形 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 底部スノコ状圧痕 脱土 長石 雪母少量 焼成 やや良 色調 橙褐色		
12 青磁小壺	底部出土 法量 口径(6.4)cm 残存率 口縁部～頸部の一部 施釉範囲 口唇部のみ露胎 内外面淡灰緑色胎 脱土 灰褐色 細密 焼成 やや良		
13 塗釉小壺	底部出土 法量 口径(9.6)cm 残存率 体部の約1.5 施釉範囲 残存部には沿びなし 脱土 灰褐色 細密 焼成 良好		
14 かわらけ	底部出土 法量 口径9.2cm 底径6.8cm 器高2.0cm 残存率 完形 せいけい 口縁部内外面ナデ 体部下半～底部指頭調整 脱土 雪母 白色針状物質少量 焼成 良好 色調 淡褐色		
15 かわらけ	底部出土 法量 口径9.1cm 底径6.7cm 器高1.5cm 残存率 完形 せいけい 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 脱土 雪母 長石少量 焼成 やや良 色調 淡褐色		
16 かわらけ	底部出土 法量 口径13.6 底径7.5cm 器高3.9cm 残存率 ほぼ完形 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 底部内面一部横ナデ 脱土 泥岩粒多 長石 雪母少量 焼成 やや良 色調 淡褐色		
17 かわらけ	底部出土 法量 口径(10.0)cm 底径(7.3)cm 器高1.9cm 残存率 全体の約1/2 せいけい ロクロ成形 内外面回転ナデ 底部内面中央部のみ横ナデ 脱土 泥岩粒多 白色針状物質 長石 雪母少量 焼成 やや不良 色調 淡褐色		

18	かわらけ	南東部落ち込み 法量 口径(11.8)cm 底径(6.1)cm 器高3.5cm 残存率 全体の約1/2 せい けい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 底部内面無調整 胎土 雲母やや多 白色 針状物質 長石 焼成 やや良 色調 暗褐色
19	かわらけ	南東部落ち込み 法量 口径(12.6)cm 底径(6.8)cm 器高3.0cm 残存率 全体の約1/5 せい けい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 胎土 長石 白色針状物質少量 焼成 やや 良 色調 淡褐色
20	かわらけ	南東部落ち込み 法量 口径(9.5)cm 底径(7.3)cm 器高1.8cm 残存率 全体の約1/3 せい けい 手捏 口縁部内外面ナデ 底部外面指頭調整 胎土 雲母 長石少量 焼成 やや良 色調 橙褐色

8号溝状遺構出土遺物

1	かわらけ	覆土最上層 法量 口径10.2cm 底径6.7cm 器高3.2cm 残存率 ほぼ完形 せいけい ロクロ 成形 内外面回転ナデ 胎土 長石 雲母 白色針状物質やや多 焼成 やや不良 色調 暗橙 褐色
---	------	--

16号溝状遺構出土遺物

1	灰釉皿	覆土中 法量 口径(13.8)cm 底径6.0cm 器高3.4cm 残存率 全体の約1/3 せい けい ロクロ成形 高台部貼り付け 施釉範囲 口縁部内外面、漬け掛け 胎土 長石、雲母を少量 色調 灰白色
2	土師器壺	覆土中 法量 口径(10.4)cm 底径(5.6)cm 器高3.7cm 残存率 口縁部～体部の1/3 せい けい ロクロ成形 底部回転系切り無調整 胎土 長石、雲母やや多い 焼成 普通 色調 暗橙 褐色

17号溝状遺構出土遺物

3	土師器高台付 壺	覆土中 法量 底径7.4cm 残存率 底部のみ せいけい 回転系切り後、高台部貼り付け、回 転ナデ 胎土 長石少量 焼成 良好 色調 橙褐色
---	-------------	---

216号土坑出土遺物

1	須恵器壺	覆土中 法量 口径(12.0)cm 残存率 口縁部～体部の約1/8 せいけい ロクロ成形 胎土 長石 雲母少量 焼成 やや不良 色調 灰白色
2	須恵器碗	覆土中 法量 底径6.8cm 残存率 体部下半～底部の約1/8 せいけい ロクロ成形 底部は回 転系切り後、高台部貼り付け 胎土 長石 焼成 普通 色調 灰色
3	土師器壺	覆土中 法量 口径(12.7)cm 底径(5.6)cm 器高3.5cm 残存率 全体の約1/6 せいけい 口 縁部横ナデ 体部二段へラケズリ 底部へラケズリ 胎土 雲母多量 石英 赤色スコリア少量 焼成 良好 色調 暗橙褐色 口縁部外面一部ススける

1号土器漏水出土遺物

1	灰釉碗	法量 口径(12.8)cm 残存率 口縁部～体部の約1/6 せいけい ロクロ成形 施釉範囲 口縁 部～体部上半 漬けかけ 胎土 長石 焼成 良好 色調 灰白色
2	土師器高台付 碗	法量 底径9.4cm 残存率 底部のみ完存 せいけい 高台部貼り付け後、ナデ 胎土 雲母 赤色スコリアを含み、白色針状物質を少量含む 焼成 良好 色調 橙褐色を基調とするが、腕 部内底面および高台部外面の一部がススける
3	土師器壺	法量 口径10.9cm 底径5.4cm 器高3.5cm 残存率 ほぼ完形 せいけい ロクロ成形 底部回 転系切り無調整 胎土 雲母、長石少量 白色針状物質極少量 焼成 やや不良 色調 暗橙褐色 を基調とするが、体部内外面共にすすけている
4	土師器壺	法量 口径(10.4)cm 底径4.2cm 器高3.9cm 残存率 全体の1/4 せいけい ロクロ成形 底 部回転系切り無調整 胎土 長石多く含み、赤色スコリア少量 焼成 良好 色調 橙褐色

5	土師器環	法量 口径10.2cm 底径5.0cm 器高3.5cm 残存率 完形 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 胎土 長石少量 焼成 普通 色調 灰黄褐色を基調とするが、内外面、底部の大半がススけており、タール状物質の付着が見られる
6	土師器環	法量 口径(12.6)cm 底径(6.0)cm 器高4.6cm 残存率 全体の1/4 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り後、ナデ消しあり 胎土 長石、赤色スコリア多く含み、白色針状物質極少量含む 焼成 やや良 色調 暗橙褐色

2号土器溜り出土遺物

1	須恵器碗	法量 口径(17.0)cm 残存率 口縁部～体部の約1/8 せいけい ロクロ成形 胎土 長石 焼成 普通 色調 灰白
2	須恵器碗	法量 口径(15.3)cm 底径(6.4)cm 器高5.5cm 残存率 全体の約1/4 せいけい ロクロ成形 胎土 長石多 雲母少量 焼成 良好 色調 灰褐色
3	須恵器環	法量 口径(12.2)cm 残存率 口縁部～体部の1/6 せいけい ロクロ成形 胎土 長石多 焼成やや不良 色調 灰褐色 (体部下半はやや橙色味を帯びている)
4	須恵器高台付皿	法量 口径13.6cm 底径5.8cm 器高2.8cm 残存率 全体の1/2 せいけい ロクロ成形、高台部貼り付け 胎土 長石多 焼成 良好 色調 灰褐色
5	土師器環	法量 底径7.0cm 残存率 底部と体部下半の一一部 せいけい ロクロ成形 底部回転糸切り無調整 胎土 赤色スコリア多 長石、雲母 焼成 良好 色調 橙褐色
6	土師器環	法量 口径13.1cm 底径6.8cm 器高3.8cm 残存率 体部の一部を欠損 せいけい 口縁部横ナデ 体部二段へラケズリ 底部へラケズリ 胎土 雲母やや多、長石 焼成 良好 色調 淡橙褐色
7	土師器環	法量 口径(10.6)cm 底径7.2cm 器高3.7cm 残存率 全体の1/4 せいけい 口縁部横ナデ 体部横方向一段のへラケズリ 体部中位に指頭圧痕残す 胎土 赤色スコリア多 長石、雲母少 焼成 良好 色調 橙褐色
8	須恵器長頸壺	法量 底径8.9cm 残存率 底部から体部の1/3 せいけい ロクロ成形、体部下半へラケズリ 胎土 長石多 焼成 良好 色調 灰褐色
9	土師器壺	法量 口縁部最大径25.2cm 脇部最大径22.2cm 残存率 全体の1/3 せいけい 口縁部横ナデ 体部外面ハケ調整後、ナデ 体部内面ハケ調整後、指頭ないナデ調整 胎土 雲母やや多 細砂やや多 焼成 やや良 色調 暗橙褐色 (体部下半はススけている)

3号土器溜り出土遺物

1	S字形状口縁台付壺	法量 口縁部最大径17.5cm 脇部最大径23.0cm 脇台部径8.8cm 脇台部高5.6cm 器高27.2cm せいけい 外面：口縁部横ナデ 体部上半分左傾斜にハケ 体部下半右傾斜のハケ 脇台部接合部付近やや斜方向のハケ 脇台部ナデ 内面：体部、脚部とも指頭調整 一部横方向のヘラナデ 胎土 雲母、長石多量 焼成 良好 色調 暗褐色 脇台部は淡褐色
2	土師器壺	法量 脇部最大径24.4cm 底径6.2cm 残存率 体部中位～底部の1/2 せいけい 外面：体部やや斜方向のハケ後、縦方向の細いヘラナデをほぼ全面に底部へラナデ 内面：体部上半横方向のヘラナデ 体部下半～底部同心円状のハケ 胎土 長石、雲母、赤色スコリア 焼成 良好 色調 橙褐色 (底部～体部下半の一部にスス付着)
3	土師器壺	法量 脇部最大径19.9cm 底径5.9cm 残存率 体部上半～底部の1/3 せいけい 外面：体部上半斜方向ハケ 体部下半斜方向にやや粗いハケ 内面：体部横方向のヘラナデ 底部 同心円状幅約1.5cmのヘラナデ 胎土 粗砂粒やや多量含む 長石、雲母少量 焼成 普通 色調 橙褐色 一部淡褐色 (体部の一部にスス付着)
4	土師器瓶	法量 口径17.9cm 底径4.6cm 器高13.6cm 残存率 口縁部一部欠損 せいけい 外面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 体部縦方向にハケ後、縦方向にヘラミガキ 底部穿穴後、指ナデ後、一部ヘラミガキ 内面：体部下半～底部横方向にハケ、口縁部～体部上半横方向にハケ→体部下半～体部横方向ヘラミガキ 胎土 長石、雲母、赤色スコリア、白色針状物質 焼成 良好 色調 淡褐色 備考 底部に径約1.5cmの穿穴あり
5	手捏土器	法量 口径7.2cm 底径3.3cm 器高5.8cm 残存率 全体の3/4 せいけい 外面：指頭調整、口縁部一部横ナデ 内面：口縁部～体部指頭調整 胎土 赤色スコリア、雲母多量 石英、白色針状物質少量 焼成 普通 色調 暗橙褐色 備考 底部外面にはつまみ出した高台部を造る

6	土師器広口壺	法量 口縁部径10.7cm 脇部最大径10.3cm 底部径3.1cm 器高10.8cm 残存率 完形 せいいい 外側：口縁部横方向のハケ後、指頭調整全体部横方向のハケ後、指頭調整 内面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 脱土 長石、雲母含む 白色針状物質少量 焼成 普通 色調 暗褐色（底部から口縁部の一部スス付着）
7	土師器広口壺	法量 口縁部径10.0cm 脇部最大径10.7cm 底部径2.0cm 器高11.1cm 残存率 完形 せいいい 外側：口縁部横方向のハケ後、指頭調整、一部横ナデ 体部斜方向のハケ後、指頭調整 内面：口縁部横方向にハケ後、指頭調整 脱土 長石、雲母含む 白色針状物質少量 焼成 普通 色調 暗褐色および灰褐色（体部～口縁部の一部にスス付着）
8	土師器鉢	法量 口径11.9cm 底径4.1cm 器高5.5cm 残存率 完形 せいいい 外側：体部横方向にハケ、一部指おさえ 口縁部横ナデ 底部斜方方向のヘラケズリ 内面：口縁部～体部横方向のハケ後、ナデ 脱土 長石、赤色スコリア、雲母含む 白色針状物質少量 焼成 やや良 色調 淡褐色

その他の出土遺物

1	同安窯系青磁小皿	B区地業面下包含層 法量 口径(10.2)cm 残存率 口縁部板一部 施釉範囲 全面 軸葉は淡緑色 買入や多い 脱土 灰白色 気泡少ない 焼成 やや良
2	同安窯系青磁小皿	B区地業面上包含層 法量 口径(9.7)cm 残存率 口縁部板一部 施釉範囲 全面 軸葉は暗緑色 外面に買入や日立つ 脱土 灰色 焼成 やや良
3	青白磁碗	B区地業面上包含層 法量 口径(16.3)cm 残存率 口縁部～体部の一部 施釉範囲 全面 軸葉は淡水青色 買入や多い 脱土 灰白色 焼成 良好
4	白磁玉縁碗	B区地業面下包含層 法量 口径(14.7)cm 残存率 口縁部の一部 施釉範囲 全面 軸葉は淡灰白色 脱土 白色 密緻 焼成 良好
5	砥石	B区地業面上包含層 法量 全長9.9cm 幅4.1cm 厚さ3.0cm 残存率両端部欠損 備考 仕上砥 硬質砂粒凝灰岩
6	土師器高台付环	法量 口径(12.0)cm 底径(7.6)cm 器高3.6cm 残存率 全体の1/3 せいいい ロクロ成形 高台部貼り付け 脱土 長石、雲母少量 白色針状物質極少量 焼成 やや良 色調 暗褐色
7	須恵器环	池状造構覆土中 法量 口径(12.3)cm 底径5.6cm 器高3.8cm 残存率 全体の1/2 せいいい ロクロ成形 脱土 長石、雲母 焼成 やや良 色調 灰褐色
8	土師器長颈甌	国庫A区古代包含層 法量 口縁部径19.2cm 脇部最大径19.5cm 残存率 口縁部～体部下半の約1/2 せいいい 外面：体部横方向にハケ後、上位には横方向ハケ 口縁部横ナデ 内面：横方向ヘラナデ後、指頭調整 口縁部横ナデ 脱土 粗砂粒多 長石、雲母、白色針状物質少量 焼成 やや不良 色調 灰茶褐色（体部内外全体に薄いスス付着 一部赤変）
9	土師器甌	国庫A区古代包含層 法量 底部径7.9cm 残存率 底部のみ完存、体部一部 せいいい 外面：体部横方向にハケ 底部木葉痕内面：ヘラナデ 脱土 粗い砂粒多く含む 長石、雲母含む 白色針状物質極少量 焼成 やや不良 色調 灰茶褐色（内面全体にスス付着） 備考 8とおそらく同一個体

瓦

1	丸瓦	17号溝状造構覆土中 厚さ2.5cm 凹面 布目 凸面 ナデ 脱土 灰白色 焼成 良好
2	丸瓦	池状造構覆土中 厚さ1.4cm 凹面 布目 凸面 ナデ 脱土 灰色 焼成 やや軟質
3	丸瓦	A区古代末包含層 厚さ1.2cm 凹面 布目 凸面 ナデ 脱土 灰色 焼成 良好 凸面の一部に軸
4	丸瓦	B区中世包含層 厚さ1.3cm 凹面 布面 凸面 ナデ 脱土 灰褐色 焼成 やや良好
5	平瓦	池状造構覆土中 厚さ1.9cm 凹面 布目 凸面 褶目 脱土 灰褐色 焼成 やや良好

写 真 図 版



▲1.
調査前状況



▲2.
堆積土層（水田址・池状遺構）



▲3.
A区・B区近世全貌



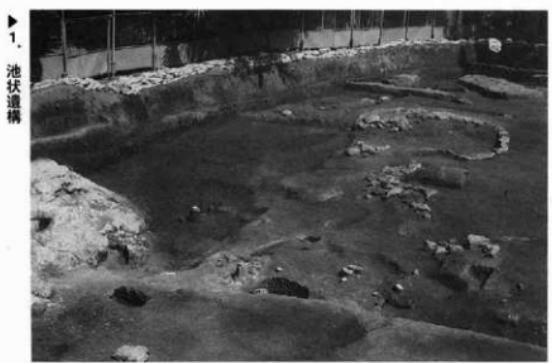


▲1. A区・B区 中世全景



▲2.
池状遺構

図版4





▲1. A区・B区 古代全景



◀
2.

16
17
号溝状遺構

図版6



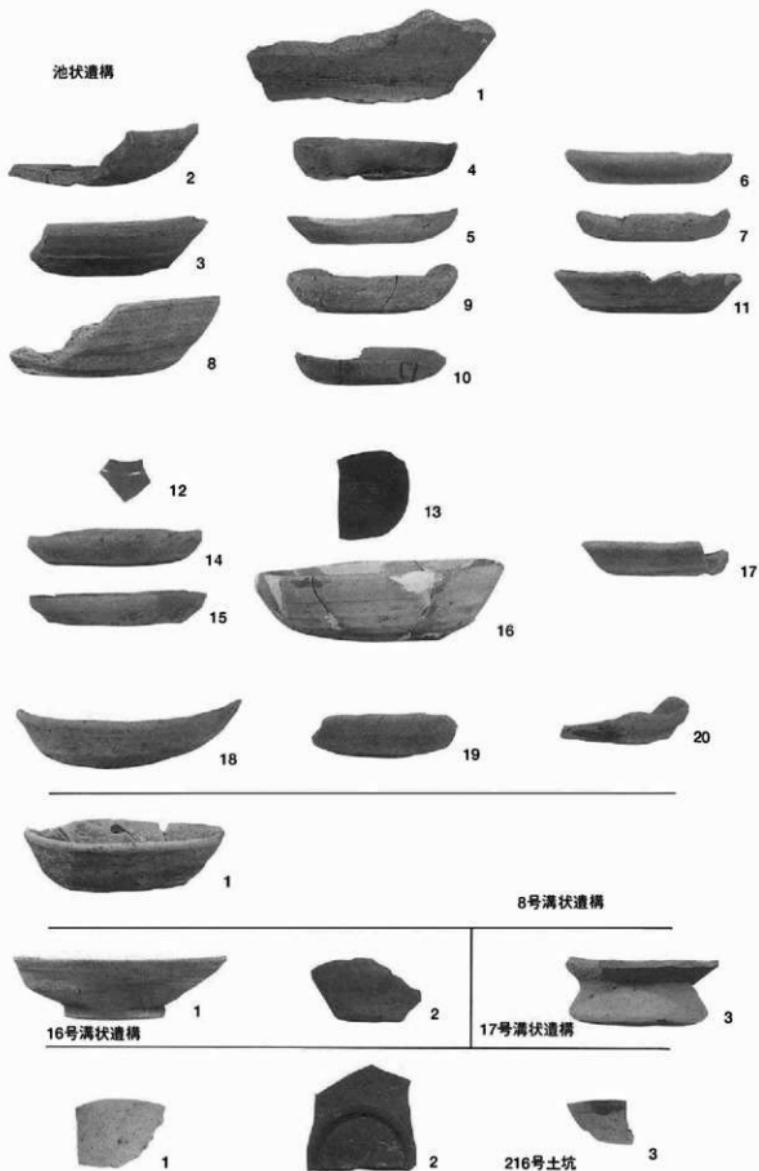
▲1.
2号土器破片



▲2.
26号土坑

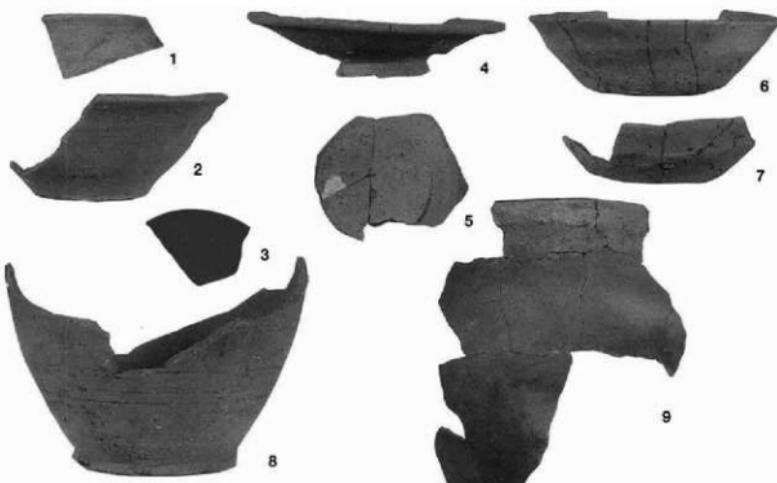


▲3.
3号土器破片

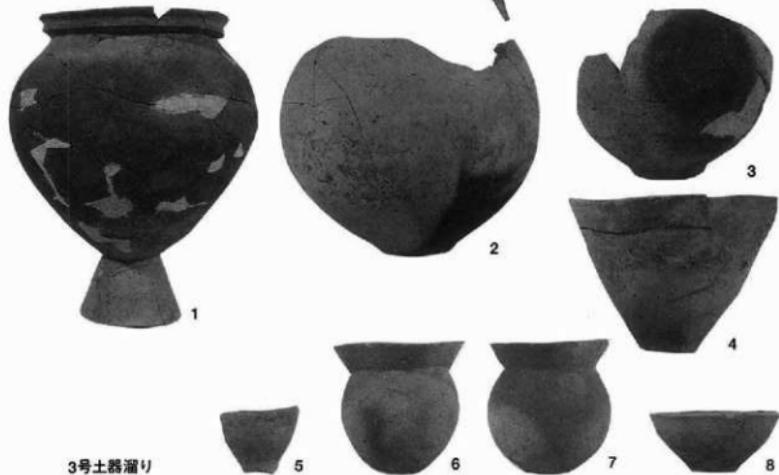




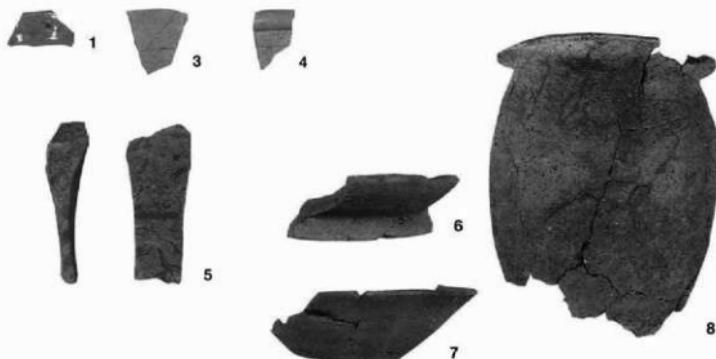
1号土器
1, 2, 4, 5, 6



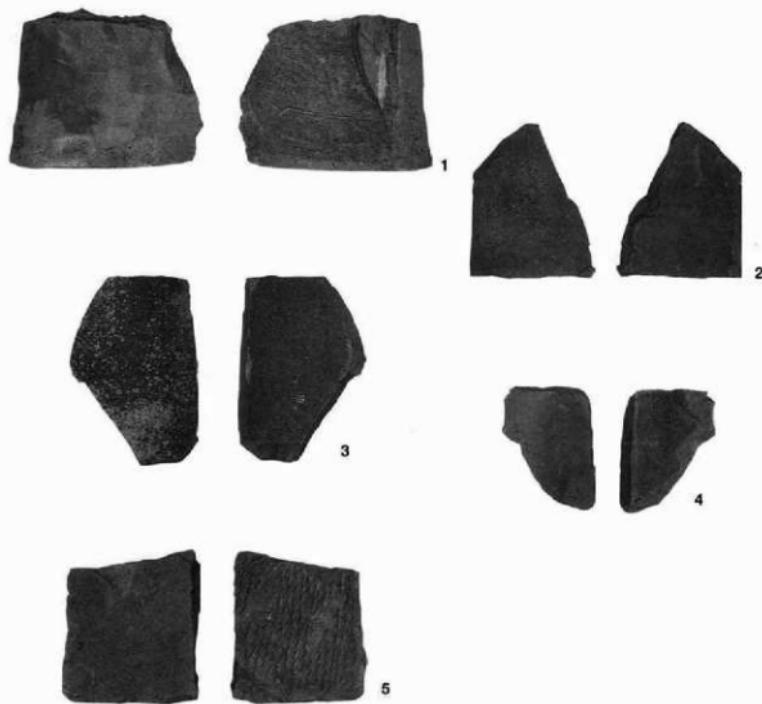
2号土器
1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9



3号土器
1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8



その他の出土遺物



瓦

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成7年度発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
シリーズ番号	13							
編著者名	松山敬一朗							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248神奈川県鎌倉市御成町18番10号							
発行年月日	西暦1997年3月							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
てんじんやまじょう いせき 天神山城遺跡	神奈川県鎌倉市 山崎字宮廻760番外	204 384	35度 21分 51秒	139度 26分 38秒	19950213 19950831	120	自己用住宅併用共同住宅	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
天神山城遺跡	集落址	古墳時代前期 古墳時代後期 平安時代 鎌倉時代 戦国時代 近世	堅穴住居址 掘建柱建物 井戸址 池状遺構 溝状遺構 土坑	25軒 3棟 2基 18条 約100	土師器・須恵器 灰陶錄釉 中国産陶磁器 国産陶磁器 木製品・石製品	平安時代の寺院址と思われる施設 13世紀前半の池状遺構		

わかみやおおじしゅうへんいせきぐん
若宮大路周辺遺跡群 (No.242)

御成町788番3 外地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市御成町788番3外地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は店舗併用住宅の建設に伴い、国庫補助事業と原因者負担事業とが並行して行なわれたが、本報には国庫補助事業分の調査成果を納めた。

3. 国庫補助事業分の調査は、1995年3月9日～4月15日までの間、調査面積約68m²を対象として鎌倉市教育委員会が実施した。

4. 現地での調査体制は以下の通り。

主任調査員 菊川英政（鎌倉考古学研究所）

調査員 石丸運人

調査補助員 秋山哲雄・田畠衣理・丹 行正・
山本直孝

協力機関名 ㈳鎌倉市シルバー人材センター
㈱清興建設

空中 写真 ㈱シン技術コンサル

5. 本報作成は以下の分担で行なった。

遺構版作成 菊川

遺物 実測 及川加代子・太田美知子・兼行枕
枝・坂倉美恵子・丹 行正・山上
玉恵・渡部律子

遺物版作成 兼行

遺物 写真 兼行

写真版作成 兼行

原稿 執筆 兼行（第三章の遺物項すべて）
菊川（第一～四章）

編 集 菊川

6. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境.....	53
第二章 調査の概要.....	56
1. 調査の経過.....	56
2. 調査方法.....	56
3. 測量軸の設定.....	56
第三章 検出遺構と出土遺物.....	59
1. 層序と生活面.....	59
2. 出土遺物の概要.....	59
3. 一面の遺構と遺物.....	60
4. 二面の遺構と遺物.....	62
5. 三面の遺構と遺物.....	74
第四章 まとめ.....	79
※ 報告書抄録.....	95

挿図目次

図1 遺跡範囲と調査地点.....	54
図2 調査地点周辺の遺跡.....	55
図3 グリッド設定図.....	56
図4 調査区設定図.....	57
図5 上層堆積図.....	58
図6 石組溝.....	60
図7 石組溝出土遺物.....	61
図8 一面上包含層出土遺物.....	61
図9 馬下顎骨.....	62
図10 二面遺構全体図.....	63
図11 道路遺構出土遺物.....	64
図12 木組溝.....	65
図13 木組溝出土遺物（1）.....	66
図14 木組溝出土遺物（2）.....	67
図15 木組遺構1.....	69
図16 木組遺構1出土遺物.....	69
図17 木組遺構2.....	70
図18 木組遺構2出土遺物（1）.....	70
図19 木組遺構2出土遺物（2）.....	71
図20 木組遺構3.....	72

図21	三面遺構全体図	-73
図22	方形竪穴1	-75
図23	方形竪穴1出土遺物(1)	-76
図24	方形竪穴1出土遺物(2)	-77
図25	方形竪穴1出土遺物(3)	-78

図 版 目 次

図版1	調査地点全景(空中撮影)	-83
図版2	石組溝	-84
図版3	道路遺構、版築状態、馬下顎骨	-85
図版4	木組溝、木組の状態	-86
図版5	木組遺構1、木組遺構2	-87
図版6	木組遺構2(部分)、木組遺構3	-88
図版7	方形竪穴1、張り出し部遺物出土状態	-89
図版8	方形竪穴1(部分)	-90
図版9	出土遺物(1)	-91
図版10	出土遺物(2)	-92
図版11	出土遺物(3)	-93
図版12	出土遺物(4)	-94

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

若宮大路周辺遺跡群（No.242）は鎌倉旧市街地のはば中央に位置し、鶴岡八幡宮から由比ヶ浜に至る現在の若宮大路を中軸としてその東西両側に広がっている。神奈川県遺跡台帳には鶴岡八幡宮社頭にある北条時房・顯時邸跡（No.278）、北条小町邸跡（No.282）、宇津宮辻子幕府跡（No.239）を除いて北辺とし、宝戒寺裏から滑川沿いに南下し夷堂橋を渡って大町四つ角（米町辻）に至る線を東辺、寿福寺門前から今小路沿いに南下して六地蔵交差点（塔ノ辻）に至る線を西辺とし、東辺と西辺を結ぶ国道134号線（大町大路）を南辺とした遺跡範囲が設定されている。（図1参照）

本遺跡が立地する鎌倉中央部の地勢を見ると、遺跡東辺を流れる滑川の右岸には段丘が発達し、若宮大路の東側一帯からJR鎌倉駅周辺に標高7～9m前後の微高地を形成している。若宮大路の西側では、北西及び西方の谷奥からそれぞれ流れ出る扇ヶ谷川と左助川の流域で標高7～8mを測るが、中世初期には標高4.5～6.5mの低地（註1）であったことが確認され、扇ヶ谷川の旧流路もより南方へ延びて、JR線と若宮大路が交差する辺りで滑川に合流していたと考えられている。現在の標高はJR線ガード下で約3.50mと最も低い数値である。また、遺跡の南辺を限る国道134号線以南には砂丘が広がり、砂丘頂部は若宮大路一の鳥居辺りで標高10m前後を測って西方へ続いている。この砂丘の北限は遺跡範囲の南西部において、御成小学校内の調査（註2）でも確認されている。

さて、本調査地点は若宮大路周辺遺跡群の西辺（今小路）に接し、地勢上では砂丘北限から低地へと移行する辺りの旧扇ヶ谷川右岸にある。この付近にはかつて「諏訪池」と呼ばれる小さな池があり、傍らに「諏訪神社」が祀られていたという。鎌倉市役所が現在地へ移転したのは昭和45年、それに先立ち諏訪神社は市役所北側の山裾へ遷座し、池も埋め立てられて市役所駐車場となった。御成隧道が完成したのは昭和37年とやや古いが、丁度この頃を境に調査地点周辺は大きく変貌したものと思われる。

池の名称にも冠された「諏訪」は、諏訪氏の屋敷があったとの伝承に由来する。江戸時代の地図『新編鎌倉志』（貞享二年／1685年刊）には「諏訪屋敷ハ千葉屋敷ノ東南ノ畠ヲ云フ」とあり、「千葉屋敷ハ天狗堂ノ東ノ畠ヲ云フ」とある。これだけでは二つの屋敷がどこにあったかよく判らないが、天保三年（1832年）に描かれた「扇ヶ谷村絵図」（註3）に「千葉地」「天狗堂崎」の名が見える。「天狗堂崎」は現在の御成小学校背後に延びた細い尾根の先端部、「千葉地」は調査地点の北西部、山裾に近い一帯を指していたらしい。これはあくまでも近世における伝承地であり、中世史料や発掘調査によって裏付けられた訳ではない。むしろ『吾妻鏡』には千葉氏が成胤、胤綱と代々甘繩に居宅を構えており、諏訪盛重は八幡宮社頭に推定される北条泰時の小町亭南角に宅のあったことを記している。また、諏訪六郎左衛門入道は扇ヶ谷（「金沢文庫古文書」）、諏訪刑部左衛門入道は山内（「毛利家文書」）に起居していたことも判っている（註4）が、調査地点に直接関わる記事は見出しができない。

それでは発掘調査から何が判ったのか、周辺部の遺跡を概観しておきたい。（図2参照）

千葉地遺跡（地点2）：1980年調査、現在はスーパー紀ノ國屋。13世紀中頃～14世紀後半にかかる5枚の生活面が確認され、道路遺構、基壇状遺構、方形堅穴建築址、掘立柱建物、溝、井戸、などが検出された。特に、両側に溝を伴う道路遺構は幅約5mと広く東西に延び、その北側では道路に直交する溝によって区画が形成されていた。出土遺物の様相から武家屋敷あるいは寺院の一画と考えられている。

千葉地東遺跡（地点3）：1984年調査、現在は神奈川県企業庁水道局。13世紀初頭～15世紀中頃にかかる9枚の生活面が確認され、道路遺構、基壇状遺構、方形堅穴建築址、掘立柱建物、礎石建物、溝、井

戸、埋没河川が検出された他、8世紀前半の竪穴住居址も見つかっている。埋没河川は幅4m前後を測り、調査区中央を北東から南西に横切る。時期によって流路は多少変化するが、古代～室町時代前半までは継続していたらしい。道路遺構は現在の今小路と並行するように調査区西端で検出された。道路幅は2.7～4.4m前後である。

諏訪東遺跡（地点4）：1981年調査、現在は富士銀行。13世紀後半～15世紀前半。基壇状遺構、方形竪穴建築址、溝、井戸、土壌が検出され、溝による方形の区画は東西10m×南北9.5m、約100m²程の規模を持つ。調査区西端で河川護岸と思われる石組みも確認された。

今小路西遺跡（地点5）：1984～1992年調査、御成小学校。8世紀前半～10世紀代の鎌倉郡衙の発見と13世紀前葉～15世紀後半の遺構群は全国的に注目をあびた。特に、中世3・4面とした時期には御成山東麓に二つの大きな武家屋敷が並び、屋敷地周囲は道路に接して溝や板塀で区画された庶民居住区が広がっていた。屋敷の主人は北条得宗家あるいはその周辺で実権を握る者と推定されるが、年代観と併せて異論もある。（註5）

註1：中世基盤層の標高から算出。因に、図2地点2は約4.7m、地点5は5.8～6.5mである。

註2：『今小路西遺跡（御成小学校内）第5次発掘調査概報』鎌倉市教育委員会 1993年

註3：『鎌倉の古絵図Ⅱ』鎌倉国宝館図録第十六集 鎌倉国宝館 1993年

註4：『第十二章、鎌倉市街の人的構成』『鎌倉市史・総説編』吉川弘文館 1972年

註5：馬淵和雄「今小路西遺跡（御成小学校内）の再検討」『鎌倉』第77号 鎌倉文化研究会 1995年



図1　遺跡範囲と調査地点（1/5000）

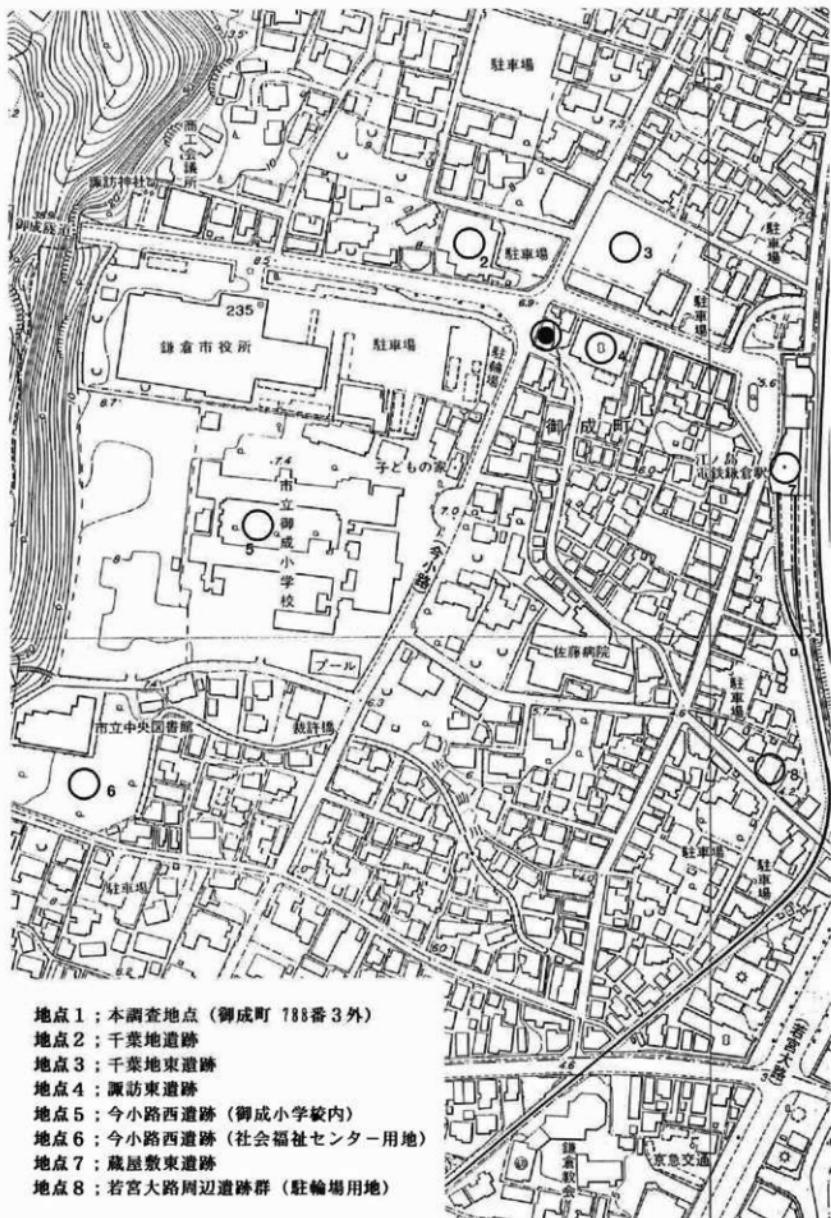


図2 調査地点周辺の遺跡（1/2500）

第二章 調査の概要

1. 調査の経過

1994年9月、自己用店舗併用住宅建設に伴う事前相談を受けて、鎌倉市教育委員会による試掘調査が実施された。その結果、発掘調査の必要性が確認されたが、当該地が車道に近接した地点であるため、安全面を考慮して杭打箇所を先行調査し、杭工事終了後に残余の区域を継続調査することにした。

先行調査は1995年1月9日から3日間の日程で実施され、建築基礎杭の集中する1箇所の他に2箇所が選ばれた。西南角隅の調査壙では近現代井戸と大形遺構の一部、東側調査壙では道路遺構、北側調査壙では近現代井戸と杭列等を検出できたが、狭い面積であるため平面的な調査より、地山までの層序、生活面の対比に主眼が置かれた。

本格的な発掘調査は1995年3月9日から開始された。排土置場を確保する必要上、調査区を二分してI、II区(図4)とし、南側のI区から調査を行なった。I区の調査は4月15日に終了し、引き続きII区の調査に移行した。すべての作業が終了したのは5月2日である。日曜、祭日を除いたこの間の実働日数は45日を数えるが、次々と検出される遺構の計測に追われて調査にゆとりなく、雨天でも休むことはできなかった。

2. 調査方法

I区およびII区では、先行調査の結果に従って地表下65cmまでの近現代整地層を重機で除去した後、手掘りで調査を進めた。その際、遺構の切り合い関係と堆積土層の状態を把握するため、調査区の西側と南側に土層観察用のベルトを設定した。なお、自然地形が傾斜し深くなることが予想された東側は、隣地境界壁を保護するため余裕を持たせざるを得ず、実質的な調査範囲は周縁に打ち込まれた建築基礎杭の内側に限られた。ただし、調査区東側では道路遺構の全容を確認する必要があり、二面調査段階には調査区東壁まで掘り下げるにした。I区の調査対象面積は約68m²、II区の調査対象面積は約38m²を測る。

3. 測量軸の設定

調査に使用した測量軸は、調査区形状に沿うように今小路側の一辺を基準にした。方眼は2m単位に設定し、南北軸には南からA～Hまでのアルファベット、東西軸には西から1～7までの算用数字を付した。方眼目の南西角にあたる測量杭A1と鎌倉市が設置した4級基準点との位置関係は図3に示した通りである。

4級基準点R-076の国土座標値は(x - 75843.788 Y - 25599.120)、R-077の国土座標値は(x - 75855.881 Y - 25577.753)、南北の測量軸は磁北から約23.5度東に傾いている。

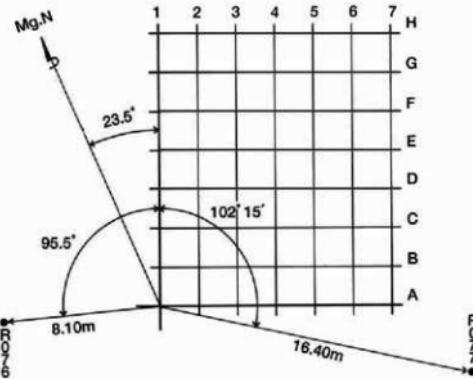


図3 グリッド設定図

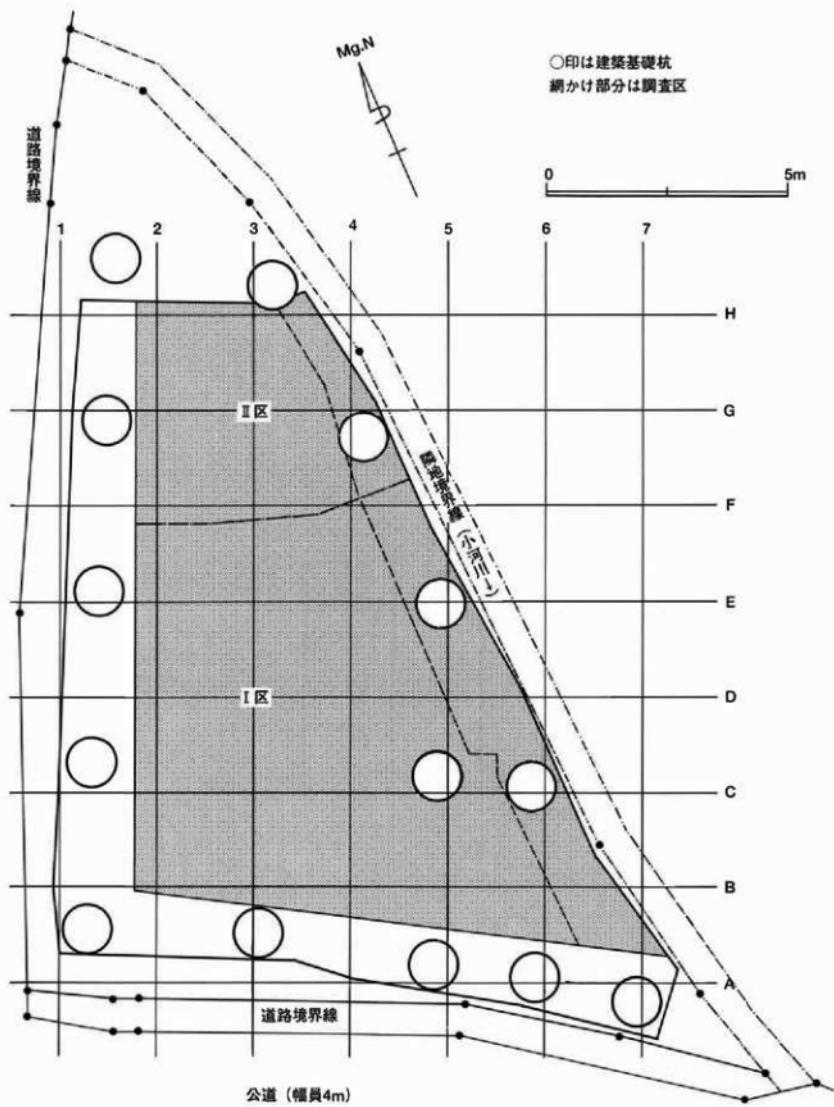


図4 調査区設定図 (1/100)

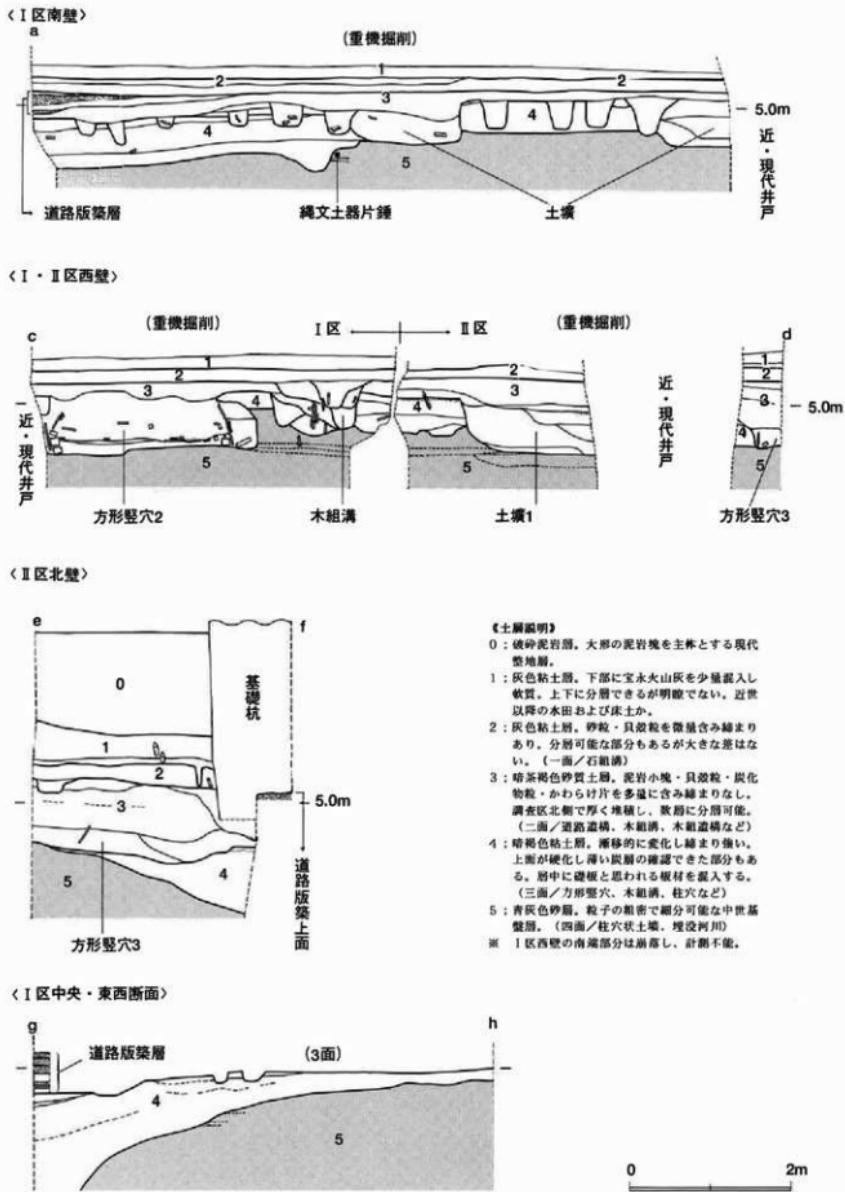


図5 土層堆積図 (1/60)

第三章 検出遺構と出土遺物

本地点で検出された遺構は、層位と切り合い関係からみておよそ4時期に区分できるが、掘り過ぎ、掘り足りないといった事態は常にあり、同一面で検出した遺構がすべて同一時期であるとは限らない。

一面～四面までの内、単独の遺構しかない一面を除き全体図を作成し各遺構の説明を行なうが、まず、生活面に対応する土層の説明と出土遺物の概略について述べておきたい。

1. 層序と生活面

本地点の地表下には、大形の破碎泥岩による整地層（0層）が1m前後の厚さで堆積している。この層は細分できず、付近一帯が一時期に埋め立てられたことを示している。おそらく、明治から昭和にかけての大規模な地盤と思われるが、その時期を特定することはできなかった。

1、2層は水田床土と思われる灰色粘土層。1層下部には宝永四年（1707年）に降下した富士火山灰が混入しており、分層の目安とした。天保三年（1832年）「扇ヶ谷村絵図」では、調査地点周辺に「田畠」と記しており、中世以後の長期間を水田として利用していたことが判る。2層は1層に比べて締まりが強く、上面で小規模な石組溝が検出された。出土遺物からみて中世最後の生活面であり、一面として調査した。

3層は泥岩片、貝殻粒、かわらけ片等を多量に含む砂質土層。締まり弱く、単なる遺物包含層と考えていたが、道路遺構や木組遺構などが検出されたことから二面として調査した。層厚10～20cmと薄いため、精査段階で大部分を掘り過ぎている。

4層は暗褐色粘土層。締まり強く中世基盤層と間違え易い。古代遺物に混じってかわらけ皿が出土しており、中世初期～前期にかけて堆積した土層と思われる。東側旧河川に向かって厚く堆積するが、同層中の変化は漸移的であり分層不可能。上面で方形堅穴や柱穴等を検出し、三面として調査した。

5層は青灰色砂層。海岸砂丘の北端部にある。上面はほぼ平坦となるが、東側は旧河川に向かって大きく落ち込んでいる。大形で深い柱穴状の土壤を検出し、四面として調査した。古代末～中世初頭の生活面と思われる。なお、砂層中の粗い砂砾部分（標高4.40m）からは、縄文中期～後期初頭の土器片錐が出土している。

2. 出土遺物の概要

遺物総量は整理箱（内法：33.5×53.5×14.5cm）にして45箱分が出土した。その内訳は以下の通り。

土器；かわらけ皿が最も多く、他に土鍋・手焼きの破片が数点出土した。

陶器；常滑窯の破片が大部分を占める。瀬戸では卸し皿の小片、捏ね鉢は山茶碗窯の製品が多い。

磁器；青磁では碗・皿、白磁では皿、青白磁では合子・壺が出土したが、全体量はわずかである。

金属製品；鋳化せず原形を保つ。銅鏡・角釘の他に、刀子・鉄皿・飾り金具様の製品がある。

骨製品；賽子・笄が出土した。

石製品；砥石・硯の破片が出土した。

木製品；箸・杓子・曲げ物桶・下駄・板草履・独楽・人形・漆椀・漆皿の他に、礎板・杭・板等の建築材が出土し、多彩な内容を持つ。

貝・骨；食物残渣としてハマグリ・アワビ・サザエ・トコブシ・アカニシの他に、クルミ（モモ？）の種子が出土した。鳥獸骨は未鑑定。

その他；縄文土器（土器片錐）・土師器（壺、甕）・須恵器（蓋、甕）・瓦が出土した。

3. 一面の遺構と遺物

石組溝(図6)；II区東壁際で検出された南北方向の溝である。上面幅約45cm、底面幅約25cm、深さ約25cmを測り、断面は逆台形を呈している。溝の西側は破砕した大形の泥岩や凝灰岩を置いて護岸し、溝壁の一部としても利用している。一方、溝の東側は板材をあてて護岸したよう、内壁沿いに約60cm間隔で打たれた杭痕が3箇所確認された。本址に伴う杭はこの3本だけで、西側一帯に打たれた杭はすべて後世の丸杭である。

溝内部には灰色粘土層が堆積する。小砾、砂粒をわずかに混入し、上下に分層できるが大差はない。なお、覆土上層からは一括投棄された状態でかわらけ皿9点が出土し、溝の南端近くからは骨製の賽子や手焼片が見つかっている。

石組溝出土遺物(図7)

1～4は溝の平面精査中に出土したかわらけ小皿。一面上に堆積する灰色粘土層(近世)下部の遺物である。器壁薄く、胎土は緻密で肌色を呈し、白色針状物質を含まない。いずれも糸切り底。1は略完形、3を除いて口縁部に煤が付着している。

5～13は溝内に一括投棄された状態で出土したかわらけ皿。すべて同一型式である。器壁厚く外反し、内底部にはナデがない。胎土は砂粒が多く、総じて粗い。すべて糸切り底である。5～7、12、ほぼ完形であり、他は2/3以上残存。7は灯明皿として使用されている。

14は備前摺り鉢。溝内から出土した。

15は瓦質手焼り。口縁部内面から体部外面上位にヘラミガキ調整を施す。胎土は灰白色を呈し砂粒、石粒を多量に含む。溝の南端近くで出土。

16は賽子。獸骨を加工したもの。1.2×1.3×1.4cmの直方体。瓦質手焼りとともに、溝の南端近くで出土した。

一面に包含層出土遺物(図8)

一面精査中に出土した遺物である。確實に一面に伴うものは、20、24～26だけと思われる。

17～21はかわらけ皿。すべて底面は回転糸切り。20は略完形。橙色の胎土を持ち、器壁厚く外反し、内底部にはナデがない。一面石組溝出土のかわらけ皿と同型式。

22は常滑甕。23は常滑捏ね鉢である。いずれも小片。

24～26は備前摺り鉢。26は内面に七条1単位の櫛目を施す。

27～32は山茶碗窯系。27～31は捏ね鉢。27は比較的精製された胎土を持ち、体部外下面下位にヘラケズ

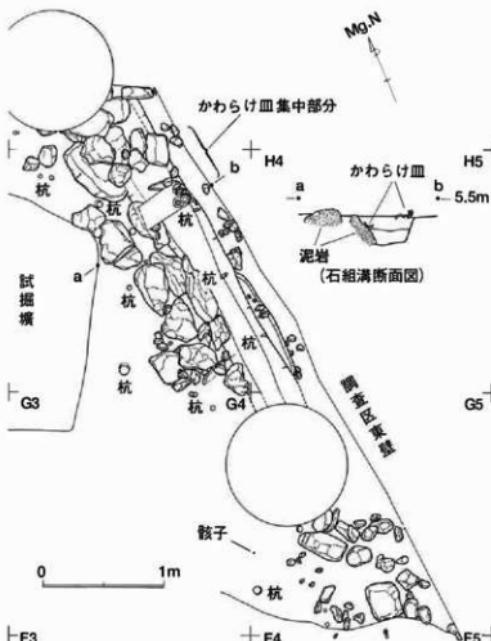


図6 石組溝(1/40)

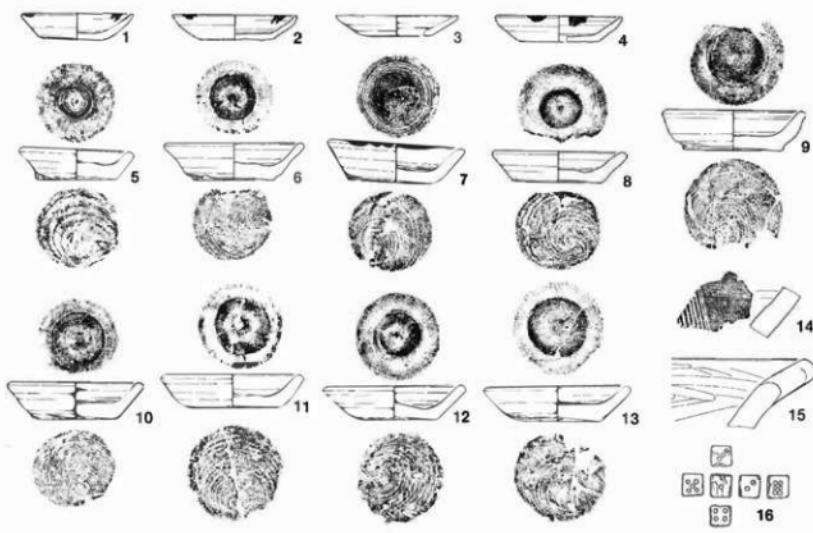
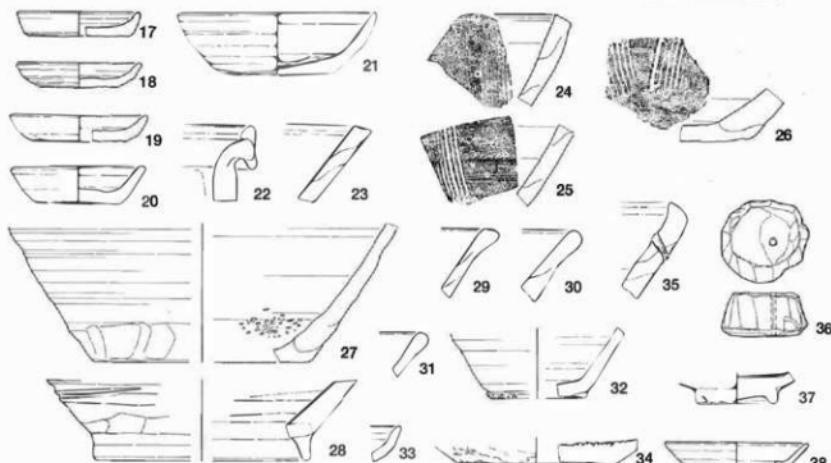


图7 石組溝出土遺物

0 10cm



S=1/1 39 S=1/1 40
嘉祐通宝·楷 1056年 照寧元宝·楷 1068年

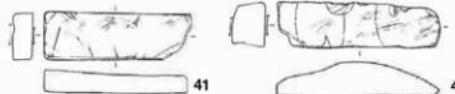


图8 一面上包含層出土遺物

0 10cm

リ調整を施す。高台欠落後も使用されており、よく使い込まれて内面は磨耗。32は碗。

33、34は瀬戸。33は灰釉の皿である。胎土は灰褐色を呈し、微砂粒を含む。釉調は、オリーブ色に藍と白濁した緑が重なり合う。34は鉢し皿。胎土は黄灰色を呈し精良。釉薬は刷毛塗り。外底面は回転糸切りである。

35は瓦質手焙り。胎土は暗橙色を呈し、砂粒を含む。口縁部下の穿孔が残存。

36は上師質手焙りの脚。側面はヘラナデ整形、中心をはずれた位置に直径約3mmの穿孔が残る。

37、38は舶載磁器。37は竜泉窯青磁碗の高台部。38は白磁口元皿で、口唇部にスス付着。

39、40は鉢。39は嘉祐通宝。40は熙寧元宝。

41、42は砥石。41は京都府鳴滝産の仕上げ砥。橙白色を呈し、底面は2面。42は群馬県上野産の中砥。緑灰色の凝灰岩で、底面は1面。

4. 二面の遺構と遺物

二面は縮まりの弱い生活面であり、精査中にかなり掘り過ぎたため、下層の遺構が混在している可能性が強い。道路構造、木組構、木組造構1は確実に二面の遺構と考えられるが、前二者は既に三面の時に構築されていたことが、上層観察結果から確認された。

道路遺構（図10）

調査区の東半部で検出された。主軸方位は南北を示すが、道路縁辺の形状を観察すると必ずしも直線的ではなく、旧河川の流路沿いに敷設された道路と推定される。確認できた道路幅は最大で約3.20m、上面の標高は5.20~5.10mを測り平坦であるが、東側に向かってわずかに傾斜している。

道路は破碎した泥岩と砂を交互に版築して作られている。部分的な補修を繰り返してかなりの厚みを持ち、I区南壁近くで3枚、同中央部では4枚の泥岩版築層を確認し、間層を含めた全体の厚みは東側部分で30~40cmを測る。

三面に伴う道路は検出していないが、I区南壁上層段で見る限り、約1m程東寄りに敷設されていたようである。この最下の道路直下からは馬の右下顎骨が潰れて出土した。本来は三面の遺構に属するが、道路に関わるものと考えて扱うこととした。（図9）

道路遺構出土遺物（図11）

道路最上面（43~47）、版築中（48~54）、道路最下面（55）

の遺物を区別して取り上げた。いずれも小片である。

43はかわらけ小皿。胎土は淡灰橙色を呈し、赤色小粒を混入。

44は常滑甕。

45は磨り常滑。甕の体部転用品である。

46は山茶碗窯系捏ね鉢。

47は鉢。聖宋元宝。

48、49はかわらけ皿。49は灯明皿として使用されている。

50、51は山茶碗窯系捏ね鉢。50は口縁部内面に自然釉。

52は瓦質手焙り。

53は舶載磁器。青白磁の壺か香炉と思われる。

54は鉄製品。角釘である。

55は山茶碗窯系捏ね鉢。内面は摩耗し火を受けた痕跡がある。

高台欠落後も使用されている。

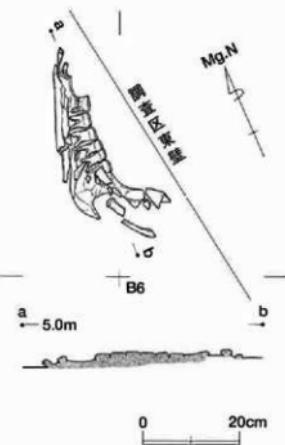


図9 馬下顎骨 (1/10)

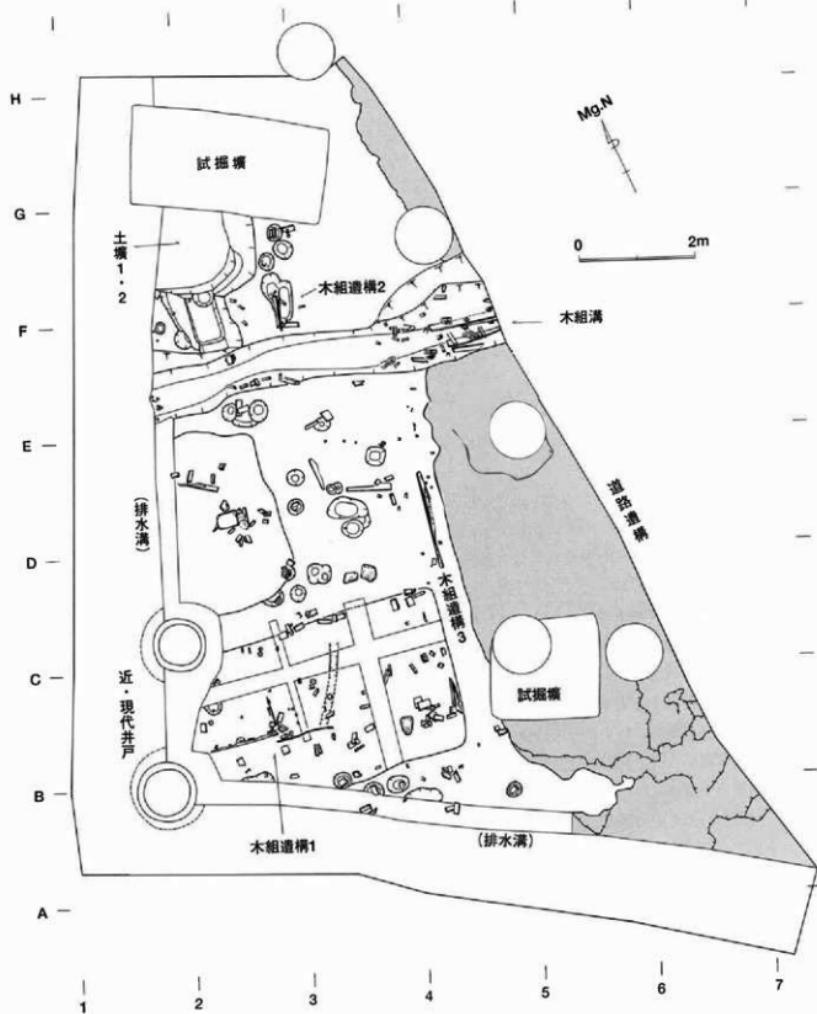


図10 二面造構全体図 (1/80)



図11 道路遺構出土遺物

木組溝 (図12)

I区とII区の境界で検出された。運悪く排水溝を掘った位置が本址にあたり、馬力ある作業員によつて多くの杭が抜かれてしまった。旧状を留めるのは溝の東端部分だけである。

溝は上幅約80cm、底部は杭を打ち込み側板で土留めをしているため、幅約30cmの狭い溝となる。また、三面から二面までの間に少なくとも2回の浚渫を行なうが、主軸に変化なく東西方向を向いている。

溝内に残る杭は多種多様で統一性は見られない。組み合う杭の並びも現状からは不明であるが、約50~60cm間隔で打たれた部分も確認できた。杭の中にはかなり太い角材を使用したものやホゾを持つもの、先端部に火を受け焦げているものがある。

溝の覆土は砂質土を主体とするが、掘り方まで同時に発掘したため、溝の形状や構造だけでなく遺物も新旧混在しており、杭や横板の計測値も不十分である。残念ながら、溝があったという事実しか判らず、調査に携わる者全員の注意と反省を促したい。

木組溝出土遺物 (図13、14)

三面から二面までの溝覆土と掘り方の遺物が混在している。図示した以外に獸(鳥、魚)骨・貝殻が出土した。

56~62は糸きり底のかわらけ皿。58の口唇部の穿孔は調査時に受けたものかもしれない。62は完形、胎土は橙色を呈し、赤色小粒が混入している。

63~66は常滑捏ね鉢。63は長石、石英粒を含み褐色を呈する胎土を持つ。内面には自然釉。注口が完全に残る。65は底部である。胎土は明褐色を呈し、長石、石英粒を多量に含む。内底面を成形した際の指頭痕がくっきりと残る。中央部は磨耗が著しい。

67~68は山茶碗窯系捏ね鉢。68は胎土に小石粒を多量に含み、体部外面下位はヘラケズリ調整。内底面はよく使い込まれて磨滅しており、内外面ともに火を受けた痕跡がある。

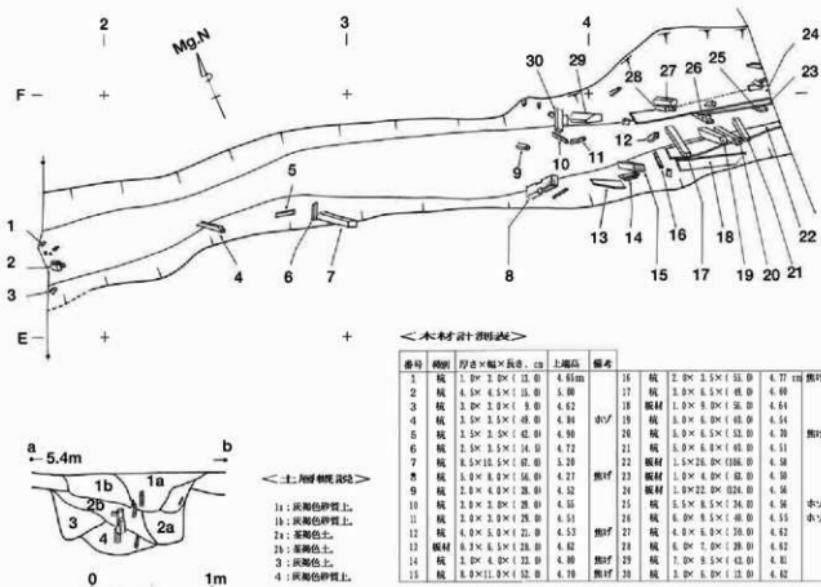


図12 木組溝 (1/40)

69は伊勢型土鍋。口縁部外面は火を受けてスス付着。

70は黒縁瓦器碗。胎土は灰白色を呈し、口縁部外面が黒灰色。

71は瓦質手焙り。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面には指痕痕が残る。貫通穿孔は2か所残る。

72~78は舶載陶磁器。72~74は竜泉窯青磁蓮弁文碗である。72は単弁。73、74は複弁で、74は焼成が悪く失透している。75は竜泉窯青磁合子の身。形状八角形の腰部には陽刻の唐草文を配し、高台置付および受け部は露胎。76は同安窯系の皿。77は白磁印花文碗。口唇部は露胎で、内面に陽刻花卉文を配す。78は褐釉壺の底部。

79~85は釘。79は両頭の釘か。

86、87は銭。86は咸平元宝。87は治平元宝。

88~90は石製品。88は硯。黒色粘板岩製。裏側の硯面は破損した後に再加工されたもの。表裏面とも墨痕が残る。89は砥石。石材不明、中砥と思われる。片面に火を受け黒く変色している。底面は1面。90は碁石か。頁岩の小砾。加工はされていない。

91は骨製品。笄。獸骨(四肢骨)を加工したもので、一端を尖らせ、他方には切り込みを作る。完形品である。

92~114は木製品。92は漆椀。黒漆地に朱漆で亀甲・菊花の印判文を捺す。93は人形。体部は五角柱状、顔は面収成形。目鼻の表現はない。柾目取り。94は曲物の底。直径38cm前後を測る。柾目取り。95は板杓子。表裏面ともに先端部が焦げている。板目取り。96は独楽。円盤状の本体部中心には、先端を尖らせた心棒を差し込む。97はヘラ状木製品。98~100は不明。一端を尖らせた棒状の製品。101~111は箸または箸状木製品。112~114は箸の未製品か。

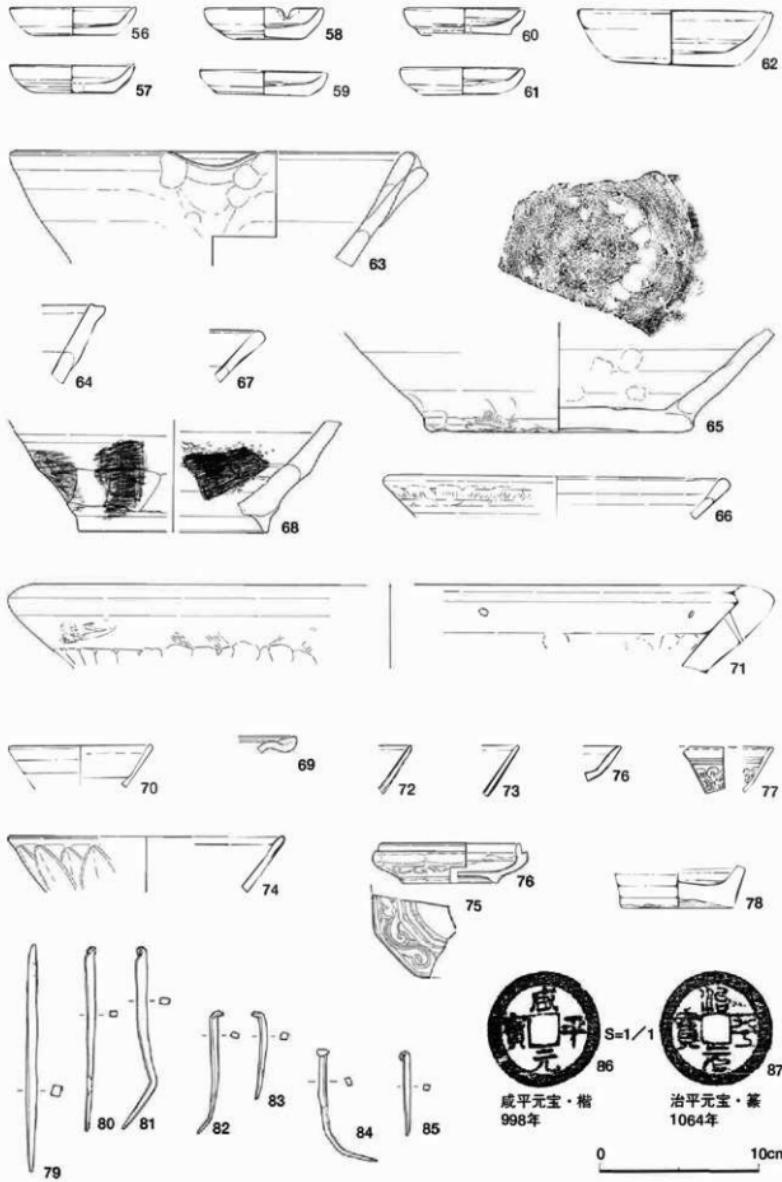


図13 木組溝出土遺物（1）

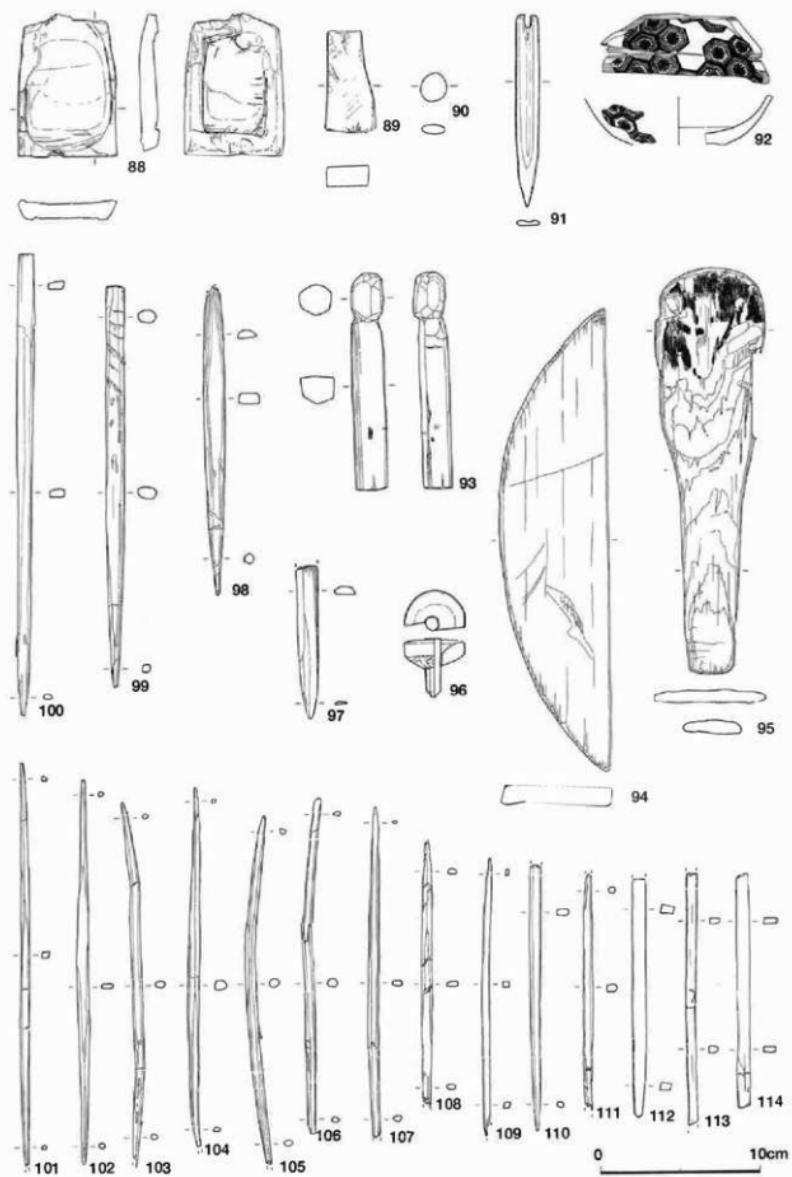


図14 木組溝出土遺物（2）

木組遺構 1 (図15)

I 区南西部、方形堅穴 1 の覆土上部で確認された。精査段階において薄い板材の痕跡がT字形に確認されたため、土層観察堤を残しながら周辺部を掘り下げた。板材は厚さ0.5~0.7cmと2cmの2種類があり、幅は残りの良い部分で14cm、長さは118cm、90cm、50cmを測る。建物の一部、間仕切り状の遺構と考えられる。この種の遺構は市内でも検出例が増えつつあるが、構造的には不明な点が多く、柱を立てた後に板材の両側を土で埋めていた例もある。本址では板材の下端を床面と考えて精査した結果、標高5.0~5.1mの高さでかわらけ皿と礎板に使用された可能性のある板材を検出できた。遺物の出土状態から見て、間仕切り板材の北側に東西に並ぶ二つの室があったものと推定される。建物全体の規模等については後章に譲ることにしたい。

なお、國中の鉄皿(k)は本址を切る浅い溝状遺構から出土したもので、溝は幅約10cm、深さ約3cmの断面U字形を呈し、溝内には砂が堆積していた。溝の性格については不明。

木組遺構 1 出土遺物 (図16)

115は内折型のかわらけ小皿。口径4.1cm、底径3.9cm、器高0.6cmを測る。糸きり底。胎土に赤色粒が混入している。

116は竜泉窯青磁鑄蓮弁文碗。単弁。蓮弁は細く、小ぶりである。117は竜泉窯青磁の無文折縁鉢。釉薬が厚く、失透している。

118は錢。政和通宝。

119は砥石。熊本県天草産の中砥で、砥面は一面。

120~126はかわらけ皿。完形もしくは略完形の皿で、すべて糸切り底である。120は図15-bに対応し、以下121はa、122はc、123はg、124はh、125はi、126はjに対応する。120、121、123、126は胎土に白色針状物質を多量に含む。

127は鉄皿。器壁が1.0~1.5mmと薄い半球形の皿である。口唇の一部を欠損するがほぼ完形。図15-kに対応する。

木組遺構 2 (図17)

II区で検出された。二面精査段階で西側のL字形木組部分が確認され、その後道路遺構下で残りの板材を検出した。板材の状態から見て同一遺構の可能性が高く、図17には両者を合成して図示することにした。三面の遺構と思われるが、二面で一部が確認できたことを考慮してここで扱う。

L字形の木組部分は、板材の東側を杭で固定し、北端に打たれた杭のすぐ横には著状木製品の集積箇所が見られた。また、東部の板材はその北側を泥岩で埋めて固定している。このことからすると、板材が重なって検出された東側に幅約1m、長さ2.35m以上の細長い室を想定できるが、床面となる三面自体が傾斜している点に疑問が残る。建物の一部と思われるが、規模、構造ともに不明である。

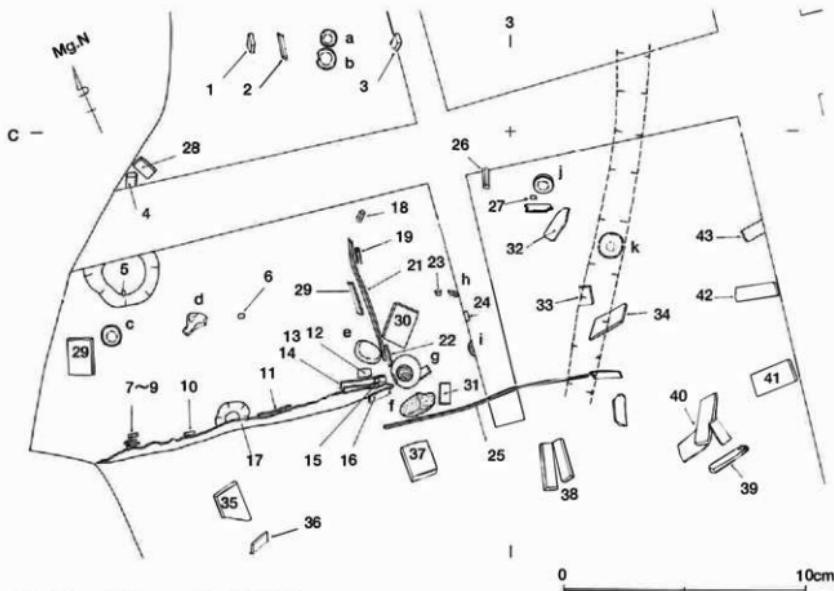
木組遺構 2 出土遺物 (図18、19)

128~131はかわらけ皿。いずれも糸きり底である。

132は常滑窯の底部。外面下位はタテのヘラナデ、内面は指頭押さえで整形。内底に自然釉の痕跡が残る。

133、134は常滑捏ね鉢。133は比較的良く精製された胎土を持ち、外面下位はヘケズリ調整。高台は欠落している。134は口縁部の小片。胎土に長石、赤色小粒を含む。

135は山茶碗窯系捏ね鉢。胎土は大小の長石粒を多量に含む。体部外面下位はヘラケズリ調整、高台は貼り付けである。



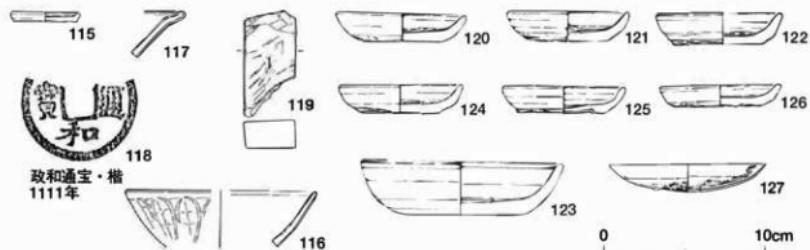
<遺物出土状況表>

番号	種別	出土高	参考
a	かわけ付	5.45m	表
b	かわけ付	5.45	裏
c	かわけ付	5.45	表
d	楔片	5.42	
e	楔	5.13	
f	楔	5.12	
g	かわけ付(丸)	5.43	裏
h	かわけ付(丸)	5.43	斜位
i	かわけ付(丸)	5.43	表
j	かわけ付(丸)	5.43	斜位
k	鉛錠	5.43	溝内

<木材調査結果>

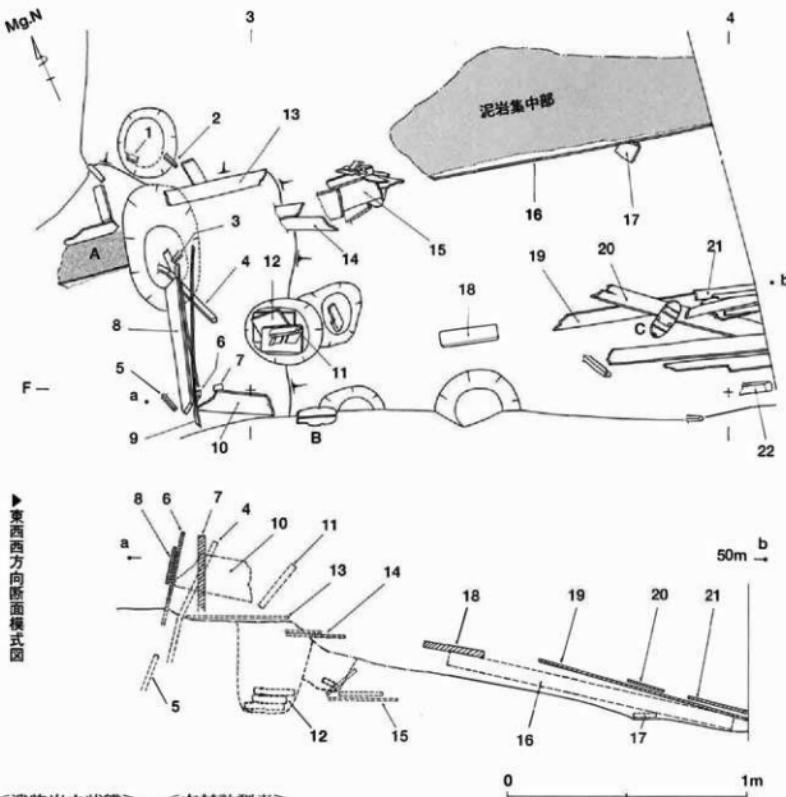
番号	種別	厚さ×幅×長さ、cm	上端高	参考
1	杭	2.5×5.4×14.0	5.13m	
2	板	1.0×3.8×15.0	5.05	板
3	杭	2.2×3.8×11.0	5.14	
4	杭	2.0×5.4×17.0	5.13	
5	杭	2.0×5.4×17.0	5.01	腐朽
6	杭	2.0×5.4×17.0	5.02	腐朽
7	杭	3.0×4.0×8.0	5.18	腐朽
8	杭	2.0×5.4×11.0	5.18	
9	板	0.3×5.0×15.0	5.18	板
10	杭	1.0×2.0×15.0	5.07	
11	板	0.3×5.0×15.0	5.08	腐朽
12	杭	3.0×4.0×12.0	5.14	
13	板	0.3×7.0×15.0	5.18	板
14	板	0.3×7.0×15.0	5.18	板
15	杭	2.0×5.4×18.0	5.14	
16	板材	1.0×10.0×12.0	5.13m	板
17	板材	0.5×1.0×18.0	5.14	板?
18	杭	1.0×2.0×18.0	5.09	
19	杭	1.0×4.5×8.0	5.12	腐朽
20	板材	1.0×11.0×8.0	5.12	板
21	板材	2.0×1.0×18.0	5.12	板?
22	板材	1.0×7.5×18.0	5.12	板
23	杭	1.0×1.0×18.0	5.07	
24	杭	1.0×1.0×18.0	5.18	
25	板材	0.7×10.0×9.0	5.12	板?
26	杭	1.0×2.0×12.0	5.06	
27	杭	1.0×2.0×12.0	5.06	
28	板材	2.0×7.0×18.0	5.09	板
29	板材	2.0×8.0×15.0	4.95	板
30	板材	1.0×10.0×18.0	5.04	板
31	板材	1.0×5.0×12.0	5.02m	板
32	板材	1.0×5.0×18.0	5.06	板
33	板材	1.0×9.0×17.0	5.04	板
34	板材	2.0×5.0×18.0	5.01	板
35	杭	2.0×5.0×18.0	5.01	腐朽
36	杭	2.0×5.0×18.0	5.06	板
37	板材	1.0×9.0×18.0	5.06	板
38	杭	2.0×5.0×18.0	5.14	板
39	杭	2.0×5.0×18.0	5.01	腐朽
40	板材	2.0×5.0×18.0	5.06	板
41	板材	4.5×5.0×12.0	5.06	板
42	板材	2.0×5.0×21.0	5.12	板
43	板材	0.3×5.0×12.0	5.05	板

図15 木組造構1 (1/20)



政和通宝・楷
1111年

図16 木組造構1 出土遺物



<遺物出土状況表>			<木材尺寸測定表>		
番号	種別	出土高	番号	材種	厚さ×長さ(cm)
A	有	4.77m	1	板材	0.5×3.5×9(4.9)
B	板厚欄	4.44	2	板材	2.5×2.0×10(10)
C	下駄	4.47	3	板材	1.5×2.0×22.0
			4	板材	2.0×2.0×10(10)
			5	板材	1.5×2.0×10(10)
			6	板材	1.5×2.0×10(10)
			7	板材	2.0×2.0×10(10)
			8	板材	2.0×2.0×10(10)
			9	板材	0.2×4.5×35.0
			10	板材	0.9×1.0×35.0
			11	杭	2.5×3.0×35.0
			12	板材	2.0×2.5×15.0
			13	板材	1.0×4.5×42.0
			14	板材	0.2×4.5×35.0
			15	板材	1.0×4.5×35.0
			16	板材	1.0×4.5×35.0
			17	板材	1.0×4.5×35.0
			18	板材	1.0×4.5×35.0
			19	板材	1.0×4.5×35.0
			20	板材	1.0×4.5×35.0
			21	板材	1.0×4.5×35.0
			22	杭	4.0×5.0×100.0

図17 木組造構2 (1/20)

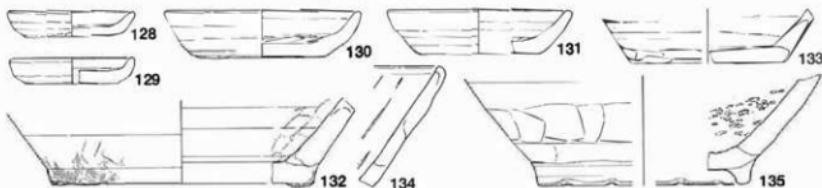


図18 木組造構2 出土遺物 (1)

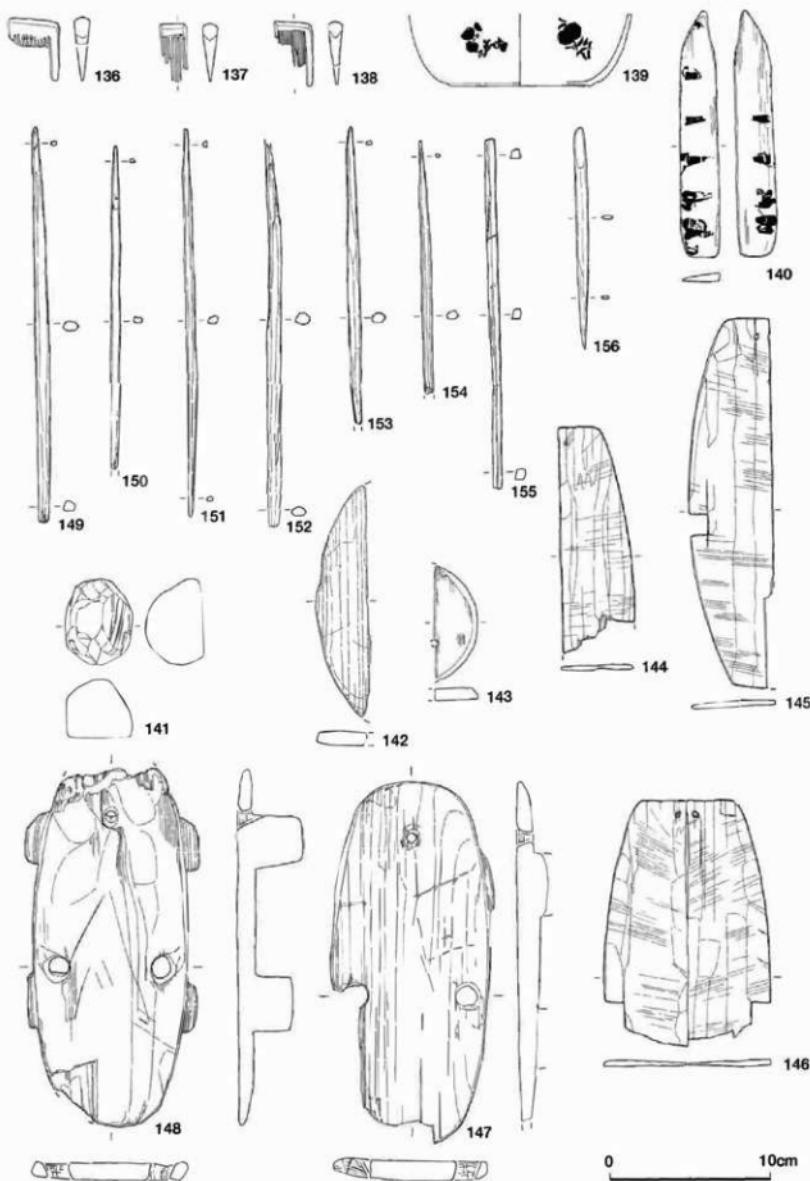


図19 木組構2出土遺物(2)

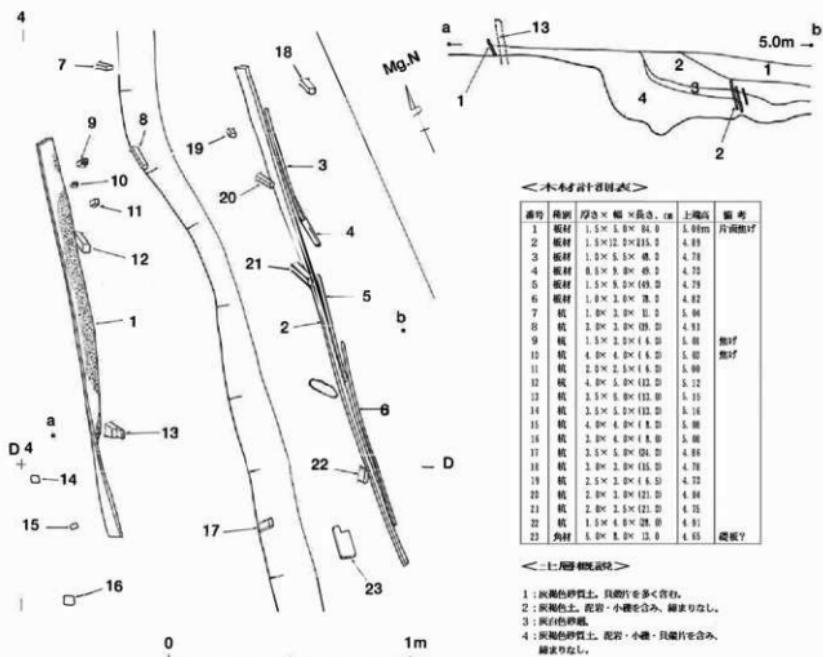


図20 木組構造3 (1/20)

136～138は櫛。いずれも小片。137は黒漆が一部残存している。

139は楓。黒漆塗りの地に朱漆で花卉文を描いている。

140はヘラ状の木製品。表裏ともに黒漆が付着している。用途不明。

141は不明木製品。上面を丸く削り整形するが、側面と裏面は平坦である。

142、143は曲物の底。142は直径約21.5cm。143は直径約7.5cmを測る。いずれも柾目取り。

144～146は板草履。表裏面には蔓状压痕がよく残っている。

147、148は下駄。歯は削りだし、かかと側の摩耗が著しい。

149～154は箸。155は箸の未製品であろうか。

156は不明木製品。箸に似るが、全体を偏平に削って一端を尖らせていている。

木組構造3 (図20)

I区二面精査時に上段(西側)の板材が確認され、道路遺構下で下段(東側)の板材が確認された。

上段の板材は道路遺構から約20cm離れて平行しており、道路側溝の一部である可能性が高い。既に一面帯を掘り過ぎていたため側溝プランは不明となるが、杭の並びが板材の延長線上に確認できた。なお、板材の東側面下部は火を受け焦げるが、固定している杭は焦げていない。火災後の廃材を転用したものと思われる。下段の板材は西側を杭で固定している。三面が段差をもって落ちており、この間約50cmを側溝としていた可能性がある。遺構の位置と方向性、構造の点からは二面、三面時の道路側溝と推定されるが、土層図に溝らしき線がないことに疑問も残る。出土遺物はない。

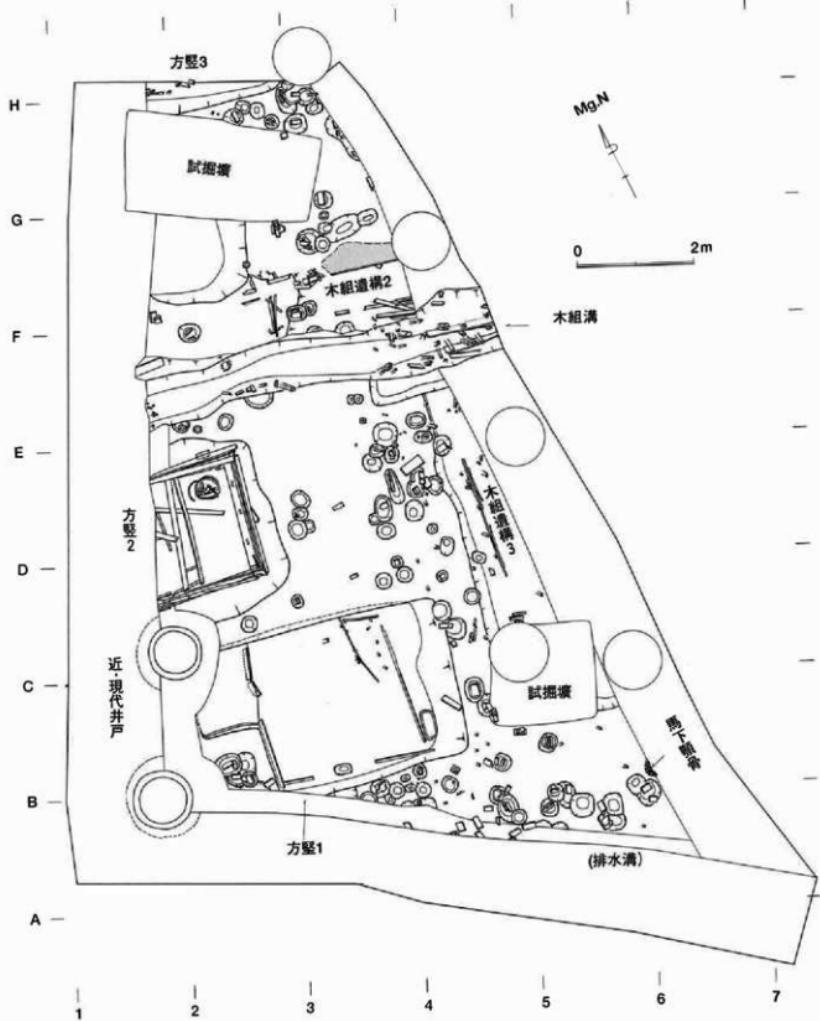


図21 三面造構全体図 (1/80)

5. 三面の遺構と遺物

三面は中世基盤に似た暗褐色粘土層を生活面としている。この上面西側はほぼ平坦となっているが、二面道路遺構下は東側旧河川にむけてわずかに傾斜した地形を呈する。なお、I区方形竪穴2の東側とII区土壤1の南側で焼土面の広がりが確認され、三面生活時には火災を受けたと推定される。

道路遺構

安全確保のために調査区東壁際を掘り残したことと、三面に伴う道路遺構は検出できなかった。二面時道路より東側に寄って敷設されていたようである。なお、調査区東南隅（図21、馬下顎骨の横）で検出された柱穴は三面道路下の位置にあたり、より古い遺構が存在したことを推測させる。

道路面（泥岩版築層）直下から馬の下顎骨が出土したこと、木組遺構3が三面道路側溝の土留め板である可能性は既に前節（二面検出遺構）の各項で述べた。

木組溝

既に前節の項で述べた通りである。溝底が中世基盤の砂丘層をわずかに掘り込むだけであり、本址の構築が四面まで遡るとは考えられない。

木組遺構2・3

前節の各項で述べた通りである。参照されたい。

方形竪穴1（図22）

I区南部で検出された。近現代の井戸掘り方で一部を壊されるが、1軒分の規模が判る遺構である。竪穴は東西3.5m、南北2.8m、深さ70cmの本体部に、東西1.0m、南北1.4m、深さ30cmの張り出し部を設け、内傾する北壁となだらかに傾斜する東壁を持ち、床面は平坦に削られている。

床面の北東部角近くに打たれた杭は2列、その杭を廻るように東・西・北の三方に板材が見られる。杭の内側を残して周囲を埋め戻し、通路状の間仕切りとしたのであろうか。西壁と南壁の板材は壁板の一部と思われる。床面から約10~20cm浮いた状態であり、竪穴使用時の床面は埋め戻して作られていたと推測できる。ただし、土層観察結果からは使用時床面の線を明確に区別できなかった。なお、床面の2箇所にある浅い窪みは柱穴と考えていたが、不定形に掘り広がる可能性があり、基盤となる砂層の汚れを掘ったものと判明した。

張り出し部は浅く掘り残した基盤砂層の上に、砂と粘土を積み上げて構築されている。現状では東側へ崩れているが、構築当初は本体部掘り方床面より25~30cm高かったと推測される。土留めの板材は5枚検出された。立て並べた4枚の横板中央に1枚の縱板をあてて支柱としていたようである。杭の痕跡が見つからず、この状態では土留めの機能を果たさない。やはり本体部床面をかさ上げして使用したと判断せざるを得ない。なお、張り出し部上面からは、かわらけ皿40個体分がすべて伏せた状態で検出された。

方形竪穴1出土遺物（図23~25）

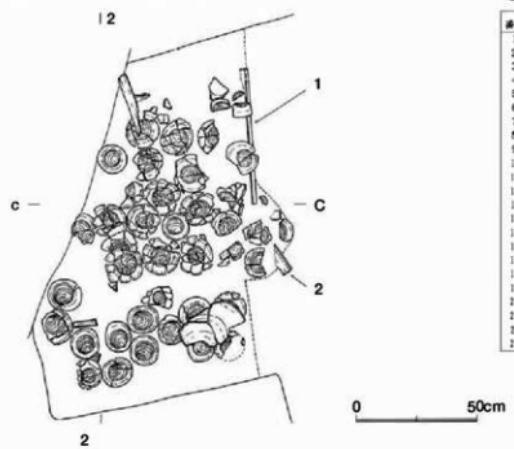
遺物の多くは覆土上層から出土したものである。張り出し部の遺物は区別して取り上げた。

157~167はかわらけ皿。157、158のみ手捏ね成形。161、162、164は胎土に赤色小粒を含む。159、162、164、165、166は完形。161は略完形。157、163は灯明皿として使用されている。164、165は張り出し部上面のかわらけ皿と同一型式で口縁部が歪んでいる。

167、168は常滑。167は壺の口縁部である。口径36cm前後の大型で、比較的精製された胎土には微気孔が多い。口縁部から肩部にかけて自然釉。168は壺の底部。底部内外面と腰部は焦げている。

169~172は山茶碗窯系捏ね鉢。172は胎土に大小の長石粒を含む。腰部はヘラケズリ調整、内底はよ

張り出し部・遺物出土状態 (1/20)



<木材計測表>

番号	固別	厚さ×幅×長さ, cm	上端高	備考
1	板材	1.8×15.4×54.5	6.67 m	ホゾ貝み
2	板材	1.8×14.8×34.5	6.65	ホゾ貝み
3	板材	2.8×12.8×32.5	6.65	
4	板材	2.8×16.5×30.5	6.67	
5	板材	2.8×3.5×35.0	6.57	
6	板材	2.8×27.8×117.0	6.62	
7	板材	2.8×15.8×35.0	6.58	
8	板材	2.8×12.8×101.0	6.61	
9	板材	2.8×13.8×21.0	6.30	
10	板材	1.8×16.8×31.0	6.26	
11	板材	1.8×16.8×35.0	6.28	
12	板材	1.8×7.8×61.0	6.20	
13	杭	1.8×8.8×34.0	6.58	
14	杭	1.8×1.8×24.0	6.32	
15	杭	1.8×1.8×17.0	6.46	
16	杭	1.8×1.8×21.0	6.0	
17	杭	1.8×1.8×21.0	6.40	
18	杭	1.8×1.8×22.0	6.49	
19	杭	1.8×1.8×19.0	6.38	
20	杭	1.8×1.8×16.0	6.58	
21	杭	1.8×4.8×121.0	6.58	
22	杭	1.8×3.8×27.0	6.58	
23	杭	1.8×4.8×125.0	6.51	

支柱?

板状
断次北へ

隔次南へ

平面図・土層堆積図 (1/40)

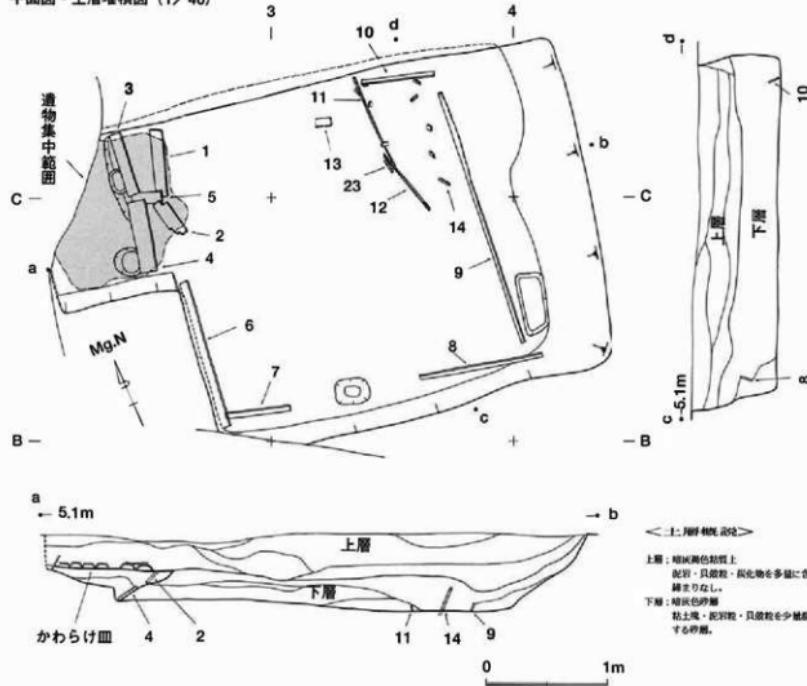


図22 方形竪穴1 (1/20, 1/40)

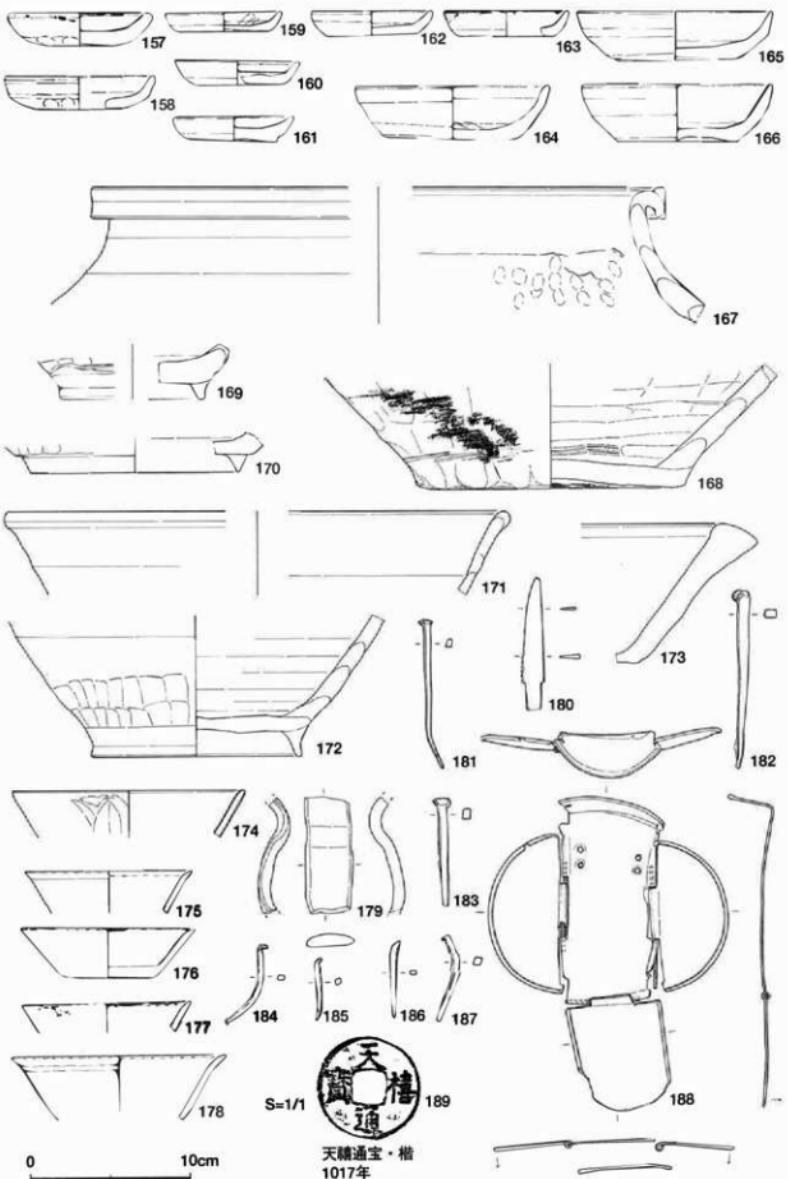


图23 方形竖穴1出土物(1)

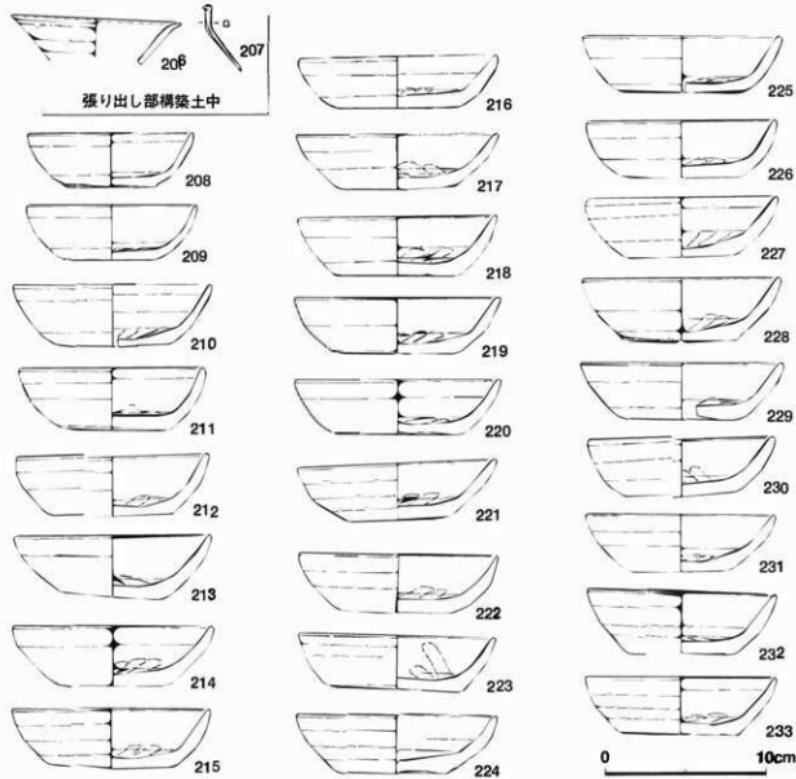
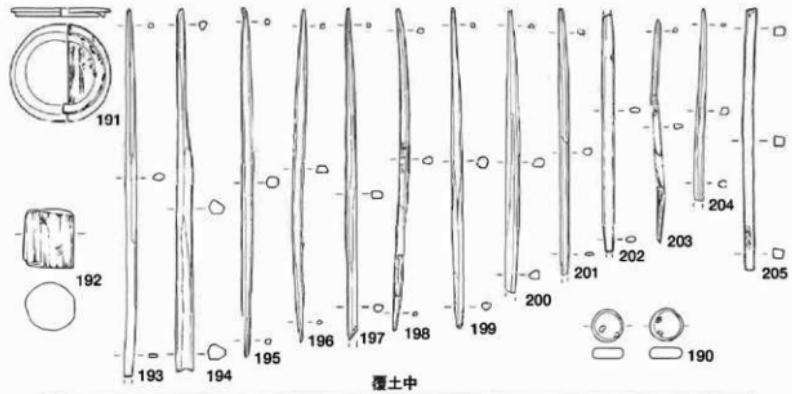


図24 方形竪穴1出土遺物(2)

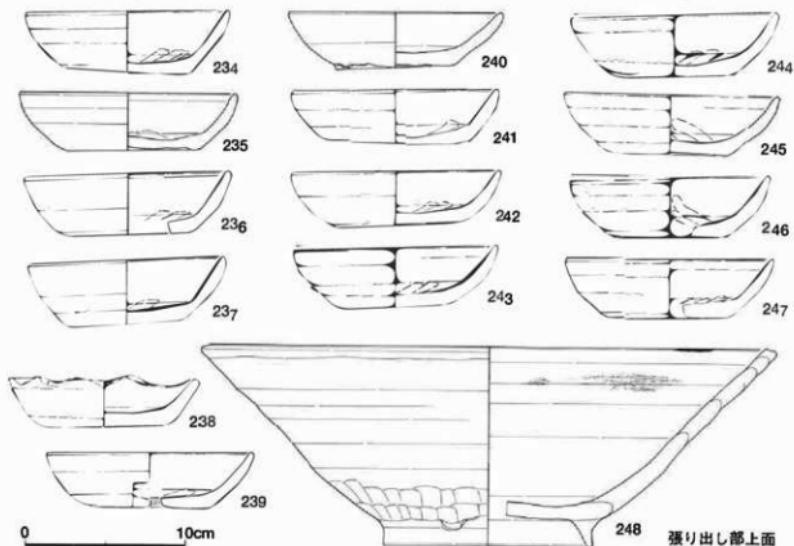


図25 方形竪穴1出土遺物(3)

く使い込まれて摩耗している。

173は瓦質手拂り。体部内面ヘラナデ。外面は指頭押さえ後、下位に縦のハケ調整を施す。口縁部下はヘラミガキ調整である。

174~179は舶載磁器。174は竈泉窯青磁蓮弁文碗。複弁。175、176、177は白磁口元皿。178は口元碗である。176、177は口唇部にスス付着。179は白磁水注の把手と思われる。

180~188は鉄製品。180は刀子、全長8.3cm、刃部長6.6cmを測る。181~187は釘。188は不明鉄製品。上端を前に折曲げた本体部の左右両翼と下端に、蝶番で可動式にした薄板を繋ぐ。各部材端部は丸く、内側に緩い曲面を持つ。本体部には釘穴らしき小孔が左右2個ずつある。本体部と左右両翼は竪穴の床面から約10cm上の砂層中から出土し、下端の舌状部分は張り出し部構築土中から出土した。

189は銭。天祐通宝。周縁を磨った加工銭である。

190は骨製品。獸骨(鹿角?)を円盤状に削ったもの。直径約2.0cm、厚さ約0.6cmを測り、覆土上層から2個出土した。双六の駒か。

191~205は木製品。191は不明木製品。円盤状の板の片面に高台状の削り出しを持ち、漆様のものが付着している。192は木栓。193~204は箸。205は箸の未製品か。

206、207は張り出し部構築土中から出土した遺物である。

206は白磁口元皿。

207は釘。

208~248は張り出し部上面から一括出土した遺物である。接合不可能の小片を除くと、山茶碗窯系程ね鉢1個体とかわらけ皿39個体を数える。かわらけ皿はすべて糸切り底である。

かわらけ皿は211、212、213、216、217、221、226、227、231、232、233、237、241が完形。215、218、222、238、239、

243、244が略完形である。

208、209、210は器壁薄く精製された胎上で色調は白っぽい茶系を呈す。他のかわらけ皿とは異なる型式の一群である。

211、212、213、215、216、217、221、222、224、226、227、228、230、231、232、233、237、240は橙色を呈し、胎上が粗く赤色粒子と雲母を含む。この一群は口縁部に両側から押したような歪みを持つが、他のかわらけ皿についても胎上や焼成は共通している。239は底部に穿孔がある。

248は山茶碗窯系捏ね鉢。約1/3個体片。胎上は大小の長石粒や小石が混入し暗灰色を呈する。口縁部下内面には火を受けた痕跡、内底面は磨耗が著しい。

第四章　まとめ

本報は国庫補助事業分の報告であるため、確認・検出されたすべての生活面と遺構を掲載できたわけではない。本報に掲載できた範囲と調査団分の報告書に割譲した範囲とを明確にし、併せて出土遺物の特徴や検出遺構の推定年代についても触れてまとめとしたい。

・一面での成果

一面で検出できたのは石組溝だけである。石組溝は小規模で簡易な構造を持ち、周辺部に住居となる建物跡や生活臭を感じさせる遺物がないこと、検出面が水田床上に似た灰色粘土層上面であることから、水田耕作用に掘られた給排水施設と考えられる。出土遺物から推定される年代は16世紀後半～末。根拠となるかわらけ皿（図7-5～13）は体部が直線的に外傾し、内底中央にナデツケがないため同心円ないし渦巻き状の強い整形痕が残る型式で、八幡宮直会殿用地の調査では「造営目論見絵図」（天正十九年／1591年）に描かれた下宮回廊跡を中心とした生活面から出土している。完形品を含めた9点が石組溝埋没段階で一括投棄されており、当該期の良好な資料となりうるものである。なお、石組溝に混入した薄手のかわらけ皿（図7-1～4）は17世紀代のものであり、一面および石組溝が中世最後の生活面と遺構であることを裏付けている。

・二面および三面での成果

二面から三面にかけては本地点の最盛期と思われ、数多くの遺構が検出された。時期的な新旧関係はあるが継続して使用された遺構も多く、土地利用状況に大きな変化はなかったと考えられる。

基本的な遺構配置としては、本地点東側に泥岩版築の南北道路が敷設され、道路西側一帯は東西方向に伸びる木組溝で区画された居住区となっていたようである。

道路遺構は本地点東側の旧河川に沿って作られ、県企業庁水道局用地の調査で検出された道路および河川に接続するものと推定される。河川は調査区の外にあり検出していないが、水道局用地での成果を援用すれば、多少の流路変更を伴いながら古代～中世にかけて流下しており、15世紀前半までには埋没したと考えられている。現在、調査地点と隣接地の境を流れる小河川（U字溝）は、この旧河川の名残りと思われる。

木組溝は居住区を南北に分ける区画溝として機能し、東端は道路遺構を切って旧河川に繋がるものと思われる。道路と木組溝は同時期に存在しており、板材を渡して簡単な橋としたのであろうが、調査区内ではそうした施設は確認できなかった。

居住区で検出された建物には、板廻い建物、掘立柱建物、方形堅穴がある。板廻い建物は主柱穴を除いて明確な柱穴を持たず、礎板上に柱を立てて間仕切りや板壁を配置した後に、建物の基礎範囲全体を

土で埋めて固定した構造であり、おそらく木組遺構1・2は板開い建物の一部と推定される。木組遺構1は方形竪穴1より新しく、木組遺構2は道路遺構より古い。掘立柱建物は一軒分の柱並びの確認できたものではなく、大形の遺構に一部を壊されたものと思われる。つまり、掘立柱建物は方形竪穴より古い可能性がある。これら2種類の建物規模や配置については、調査団分の報告書を参照されたい。

方形竪穴は3軒検出された。方形竪穴1のみ本報で扱い、方形竪穴2・3については調査団分の報告書に譲った。方形竪穴1は一軒分の規模が判るだけでなく、張り出し部で確認された40個体のかわらけ皿の出土状態は類例のないものである。この竪穴の性格は明確にし難いが、日常の住居にしてはかわらけ皿以外の雑器がなく、工房にしては加工具や未製品が出土せず、商家や店舗とするにも確証がない。したがって、母屋に付随する物置き・作業小屋としておきたい。出土遺物から推定される年代は13世紀後葉～14世紀初頭に比定できる。

土壌1・2および三面上に堆積した土層中の遺物は調査団分の報告書に譲った。

二面、三面については後刊される報告書に負うところが大きい。予察として言えば、当該期は13世紀後半～14世紀代まであり、15世紀の遺構や遺物は見つかっていない。今小路西（御成小学校内）遺跡では、大形武家屋敷の外縁に広がる庶民居住区を確認しているが、遺構・遺物の様相や年代観はほぼ一致しており、本地点がそうした庶民居住区の一画であることは間違いない。

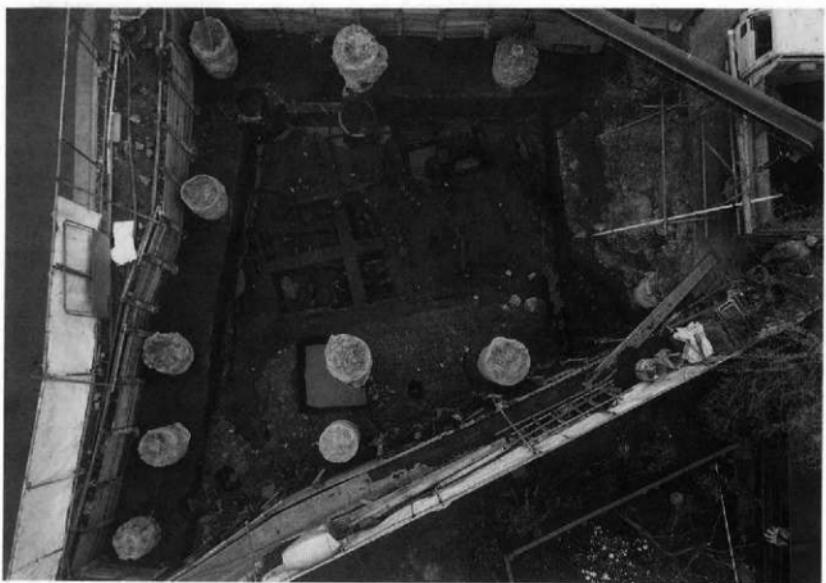
・四面での成果

四面は中世基盤となる砂丘層であり、東側旧河川際には橋脚状の大形柱穴が検出された。出土遺物には純文土器・土師器・須恵器・古代瓦などもあるが、遺構密度は低く中世以前の遺構は見つかっていない。遺構・遺物を含めた詳細は、後刊される調査団分の報告書で明らかにしたい。

写 真 図 版



遺跡全景（空撮）



調査区全景（空撮）

図版2



石組溝



石組溝・護岸および遺物出土状況



道路遺構全景



道路版築層の状態

馬下顎骨の状態



図版4



木組溝全景

木組溝・護岸の状態





木組造構1



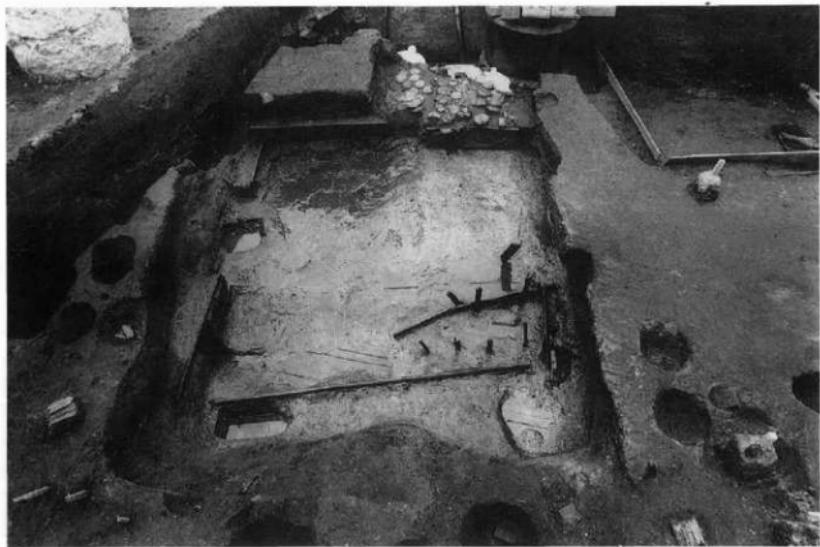
木組造構2



木組遺構2・部分



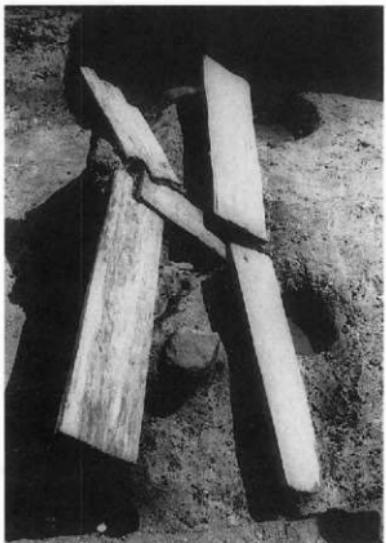
木組遺構3



方形竪穴1全景



方形竪穴1張り出し部 遺物出土状況



南から

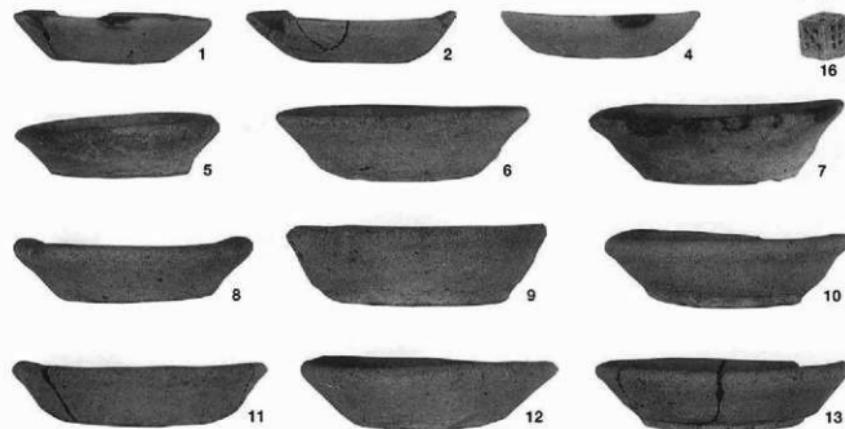
方形竪穴1張り出し部
木組の状態



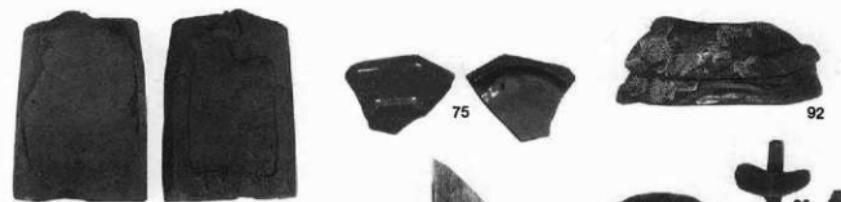
東から



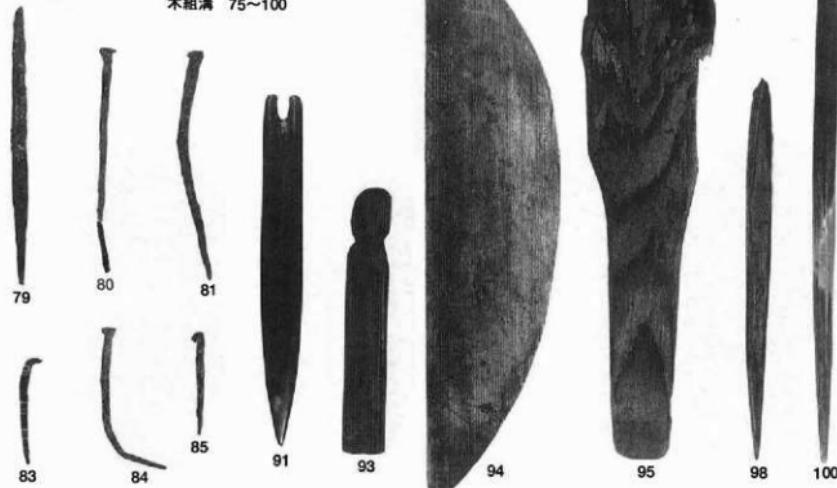
方形竪穴1床面の木組施設



石組溝 1~16

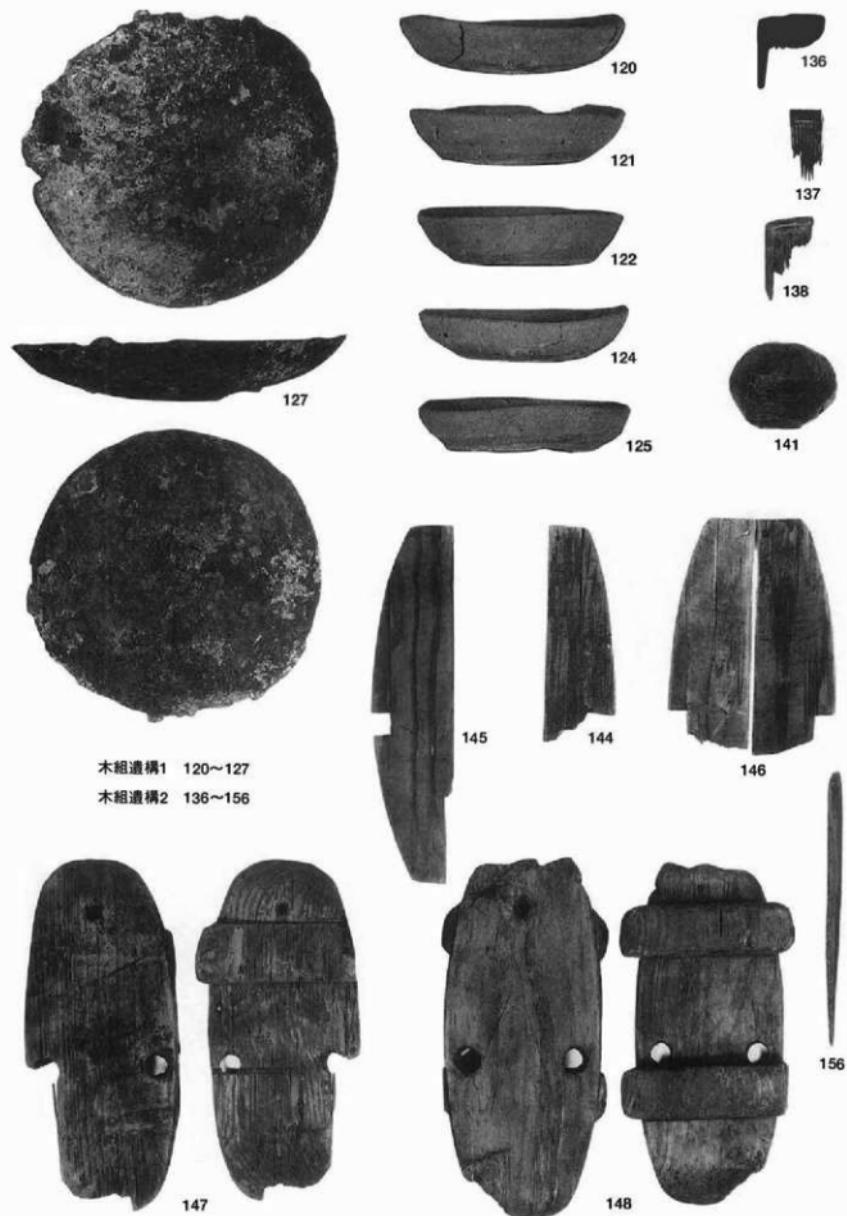


木組溝 75~100

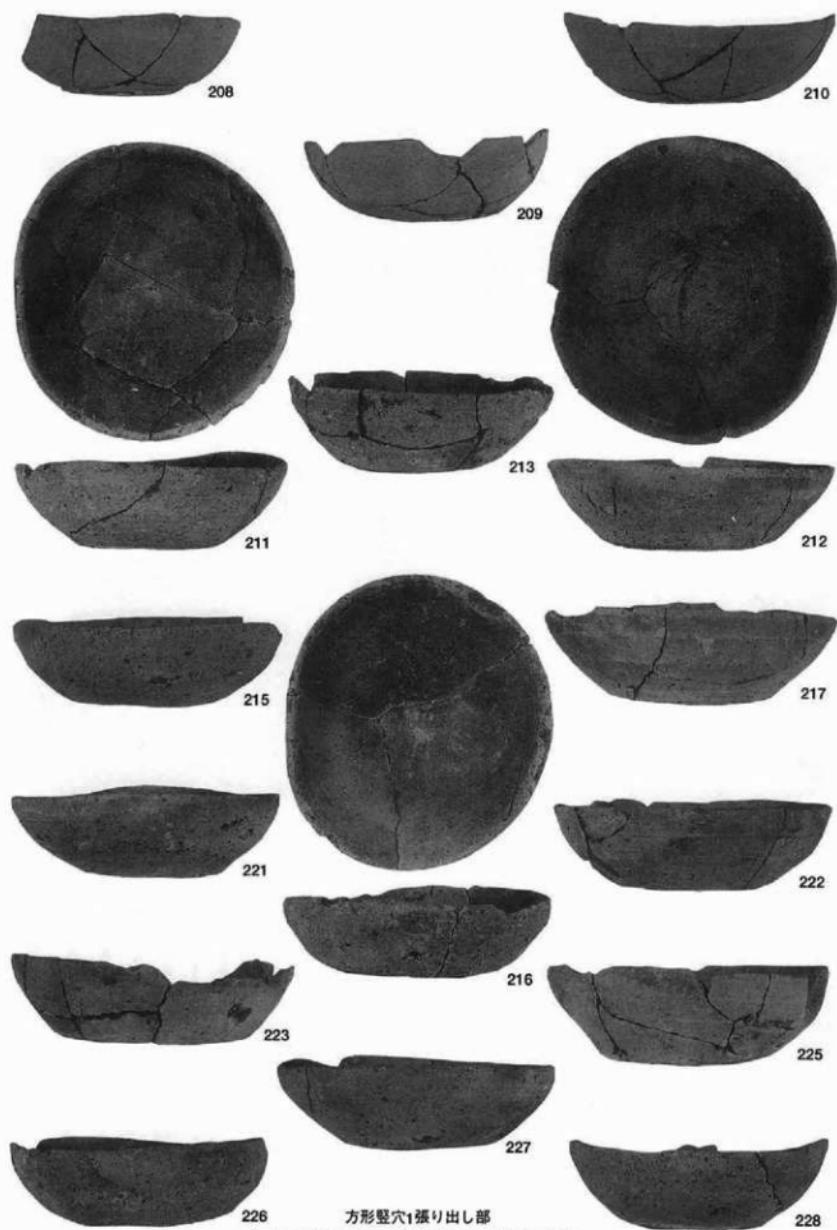


▲ 出土遺物 (1) 番号は遺物実測図に対応する。

図版10



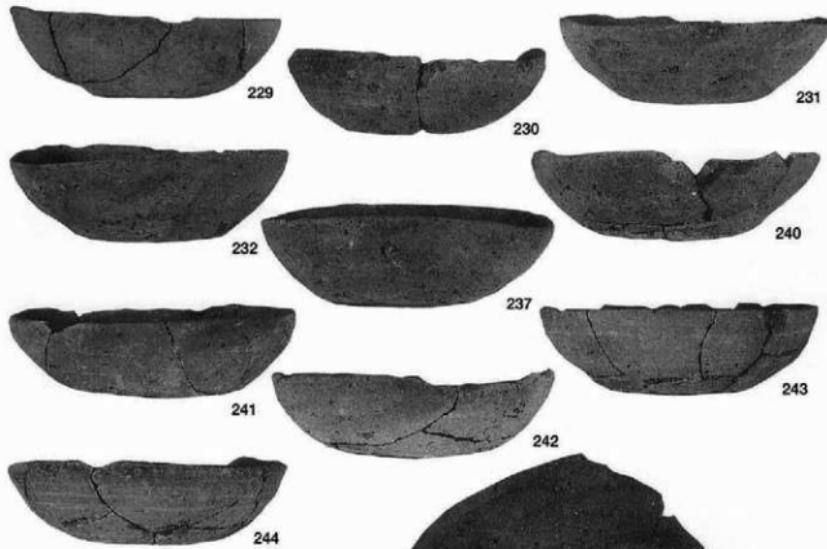
▲ 出土遺物（2）番号は遺物実測図に対応する。



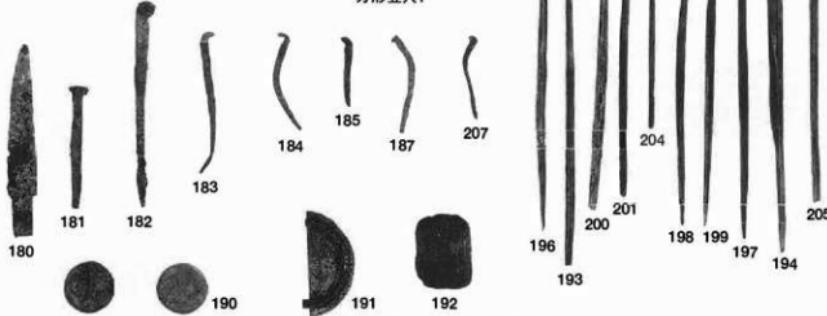
方形竪穴1張り出し部

▲ 出土遺物（3）番号は遺物実測図に対応する。

図版12



方形竪穴1
張り出し部
229~248



▲ 出土遺物(4) 番号は遺物実測図に対応する。

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	13						
編著者名	菊川英政						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号						
発行年月日	西暦1997年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
わかみやおおじ しゅうへんいせきぐん 若宮大路 周辺遺跡群	かながわけん かまくらし おなりまち 神奈川県 鎌倉市 御成町	204 242	35° 18' 57"	139° 33' 06"	19950309 19950415	68	自己用店舗併用住宅の建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
若宮大路 周辺遺跡群	中世都市道路	13~14世紀	道路遺構 方形竪穴 溝	1条 3軒 2条	かわらけ 常滑、瀬戸 木製品など 45箱分出土		

ごくらくじきゅうけいだいいせき
極楽寺 旧境内 遺跡 (No.291)

極楽寺三丁目320番1地点

例　　言

1. 本書は、極楽寺旧境内遺跡内の鎌倉市極楽寺三丁目320番1地点に於ける緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、個人専用住宅に係る建築範囲100m²を対象とし、平成7年6月12日～6月30日にかけて鎌倉市教育委員会によって実施された。
3. 報告書作成メンバーと担当分野は以下のとおりである。
 - ・原稿執筆：田代郁夫（第1章）、継 実（第2、3、4章）
 - ・資料整理・図版作成：大坪聖子、深尾義子、小西さつき、鈴木真由美、辻由美子、佐藤慈子、笠原さやか、西井末子、山田純子
 - ・遺物写真撮影：上田求実、笠原さやか
 - ・編 集：継 実
4. 調査体制は以下のとおりである。
 - ・調査主体：鎌倉市教育委員会
 - ・主任調査員：田代郁夫
 - ・調 査 員：浜野洋一、大坪聖子、遠藤雅一
 - ・調査補助員：渡邊王夫、高橋健一郎
5. 出土遺物は、鎌倉市教育委員会が保管している。

凡　　例

- ・各図面の縮尺は次のとおりである。
 - 遺跡位置図（1）：1／2,500
 - 遺跡位置図（2）：1／250
 - 遺構図：1／50
 - 遺物実測図：1／3
- ・図版に掲載した遺物のうち、須恵器は断面黒色で表示した。
- ・各遺構図中のレベル数値はすべて海拔高である。

本文目次

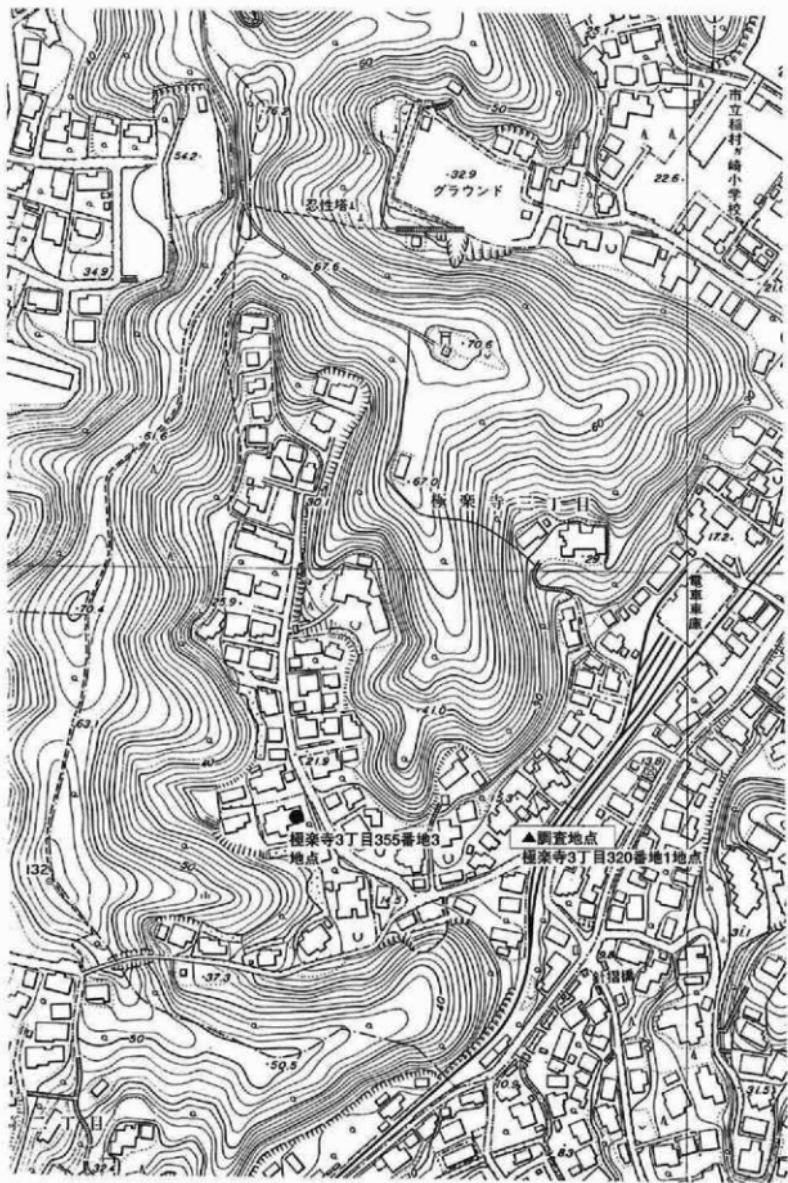
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	102
第二章 基本層序	102
第三章 検出遺構・遺物	104
第四章 まとめ	111

挿図目次

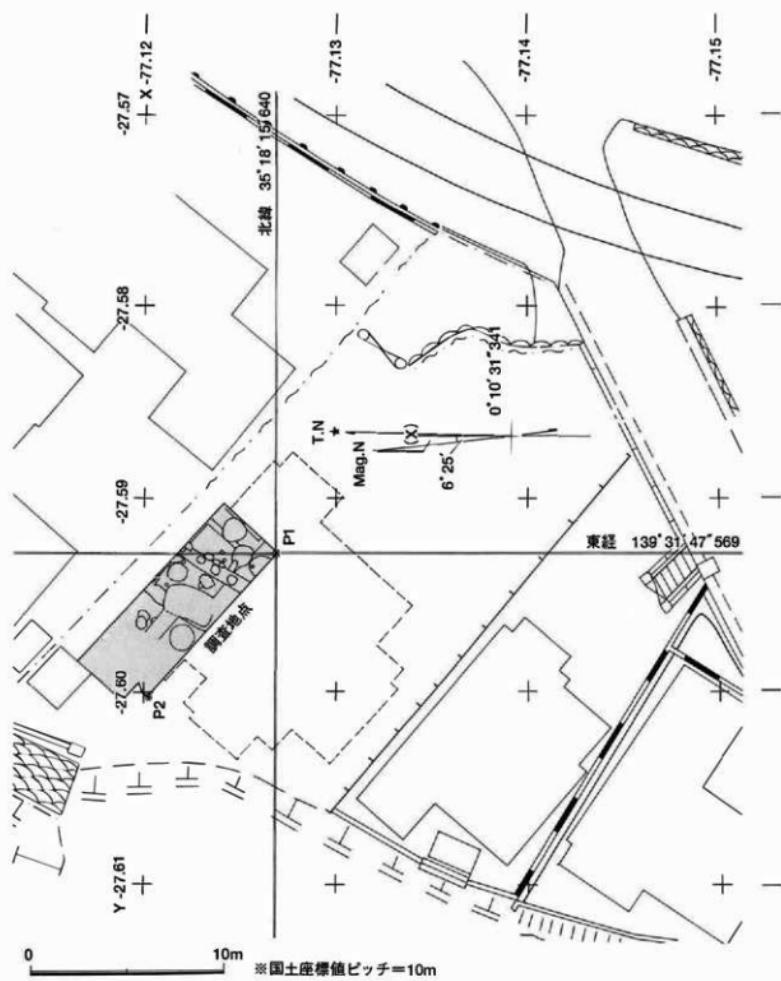
第1図 遺跡位置図（1）.....	100
第2図 遺跡位置図（2）.....	101
第3図 極楽寺境内絵図	103
第4図 遺構図	105
第5図 出土遺物（1）土壤1～6	108
第6図 出土遺物（2）溝（布掘）、中世地業層.....	109
第7図 出土遺物（3）古代遺物包含層	110

図版目次

図版1 現在の月影ヶ谷入口付近、調査区全景	115
図版2 土壌1、土壤2、土壤3	116
図版3 土壌4、土壤5、土壤6	117
図版4 溝（布掘）、土層堆積状況、古代遺物出土状況.....	118
図版5 出土遺物（1）土壤1～6	119
図版6 出土遺物（2）溝（布掘）、中世地業層.....	120
図版7 出土遺物（3）古代遺物包含層	121



第1図 遺跡位置図(1)



各点の地理的位置一覧表(座標系AREA9)

点名	X座標	Y座標	緯度	経度
P 1	X-77126.626	Y-27592.706	+35°18'15.640°	+139°31'47.569°
P 2	X-77119.812	Y-27600.250	---	---

第2図 遺跡位置図(2)

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

極楽寺旧境内遺跡は、江ノ島電鉄極楽寺駅から南西方向300mのところに位置する（第1図）。地番は鎌倉市極楽寺三丁目320番1。調査地点は現在の極楽寺の南側丘陵をひとつ隔てた月影ヶ谷と呼ばれる南向きに開口する谷戸の入口部に立地する。

極楽寺は靈鷲山感應院極楽寺と号し、真言律宗奈良西大寺の末寺である。開山は忍性、開基は北条重時である。「極楽寺縁起」によれば、正元元年（1259）、北条重時が良親上人忍性に從来一老僧によって営まれていた極楽寺という小寺を大寺に変えて、律院とするのに相応しい場所について詣ったところ、忍性は当時、地獄谷と呼ばれていた現在の境内地一帯を指したといわれている。「忍性菩薩行状略頌」には忍性は文永四年（1267）八月に極楽寺に入寺したとあり、この年に伽藍が落成したものと思われる。発願者の北条重時は弘長元年（1261）忍性の入寺を見ることなく歿している。文永四年以降、飛躍的な成長を遂げた極楽寺は元弘三年（1333）北条氏の滅亡により有力な後盾を失い、元亀3年（1572）には火災により講堂他3塔頭を残して焼失し、明暦年間には残った講堂を本堂に、仏法寺を方丈として現在地に移した。

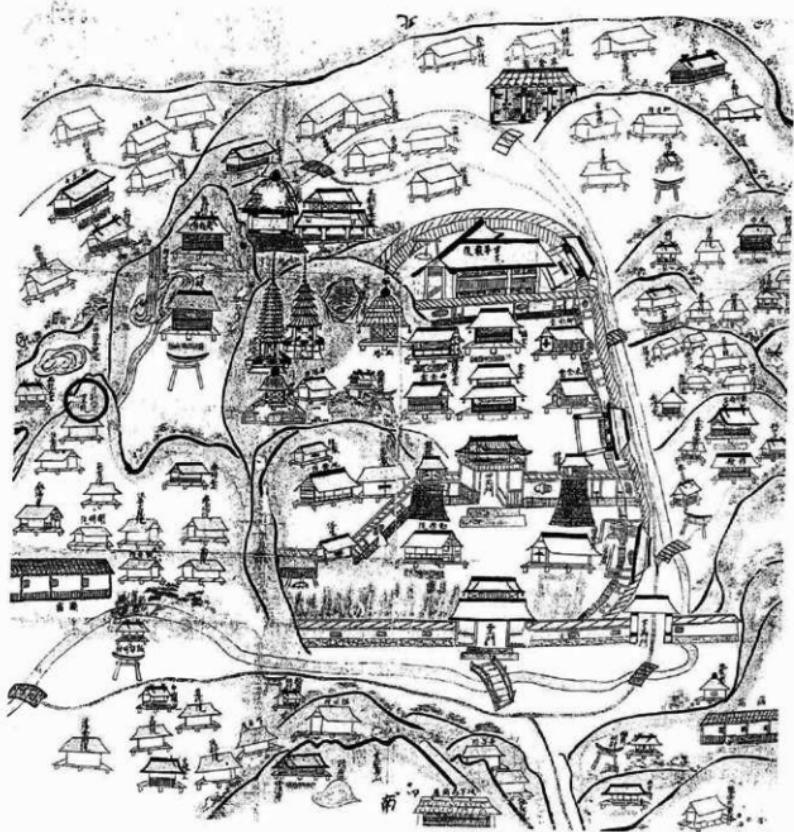
ところで、かつての境域には西方寺・仏法寺・真言院・興正寺・蓮華寺・尼寺・福田院・吉祥院・宝幢（塔）院・就学院・勸学院等の支院があったことが、境内古絵図等から推定されている。今回調査を実施した月影ヶ谷は、境内古絵図によれば最奥部に月影地藏四王院、そしてその前面に法藏院・無常院・葉湯寮などが建ち並んでいる谷戸である。

また、月影ヶ谷は、阿佛尼が住んだところといわれている。『十六夜日記』月影の谷には「あずまにて住むところは、月影の谷とぞ言ふなる。浦近き山もとにて、風いと荒し。山寺の傍なれば、のどかに、すごくて、浪の音、松の風絶えず。」とある。阿佛尼屋敷云々については、律宗に於ける尼寺の存在形態や歴史的意義との関連で議論されているところである。

第二章 基本層序

調査地点の原地形は上方からの流入土によって斜面となっていたようで、中世以降これを削平、土丹塊で地業し土地を利用していたものと思われる。現代のゴミを含む表土層によって遺構の上層部は破壊されており、中世以降、近代までの遺跡地の状況は不明である。

調査の最終段階に於いて、古代以前の状況把握の為、調査区の南西隅に1.5m四方のテスト・ピットを設定し、調査し得る限界（地表-3m）まで掘り下がったが、古代以前の遺構・遺物は検出されなかつた。土層堆積状況の把握は、この部分及び調査区南・西壁で行った。堆積土は前述したように上方からの流入土で、粘性いずれも強い。また、山裾という事もあり、第8層以下は滞水層で土色は還元し灰色を呈する。尚、古代の遺物は第4層～第14層に包含される。各層の詳細は第4図を参照されたい。



第3図 極楽寺境内繪図（極楽寺蔵）

第三章 検出遺構・遺物

調査地点は前述したように谷戸内の沖積地に立地するが、調査区を設定し表土を除去した段階で岩盤が露出し、かつては山裾際であったことが明らかとなった。

検出した遺構は、土壤状遺構・溝（布掘）・ピットなどで、出土遺物から見てすべて中世の所産である。このうち溝・土壤3など方向性を有する遺構は、かつての山裾に平行して設けられる。いずれも後世の削平によって上層部が破壊され、原形を留めていない。但し、上層の観察から土壤群と溝には時期差が存在し、溝の方が構築時期が古い事が判明している。

遺構内や古代の堆積土中から古代（主に奈良時代）の土師・須恵器が出土しており、出土量としては中世遺物を凌駕するものの、調査区内では遺構の検出を見なかった。土層の堆積状況から見て、遺跡地の上方から流れ込んだものと思われる。以下、各遺構について詳述する。尚、出土遺物については出土遺物観察表を参照されたい。

土壤1（第4、5図-1～10／図版1、2、5）

調査区西南隅で検出した。直径約130cmの円形プランを呈する。確認面からの深さは約30cm。断面形は凹状を呈し、底面は平坦ではない。遺構覆土は3層に分層される。

出土遺物：覆土中から、かわらけが10点出土した。このうち、9点が完形品である。すべてロクロ成形品である。2は灯明皿。

土壤2（第4、5図-11～15／図版1、2、5）

調査区中央部北東側で検出した。直径約100cmの円形プランを呈する。確認面からの深さは約60cm。底面はほぼフラットで、壁は上方に向かってやや開く。遺構覆土は1層である。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、瓦、須恵器、円碟などが出土した。このうち、図示し得たのは瓦のみである。胎土の特徴から、平瓦は極楽寺瓦A種Ⅱ類、丸瓦は同A種に比定される。

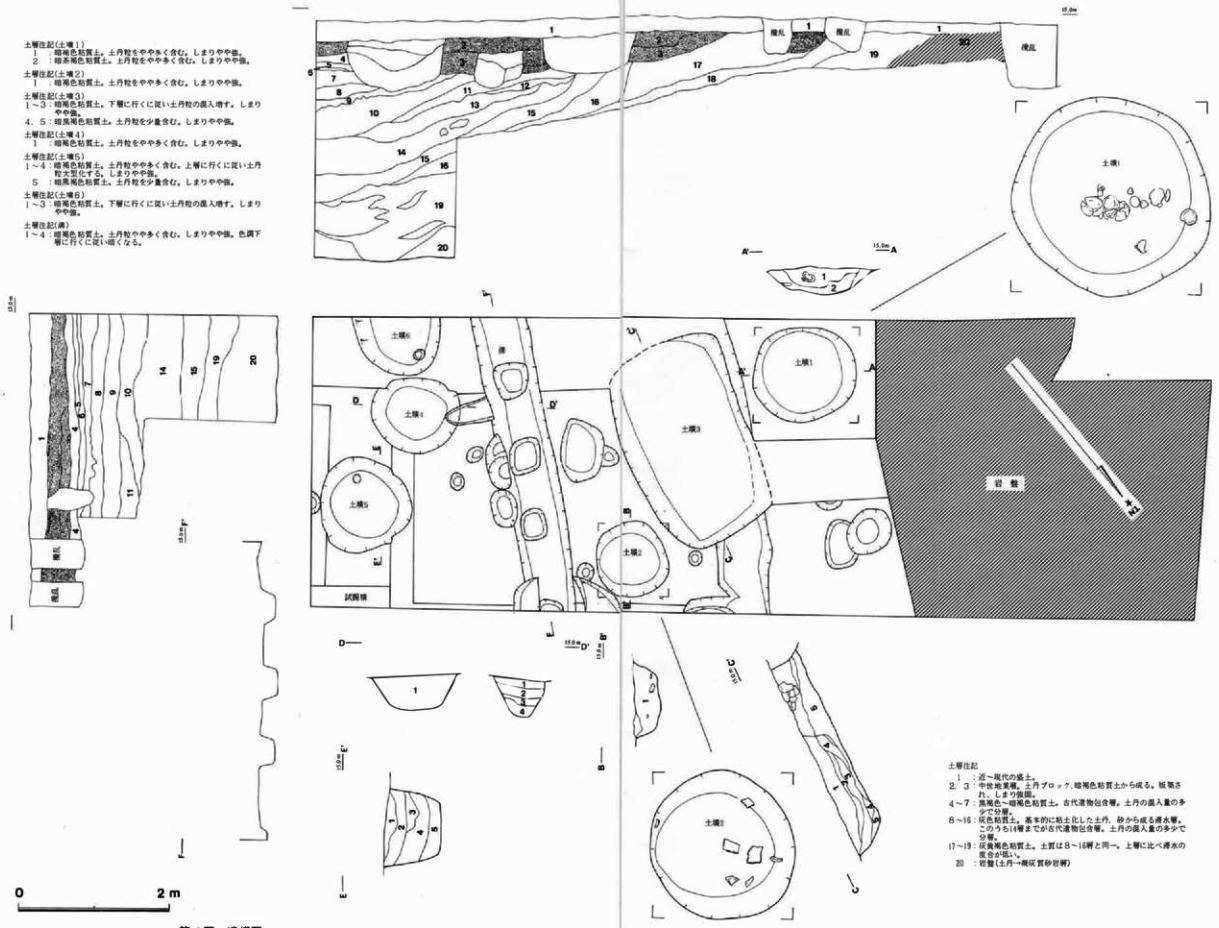
土壤3（第4、5図-16～20／図版1、2、5）

調査区中央で検出した。プランは長方形を呈する。覆土の観察から、2基の土壤が重複している可能性もある。遺構方位は長軸でN-25°-E。規模は280×170cm、確認面からの深さは約50cmを測る。底面は平坦で、壁は上方に向かって開きながら立ち上がる。遺構覆土は5層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、土師器、須恵器、鉄製品などが出土した。このうち図示し得たのは、かわらけと鉄釘のみである。かわらけはすべてロクロ成形品である。

土壤4（第4図／図版1、3）

調査区東南寄りで検出した。後述する布掘りに直交する溝状遺構より新しい遺構である。プランは東西方向にやや長い楕円形である。規模は120×100cm、確認面からの深さは約50cmである。断面形は碗形の凹状を呈する。遺構覆土は1層である。尚、遺物の出土は皆無である。



第4図 遺構図

土壤5（第4、5図-21／図版1、3、5）

調査区東隅で検出した。プランは直径125cmの円形、確認面からの深さは約80cmと他の土壤に比べ深い。断面形は箱形で、ほぼフラットな底面からわずかに開きながら壁は立ち上がる。遺構覆土は5層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、土師器、骨片などが出土したが、図示し得たのはかわらけ1点（ロクロ成形品）のみである。

土壤6（第4、5図-22／図版1、3、5）

調査区南東隅で検出した。調査し得たのは遺構の東半のみである。プランは直径100cmの円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは約60cm。遺構覆土は3層に分層される。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、須恵器、舶載陶磁（青磁）などが出土したが、図示し得たのはかわらけ（ロクロ成形品）1点のみである。

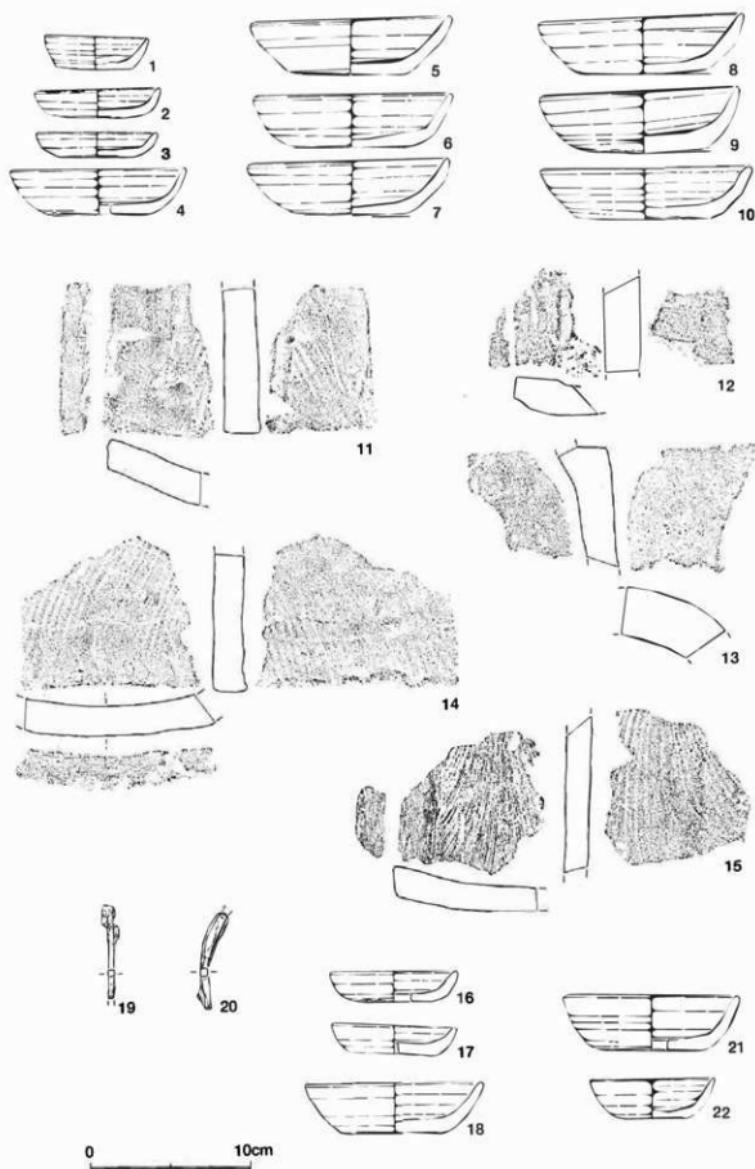
溝（布掘）（第4、6図-23～30／図版1、4、6）

調査区やや東寄で、その一部を検出した。調査区壁で観察する限りでは土壤群よりも古い段階の遺構である。

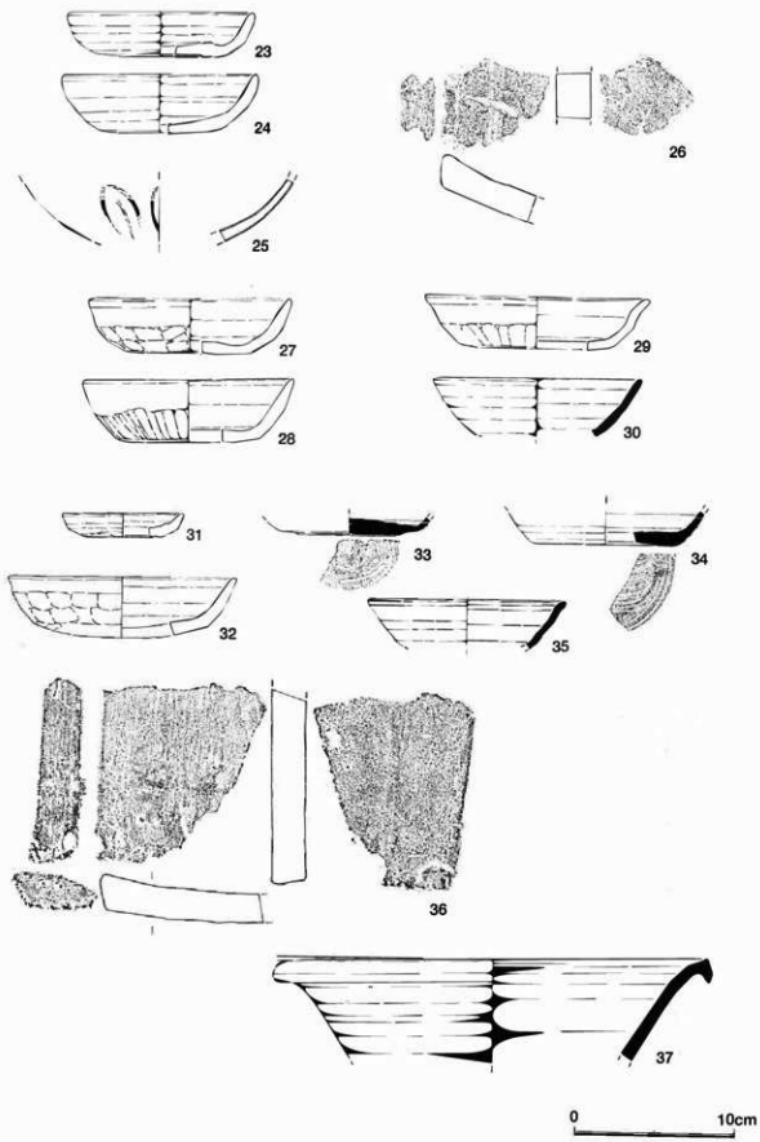
溝方位はN-30°-Eである。溝部分の規模は、横幅約70cm、確認面からの深さ約50cmである。断面形はU字状を呈する。遺構覆土は4層に分層される。溝底には一辺40～50cm、隅丸方形プランを呈するピットが4基検出された。柱間は芯々で90～110cmである。

出土遺物：遺構覆土中からかわらけ、渥美窯製品、瓦質手焙、瓦、鉄製品、土師器、須恵器などが出土した。23、24はかわらけ（ロクロ成形品）である。25は龍泉窯系青磁蓮弁文碗、26は平瓦（極楽寺瓦A種）で、以上が中世遺物である。27～29は相模型坏である。底部平底で、1もしくは2段のヘラケズリが成される。30は須恵器坏である。

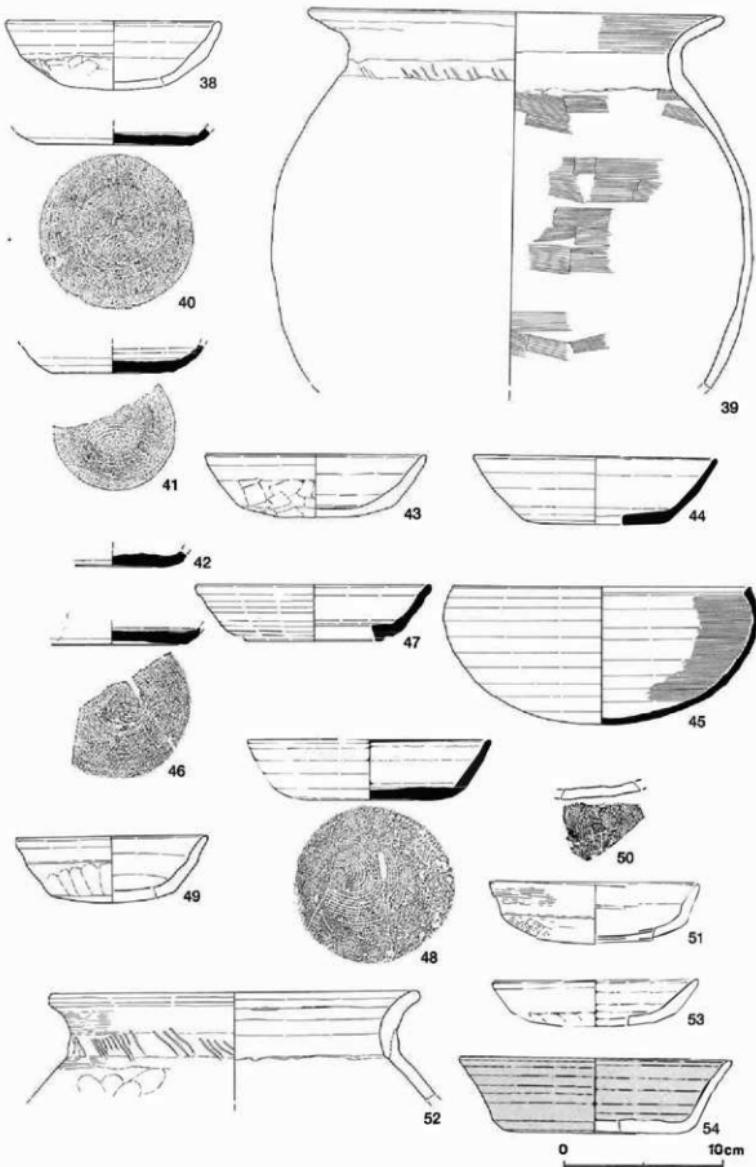
中世遺構以外にも、中世地業層中、古代遺物包含層中から多量の遺物が出土した（第6、7図-31～54／図版4、6、7）。遺物の主体はかわらけ、土師器である。31～37は中世地業層中から出土。31のかわらけ（ロクロ成形品）と36の平瓦（極楽寺瓦A種II類）のみ中世の所産である。38～54は古代遺物包含層から出土。50は底部に「井」の字形の線刻が成された土師片である。54は盤状坏。内・外面共に赤彩されるが、内面に暗紋は認められない。45、51～53は他に比べ古相を呈する一群である。51、53は底部丸底で、体部との境にやや強い稜を持つ。45は古墳時代後期の所産か。



第5図 出土遺物(1)土壤1~6



第6図 出土遺物(2)溝(布振)・中世地表層



第7図 出土遺物（3）古代遺物包含層

第四章　まとめ

中世遺構の所産時期は、出土遺物から見て14世紀前半が適当と思われる。ほぼ同時期に実施された谷戸内の調査でも、14世紀前半以降、地業は行われていないようである。どちらも上層が破壊されており断定しかねるが、この時期以降、月影ヶ谷では遺跡は衰微する方向に向かうようである。14世紀前半といえば、元弘3年（1333）北条氏の滅亡、嘉元元年（1303）の開山忍性の病歿など、極楽寺を取り巻く環境にも大きな変化が生じた時期である。

土壙群は器の破片、食物残滓といった出土遺物の内容から、ゴミ穴であったものと思われる。溝（布掘）は築地塀の基礎部分か。これらは、層位的には時期差が明確に認められるものの、出土遺物、特にかわらけは両者に時期差が認められず、恐らく五十年以下というような時間の中で遺跡の機能が変化したものと思われる。遺構の性格から短絡的に考えるならば、支院か何か、ある種の領域が拡大された状況を提示するものか。

古代の遺構の検出は見なかったものの、中世遺物を圧倒する量の遺物が出土した。土師甕や須恵器に前代のものが若干認められるものの、壺の大半は相模型壺と盤状壺で占められ、谷戸内に8世紀後半から9世紀後半を中心とした遺跡の存在が予想される。安定した台地や低地の殆ど無い鎌倉市内では、弥生時代末以降、こうした谷戸内や、丘陵斜面に集落が発見される例が多く、谷戸内の沖積地を生産基盤とした当時の生活の一端を窺わせる。

・出土遺物の数量について

出土遺物の数量について、簡単なデータを提示する。算出にあたっては、完形品、破片に関係なく1個1点としてカウントした。

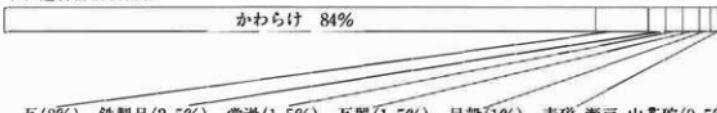
中世：出土遺物の総数は231点である。内訳は多いものから順に、かわらけ194点（84%）、瓦19点（8%）、鉄製品（含鉄滓）5点（2.5%）、常滑窯製品3点（1.5%）、瓦器3点（1.5%）、貝殻2点（1%）、青磁・瀬戸・山茶碗各1点（0.5%）、骨片少量（計測不能）である。傾向としては、かわらけが圧倒し、日常雜器の類が殆ど見あたらない。地点別の比率では土壙群65%、溝（布掘）15%、地業層中16%、その他4%と、土壙中からのものが高比率を示す。

古代：出土遺物の総数は817点と、量的に中世遺物を圧倒する。内訳は、土師器759点（93%）、須恵器58点（7%）である。須恵器は出土比率の割には図示し得る良好な破片が多く得られた。地点別の比率では、古代遺物包含層60%、中世遺構・地業層40%と、中世遺構に対する混入が目立つ。尚、器種・タイプ別分類は、遺物破片の確定的な分類が困難な為、行わなかった。

出土遺物時代別割合

中世（231点）22%	古代（817点）78%
-------------	-------------

中世遺物器種別割合



出土遺物観察表

団体No.	種 別	法量 (cm) * カッコ付は復元値	備考
土壤 1			
1	かわらけ	口径6.5 底径4.9 器高3.0	完形
2	かわらけ	口径7.9 底径6.0 器高1.8	完形 * 灯明皿
3	かわらけ	口径6.6 底径4.8 器高1.6	4 / 5個体
4	かわらけ	口径11.0 底径6.4 器高2.9	1 / 3個体
5	かわらけ	口径12.6 底径7.3 器高3.7	完形
6	かわらけ	口径12.8 底径8.1 器高3.3	完形
7	かわらけ	口径12.8 底径7.0 器高3.5	完形
8	かわらけ	口径12.8 底径8.4 器高3.6	完形
9	かわらけ	口径12.4 底径8.2 器高3.9	完形
10	かわらけ	口径13.2 底径8.4 器高3.2	完形
土壤 2			
11	平瓦	不明	破片 A種 II類
12	平瓦	不明	破片 A種 II類
13	丸瓦	不明	破片 A種
14	平瓦	不明	破片 A種 II類
15	平瓦	不明	破片 A種 II類
土壤 3			
16	かわらけ	口径(8.0) 底径(4.6) 器高1.9	1 / 4個体
17	かわらけ	口径(7.8) 底径(5.8) 器高1.9	1 / 4個体 * 灯明皿
18	かわらけ	口径(11.2) 底径(6.8) 器高3.1	1 / 4個体
19	鉄釘	断面方形 頭部折曲げ	先端部欠損
20	鉄釘	断面方形	破片
土壤 5			
21	かわらけ	口径(11.0) 底径(6.8) 器高3.4	1 / 4個体
土壤 6			
22	かわらけ	口径(7.8) 底径(4.4) 器高2.9	1 / 2個体
溝 (布縫)			
23	かわらけ	口径(11.6) 底径(7.1) 器高2.8	1 / 3個体
24	かわらけ	口径12.2 底径7.6 器高3.7	完形
25	青磁 瓶	不明	破片 能泉窑系蓮弁碗
26	平瓦	不明	破片 A種 II類
27	土師 壺	口径(12.6) 底径(8.0) 器高3.5	1 / 4個体 相模型
28	土師 壺	径(13.0) 底径(8.8) 器高3.9	1 / 5個体 相模型
29	土師 壺	口径(13.8) 底径(9.4) 器高3.0	1 / 6個体 相模型
30	須恵 壺	口径(12.9)	口縁～体部破片
中世地窯群			
31	かわらけ	口径(7.6) 底径(5.0) 器高1.5	1 / 5個体
32	土師 壺	口径(14.0) 底径(10.8) 器高3.5	1 / 5個体 相模型
33	須恵 壺	底径(6.3)	底部破片
34	須恵 壺	底径(9.0)	底部破片
35	須恵 壺	口径(12.2)	口縁～体部破片
36	平瓦	不明	破片 A種 II類
37	須恵 壺	口径(27.4)	口縁部破片
古代遺物包含層			
38	土師 壺	口径(13.4) 底径(7.5) 器高4.3	1 / 4個体 相模型
39	土師 壺	口径26.0 腹部最大径30.0	
40	須恵 壺	底径7.7	底部破片
41	須恵 壺	底径7.7	底部破片
42	須恵 壺	底径(7.8)	底部破片
43	土師 壺	口径(13.8) 底径(9.6) 器高3.8	1 / 8個体
44	須恵 壺	口径(15.2) 底径(8.9) 器高4.2	1 / 5個体
45	須恵 鉢	口径(18.0) 器高8.5	1 / 5個体
46	須恵 壺	底径9.4	底部破片
47	須恵 壺	口径(14.4) 底径(8.8) 器高3.8	1 / 5個体
48	須恵 壺	口径15.0 底径10.0 器高3.8	完形
49	土師 壺	口径(12.0) 底径(7.6) 器高4.1	1 / 5個体 相模型
50	土師 壺	不明	底部小片 * 外底面に「井」字形の線刻
51	土師 壺	口径(13.2) 底径(7.0) 器高4.9	1 / 5個体
52	土師 壺	口径(23.0)	口縁部破片
53	土師 壺	口径(12.7) 底径(8.0) 器高2.8	1 / 6個体
54	土師 壺	口径(17.0) 底径(11.6) 器高4.6	1 / 5個体 壁状坏 * 全面赤彩

*瓦の分類は、極楽寺旧境内遺跡（註1）に於ける木村美代治氏（鎌倉考古学研究所）による分類に基づく

（註1） 極楽寺旧境内遺跡 1980 極楽寺旧境内遺跡発掘調査團・鎌倉市教育委員会

写 真 図 版



▲現在の月影ヶ谷入口付近

►調査区全景（北側から）





▲土壤一かわらけ検出状況



▲土壤2



▲土壤3

▶土壤4



▶土壤5



▶土壤6





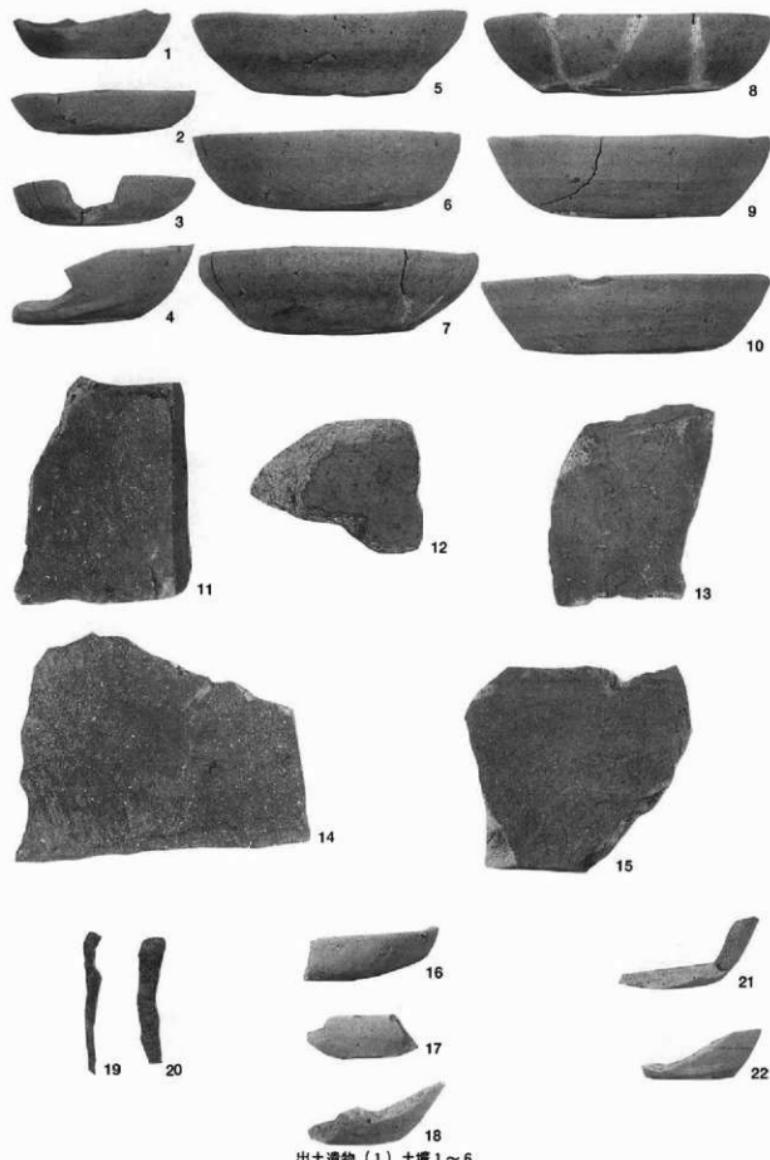
◀溝（布掘）



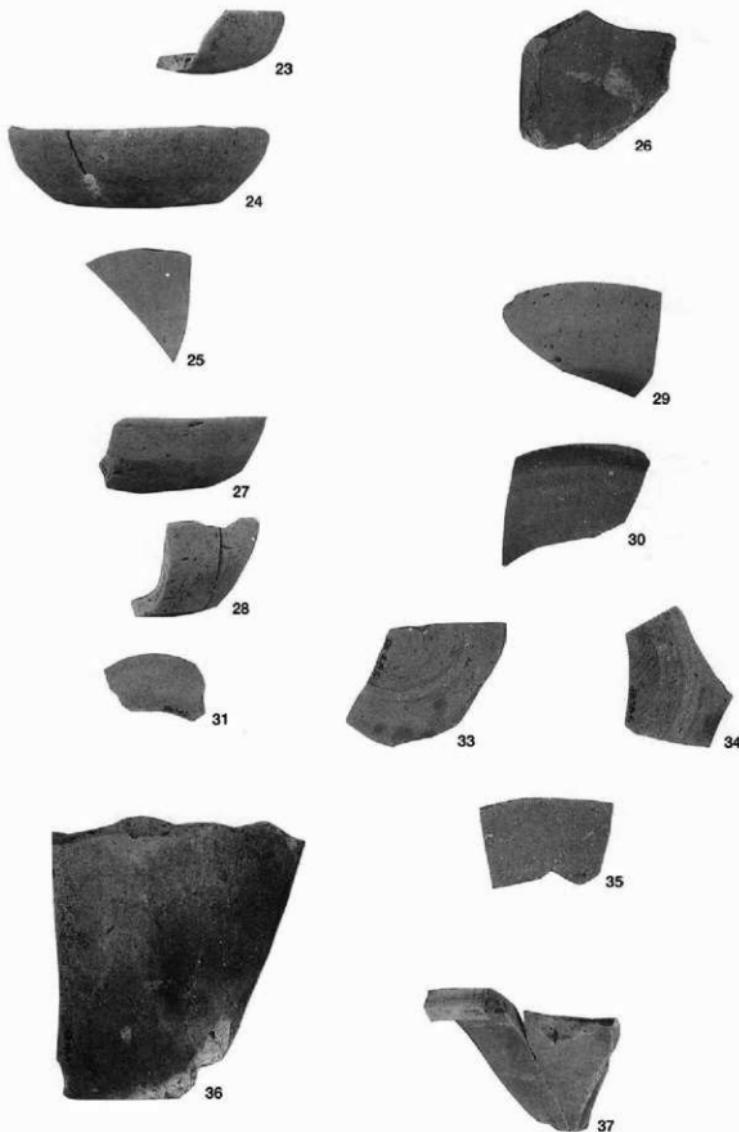
土層堆積状況▶
(調査区南西隅)



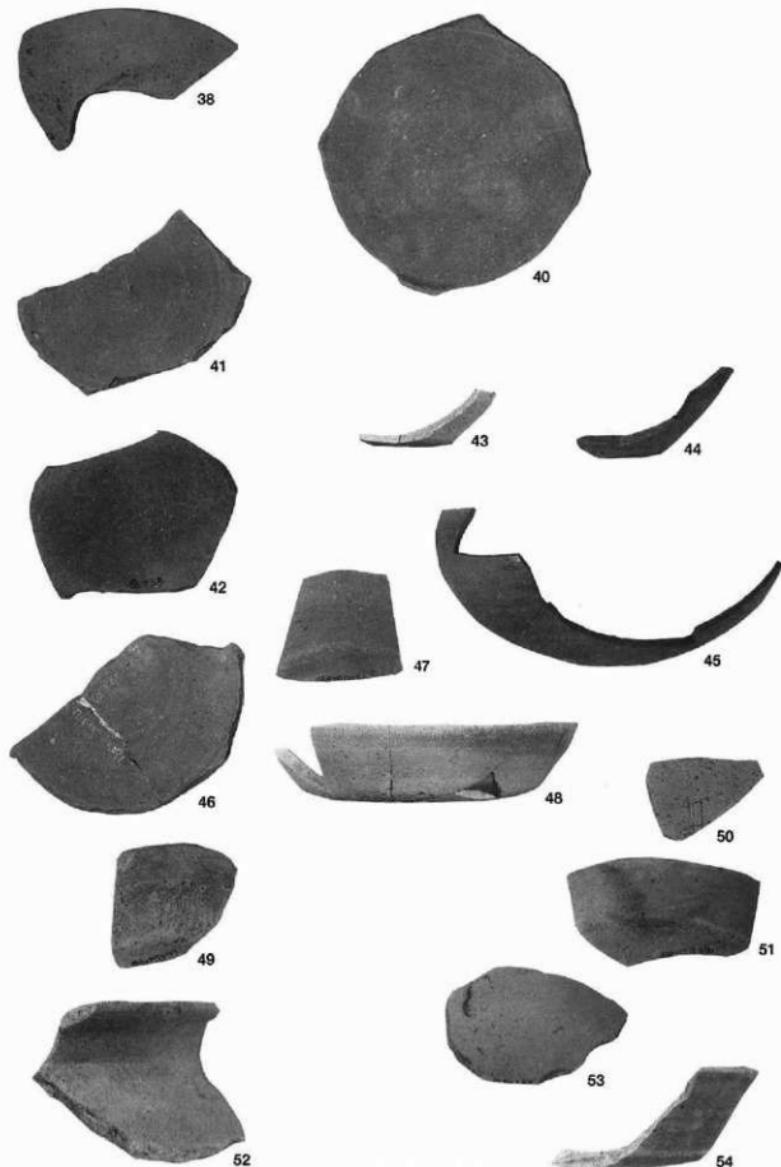
◀古代遺物
(土築器) 出土状況



出土遺物（1）土壤 1～6



出土遺物（2）溝（布掘）中世地表層



出土遺物（3）古代遺物包含層

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
卷次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	雄実
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	鎌倉市御成町18番10
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °°° °°°	東経 °°° °°°	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ごくらくじ きゅうけいだいいせき 極楽寺 旧境内遺跡	神奈川県鎌倉市 極楽寺 三丁目320番1	No.291	35度 18分 15秒	139度 31分 47秒	H7 6月12日 / 6月30日	100	個人専用住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
極楽寺 旧境内遺跡	寺院址	奈良・平安 / 鎌倉時代	中世 溝(布掘) 土壙群	古代 土師、須恵 (相模型坏、盤状坏) 中世 かわらけ 常滑 瓦 国産・ 舶載陶磁	

だいやまいせき
台山遺跡 (No.29)

台字西ノ台1627番地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市台字西ノ台1627番における自己住宅に係る車庫造成に伴う発掘調査報告である。
2. 発掘調査は国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成7年6月19日から7月6日である。
3. 本報の執筆・編集は野本が行った。出土遺物の実測は川又が行った。
4. 本報に使用した写真は遺構を川又・野本が、遺物を野本が行った。
5. 調査体制

担当者 手塚直樹
調査員 野本賢二・小柳津シゲ子
調査補助員 川又隆央・山崎理香
作業員 富岡真之・田代昭・照井三喜・柴崎英輔・山崎一男
6. 本調査で使用した調査グリッド設定に際し、福田誠・菊川泉の協力を受けた。
7. 発掘調査にあたり次の諸氏より御協力を受けた。
清沢工務店、田代郁夫、奥寺宏之
8. 本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	126
第二章 調査の経過と堆積土層	128
第三章 検出された遺構と出土遺物	130
第四章 まとめ	133

図表目次

図1 遺跡の位置	127
図2 グリッド設定図	128
図3 遺構平面図及び土層断面図	131
図4 出土遺物	132
表 遺物観察表	132

写真図版目次

図版 1 遺跡全景（北から）、溝1・2（北から）	137
2 出土遺物	138

第一章 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市のほぼ中央、横須賀線北鎌倉駅の西方約550mにあり、台山遺跡（県遺跡台帳No.29）内、西北に開析する台本村が所在する谷戸奥に位置する。この谷戸内には縱貫する道路が走っているが、調査地点はこの道路に面している。

調査地点から東方に北に折れながら緩やかな坂を上りきると交差点となる。これを真っ直ぐ進むと曲がりくねった切通しの下り坂となるが、その途中、左（西）に西台（せいたい）山英月院光照寺がある。宗派は時宗で、開山は一向。本尊は阿弥陀如来像〔正長2年（1429）修理銘〕。境内には正中2年（1325）銘の阿弥陀三尊種子板碑がある。当寺は、一説には、弘安5年（1282）執権北条時宗に鎌倉入りを拒絶された一遍が一夜を明かした所につくられたとされる。坂を下りきり約100m進むと県道横浜・鎌倉線（山ノ内路）に突き当たる。

反対に調査地点からこの道路を西に約30m進むと左（南）に曲がる小道がある。この突き当たりが徳蔵山東溪院（臨濟宗・早雲寺末）跡とされる。延宝8年（1680）豊後国大野郡原城主中川久清が娘の供養にて位牌堂であった。当寺は明治5年（1872）に廃絶し、山門と本尊の釈迦如来像〔天文25年（1556）造立？〕は光照寺に移されている。

そこから約50m進むと、右（北）に地蔵堂跡（現台公会堂）がある。堂内には地蔵菩薩坐像と半跏像が納められていた。坐像は室町前期の造立とされ宝暦8年（1758）の修理銘がある。半跏像は胎内に延宝3年（1675）、明治13年（1880）、明治42年（1909）の修補文書が納められていた。延宝3年の文書には念仏講の人々が中心となって寄付をつのり、仏師（三橋）但馬に依頼して修補をおこなうことができたとある。造立は室町期である。

さらに西に約400m進むと台・神明社付近の江ノ島みちに突き当たる。江ノ島みちは台の水堀橋から山崎切通し（ほほ消滅）を抜け、上町屋・手広切通し（鎖大師裏）を経由して江ノ島に至る道（途中断絶）で近世期の江ノ島詣の道であった。

台山遺跡内ではこれまで7カ所で調査が行われ、大きな成果を得ている。

《参考文献》

- 阿部正道 1957年 『鎌倉の古道』 鎌倉市教育委員会・鎌倉国家館
三山進・貫入はか 1974年 『鎌倉の文化財 第五集 鎌倉市指定編（五）』 鎌倉市教育委員会
大藤ゆき 1977年 『鎌倉の民俗』 かまくら春秋社
貫 達人・川瀬武風 1980年 『鎌倉施寺事典』 有隣堂
木村彦三郎 1980年 『施寺「東院院」』『鎌倉』34号 1980年
神奈川県図書館協会 1991年 『神奈川県皇國地誌 相模国鎌倉郡村誌』
三浦勝男 1996年2月11日 「かまくらの秘仏」朝日新聞連載

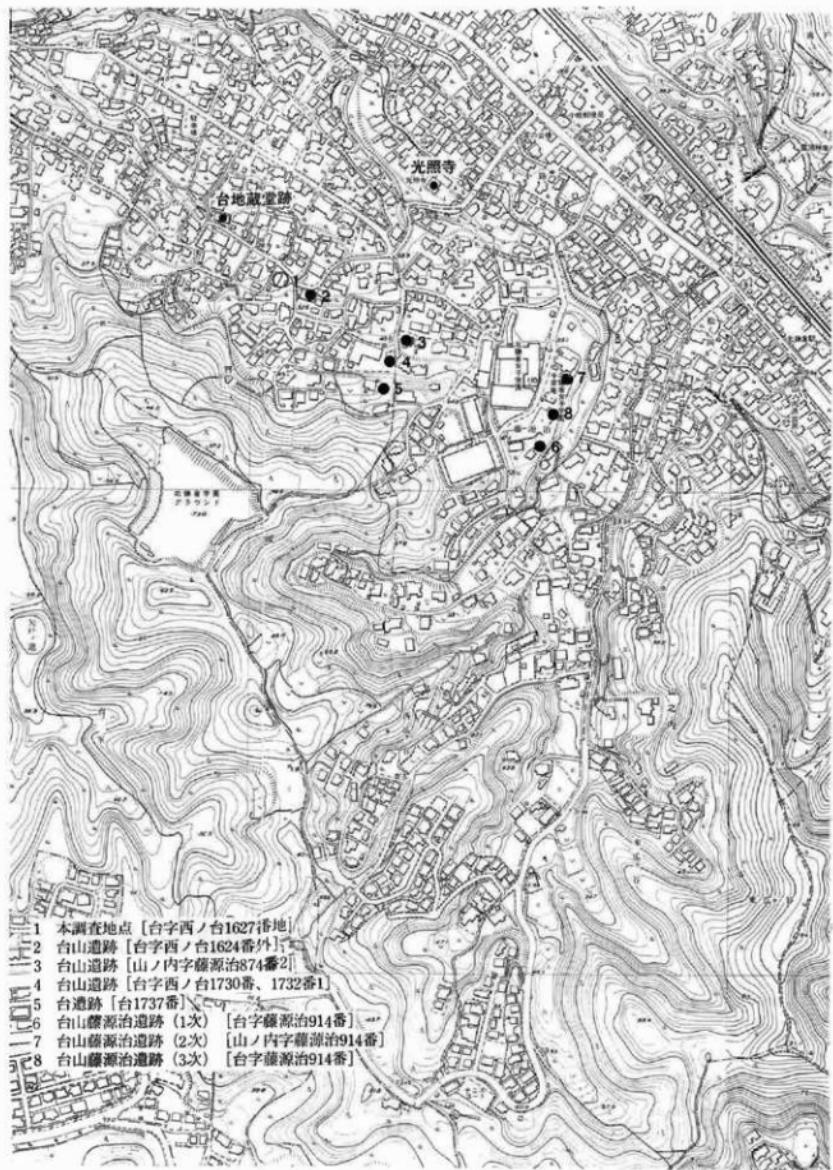


図1 遺跡の位置と周辺

0

200m

第二章 調査の経過と堆積土層

調査経過

調査に先だって、鎌倉市教育委員会の試掘調査の結果をもとに、岩盤面から約20cm上まで重機によつて表土を除去した。調査は6月19日開始、調査期間中は梅雨の時期と重なり調査がたびたび中断したが、7月6日に調査を終え撤収した。その間の経過は以下の通りである。

6月21日 岩盤面遺構検出を中心に作業開始

22日 遺構掘り上げ開始

27日 全景写真撮影・測量方眼の設定

28日 調査区壁土層断面図実測

29日 平面実測

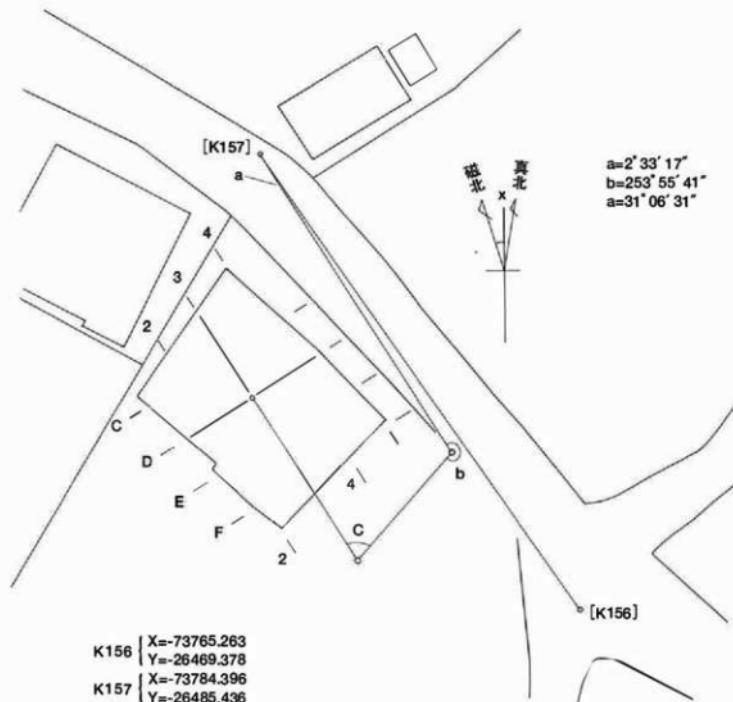


図2 グリッド設定図

本調査地点における地表面レベルは約29.60mで、それより約1.30~1.60m下で岩盤面を検出する。岩盤面は南から北に傾斜し、高低差は最大30cmある。

堆積状況は以下の通りである。

1. 表土
2. 暗黄褐色土 泥岩粒多く含む。
3. 灰褐色土 泥岩粒多量に含む。
4. 暗褐色粘質土 泥岩粒含む。しまり弱い。
5. 暗褐色土 泥岩粒・少量の炭粒含む。
6. 灰褐色土 泥岩粒・ごく少量の炭粒含む。
7. 暗灰色土 少量の泥岩粒含む。
8. 暗褐色土 多量の泥岩粒含む。
9. 暗黄褐色土 多量の泥岩粒・少量の炭粒含む。
10. 暗褐色土 多量の泥岩粒・少量の炭粒含む。
11. 暗褐色土 泥岩粒・少量の炭粒含む。粘性あり。
12. 暗褐色土 泥岩粒含む。
13. 暗褐色土 泥岩粒・炭粒含む。
14. 暗褐色粘質土 多量の泥岩粒含む。
15. 青灰色土 少量の泥岩粒・炭粒含む。
16. 暗褐色粘質土 泥岩粒・少量の炭粒含む。

第三章 検出された遺構と出土遺物

第1節 遺構（図3）

岩盤削平面に多数の遺構（溝2条、土壌6、ピット192）が検出された。

溝1

調査区東際で検出された。調査地点東の道路とほぼ平行に、南から北に流れる（下場高低差28cm）。上幅22~35cm、下幅12~16cm、深さ6~15cm。

溝2

溝1の約2m西、溝1とほぼ平行に南から北に流れる（高低差37cm）。上幅30~67cm、下幅16cm前後、深さ3~8cm。Eラインより南の底面にノミ痕状の穴が不規則に多数（43ヶ）穿たれている。穴の形態は不正円形を呈し、径2~6cmとまちまちである。調査区南壁が近年の擾乱により残存状況が悪かったため、確認できなかったが、溝1・溝2はともに性格が同じと思われることから、この間は道路の可能性がある。

ピット

いづれのピットからも礎板・礎石は検出されていない。多くのピットがあることから（掘立柱）建物を想定することができるが、プランの検討をしたところ見出すことができなかった。

また、ピット36、63、72、142は棚列となる可能性がある。

第2節 出土遺物（図4・表）

本調査地点の出土遺物の総計は98点で内訳はかわらけ（ロクロ成形）48点（小型5・大型2・不明41）、土器（不明）1点、常滑・甕8点、平瓦2点、金属製品2点（釘1・不明1）、砥石2点（仕上げ砥1・中砥1）、近世以降陶磁器35点（陶器17・磁器13・擂鉢5）。ほとんどの遺物は小破片で実測可能なものは少なかった。

1~9は13層～岩盤面上から出土したもの。1は瀬戸・美濃系と思われる灯明皿受け皿で受けは口縁より低い。2は灯明皿上皿で产地不明。3は产地不明の皿で内面に草状の文様を配する。4は越前山内の縁軸碗と思われる。5は堺系の擂鉢。6・7は常滑・甕。8はかわらけで器肉が厚く粉っぽい。9は平瓦で凸面の叩き目は残っていない。

10は溝1から出土している砥石で方柱状を呈する中砥である。11・12はかわらけで11はピット43、12はピット122から出土。13は瀬戸美濃系の擂鉢で火を受けている。ピット30から出土。

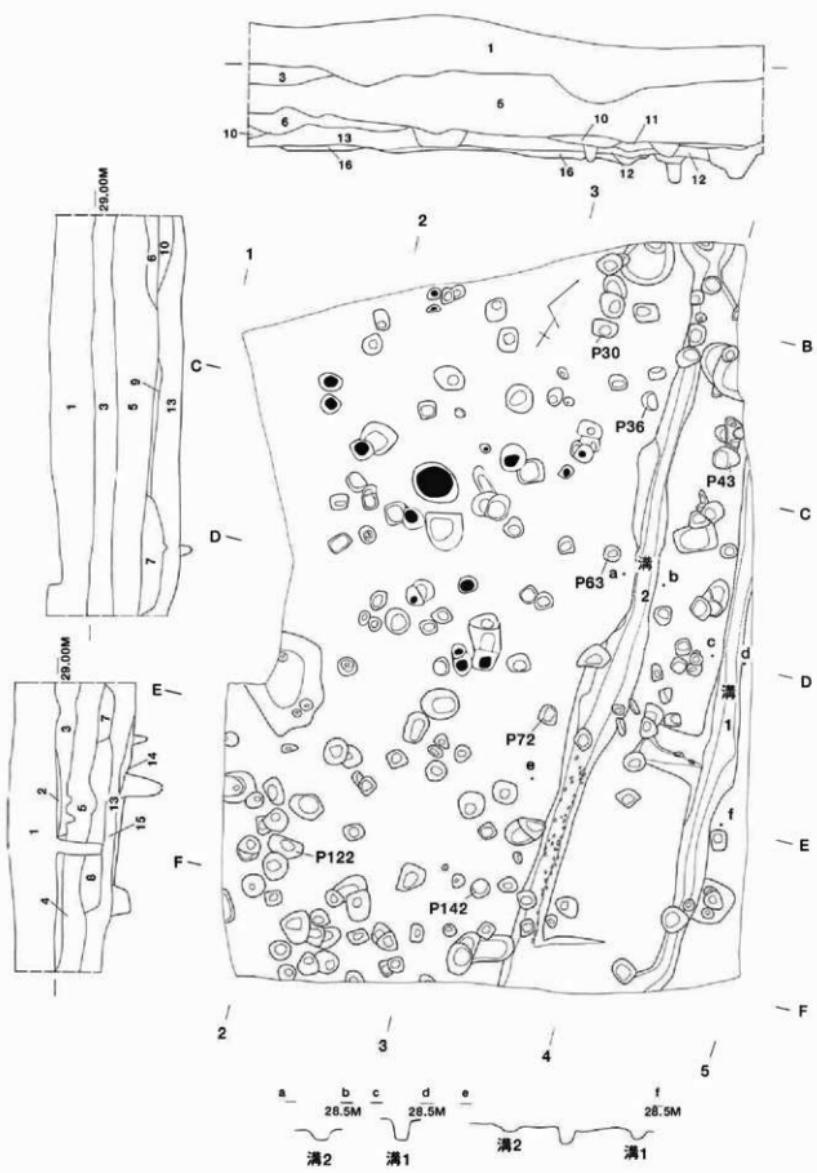


図3 遺構平面図及び土層断面図

0 2m

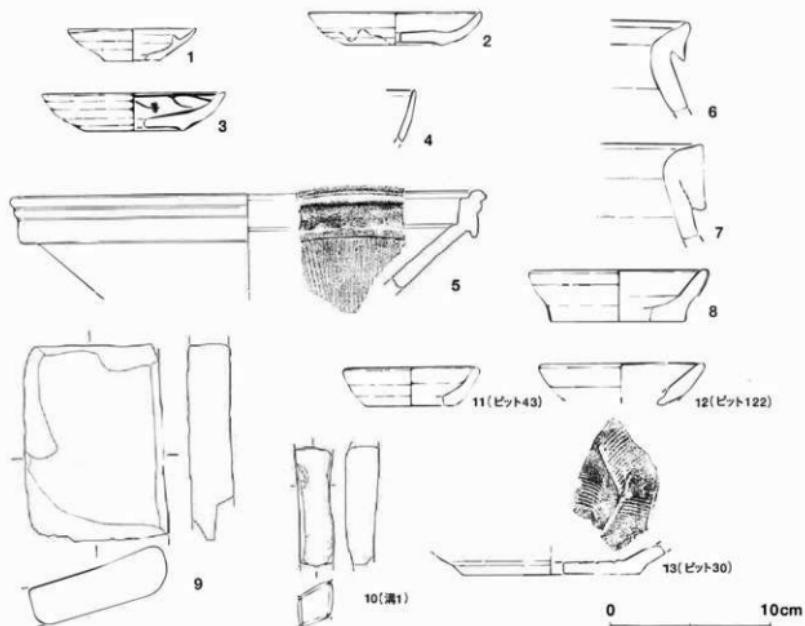


図4 出土遺物

番号	種類	計測値 単位cm、()は復元	特記事項
1	瀬戸・美濃？ 灯明皿受け付鉢	口径(7.8) 底径(3.5) 器高(2.0) 受け径(1.6) 受け高(1.6)	胎土 淡黄褐色 軸 黄灰色
2	産地不明 灯明皿上皿？	口径(10.6) 底径(6.6) 器高2.0	胎土 灰色 軸 茶褐色
3	産地不明 皿	口径(11.3) 底径(6.1) 器高2.4	胎土 淡黄褐色 軸 灰褐色 内面に植物文様(茶褐色) 目痕あり
4	肥前山ノ内窯 緑釉輪碗		胎土 淡黄褐色 軸 不透明(外) 草綠色(内) クリーム色
5	堀系 描鉢	口径(28.8)	胎土・器表ともに暗赤茶褐色
6	常滑 甕		胎土 暗灰色 器表 暗茶褐色
7	常滑 甕		胎土 暗灰色 器表 暗茶褐色
8	かわらけ	口径(9.1) 底径(6.7) 器高3.2	胎土 淡橙色
9	平瓦	厚さ2.5	胎土 淡褐色
10	砥石(中砥)	残存長7.2	頁岩・淡黄灰色 4面使用
11	かわらけ	口径(8.2) 底径(5.9) 器高2.4	胎土 淡橙色
12	かわらけ	口径(9.9)	胎土 橙褐色
13	瀬戸・美濃系描鉢	底径(11.0)	胎土 淡黄褐色 軸 小豆色

表 遺物観察表

第四章　まとめ

本調査地点は台字西ノ台1624番3外地点（図1-2）に続き、谷戸の奥の調査であった。調査範囲が狭く、遺物も小破片がほとんどで遺構の年代を特定するのは難しい。が、遺構検出時の出土状況等から中世後半以降と思われる。本地点と台字西ノ台1624番3外地点は約30mと至近距離にあり、遺構の方向性（溝）はほぼ同一ものの、連続性は認められなかった。

台山遺跡内で中世の遺構が確認されている地点は以下の通りである。

台山藤源治遺跡（1次） ······ 削平面、道路 [14世紀～16世紀]

台山藤源治遺跡（3次） ······ 削平面、欄列、切り岸（2段）、道路 [14世紀中葉～後葉]

台字西ノ台1624番3外地点 ······ 溝状遺構、落ち込み遺構、ピット [中世後半]

台字西ノ台1627番地点（本地点） ······ 溝（道路）、土壤、ピット 8

8地点の調査で中世遺構は4地点で検出されていて、台山藤源治遺跡（2次）・山ノ内字藤源治874番2地点と上記のあわせて6地点で14～16世紀代の遺物が出土している。宗臺氏は台山藤源治（3次）のピット中から密教系法具である銅製の六器皿が出土していることと、遺跡地周辺の宗教施設等の存在から、中世期に遺跡地（台山藤源治遺跡1～3次）に寺院が存在していたと想定している。また、大河内氏は小字「藤源治（トウゲンジ）」の語源を『新編相模國風土記稿』「徳泉寺蹟」の項にみえる「東現寺」と推定している。以上のように、台山遺跡の丘陵南東部は中世鎌倉の北の境界的要素を有していたことがうかがわれる。本調査地点付近は丘陵の裾部にあたり、調査例も2カ所と僅かなことから今後の調査の進展に期待したい。

《参考文献》

- 井野 敏 1974年 「神奈川県鎌倉市台跡調査報告」「人文科学科紀要」第59輯 東京大学教養学部人文科学科
手塚直樹ほか 1985年 「台山藤源治遺跡」 台山藤源治遺跡発掘調査団
斎木秀雄・宗臺秀明 1985年 「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」1 鎌倉市教育委員会
玉林美男・新国悟也 1988年 「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」4 鎌倉市教育委員会
大上周三 1992年 「台山遺跡」「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」8 鎌倉市教育委員会
宗臺秀明 1993年 「台山藤源治遺跡－第三次調査報告－」 台山遺跡発掘調査団
大河内勉 1996年 「台山藤源治遺跡－第2次調査報告－」 台山遺跡発掘調査団

写 真 図 版

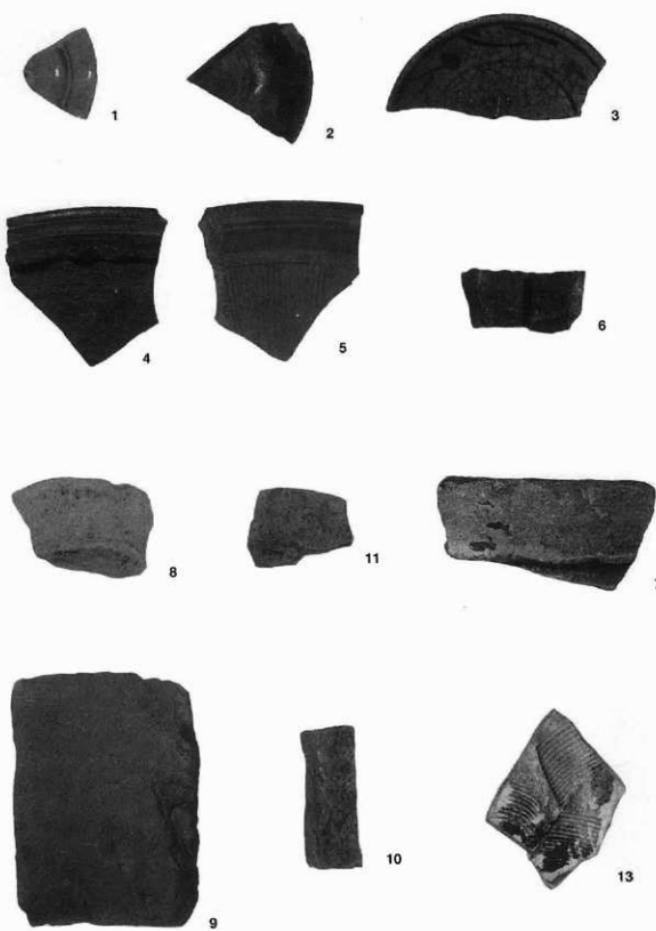


1. 遺跡遠景（北から）



2. 溝1・2（北から）

図版2



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	13						
編著者名							
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	鎌倉市御成町18番10						
発行年月日	西暦1997年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
だいやまいせき 台山遺跡	神奈川県鎌倉市台字 西ノ台1627番	204	No.29		950619～ 950706	56	自己住宅建設 に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
台山遺跡	集落址	中世	ピット 土塙 溝状遺構	かわらけ 常滑窯製品			

ざいもくざまちやいせき
材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座三丁目364番1 外地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市材木座三丁目364番1外地点における埋蔵文化財発掘調査報告である。
2. 発掘調査は個人専用住宅建設にともなう国庫補助事業として、1995年6月19日～同年7月29日におこなわれた。調査面積は100m²である。
3. 調査体制は次のとおり
担当者 馬淵和雄
調査員 太田美知子・山上玉恵・渡部律子
(資料整理)・及川加代子(同前)
調査補助員 丹行正・坂倉美恵子・岡陽一郎・
兼行优枝(資料整理)
調査参加者 岸名富雄・齊藤栄一・山下俊明・
箕田孝善・長島三男・渡辺鉄雄
4. 本報作成担当は次のとおり
遺構図整理 丹
同墨入れ 丹
遺物実測 渡部・及川・兼行・太田・馬淵
同墨入れ 馬淵
遺物計量 兼行・丹
表作成 兼行
遺物写真撮影 太田
原稿執筆 馬淵
編集 馬淵
5. 出土遺物等、本発掘調査にかかわる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本文目次

第一章 調査地点概観	145
1. 位置と地勢	145
2. 歴史的環境	147
第二章 調査の概略	149
1. 調査にいたる経緯	149
2. 方眼設定方法	149
3. 調査の概要と経過	150
第三章 調査結果	151
第1節 概要	151
1. 層序と遺構面の概略	151
2. 出土遺物の概要	151
第2節 検出遺構と出土遺物	151
1. 井戸	151
2. 坂穴建物	151
3. 碟集中部	156
4. 方形土壙	156
5. 土壙	156
6. 柱穴様小落ち込み	166
7. 包含層その他からの出土遺物	168
第四章まとめ	184

挿図目次

図1 調査地点の位置	145
図2 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	146
図3 調査地点位置図(拡大)	147
図4 方眼設定図	149
図5 上層遺構群全図	152
図6 下層遺構群全図	153
図7 井戸1	154
図8 坂穴建物1・4・8	155
図9 坂穴建物2	157
図10 坂穴建物6	158
図11 坂穴建物6出土遺物(1)	159
図12 坂穴建物6出土遺物(2)	160
図13 坂穴建物9・11	164
図14 坂穴建物出土遺物	165
図15 方形土壙・同出土遺物	167
図16 方形土壙8・土壙9・10	169
図17 碟集中部・土壙	170
図18 土壙出土遺物	171
図19 柱穴出土遺物	174
図20 上層出土遺物(1)	176
図21 上層出土遺物(2)	177
図22 下層出土遺物	177
図23 採集遺物(1)	182
図24 採集遺物(2)	183

表 目 次

表1 竪穴建物1出土遺物観察表	157	表19 土壙8出土遺物観察表	172
表2 竪穴建物4出土遺物観察表	157	表20 土壙11出土遺物観察表	172
表3 竪穴建物8出土遺物観察表	157	表21 土壙12出土遺物観察表	173
表4 竪穴建物6出土遺物観察表(1)	161	表22 土壙14出土遺物観察表	173
表5 竪穴建物6出土遺物観察表(2)	162	表23 土壙17出土遺物観察表	173
表6 竪穴建物6出土遺物観察表(3)	163	表24 土壙20出土遺物観察表	173
表7 竪穴建物9出土遺物観察表	165	表25 土壙13出土遺物観察表	173
表8 竪穴建物11出土遺物観察表	165	表26 土壙18出土遺物観察表	173
表9 竪穴建物3出土遺物観察表	166	表27 柱穴出土遺物観察表	175
表10 竪穴建物5出土遺物観察表	166	表28 上層出土遺物観察表(1)	178
表11 方形土壙1出土遺物観察表	168	表29 上層出土遺物観察表(2)	179
表12 方形土壙2出土遺物観察表	168	表30 上層出土遺物観察表(3)	180
表13 方形土壙4出土遺物観察表	168	表31 下層出土遺物観察表	181
表14 方形土壙5出土遺物観察表	168	表32 採集遺物観察表(1)	181
表15 土壙9・10出土遺物観察表	169	表33 採集遺物観察表(2)	182
表16 土壙2出土遺物観察表	172	表34 採集遺物観察表(3)	183
表17 土壙4出土遺物観察表	172	表35 出土遺物組成表	185
表18 土壙5出土遺物観察表	172		

図 版 目 次

図版1-1 東端部上層遺構面(西から)	189	5-2 同上 図11-5・8・6・15・16・14 (左上から) 出土状況	
1-2 同上 下層遺構面(西から)		5-3 竪穴建物11南域(北から)	
1-3 下層面全景(西から)		図版6-1 中央部柱穴群(東から)	194
図版2-1 南北上層断面(東壁寄り)	190	6-2 方形土壙1南半部(西から)	
2-2 井戸1(東から)		6-3 方形土壙8(南から)	
2-3 同上 内部の状況		図版7-1 図17-4出土状況	195
図版3-1 竪穴建物1・4(東から)	191	7-2 図19-6出土状況	
3-2 竪穴建物2(東から)		7-3 図13-6出土状況	
3-3 竪穴建物8(東から)		図版8 竪穴建物出土遺物	196
図版4-1 竪穴建物6東辺部(西から)	192		
4-2 同上 西域部(西から)		図版9 竪穴建物・土壙出土遺物	197
4-3 同上 図11-13・12-50(左から) 出土状況		図版10 包含層などからの採集遺物	198
図版5-1 竪穴建物6 図11-7・17・20 (左から) 出土状況	193		

第一章 調査地点概観

1. 位置と地勢

鎌倉旧市街は、三本の幹線南北道路と、それに直交する数本の東西道路により構成される。南北道の中心は「若宮大路」で、西側に「今小（大）路」、東側に「小町大路」が通る。中世期にこれらの南北道が海岸方向にどこまで延びていたか検討の余地があるが、このうち最も海岸寄りを通る東西道路が小町大路と交差する場所は、近在の寺院の名称が冠せられ、九品寺交差点と呼ばれている。調査地点はこの交差点の約100m北に位置する。地番は鎌倉市材木座三丁目364番1外地点。

付近一帯は、鎌倉の平野部を形成する滑川扇状地の東南の一隅にあたり、現在の海岸まで300mほどの距離にある。海拔は地表面で6m前後。また、先年おこなわれた北東250mにある能蔵寺跡の発掘調査の結果、この辺りの地層は東の山裾まで海成砂層であったことがわかっている¹。

中世期鎌倉の海岸線が現在よりもだいぶ奥まで深入していたことは確実だが、この点について、近年斎藤直子は次のようにいっている。

（1）滑川の河口は、かつては現在よりも400～500m東寄りにあり、このことは17世紀後半まで遡れる。また、現河口へと移されたのは1829年頃から幕末にかけての間である。

（2）海岸部には砂丘（砂州）が形成されていたが、それは遅くとも15世紀の中頃にはその上に堂が建てられるまでに安定していた。

（3）鎌倉期には、海岸砂丘の内側（陸側）に広い潟湖が存在していた。

斎藤のこの意見は、先に紹介した九品寺交差点付近から海岸にかけての一帯が、現在でも標高12m程

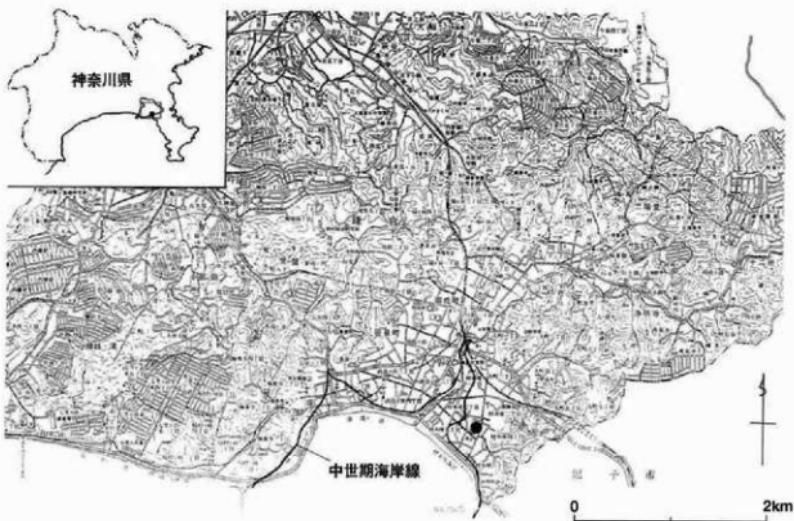


図1 調査地点の位置

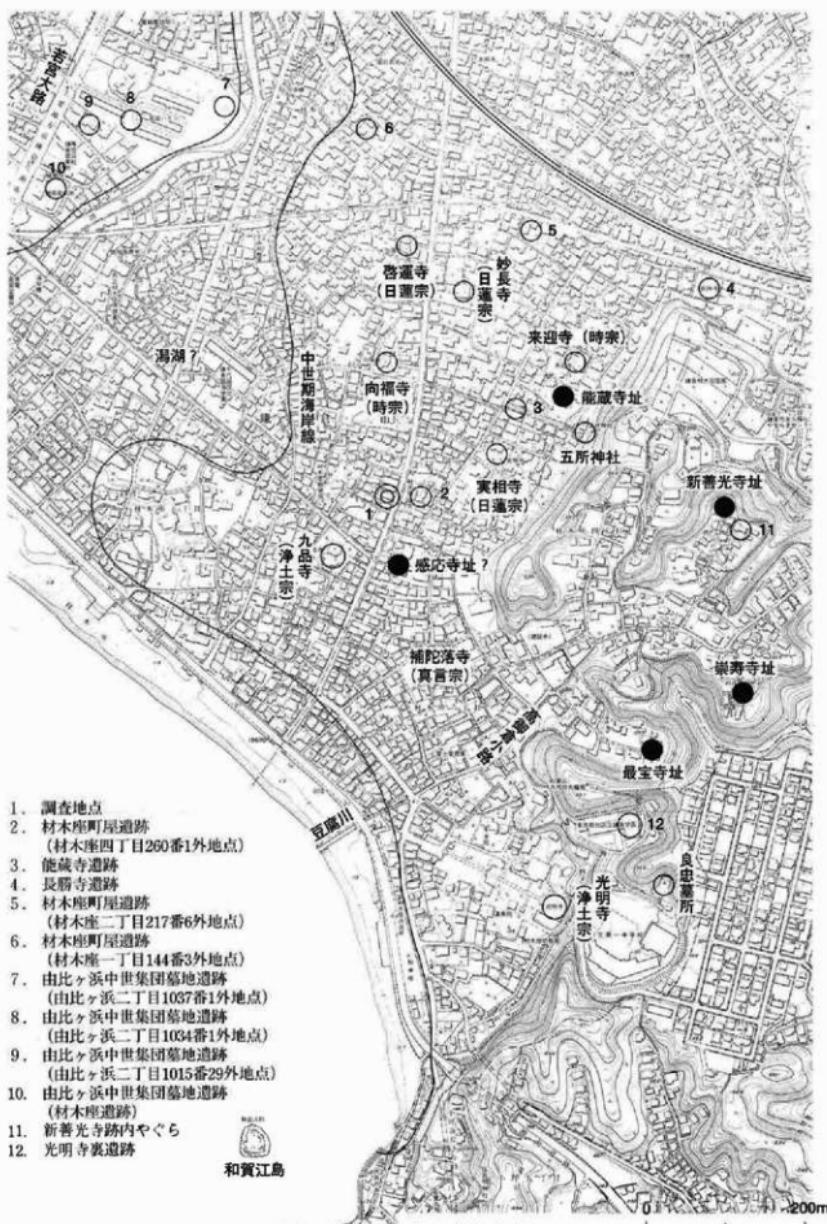


図2 調査地点と周辺の遺跡・旧跡



図3 調査地点位置図（拡大・1/500）

度の微高地になっていることや、湯湖推定範囲のなかに古い来歴をもつ寺院が存在しないことからも、いちおう首肯できる。そしてそうだとすれば、調査地点は湯湖のだいたい東辺に位置することになり、現在の実感よりもはるかに水辺に近かったといえる。

2. 歴史的環境

鎌倉の海岸地帯では、これまで主に滑川対岸の由比ヶ浜地区では頻繁に発掘調査が行われてきた。しかし材木座地区では少なく、谷戸部を除くと本調査は4例目に過ぎない。これらの調査結果からみて、調査地点付近で人の生活痕が認められるようになるのはおおむね律令期とみてよい。

鎌倉に源氏が入るのは11世紀なかばのことと、康平六年（1063）頼義が石清水八幡宮を勧請して建てた由比若宮は、ここから約500m北に位置する。以後、鎌倉時代前期ごろまで材木座一帯の消息は、よく伝わらない。

『吾妻鏡』建保四年（1216）6月15日によれば、將軍実朝は宋人陳和卿と面談し、渡宋用の「唐船」修造を命じた。翌建保五年4月17日、完成した船を進水させようとしたが、不首尾に終わった。『吾妻鏡』は失敗の理由を、由比浦が唐船の出入りに不向きであったからだとしている。貞応二年（1223）成立の紀行文『海道記』には「湯井浜」（由比ヶ浜）に停泊する船にぎわいと、浜の「東南角ノ一道」に蝦夷集する商人たちのことがみえる。

執権北条泰時の貞永元年（1232）、本地点から700mあまり南の飯島崎に、念佛僧往阿弥陀仏の勧進により和賀江港が作られた。「為無舟船着岸煩、可築和賀江島之由」と泰時に願い出たという。狭くなつたのか、遠浅で大船の接岸に不向きだったのか、おそらく両方が理由であろう。すると、やや話は逸

れるが、陳和卿の唐船とはよほど大きなものだったのだろうか。

建長三年（1251）、鎌倉幕府は市内に七カ所の商業地区を指定した。和賀江はそのうちのひとつとなる。文永二年（1265）に幕府は再度の商業地指定をするが、このとき和賀江は指定から外れた。鎌倉を海岸部とそれ以外の地区という二分法で分けた場合、幕府はただひとつ海岸部に含まれる和賀江を放棄したことになる。その意味は、この法令の時点で、幕府は海岸部における商行為の統制から手を引いたということである。この点は以前にも何度か書いたが、もう一度簡単に触れておきたい。

よく知られているように、鎌倉時代後期の海岸部（前浜・浜地）は西大寺流律宗の極楽寺が殺生禁断を布令して検断権を有するところとなり、和賀江の維持・管理も忍性以来極楽寺長老に任されていた。西大寺律が浜に弘通するのは、弘長二年（1262）、寂尊が関東下向したときだと考える。そして、文永二年の商業地の再指定で和賀江が除かれたとき、浜での権益が極楽寺に移ったのである。

調査地点北東300mにある材木座鎮守五所神社には、市指定文化財の弘長二年銘板碑（「俱利迦羅明王板碑」とも）がある。灰黒色粘板岩の常盤型で、もと近在の感応寺（廃寺）に所在していた。この板碑について筆者は、弘長二年の西大寺律の前浜弘通を示すものとかつて書いた。なお感応寺は調査地点向かい側の材木座公会堂の辺にあったという。

材木座から東の山塊にかけては、おもに鎌倉時代後期、新善光寺・最福寺・最宝寺・光明寺など仏教寺院が多く集まる空間となっていた。また北条高時の開いた禅寺の崇寿寺、先の五所神社板碑が元あった真言宗醍醐三宝院流の感応寺もあり、和賀江に近いこの付近は、当時寺院の集中する、特異ともいえる宗教空間が形成されていたらしい。これらはすべて廃寺化、あるいは別の場所に移転している。

なお、調査区から少し南の九品寺には永仁四年（1296）銘造薬師如来座像があり、これについて赤星直忠は、箱根精進池畔の石仏群中の像に似ているといっている。¹ 箱根のものは極楽寺忍性作とされており、赤星の評価が正しければ、九品寺像も彼に関係する可能性がある。この一帯の特殊な宗教的あり方も、前浜における西大寺律の弘通と何かしらのつながりを見出すことができるかもしれない。

明治四十一年（1908）、乱橋村と材木庄村が合併してこの辺は東鎌倉村大字乱橋材木座となった。このとき、乱橋村鎮守の三島神社の地に近在の四社を合祀して、現在の五所神社が建てられている。五所神社には、鎌倉の代表的古蹟である「天王唄」が伝わる。文言からみてその成立はおそらく近世を遡らないだろうが、この唄は中世以来の伊勢と鎌倉間の太平洋交通の様子をよく伝えている。これについては別に書いた。なお材木座の地名は近世を初見とする。

注

- 1 馬淵和雄 1995 「能登寺跡－材木座五所神社境内所在遺跡の発掘調査－」鎌倉市教育委員会
- 2 斎藤直子 1995 「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」「中世東国の物流と都市」山川出版社
- 3 a 馬淵和雄 1991 「都市の周縁、または周縁の都市」「青山考古」第9号 青山考古学会
b 馬淵和雄 1994 「武士の都 鎌倉－その成立と構想をめぐって－」「都市鎌倉と坂東の海に暮らす」（『中世の風景を読む』2）新人物往来社 ほか
- 4 馬淵和雄 1995 「浜と板碑－五所神社藏弘長二年銘板碑の意味－」注1前掲書 35頁
- 5 高橋慎一郎 1995 「中世鎌倉における淨土宗西山義の空間」「中世の空間を読む」吉川弘文館
- 6 赤星直忠 1959 「鎌倉市史 考古編」吉川弘文館456頁
- 7 注1馬淵前掲書 3・4頁 なお唄の文句にある「わかの浦」について、注1前掲書中で「どこであるかは分からない」と書いたが、おそらく紀州のそれであろうと訂正したい。

第二章 調査の概略

1. 調査にいたる経緯

この点については、「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書」12（第1分冊 鎌倉市教育委員会1996）所収「平成7年度調査の概観」を参照してほしい。

2. 方眼設定方法

調査の便宜上、県道（小町大路？）側を東、海岸側を南と仮称することにした。

まず、北西調査区外に任意点を設定し、それを原点A-1とした。ここから東に向かい南北軸を、南に向かい東西軸を5mごとに派生させ、前者に算用数字を、後者に大文字アルファベットの呼称を付した。ただし調査区が狭いため、区内を実際に通過するのは、南北は2・3軸、東西はB軸のみである。

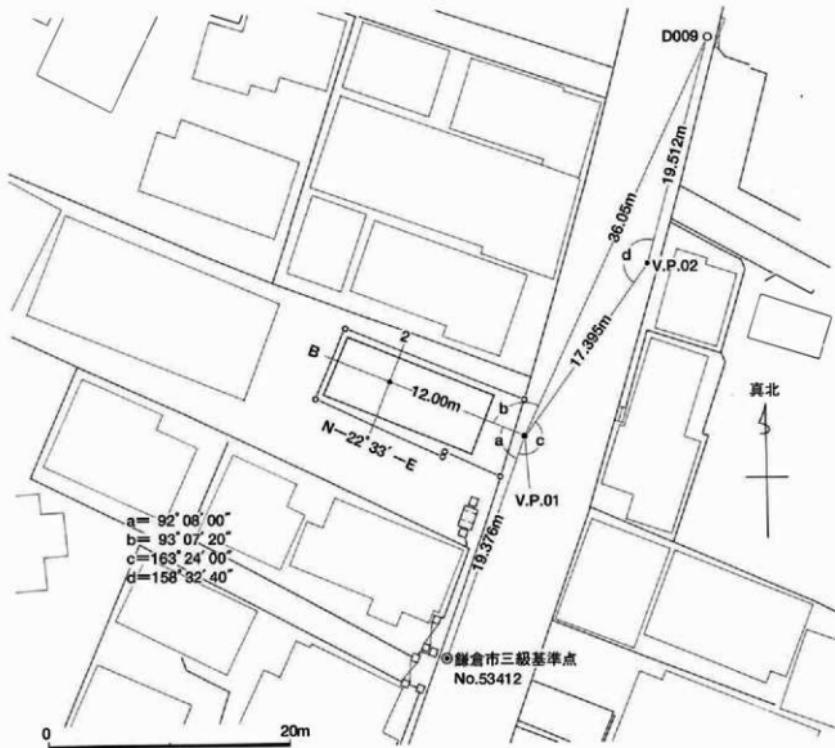


図4 方眼設定図

各方眼区画の名称は北西角の軸線交点で表される。また、東西軸は測量の便宜を考慮して調査区長軸に平行させたため、経緯方向に一致しない。

南北軸方位 N-22° 33' - E。

軸線交点B-2の位置はつきのとおり。

東経 139° 33' 20"

北緯 35° 18' 16"

この方眼は次のように鎌倉市三級基準点No.53412、および四級基準点D009に連絡している。

B-4 東2mのB軸上に任意点V.P.01をおいた。ここからD009までは距離36.05m、B軸との角度は時計回りで93° 07' 20"である。またNo.53412まで19.376m、角度は反時計回りで92° 08'である。

また、ここからさらに163° 24' 反時計回りに進んだ軸線上17.395mの場所に、もうひとつの任意点V.P.02を派生させ、補助点とした。この点はD009まで19.512mの位置にある。

3. 調査の概要と経過

調査は1995年6月19日から、同年7月29日までを要した。調査面積は100m²である。

調査区は敷地のほとんど全面にわたるので、残土の場外搬出のための空間を確保する必要があり、調査を二期に分けた。すなわち当初は、東側の道路に接した部分を幅3mほど掘り残して、以西で作業を進め、のち東側の作業をおこなう。このとき排土は西側の調査区に置く。このような手順を余儀なくされたので、西側調査区と東端部と一緒に写真撮影することはできなかった。

建設工事とともになう掘削深度は地表下195cmである。そのため調査の掘削深度にもそこまでの規制があった。しかし中世層については、かなり広い範囲にわたってこの深度まで基盤層を確認することができた。

鎌倉市教育委員会の試掘調査により、現地表下約70~80cmまで、近・現代の整地層が及んでいることが判明していた。そこでまず、当初の二日間で地表下70cmまで重機によって排土した。

以下人力によって順次作業を進めたが、おりしも梅雨の真っ最中であり、また海岸に近いこともあってか、予想以上に湧水が多く、海成砂層に掘りこまれた遺構はたちまち崩落していくことがしばしばあった。

以下、順次作業を進めていった。作業の節目を日誌から抜粋して記す。

6月24日（土） 基準点設置

7月19日（水） 西側の全景写真撮影

7月21日（金） 東端部掘削開始

7月28日（金） 東端部地山面写真撮影

7月29日（土） 機材撤収、現地作業終了

第三章 調査結果

第1節 概要

1. 層序と遺構面の概略

厚さ70~80cmほどの近・現代の客土層を除去すると、中・近世の包含層となる。この層は海岸の砂そのもので、これ以下もすべて砂層となる。

すでに層位的にはこの付近から切り込まれた遺構もあるが、攪乱が非常に多く、本格的な検出はもう20~30cmほど下げるなければならない。すると、生活面自体はそれほど明瞭ではないが、遺構の検出が可能となる。部分的に遺存している生活面構成土は、灰~黄褐色の砂であり、人工遺物のほか、自然遺体も多く含む。この面では井戸など近世の遺構も検出されている。

遺構は複雑に切り合っており、ほぼ全面がその堆積土となって連続的に検出されるため、生活面はほとんど残っていないかった。また、したがって、調査中に遺構を層位から群別することは難しかったが、整理の際の検討により、中世期に属する遺構をいちおう上層遺構群・下層遺構群の二群に大別した。ただし、以下の個別記載では上下の区別をしていない。なお、整理の結果、消滅した遺構もいくつかあるが、整理時の混乱を避けるため、欠番はそのままにしておいた。

上層遺構群としては、竪穴建物6・方形土壙4・土壙7・柱穴様小落込み約50がある。また炭化物の散在した部分や、暗黄灰色の粘土を叩き締めた土間状の面などが検出された。

下層遺構群としては、竪穴建物4・方形土壙1・土壙8・柱穴様小落込み約60がある。柱穴様小落込みのうちいくつかには規則性が認められ、掘立柱建物の一部である可能性もある。

2. 出土遺物の概要

縄文時代から近代まで、合成樹脂整理箱で約30箱ほどの出土遺物があった。土器・陶磁器・鉄製品・石製品などがある。木製品は、土層が砂で構成されているためとみられるが、ほとんどなかった。詳細な内訳は本文末の出土遺物組成表に譲る。

第2節 検出遺構と出土遺物

1. 井戸

井戸1（図7）

1-Aにあり近世後期に属す。直径1.7m前後の掘方中に、弧状に成形した泥岩を積み上げて井戸枠にしている。底部近くには木桶の溜まり部が遺存していたが、厳しい掘削深度規制があり、全体を底部まで掘り出すことはできなかった。現状で確認面からの深さ約1.8m。

2. 竪穴建物

竪穴建物1・4（図8）

調査区西南角1-Bで、重複して検出された。当初検出した1の掘削途中、ほぼ重なる位置にもう1基あることを確認し、竪穴建物4とした。4が1を切る。

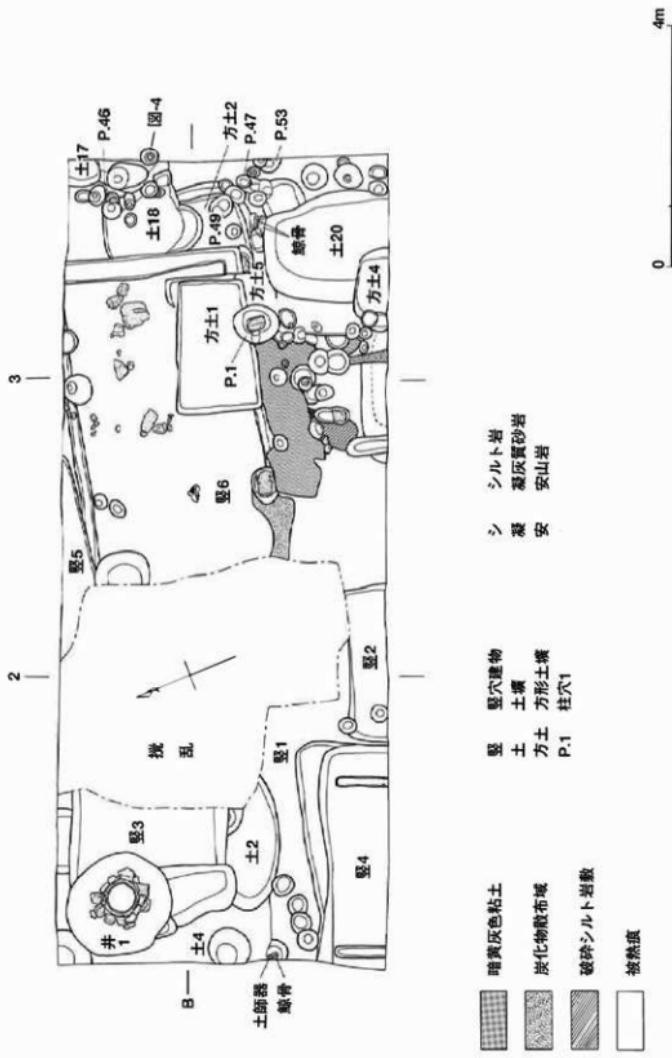


図5 上層遺構群全図

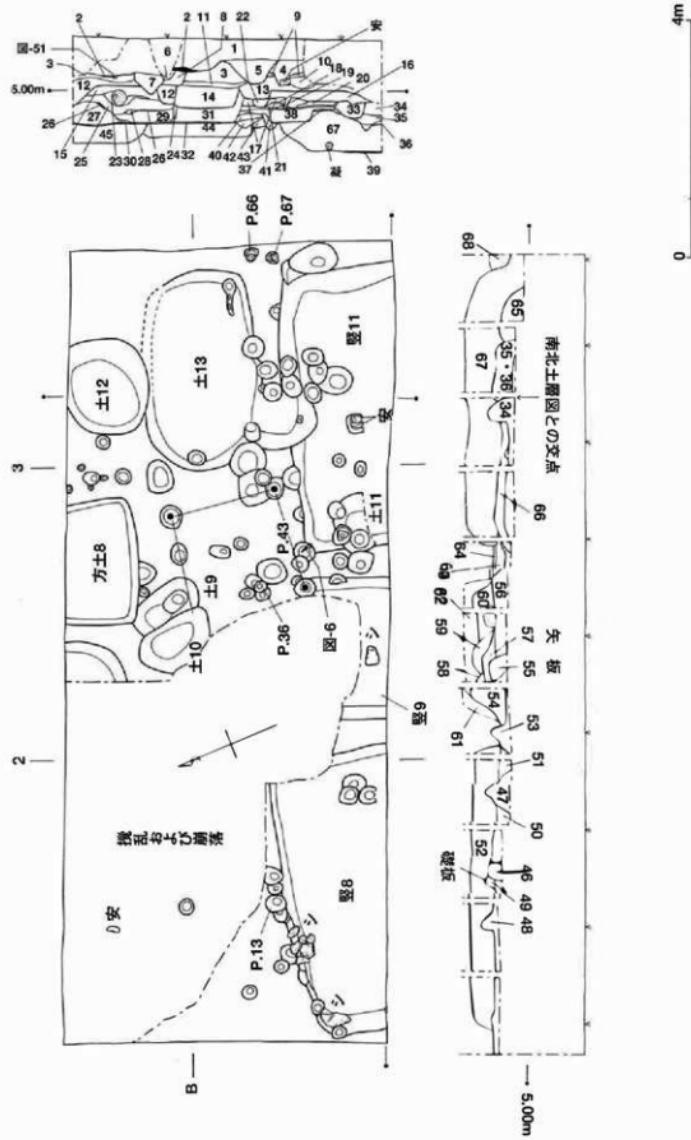


図 6 下層遺構群全図

- 図6 土層説明（東西・南北土層図共通） 1. 表土 2. 炭化層 3. 茶褐色土（一部暗灰褐色色粘土含む） 4. 暗灰褐色土
 5. 暗茶褐色土 6. 明灰褐色土 7. 暗黃灰色土 8. 茶褐色土 9. 明灰褐色粘土 10. 暗茶褐色土 11. 明茶灰色土
 12. 茶褐色土 13. 暗灰褐色粘土 14. 方形土壙 15. 明茶褐色砂質土 16. 茶褐色土 17. 黄褐色砂質土（鐵岩粒子多い）
 18. 茶褐色砂質土 19. 明灰褐色砂質土 20. 暗茶褐色砂質土 21. 暗茶褐色土 22. 暗茶褐色土 23. 暗灰褐色砂質土 24.
 暗灰褐色土 25. 暗黃褐色砂質土（以下32まで堅穴建物 6. 図10参照） 26. 炭化層 27. 黄褐色砂質土 28. 燐土 29. 灰
 茶褐色砂質土 30. 灰褐色 31. 暗灰褐色砂質土 32. 暗灰色粘土 33. 茶褐色砂質土 34. 灰褐色土 35. 暗灰褐色粘土質（暗
 黄褐色砂との混土、土壙埋土） 36. 暗黃褐色砂質土 37. 灰褐色砂質土 38. 暗灰褐色砂質土（土壙5） 39. 暗灰色粘土 40. 灰
 茶褐色土 41. 暗灰褐色砂質土 42. 灰褐色砂質土 43. 明灰褐色砂質土 44. 土壙13（図17参照） 45. 明灰褐色砂質土（土
 壙12） 46. 小落ち込み（以下52まで図8参照） 47. 同前 48. 堅穴建物4 49. 小落ち込み 50. 暗灰色粘土 51. 暗灰
 褐色砂質土 52. 堅穴建物8 53. 暗褐色砂質土 54. 小落ち込み（以下61まで図13参照） 55. 同前 56. 暗褐色砂質土 57.
 土壙埋土 58. 小落ち込み 59. 土壙埋土 60. 土壙14埋土 61. 堅穴建物9 62. 灰褐色砂質土 63. 暗褐色砂質土（粘土・貝粒子
 を含む） 64. 土壙20（以下67まで図13参照） 65. 土壙6・7 66. 堅穴建物11 67. 灰褐色砂質土

1は深さ22cm、4は深さ50cm。大きさは、半ば以上調査区外に出ているため不明だが、4の東西については、底面の根太の痕跡から、約4m前後に復元される。

出土遺物には土師器・常滑こね鉢（II類）・瀬戸・鉄製品などがあり、1・4ともに鎌倉時代後期に属している。

堅穴建物2（図9）

上記堅穴建物1・4のすぐ東側2-Bにある。東西5.2mで、南側の大半は調査区外に出ている。深さ26cm。

出土遺物に図示しうるものはなかった。

堅穴建物6（図10~12）

調査区東寄りの2・3-A・Bにある長方形の堅穴建物。西側を攪乱壙に削られ、東北角が少し調査区外に出ているが、現状で東西10.8m、南北6.7mほどの規模を持つ。深さ約50cm。

壁際の底面には、切石を据えたとみられる幅25~40cmの浅い溝が巡っている。また、床上7~8cmには暗灰色の粘土が薄く敷かれていた痕跡がある。

出土遺物は多彩で、床面に土師器がかなり散在していたほか、常滑・瀬戸などの国産陶器、青磁・黒釉陶器など舶載陶器、砥石・土製品・釘・錢などがある。瀬戸のなかには仏像か何かの蓮台とみられるものもある（図12~59）。遺物の年代は、手づくね土師器（土師器T種）の存在を下層からの混入とみれば、おおむね鎌倉時代後半~末期に納まる。

堅穴建物8（図8）

前出堅穴建物1・4の下に検出された遺構で、や

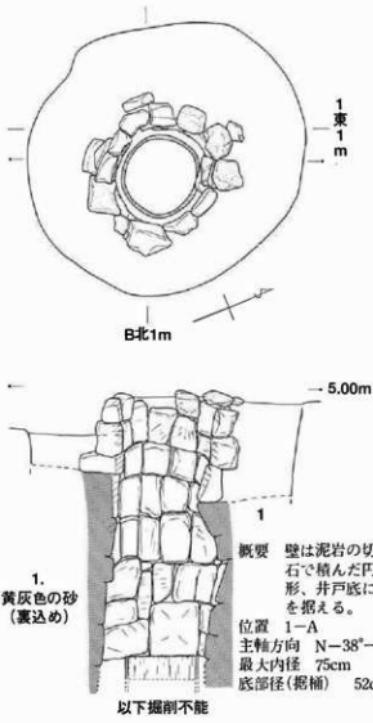
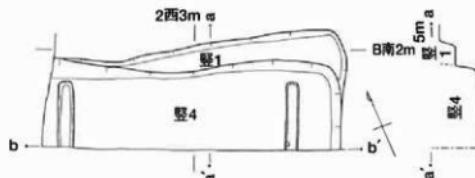
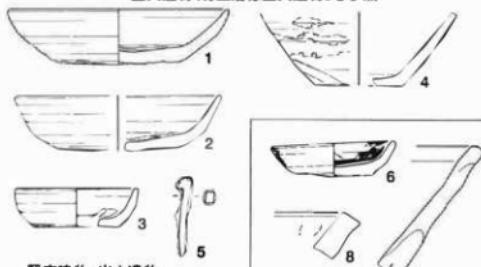


図7 井戸1



豊穴建物4の土層は豊穴建物8を参照



豊穴建物1出土遺物

0 2m(造構)
0 10cm(遺物)

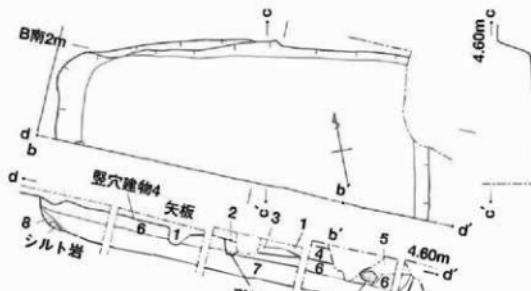
豊穴建物4出土遺物

豊穴建物1

位置 1-B
軸方位 N-105°-E
平面形 圓丸長方形
規模 (3)m×(7.5)m
深さ 22cm
特記事項 豊穴建物4に切られる

豊穴建物4

位置 1-B
軸方位 N-111°-E
平面形 圓丸長方形
規模 (2.3)m×(7.5)m
深さ 50cm
面積 (17.25)m²
特記事項 豊穴東西床面に根太木を掘れた痕あり、豊穴建物1を切る



1. 暗褐色粘質土 粘性弱い シルト岩粒子多量 豊穴建物4土層
2. 暗褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 暗灰褐色粘質土
6. 黄褐色粘質土 皮粒多量 硬くしまっている
7. 暗灰褐色粘質土 具晶片多量
8. 暗褐色粘質土 壁土層

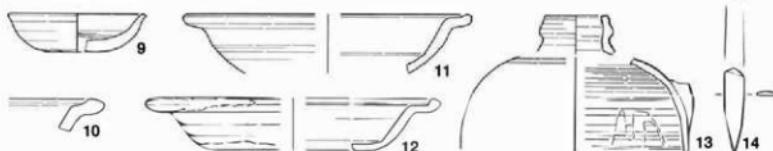


図8 豊穴建物1・4・8

はり南半部は調査区外に出ている。東西9.3mほどで、深さは約40cm。

出土遺物には土師器・瀬戸・青白磁水注・骨製笄などがあるが、年代的に鎌倉末期から南北朝期のものまで含んでおり、竪穴建物1・4、あるいは他の上層の遺物が混入した可能性もある。

竪穴建物9（図13）

竪穴建物8の東隣・同2の下に検出された。南側は調査区外にある。東西4.8mで、深さは規制深度よりも下にいくが、現状まで55cm以上ある。規模からいって後述の土壙8に共通しており、土壙といつても差し支えない。

出土遺物には土師器・瀬戸・青磁などがある他、直径2.2cmの水晶製念珠（母指）がある。他の数珠玉は発見されなかった。青磁に古い様相のものがみられるが、おおむね鎌倉時代後期とみて大過なかろう。

竪穴建物11（図13）

竪穴建物9のさらに東側にあり、これも南半部は外に出ている。これらの点からみて、本地点の竪穴建物が大体この辺に並んでいることがわかる。東西9.4m、深さ75cm。

出土遺物には土師器・常滑・瀬戸・貿易陶磁・土製品・鉄釘などがあるが、これもほかの竪穴建物と同様、鎌倉時代後期～末期に属する。

竪穴建物出土遺物（図14）

竪穴建物3・5からの出土遺物を図示しておいた。前者からは口縁部内面に凸帯の付いた瀬戸の鉢、後者からは土師器のほか、青磁や火打金が出土している。

3. 碟集中部（図17）

A-2・3付近に、凝灰質砂岩やシルト岩、安山岩などが散在した状況がみられたので示しておく。床面からは若干浮いているが、位置からいって竪穴建物6の埋土中に投棄されたものかもしれない。

4. 方形土壙

方形土壙1（図15）

調査区東寄りの3-B交点付近に竪穴建物6を切る形で検出された。東西に長い長方形で、東辺の方が西辺に比べ、やや短い。西辺1.4m、東辺1.05m、東西2.2m。深さ33cm。

出土遺物には、土師器・常滑こね鉢・瀬戸・鏡などがあり、大体鎌倉時代末とみてよい。

方形土壙8（図16）

調査区中央部北寄り2-Aにあり、北側は調査区外に出ている。整った矩形を呈し、東西2.13m、深さ23cmの規模をもつ。

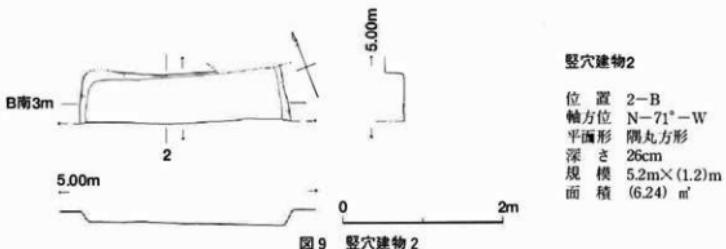
出土遺物には図示しうるものはなかった。

方形土壙出土遺物（図15）

方形土壙2・4・5出土遺物を提示する。2からは土師器・貿易陶磁・常滑などが、4からは土師器・白磁口はげ皿・鹿角製品未成品などが出土。5からは線刻のある砂岩片が出土している。全体に舟形をしているが、性格等については不明。

5. 土壙

土壙9・10（図16）



壁穴建物 1	土師器	寸法 口径14.0cm 底径8.0cm 器高3.25cm		成形 ロクロ	内底部ナデ 外底部回転糸切り痕	焼成 良好	備考 板状圧痕あり
		粘土	砂粒 鈎状物質含む				
2	土師器	寸法 口径13.0cm 底径8.3cm 器高3.5cm		成形 ロクロ	内底部ナデ 外底部回転糸切り痕	焼成 良好	備考 板状圧痕あり
3	土師器	寸法 口径9.4cm 底径5.4cm 器高2.4cm		成形 ロクロ	内底部ナデ 外底部回転糸切り痕	焼成 良好	備考 板状圧痕あり
4	瀬戸 瓢	寸法 口径(5.6cm) 成形 ロクロ					
		粘土 黄灰色 微気孔有り		輪葉 灰色透明	ハケ塗り	焼成 良好	
5	鉄製品 釘	寸法 残存長(4.8cm) 幅0.55cm 厚さ0.7cm					

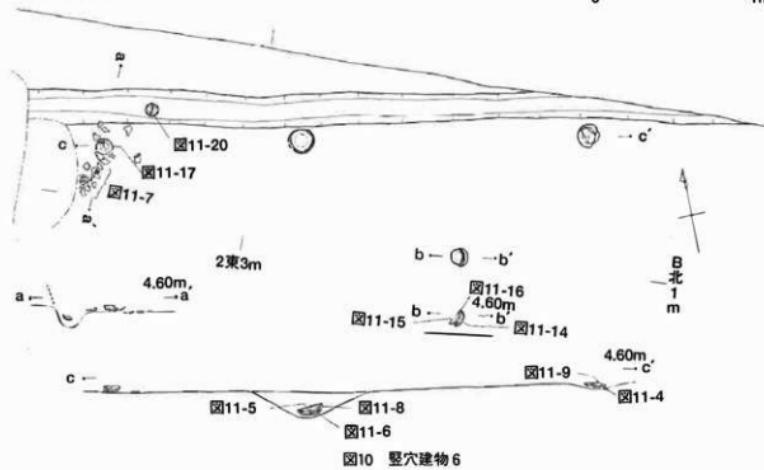
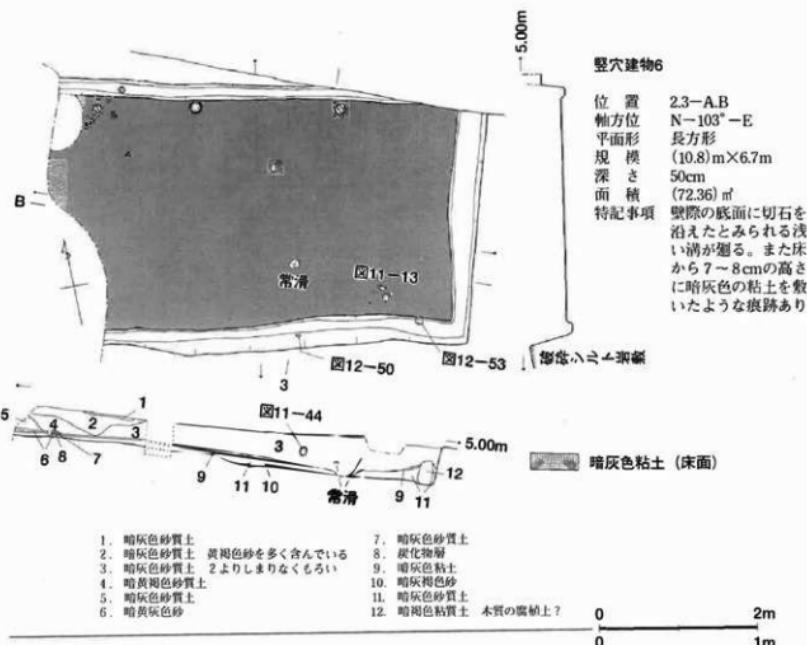
表1 壁穴建物1出土遺物観察表

壁穴建物 4	土師器	寸法 口径7.8cm 底径4.8cm 器高2.0cm		成形 ロクロ	内底部ナデ 外底部回転糸切り痕	焼成 良好	備考 板状圧痕あり 二次焼成を受ける
		粘土	砂粒 鈎状物質含む				
6	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 ルミ					
7	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 ルミ	粘土 灰褐色 小石 白色粒含む	色調 晴赤褐色	焼成 良好		

表2 壁穴建物4出土遺物観察表

壁穴建物 8	土師器	寸法 口径8.6cm 底径4.0cm 器高2.4cm		成形 ロクロ	内底部ナデ 外底部回転糸切り痕	焼成 良好	備考
		粘土	砂粒 鈎状物質 赤色小粒含む				
9	瀬戸 折縁皿	寸法 不明 成形 ロクロ					
10	瀬戸 折縁皿	寸法 不明 成形 ロクロ	粘土 灰黄色 微気孔有り	輪葉 灰黄緑色 透明 滲掛け	焼成 良好		
11	瀬戸 折縁皿	寸法 口径(18.0cm) 成形 ロクロ					
12	瀬戸 折縁皿	寸法 口径(18.4cm) 底径(10.0cm) 器高3.25cm 成形 ロクロ					
13	青白磁 水注	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 肩部に2本の沈線					
14	骨製品 笈	寸法 残存長(12.7cm) 幅1.4cm 厚さ0.25cm 骨骨					

表3 壁穴建物8出土遺物観察表



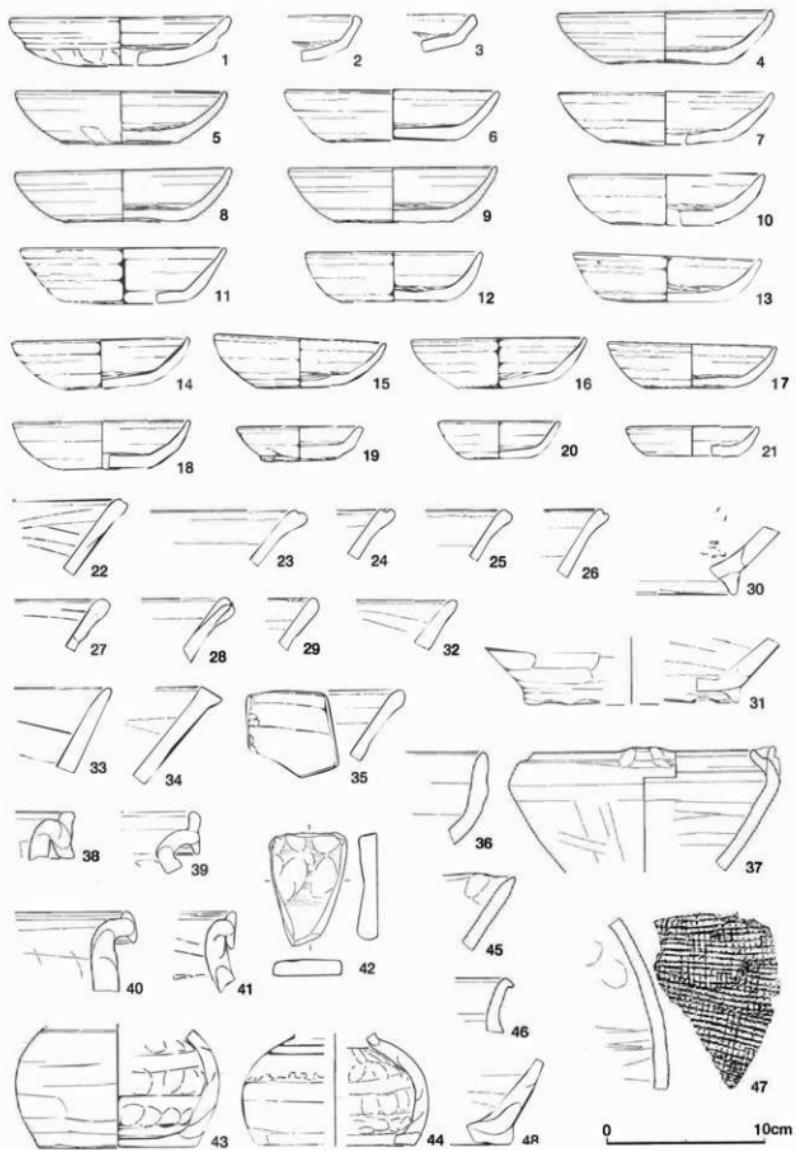


図11 穹穴建物6出土遺物(1)

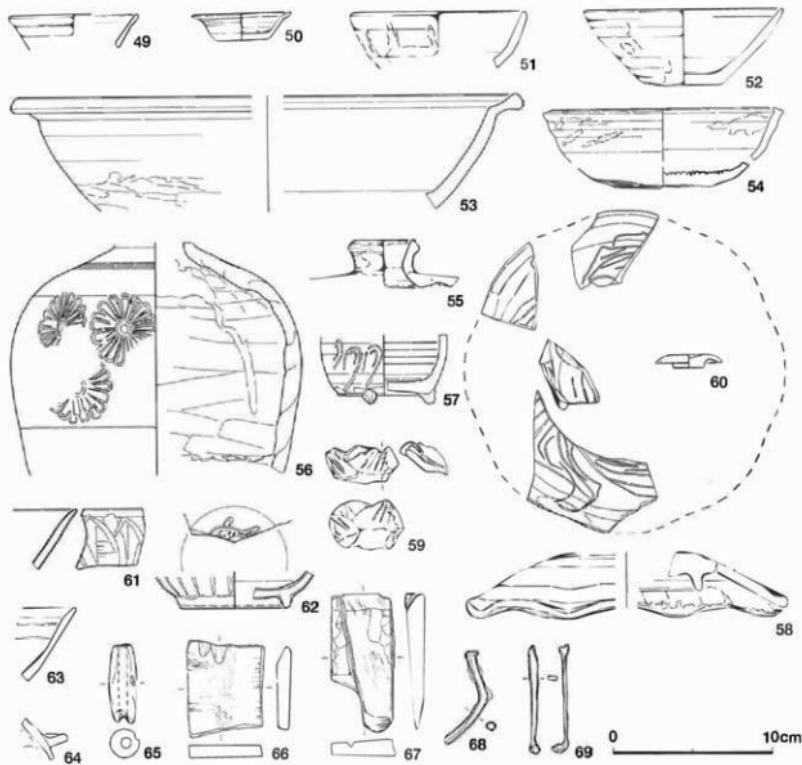


図12 積穴建物6出土遺物（2）

ほぼ同等の規模を持ち、調査区中央部2-Aに両者接して存在する。いずれも長楕円形で、浅い逆台形、もしくはすり鉢形の断面を呈する。新旧の関係は確認できなかった。同時存在である可能性がある。

大きさは9が長さ1.23m、幅60cm以上、深さ20cm、10が長さ1.35m、幅82cm以上、深さ22cm。

出土遺物には土師器・漬戸・不明鉄製品などがあるが、当初1基の土壙と認識して掘ってしまったので、9・10いずれの土壙に帰属するか、確実ではない。不明鉄製品は、先端が偏平に尖った細長いもので、基部には、おそらく握りの部分とおぼしい木質が残っている。鉛か何か、漁具の一種だろうか。全体に13世紀末～14世紀前半の様相を示している。

堅穴建物 6	1	土 師 器	寸法 口径14.0cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 鉢殻含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	2	土 師 器	寸法 不明 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	3	土 師 器	寸法 不明 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	4	土 師 器	寸法 口径13.6cm 底径7.5cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 晴橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	5	土 師 器	寸法 口径13.4cm 底径7.8cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	6	土 師 器	寸法 口径13.4cm 底径8.2cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 晴橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	7	土 師 器	寸法 口径13.6cm 底径7.8cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	8	土 師 器	寸法 口径13.7cm 底径7.8cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 晴橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	9	土 師 器	寸法 口径13.2cm 底径7.6cm 器高3.45cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 砂粒 赤色小粒含む 色調 橙色 備考 板状圧痕あり
	10	土 師 器	寸法 口径12.4cm 底径7.0cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 白色粒含む 色調 晴橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	11	土 師 器	寸法 口径13.0cm 底径8.0cm 器高3.5cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	12	土 師 器	寸法 口径11.2cm 底径6.6cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	13	土 師 器	寸法 口径11.9cm 底径7.6cm 器高2.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	14	土 師 器	寸法 口径11.2cm 底径5.6cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	15	土 師 器	寸法 口径10.9cm 底径5.7cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 黒石 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	16	土 師 器	寸法 口径11.0cm 底径5.8cm 器高3.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 白色粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	17	土 師 器	寸法 口径10.75cm 底径5.6cm 器高2.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	18	土 師 器	寸法 口径11.2cm 底径6.0cm 器高2.95cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 淡橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	19	土 師 器	寸法 口径6.0cm 底径5.0cm 器高2.15cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	20	土 師 器	寸法 口径7.7cm 底径4.2cm 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒 長石含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	21	土 師 器	寸法 口径8.4cm 底径5.6cm 器高1.8cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	22	常 潜 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石含む 色調 暗灰色 焼成 良好
	23	常 潜 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	24	常 潜 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好

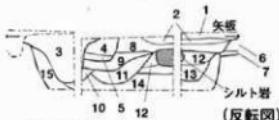
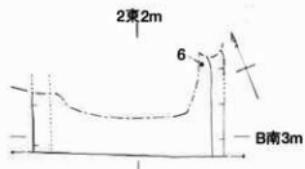
表4 堅穴建物6出土遺物観察表(1)

堅穴建物6	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 白色粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好					
		寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰白色 焼成 良好					
25	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好					
26	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好					
27	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好					
28	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石白色粒含む 焼成 良好					
29	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積後クロ 胎土 砂粒 小石白色粒含む 焼成 良好					
30	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 外面体部下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 砂粒 小石白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好					
31	常 滑 こね鉢I類	寸法 底径(13.4cm) 成形 輪積後ロクロ 外面体部下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 砂粒 小石白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好					
32	常 滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒 小石白色粒含む キメ細かい 色調 晴灰褐色 内面薄灰 焼成 良好					
33	常 滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 茶褐色 砂粒 小石含む 色調 茶褐色 焼成 良好					
34	常 滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 橙色 小石白色粒含む 色調 橙褐色 焼成 良好					
35	常滑こね鉢I類 転用砥石	寸法 長さ5.0cm 幅5.0cm 厚さ0.7cm 成形 輪積 胎土 灰褐色 砂粒 小石含む 色調 外面茶褐色 内面黄緑褐色 焼成 良好 備考 砥石として転用					
36	常 滑 鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 晴灰色 小石白色粒含む 色調 暗褐色の施釉 焼成 良好					
37	常 滑 広口壺	寸法 口径17.0cm 成形 輪積 胎土 暗灰色 白色粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好					
38	常 滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 灰褐色 小石白色粒含む 色調 黒褐色 自然釉 焼成 良好					
39	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 黑灰色 白色粒含む 色調 黑灰色 焼成 良好					
40	常 滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 灰褐色 砂粒 小石含む 色調 内面自然釉 外面茶褐色 焼成 良好					
41	常 滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 灰黒色					
42	常 滑 甕 転用	寸法 長さ7.0cm 幅4.5cm 厚さ1.0cm 胎土 淡灰褐色 白色粒含む 色調 外面黒褐色 内面茶褐色 焼成 良好 備考 砥石に転用					
43	常 滑 広口壺	寸法 底径10.0cm 成形 輪積 胎土 灰褐色 砂粒 小石含む 色調 灰茶褐色 焼成 良好 備考 スス付着					
44	常 滑 広口壺	寸法 底径10.0cm 成形 輪積 内面指壓押さえ 胎土 暗褐色 白色粒 小石含む 色調 茶褐色 自然釉 焼成 良好					
45	渥美 こね鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰色 焼成 良好					
46	渥美 苦鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 暗灰色 砂粒 小石含む 色調 黑褐色 ハケ塗り 焼成 良好					
47	亀山	寸法 不明 成形 輪積 外面体部 格子の印き目 胎土 瓦質 灰褐色 砂粒 白色粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好 備考 拓本あり					
48	窯不明 こね鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 砂粒 小石白色粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好					

表5 堅穴建物6出土遺物観察表(2)

堅穴建物6		寸法	口徑8.0cm 成形 ロクロ 胎土 淡灰色 色調 灰色 焼成 良好
49	漸 入 れ 子	寸法 口徑6.2cm 底径3.2cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 胎土 灰白色 砂粒 小石含む 気孔少しあり 色調 黄白色 焼成 良好	
50	漸 小 皿	寸法 口徑6.2cm 底径3.2cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 胎土 灰白色 砂粒 小石含む 気孔少しあり 色調 黄白色 焼成 良好	
51	漸 碗	寸法 口徑11.0cm 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 砂粒含む 軸栄 暗灰緑色透明 ハケ塗り 焼成 良好	
52	漸 碗	寸法 口徑12.4cm 底径5.0cm 器高4.75cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 胎土 淡灰黄色 砂粒含む 気孔あり 軸栄 淡灰緑色透達 漆掛け 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける	
53	漸 折 緑 盤	寸法 口徑(32.0cm) 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 砂粒 白色粒 長石粒含む 軸栄 灰緑色透明 ハケ塗り後漆掛け 焼成 良好	
54	漸 鉢 皿	寸法 口徑7.5cm 底径6.0cm 器高(4.9cm) 胎土 黄灰色 白色粒含む 気孔あり 軸栄 灰緑色透達 ハケ塗り 焼成 良好	
55	漸 盤	寸法 口徑4.4cm 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 長石含む 気孔あり 軸栄 灰緑色 刻落 焼成 良好	
56	漸 盤 子	寸法 最大径17.4cm 成形 ロクロ 文様 外面体部に押印の菊花文 胎土 黄灰色 小石含む 気孔あり 軸栄 黒褐色半透明 漆掛け	
57	漸 香 両	寸法 底径6.0cm 成形 ロクロ 文様 線刻の蓮弁文 胎土 黄灰色 気孔あり 軸栄 緑褐色透明 漆掛け 焼成 良好	
58	漸 会 壺 盖	寸法 口徑(20.0cm) 成形 ロクロ 文様 刻花文 胎土 黄灰色 気孔あり 軸栄 暗緑色透明 漆掛け 焼成 良好	
59	仏 僧 盤 の き 部 分	寸法 不明 成形 花弁貼り合わせの蓮華座 胎土 淡灰橙色 砂粒含む 軸栄 暗緑褐色透達 漆掛け 焼成 良好	
60	漸 戸 小 壺 盖	寸法 口徑4.2cm 底径2.0cm 器高0.8cm 成形 ロクロ 底部回転糸切り 胎土 黄灰色 軸栄 鮫輪 尖透 漆掛け 焼成 良好	
61	竜 泉 宝 青 磁 碗	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 蓮弁 蓋地 暗灰色 軸栄 青緑色透明 焼成 良好	
62	竜 泉 宝 青 磁 小 鈎	寸法 底径7.0cm 成形 ロクロ 文様 内底部 魚文 体部外面 蓮弁文 蓋地 灰白色 軸栄 灰緑色透明 内外面 高台内施釉 着付露胎 焼成 良好	
63	白 磁 碗	寸法 不明 成形 ロクロ 蓋地 黄灰色 軸栄 黄白色半透明 焼成 良好	
64	土 瓢 翁 付 き	寸法 不明 成形 輪積 胎土 肌色 砂粒 赤色小粒含む 色調 肌色 焼成 普通 備考 スス付着	
65	土 鍋	寸法 長さ4.9cm 最大径4.9cm 内径0.6cm 成形 手づくね 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 暗緑色 焼成 良好	
66	低 石	寸法 残存長(5.3cm) 幅4.6cm 厚さ0.75cm 產地 天草 備考 中低 2面が低面	
67	低 石	寸法 残存長(8.7cm) 幅4.0cm 厚さ1.0cm 產地 天草 備考 中低 2面が低面	
68	鉄製品 釘	寸法 残存長(6.6cm) 幅0.5cm 厚さ0.75cm	
69	鉄製品 釘	寸法 残存長(7.0cm) 幅0.5cm 厚さ0.2cm	
70	錢	天聖元宝 北宋 初鑄 1028年 篆書	
71	錢	治平通宝 北宋 初鑄 1064年 篆書	
72	錢	元符通宝 北宋 初鑄 1098年 行書	
73	錢	判読不能	

表6 堅穴建物6出土遺物観察表(3)



1. 暗褐色砂質土
2. 明褐色砂質土 1のような貝殻の遺入はない
3. 暗褐色砂質土 貝殻を含む、道構造土
4. 暗褐色砂質土 3に比べて多いが、貝殻は含まない
5. 暗褐色砂質土 土塊復土
6. 褐色砂
7. 暗褐色砂質土 均質な粘土と貝殻を含む。他の混入物なし
8. 暗褐色砂

0 (遺構) 2m
0 (遺物) 10cm 3束1m

豊穴建物9

位置 2-B
軸方位 N-22°-E
平面形 長方形
規模 4.8m×(2.6)m
深さ 55cm以上
面積 (12.48)m²



豊穴建物11

位置 2.3-B
軸方位 N-106.5°-E
平面形 四方形
規模 9.4m×(3.8)m
深さ 75cm
面積 (35.72)m²



1. 暗褐色砂質土 粘性は50%、シルト岩粒を多量に含む
2. 明褐色砂質土 貝殻多量に含む
3. 暗褐色砂質土 粘性は50%、シルト岩
4. 暗褐色砂質土 粘性は50%、土塊復土
5. 暗褐色砂質土 貝殻多量に含む
6. 暗褐色砂質土 粘性は50%
7. 暗褐色砂質土 貝殻多量に含む
8. 暗褐色砂質土 粘性は50%、炭化物、凝灰質砂岩多量、遺物多量に含む。土塊6.7
9. 暗褐色砂質土

10. 暗褐色砂質土 粘土ブロックを少量含む
11. 黄褐色砂
12. 暗褐色砂質土 均質な粘土と貝殻を含む土、他の混入物なし
13. 暗褐色砂質土 開くしまった砂の層、粘土ブロックを少量含む
14. 暗褐色砂質土 13とほぼ同じだがやや含まれるものが多い
15. 黄褐色砂
16. 暗褐色砂質土 細めの繊維、粘土と砂が混入
17. 暗褐色砂質土 混合層
18. 黄褐色砂質土 粘土の状態
19. 黄褐色砂質土 貝殻多量に含む

豊穴11

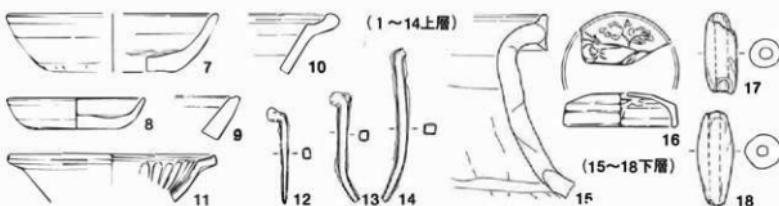


図13 豊穴建物9・11

堅穴 建物 9	1 土師器	寸法 口径14.0cm 底径7.8cm 器高3.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	2 土師器 灯明皿	寸法 口徑8.6cm 底径6.0cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 油煤付着
	3 漏戸 卸皿	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 黄白色 微砂粒含む 気孔あり 軸巻 黄白色透明 ハケ塗り 焼成 良好
	4 漏戸 折縁皿	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 灰白色 気孔有り 軸巻 淡灰緑色失透 滲掛け 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける
	5 龍泉窓 青磁碗	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 外面 楠描き蓮弁文 内面 楠描き文 画花文 素地 暗灰色 軸巻 青緑色半透明 焼成 良好
	6 水晶玉	寸法 直径2.25cm 穿孔部径 横1.5mm 縦2.0mm 完形

表7 堅穴建物6出土遺物観察表

堅穴 建物 11上層	7 土師器	寸法 口径13.2cm 底径7.8cm 器高3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
	8 土師器	寸法 口径9.2cm 底径5.5cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰橙色 焼成 良好
	9 常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 茶褐色 色調 茶褐色 焼成 良好
	10 漏戸 折縁皿	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 灰色 軸巻 灰緑色 焼成 良好
	11 龍泉窓 青磁鉢	寸法 口径13.0cm 成形 ロクロ 文様 内面蓮弁文 素地 灰白色 微砂粒含む 軸巻 黄緑色不透明 焼成 良好
	12 鉄製品 鉤	寸法 長さ6.0cm 幅0.4cm 厚さ0.55cm
	13 鉄製品 鉤	寸法 残存長 (7.9cm) 幅0.55cm 厚さ0.6cm
	14 鉄製品 鉤	寸法 残存長 (9.6cm) 幅0.65cm 厚さ0.55cm
	15 常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 茶褐色 小石 白色粒含む 色調 黒褐色 焼成 良好
	16 青白磁 合子蓋	寸法 口径7.2cm 器高2.05cm 成形 ロクロ 文様 型押し花卉文 素地 灰白色 一部淡緑色 軸巻 淡黄緑色透明 焼成 良好
堅穴 建物 11下層	17 土鍤	寸法 長さ5.0cm 最大径1.9cm 内径0.7cm 成形 手づくね 胎土 白色粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好
	18 土鍤	寸法 長さ5.9cm 最大径2.2cm 内径0.6cm 成形 手づくね 胎土 砂粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好

表8 堅穴建物11出土遺物観察表

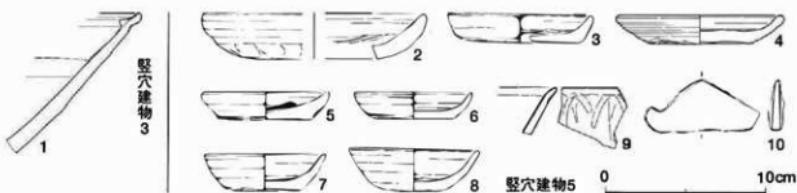


図14 堅穴建物出土遺物

3	瀬戸平鉢	寸法 不明 成形 ロクロ 外面下位回転ヘラ削り 透明 焼成 良好	胎土 黄白色 微砂粒含む	釉薬 鉄釉半透明
---	------	-------------------------------------	--------------	----------

表9 穴建物3出土遺物観察表

穴建物5	2	土師器	寸法 口径(14.0cm) 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	3	土師器	寸法 口径9.0cm 底径7.2cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	4	土師器	寸法 口径10.4cm 底径6.4cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	5	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.8cm 器高1.75cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	6	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.2cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	7	土師器	寸法 口径7.6cm 底径4.7cm 器高2.25cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 金雲母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	8	土師器	寸法 口径8.1cm 底径4.1cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 色調 灰褐色 焼成 良好
	9	竈	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 蓮弁文 素地 灰色 釉薬 青緑色不透明 焼成 良好
	10	鉄製品火打金	寸法 長さ3.0cm 厚さ0.45cm

表10 穴建物5出土遺物観察表

土壤13(図17)

調査区東寄りの3-A・Bで検出された楕円形土壤。大きさは、長さ3.38m、幅1.93mで、深さは上部を削られているが、現状で22cm。

出土遺物として、土師器小皿1点を図示する。

土壤18(図17)

調査区東北角近くで検出された不整形土壤。規模は現状で2.80m×2.38m、深さ30cm。

出土遺物には、土師器のほか常滑壺類がある。年代的には、T種土師器を除いて鎌倉時代後期とみてよいだろう。

土壤出土遺物(図18)

土壤2・4・5・8・11・12・14・17・20出土遺物をまとめて図示する。

土師器・土製品・常滑・瀬戸・青磁・白磁などがあり、年代的には13世紀前半のもの(土師器皿T種)から14世紀半ばの瀬戸(図18-11・17)まで含まれているが、主体は13世紀後半~14世紀初頭、つまり鎌倉時代後期にある。

6. 柱穴様小落ち込み

柱穴らしい小さな穴もいくつか検出したが、掘立柱建物を形成するような秩序立った並びは見出せなかった。ただ、中央部に同規模の穴がカギ形に配置されたものがあったので、図6の図上で線を結び、配列を示しておいた(調査区中央部)。

柱穴出土遺物(図19)

いくつかの小穴から、図示しうる遺物が出土している。5は滑石の温石だが、鍋を転用したような様子はないところから、滑石が必ずしも製品化されたもののみでなく、おそらく板状、あるいは切り出さ

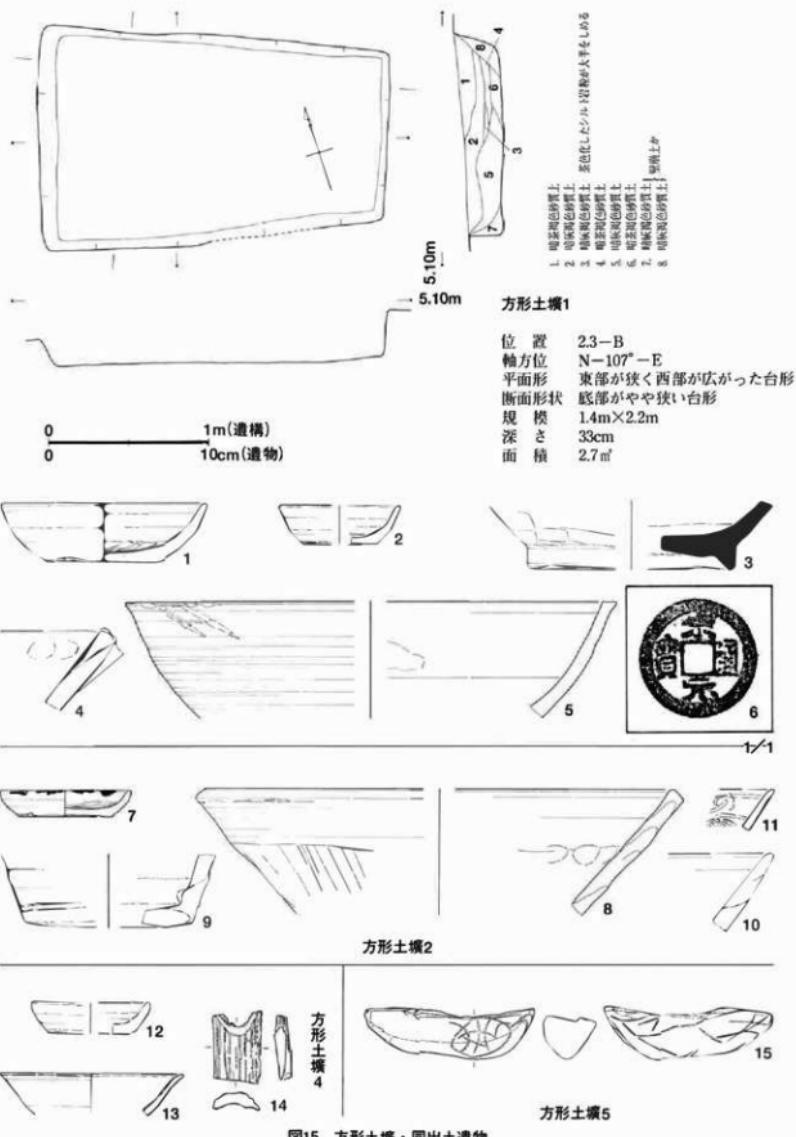


図15 方形土壙・同出土遺物

方形土壙1	1	土師器	寸法 口径12.8cm 底径7.0cm 器高3.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 鉢状物質 貝片 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	2	土師器	寸法 口径(7.6cm) 底径(4.6cm) 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 鉢状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	3	常滑 こね鉢I類	寸法 口径(13.0cm) 成形 輪積後ロクロ 外面下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 砂粒 長石 白色粒含む 色調 灰色 焼成 普通
	4	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 淡褐色 白色粒 長石 石英含む 色調 赤褐色 焼成 普通 備考 注口一部残存
	5	瀬戸 洗	寸法 口径(30.6cm) 成形 ロクロ 胎土 淡灰黄色 釉薬 外面胎輪 淡褐色 内面灰釉 淡灰綠色 ハケ塗り 焼成 良好
	6	錢	宋遼元宝 北宋 初鑄 960年 鑄書

表11 方形土壙1出土遺物観察表

方形土壙2	7	土師器 灯明皿	寸法 口径8.2cm 底径5.9cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 針状物質 砂粒 貝片含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 口縁部油煤付着 板状圧痕あり
	8	常滑 こね鉢II類	寸法 口径(30.4cm) 成形 外面中位ヘラナデ 胎土 砂粒 長石含む キメ細かい 色調 淡褐色 焼成 固く焼き締まる
	9	常滑 壺	寸法 底径(10.4cm) 成形 輪積 外面に胎輪を施す 内面は自然釉 胎土 微砂粒含む キメ細かい 色調 茶褐色 焼成 良好
	10	瀬戸 こね鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎土 暗灰色 微砂粒 長石含む 色調 暗灰色 口縁部自然釉 焼成 良好 備考 注口一部残存
	11	竈 青磁碗	寸法 不明 成形 ロクロ 文様 体内部内面にヘラ描き文 素地 灰色 黒色微砂粒含む 釉薬 黄緑色半透明 焼成 良好

表12 方形土壙2出土遺物観察表

方形土壙4	12	土師器	寸法 口径7.4cm 底径5.4cm 器高1.7cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 小石 赤色小粒 長石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	13	白磁 口兀皿	寸法 口径11.4cm 成形 ロクロ 素地 乳白色 黒色粒 糜薬 灰白色 白濁 焼成 良好
	14	骨製品	寸法 長さ4.5cm 幅3.0cm 厚さ0.8cm 魔角の加工品

表13 方形土壙4出土遺物観察表

方5	15	石製品	寸法 長さ10.5cm 幅(2.5cm) 厚さ(3.3cm) 石材 砂岩 備考 線刻文様あり
----	----	-----	--

表14 方形土壙5出土遺物観察表

れたままの状態で搬入された例もあることを示している。

6は掛け金の受け部、12は不明鉄製品である。10・11の土鍤はひとつ落込みから一緒に出たもので、このような例はときにあるようだ。漁具埋納儀礼があるとすれば、これはその例かもしれない。

13・14・15などは13世紀前半までのもので、材木座一帯の開発が、かなり早い時期からあったことがわかる。

7. 包含層その他の出土遺物

遺構に帰属しない出土遺物や、表土・擾乱層などからの出土遺物を提示する。

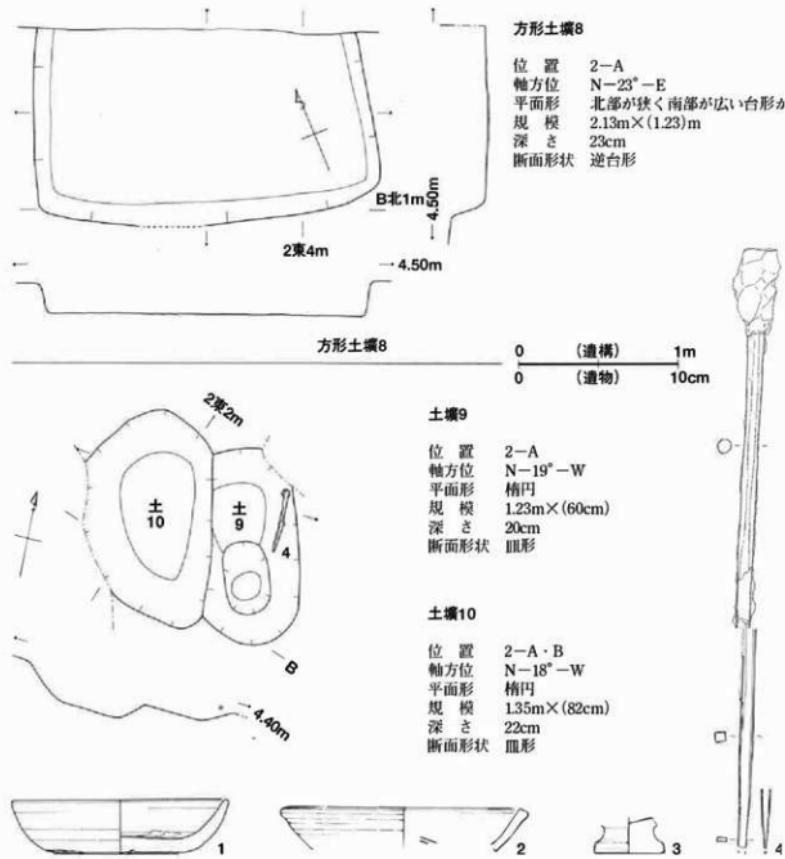


図16 方形土壙8・土壙9・10

土壙 9 10	1	土師器	寸法 口径13.6cm 底径8.4cm 器高3.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 鈎状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 参考 板状圧痕あり
	2	漬戸 卸皿	寸法 口径15.4cm 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 微砂粒含む 軸葉 全面剥離 二次焼成を受けたか?
3	漬戸 仏事 瓶	寸法 底径4.4cm 成形 ロクロ 外底部回転糸切り 胎土 黄灰色 微砂粒含む 軸葉 二次焼成により剥離 焼成 良好	
4	鉄製品	寸法 残存長(37.1cm) 幅0.7cm 厚さ0.75cm	

表15 土壙9・10出土遺物観察表

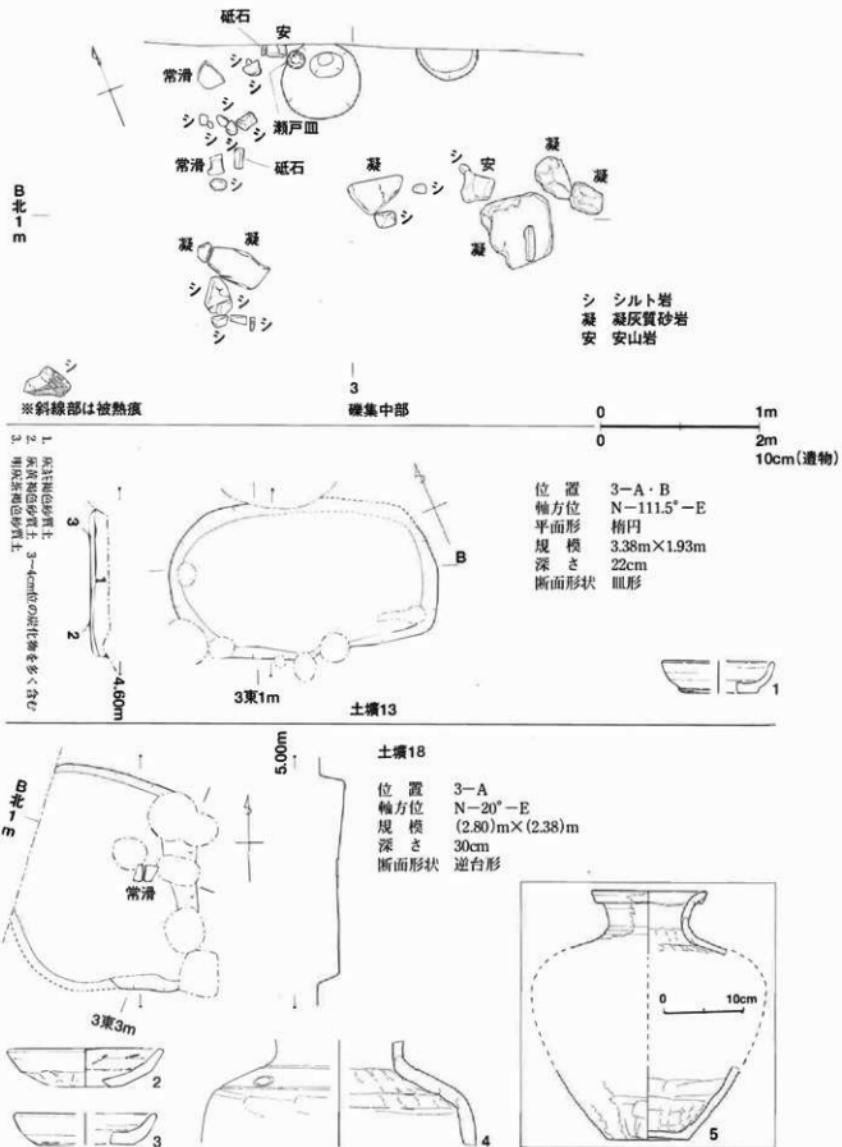


図17 純集中部・土壤

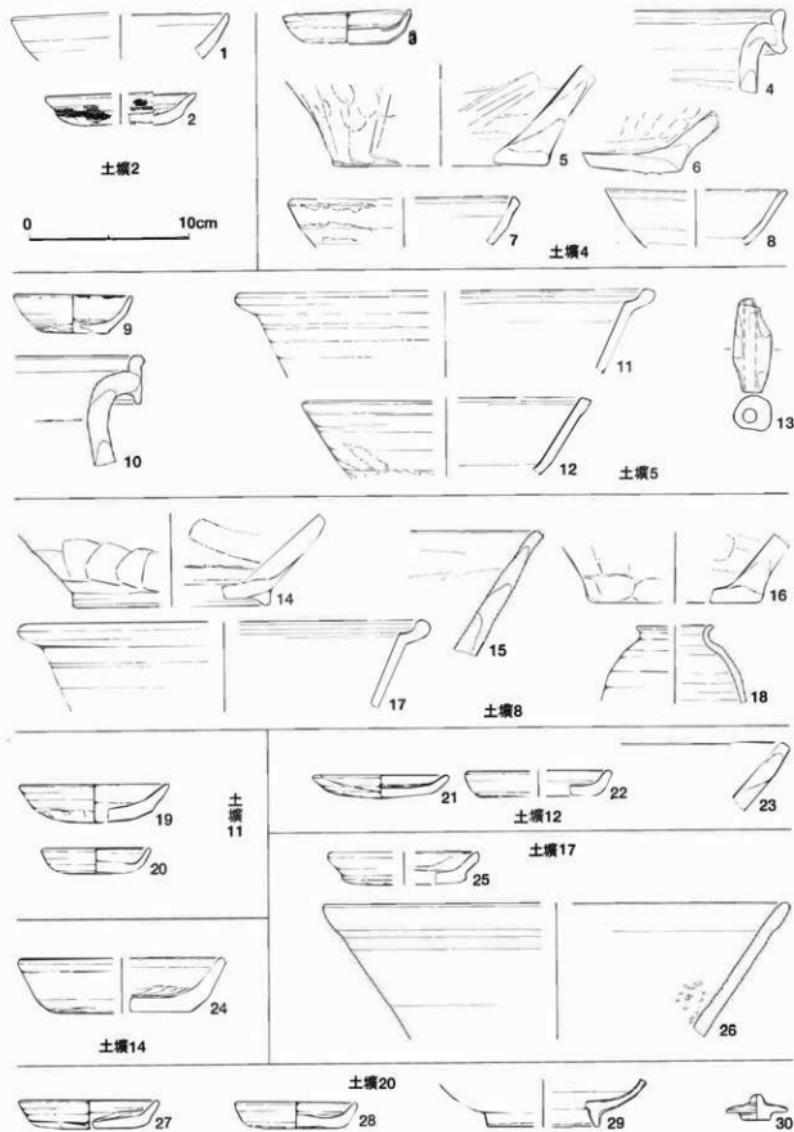


图18 土壤出土遗物

土壤2	1	土師器	寸法 口径13.6cm 底径5.1cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	2	土師器 灯明皿	寸法 口径9.4cm 底径5.2cm 器高1.9cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 雲母含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 油煤付着

表16 土壤2出土遺物観察表

土壤4	3	土師器	寸法 口径8.0cm 底径5.1cm 器高1.9cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 雲母 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	4	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 灰白色 砂粒 白色粒含む 色調 明褐色 焼成 良好
	5	常滑 こね鉢II類	寸法 底径13.2cm 成形 輪積 外面下位よりタテ方向のヘラナデ 胎土 橙色 白色粒 砂粒 雲母含む 色調 赤茶色 焼成 良好 備考 内外面にスス付着
	6	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 外面下位よりタテ方向のヘラナデ 胎土 暗褐色 白色粒 長石 小石含む 色調 暗褐色 焼成 良好
	7	瀬戸 皿	寸法 口径(14.4cm) 成形 ロクロ 胎土 灰白色 微砂粒含む 納葉 灰綠色透明 漆掛け 焼成 良好
	8	白磁 口朧碗	寸法 口径(11.4cm) 成形 ロクロ 素地 白色 微砂粒含む 納葉 青白色 白湯 気泡あり 焼成 良好

表17 土壤4出土遺物観察表

土壤5	9	土師器 灯明皿	寸法 口径7.4cm 底径4.4cm 器高2.3cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 油煤付着
	10	常滑 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 暗褐色 白色粒 長石 砂粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好
	11	瀬戸 折縁皿	寸法 口径(26.2cm) 成形 ロクロ 胎土 灰白色 微砂粒含む 納葉 灰綠色透明 漆掛け 焼成 良好
	12	瀬戸 皿	寸法 口径(18.0cm) 成形 ロクロ 胎土 黄灰色 微砂粒含む 納葉 淡灰綠色透明 漆掛け 焼成 良好
	13	土 鍋	寸法 長さ5.8cm 幅2.3cm 厚さ2.1cm 成形 手づくね 胎土 櫻紋粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好

表18 土壤5出土遺物観察表

土壤8	14	常滑 こね鉢I類	寸法 底径(12.4cm) 成形 輪積後ロクロ 外面下位ヘラ削り 高台貼り付け 胎土 灰色 長石 砂粒 小石含む 色調 灰色 焼成 良好
	15	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 海緑色 白色粒 砂粒 長石 雲母 小石含む 粗い 色調 赤褐色 焼成 良好
	16	常滑 こね鉢II類	寸法 底径(11.0cm) 成形 輪積 外面下位タテのヘラナデ 胎上 暗褐色 長石 赤色小粒 小石含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好
	17	瀬戸 折縁皿	寸法 口径(25.8cm) 成形 ロクロ 胎上 黄灰色 微砂粒含む 気孔あり 納葉 灰綠色透明 漆掛け 焼成 良好 備考 二次焼成により内面器表が荒れている
	18	瀬戸 茶入れ	寸法 口径(4.8cm) 成形 ロクロ 胎上 暗灰色 微砂粒含む 納葉 黒褐色透明 漆掛け 焼成 良好

表19 土壤8出土遺物観察表

土壤11	19	土師器	寸法 口径9.6cm 底径(4.7cm) 器高(2.4cm) 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎上 砂粒 貝片 針状物質 赤色小粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	20	土師器	寸法 口径6.9cm 底径4.6cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎上 針状物質 砂粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表20 土壤11出土遺物観察表

土 器 12	21	土 師 器	寸法 口径8.6cm 底径3.4cm 器高1.5cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒含む きめ細かい 色調 灰橙色 焼成 良好
	22	土 師 器	寸法 口径(9.2cm) 底径(7.3cm) 器高1.6cm 成形 ロクロ 内底部ナデ外底部回転系切り裏 胎土 砂粒 雲母 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好
	23	常 滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 口縁部ナデ 外面体部上位斜めのヘラナデ 胎土 砂粒 長石多量に含む 粗い 色調 明茶色 焼成 良好

表21 土壌12出土遺物観察表

土 器 14	24	土 師 器	寸法 口径(13.0cm) 底径(8.7cm) 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり

表22 土壌14出土遺物観察表

土 器 17	25	土 師 器	寸法 口径(9.5cm) 底径(6.9cm) 器高2.0cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	26	常 滑 こね鉢I類	寸法 口径(29.2cm) 成形 輪積後ロクロ 胎土 砂粒 長石 貝片 小石含む 色調 灰色 焼成 良好

表23 土壌17出土遺物観察表

土 器 20	27	土 師 器	寸法 口径8.8cm 底径6.0cm 器高1.8cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒含む 色調 淡灰褐色 焼成 良好
	28	土 師 器	寸法 口径7.7cm 底径5.6cm 器高1.65cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質 シルト岩粒 貝片含む 色調 灰褐色 焼成 良好
	29	竜 泉 窯 青 磁 瓶	寸法 底径(7.0cm) 成形 ロクロ 素地 乳白色 程度 淡青緑色半透明 焼成 良好
	30	瀬 戸 蓋	寸法 径3.8cm 底径1.8cm 器高1.6cm 成形 ロクロ 底部回転系切り 胎土 黄白色 微砂粒含む 程度 淡緑色透明 焼成 良好

表24 土壌20出土遺物観察表

土 器 13	1	土 師 器	寸法 口径7.2cm 底径5.0cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒 小石含む 色調 灰橙色 焼成 良好

表25 土壌13出土遺物観察表

土 器 18	2	土 師 器	寸法 口径9.8cm 底径4.8cm 器高2.4cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 微砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好
	3	土 師 器	寸法 口径9.0cm 底径6.1cm 器高2.0cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕 胎土 微砂粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり
	4	常 滑 壺	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 肩部に沈線2本逃る 円形押印文 胎土 灰白色 砂粒 長石 雲母含む 色調 明茶色 肩部に自然釉
	5	常 滑 壺	寸法 口径14.4cm 底径10.0cm 器高(30.1cm) 成形 輪積後ロクロ 胎土 暗灰色 白色粒含む 色調 褐色 口縁部 肩部自然釉 焼成 良好

表26 土壌18出土遺物観察表

上層出土遺物（図20・21）

土師器・瓦質火鉢・内耳土鍋・常滑・瀬戸・青磁・白磁・鉄製品・石製品・木製品・錢がある。

土師器の中には、口縁部を意図的に打ち欠いたもの（4・6）、底部を穿孔されているもの（12）、増堀代わりに使われたらしく、溶融した鉄分が付着したもの（13・14）がある。

18の内耳土鍋は土師質で、外面は口縁部まで煤が濃く付着している。報告例では「名越・山王堂跡」（同発掘調査団1990）に続き、市内で2例目。14世紀半ば過ぎには相模に出現するのだろうか。



図19 柱穴出土遺物

常滑・瀬戸・備前は13世紀前半のもの(21・27・43)から14世紀代のもの(21・34・41・42・45・46・47・50ほか)、15世紀のもの(52・53)まであるが、もっとも多いのはやはり13世紀後半から14世紀前半の鎌倉後期にあるとみてよい。

62は掛け金、63は鉄鍔とみられる。64には「南無□」の文字が線刻されている。67は針山で、これはあるいは近世以降のものが混入したのかもしれない。

66は古代竪穴住居のカマド支脚か。

下層出土遺物(図22)

調査区東側では規制深度内で中世基盤層まで達した。その直上面の主な遺物を提示する。土師器・常滑こね鉢Ⅱ類・白磁四耳壺・滑石鍋・鉄釘・灰釉陶器がある。

土師器はすべてT種で、中世基盤層の主体が鎌倉時代前期に始まったことを示している。滑石鍋(9)は底部に直径1cmほどの小孔が開けられており、せいろに使われた可能性がある。

採集遺物(図23・24)

表土掘削中、あるいは攪乱層などの中から採集された遺物のうち、主なものを提示する。土師器・同白色系・つば鍋・(土鍋・炮烙などの)上器蓋・備前すり鉢・常滑こね鉢Ⅱ類・瀬戸美濃すり鉢・志戸呂小皿・青白磁梅瓶・鉄製品・石製品・近代の七輪・縄文の凹石などがあり、年代的には一様でない。

1は産地不明。4はつばの付いた土鍋で、内耳土鍋と同様、相模ではこれも14世紀半ば頃出現するようだ。ただし、こちらのほうが内耳土鍋よりはるかに多く出土する。鉄鍋などとの関係については、いまだ大きな課題が残る。

11の瀬戸美濃すり鉢は破片の縁辺や底面を磨っており、すりこぎ代わりに使われた可能性がある。14~17は近世陶器で、うち14・15は志戸呂産。

19は船釘だろう。20・21はいずれも上野産の中砥。22は茶臼で、臼の受け皿部。石材は安山岩。

24は箱型の七輪である。四角い外枠の中に、上部の折がった筒形の内枠(燃焼部本体)を納め、両者を上端で接着して後者を前者の中でぶら下げるかたちになっている。外枠前面下部には火力調整のため

柱穴出土遺物		P_1	土 師 器 灯 明 盆	寸法 口径7.7cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 油煤付着
		2	砥 石	寸法 残存長(8.6cm) 幅3.2cm 厚さ3.4cm 原地 上野 備考 4面砥面中砥 よく使い込まれている
		P_12	土 師 器 灯 明 盆	寸法 口径8.2cm 底径5.1cm 器高2.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 油煤付着
		P_13	常 滑 陶器 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 体部指痕痕 口縁部横ナデ後ハケ日調整 胎土 脱芯 磨灰褐色 粗砂粒 石英粒含む 気孔あり 色調 鉄色 焼成 良好 備考 降灰
		P_36	温 石	寸法 長さ11.5cm 幅9.1cm 厚さ2.2cm 石材 滑石 備考 転用かどうか不明
		P_43	鐵 製 品 掛け金部材	寸法 長さ15.2cm 幅2.2cm 厚さ2.0cm
		P_46	土 師 器	寸法 口径13.0cm 底径6.6cm 器高2.95cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 針状物質 白色粒 赤色小粒含む 気孔多い 色調 磨灰褐色 焼成 良好
			土 師 器	寸法 口径10.0cm 底径7.0cm 器高1.6cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 小石 白色粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好
		P_47	骨製品 斧	寸法 幅1.45cm 厚さ0.25cm 素材 骨質 部位不明 備考 加工後でいねいに磨かれている
		P_49	土 鍤	寸法 長さ5.6cm 月桂12.1cm 内径0.75cm 成形 手づくね 胎土 針状物質含む 色調 磨灰褐色
			土 鍤	寸法 残存長(4.0cm) 月桂1.7cm 内径0.6cm 成形 手づくね 胎土 針状物質含む 色調 磨灰褐色
		P_53	不明鉄製品	寸法 残存長(8.5cm) 径1.0cm×1.2cm 円柱状
		P_65	土 師 器	寸法 口径10.2cm 底径6.2cm 器高2.1cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 小石含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状痕あり
		P_66	青 白 磁 瓶	寸法 不明 成形 ロクロ 素地 乳白色 精密 漆青白色透明 光沢が無い 焼成 良好
		P_67	土 師 器	寸法 口径9.6cm 底径4.2cm 器高1.85cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 針状物質 微砂粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好

表27 柱穴出土遺物観察表

の引き戸式小窓があり、内枠の対応位置にも四角く窓が開けられている。内枠には上部壁面に径2cm前後の空気孔が7つあり、上端には審器を支える五徳代わりの突起が3つ付いている。内枠外側上部には櫛目の調整が残る。外枠外面はヘラ磨きされ、上面には煤が付着している。胎土は赤褐色で金雲母を含む。内枠上端の内径16.5cmとやや小さめ。明治以降のものだろう。

24は縄文の凹み石。安山岩。

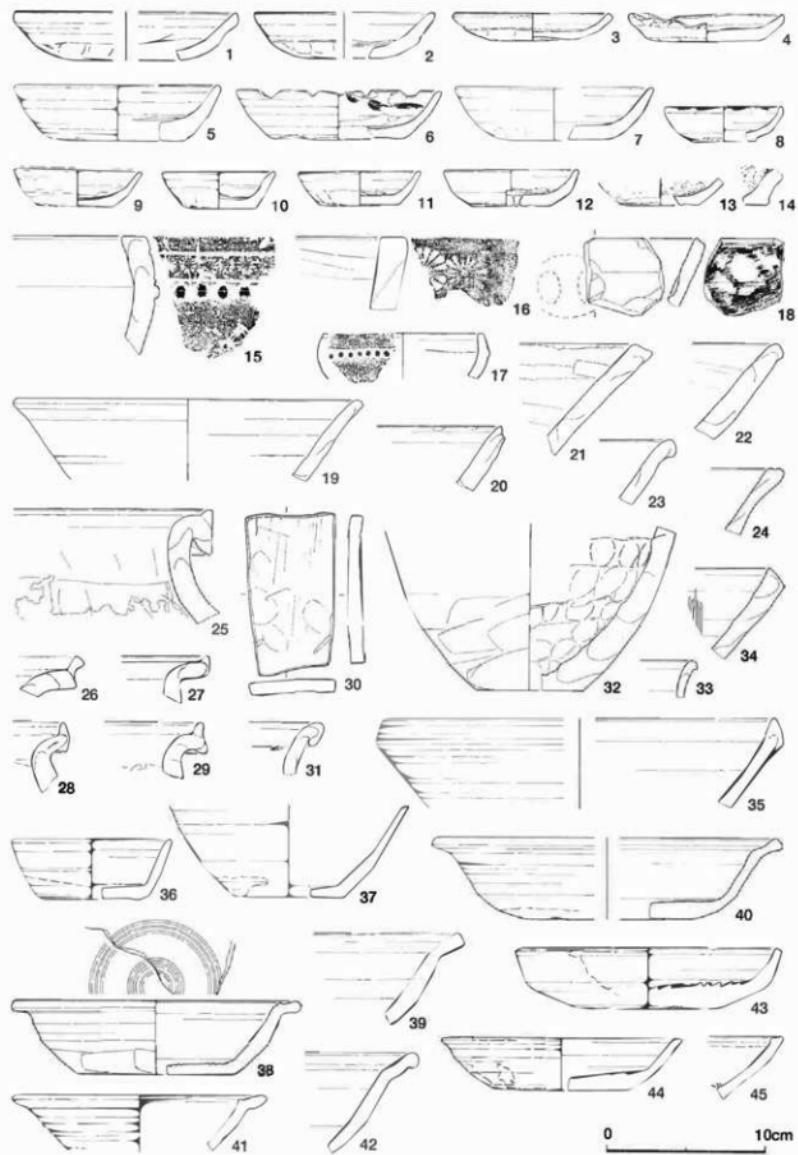


図20 上層出土遺物（1）

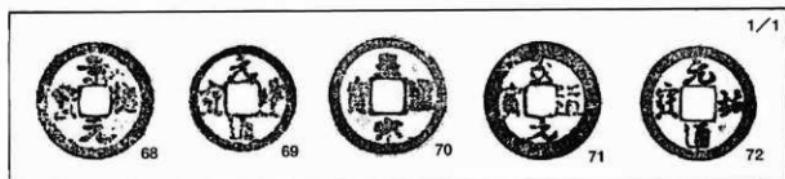
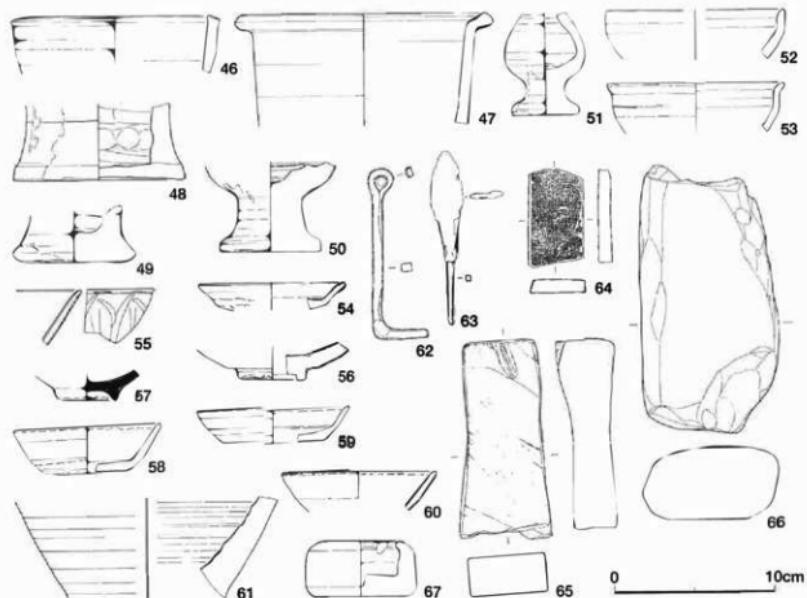


図21 上層出土遺物（2）

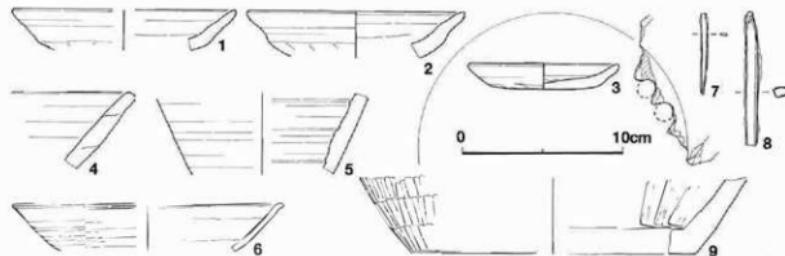


図22 下層出土遺物

上層出土遺物	土師器	寸法 口径14.0cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 脱芯 灰黑色 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好					
		寸法 口徑(6.6cm) 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 針状物質 砂粒 シルト岩粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 内面赤彩					
3	土師器	寸法 口径10.0cm 底径6.0cm 高さ1.8cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 砂粒 白色粒含む 色調 灰橙色 焼成 良好 二次焼成?					
4	土師器	寸法 口径9.8cm 底径7.6cm 器高1.7cm 成形 手づくね 成形後口縁部ナデ 胎土 針状物質 小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 内面 外面一部に赤褐色残る 口縁部を打ち欠く 完形					
5	土師器	寸法 口径12.8cm 底径8.4cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 暗灰橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり					
6	土師器 灯明皿	寸法 口径12.8cm 底径4.4cm 器高3.1cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 シルト岩粒 小粒 赤色小粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり 油墨付着 口縁部を打ち欠く					
7	土師器	寸法 口径12.2cm 底径7.0cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 シルト岩粒含む 色調 暗褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり					
8	土師器 灯明皿	寸法 口径7.4cm 底径4.0cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 砂粒 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 油墨付着					
9	土師器	寸法 口径8.0cm 底径4.8cm 器高2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり					
10	土師器	寸法 口径1.0cm 底径4.5cm 高さ2.4cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 芸母 シルト岩粒含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 板状圧痕あり					
11	土師器	寸法 口径7.5cm 底径5.8cm 器高2.2cm 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 針状物質 赤色小粒 シルト岩粒 小粒 芸母含む 色調 橙色 焼成 良好 備考 略完形					
12	土師器 穿孔	寸法 口径(5.0cm) 成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転糸切り痕 胎土 小石 針状物質 赤色小粒含む 色調 暗橙色 焼成 良好 備考 外底部に穿孔					
13	土師器	寸法 底径5.0cm 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質 小石含む 色調 暗灰褐色 焼成 良好 備考 二次焼成? 坪場?					
14	埴輪	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 砂粒 針状物質含む 色調 黑灰色 焼成 良好					
15	瓦火鉢	寸法 不明 成形 輪積 外側面押印文 文様 外面上位に菊花文 連珠文 中位に方形文 胎土 瓦質 砂粒 小粒 小石含む 色調 灰褐色白色 焼成 良好					
16	瓦火鉢	寸法 不明 成形 輪積 内面ヘラ磨き 外側面押印文 文様 菊花文 胎土 瓦質 白色粒 小粒含む 脱芯 赤灰色 色調 赤灰褐色 焼成 良好					
17	瓦香炉	寸法 口径10.0cm 成形 ロクロ 外側面押印文 文様 雷文 連珠文 菊花文 胎土 瓦質 脱芯 茶灰色 白色粒含む 色調 暗赤褐色 焼成 良好					
18	土師質 内耳土鍋	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 針状物質 赤色小粒含む 色調 灰褐色 焼成 良好 備考 スス付着 内耳側面に指頭痕あり 内耳の一部が破く					
19	常滑 こね鉢I類	寸法 口径22.0cm 成形 輪積後ロクロ 胎土 小石 砂粒 長石含む 色調 暗灰色 焼成 良好					
20	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 脱芯 黑灰色 長石 小塵 針状物質含む 色調 赤褐色 焼成 良好					
21	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 ヘラ削り ヘラナデ 胎土 脱芯 黑灰色 小石 シルト岩粒含む 色調 赤褐色 焼成 良好					
22	常滑 こね鉢II類	寸法 不明 成形 輪積 胎土 脱芯 灰黑色 長石 小石含む 色調 褐色 焼成 良好					
23	常滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 小石 長石 黑色粒含む 色調 灰茶色 焼成 良好					
24	常滑 こね鉢I類	寸法 不明 成形 輪積後ロクロ 胎土 針状物質 砂粒含む キメ細かい 色調 灰色 焼成 良好					

表28 上層出土遺物観察表(1)

上層出土遺物		寸法	不明	成形	輪積	胎土	長石	小礫含む	
25	常 甕	色調 黒灰色 焼成 良好 備考 内面肩部に無機質カルシウム付着 便槽か?							
26	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 口縁部 回転ナデ 胎土 シルト岩粒 針状物質含む 色調 灰色 焼成 良好							
27	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 針状物質 長石 シルト岩粒含む 色調 淡灰茶色 焼成 良好							
28	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 淡褐色 白色粒 長石含む 色調 褐色 焼成 良好							
29	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 小礫 小石含む 色調 灰色 焼成 良好 備考 口縁に透明の降灰							
30	転 常 甕	寸法 長さ10.2cm 幅5.6cm 厚さ1.0cm 胎土 針状物質 長石 石粒含む 色調 暗灰色 焼成 良好 備考 輪積成形の甕の破片 外面にハケナデ 割れ口に擦り痕あり							
31	常 甕	寸法 口徑13.0cm 成形 輪積 胎土 長石 針状物質含む 色調 黒灰色 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける							
32	常 甕	寸法 底径6.6cm 成形 輪積 体部外面へラ削り 内面ナデ 胎土 小石 針状物質 黒色粒子含む 色調 黑灰色 焼成 良好							
33	常 甕	寸法 不明 成形 輪積 胎土 針状物質 小礫含む 色調 淡灰茶色 焼成 良好							
34	備 前 す り 鉢	寸法 不明 成形 輪積 胎芯 内側赤褐色 外側黒灰色 砂粒 小礫含む 色調 褐色 焼成 良好							
35	魚 こ ね 鉢	寸法 口徑(24.4cm) 成形 輪積 胎土 小石粒 砂粒 黑色粒含む 色調 黑灰色 焼成 良好							
36	漬 戸 鉢 高 台 付	寸法 口徑10.0cm 底径6.2cm 器高3.8cm 成形 ロクロ 胎土 黒茶色 白色粒含む 軸窓 黄緑色透明 体部外面下位から底部まで露胎 濁掛け 焼成 良好							
37	漬 戸 鉢 ?	寸法 底径7.0cm 成形 ロクロ 胎土 黒灰色 長石含む 軸窓 淡緑色透明 体部外面下位から底部まで露胎 濁掛け 焼成 良好							
38	漬 戸 鉢 折 縁 重	寸法 口徑18.2cm 底径10.0cm 器高4.6cm 成形 ロクロ 体部外面下位から底部まで露胎 濁掛け 文様 内底部 中央に3本 外周に4本の沈線 軸窓 黒緑色半透明 ハケ塗り 焼成 良好 備考 二次焼成を受ける							
39	漬 戸 鉢 折 縁 重	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 黒灰色 軸窓 黄緑色半透明 ハケ塗り 焼成 良好							
40	漬 戸 鉢 折 縁 重	寸法 口徑(22.0cm) 底径(10.4cm) 器高5.2cm 成形 ロクロ 胎土 黒灰色 長石 小礫含む 軸窓 黄緑色半透明 ハケ塗り後濁掛け 焼成 良好							
41	漬 戸 鉢 折 縁 重	寸法 口徑16.0cm 成形 ロクロ 胎土 淡灰色 軸窓 黄緑色透明 ハケ塗りか? 焼成 良好							
42	漬 戸 鉢 折 縁 重	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 淡灰茶色 軸窓 黑緑色半透明 ハケ塗り 焼成 良好							
43	漬 戸 鉢 ?	寸法 口徑16.6cm 底径7.0cm 器高3.7cm 成形 ロクロ 胎土 胎芯 灰色 軸窓 黄緑色透明 焼成 良好 備考 外面 軸窓部分的に剥離 内面スス付着							
44	漬 戸 鉢 ?	寸法 口徑15.0cm 底径9.0cm 器高3.4cm 成形 ロクロ 胎土 灰白色 軸窓 黄緑色半透明 ハケ塗り 焼成 良好							
45	漬 戸 鉢 ?	寸法 不明 成形 ロクロ 胎土 灰色 軸窓 黄緑色半透明 内面および外面部中位まで露胎 焼成 良好							
46	漬 戸 鉢	寸法 口徑13.0cm 成形 ロクロ 胎土 灰白色 黒色粒子含む 軸窓 淡黄緑色透明 濁掛け 焼成 良好							
47	漬 戸 平 鍋	寸法 口徑16.0cm 成形 ロクロ 胎土 淡灰茶色 白色粒含む 軸窓 黄緑色透明 焼成 良好							
48	漬 戸 瓶 子	寸法 底径10.6cm 成形 輪積 外面下位施釉 胎土 灰色 石英含む 粗密 軸窓 緑色透明 濁掛け 焼成 良好							

表29 上層出土遺物観察表(2)

上層出土遺物	件番	品名	寸法							
			底径	高さ	成形	口	胎土	施釉	表面	
	49	瀬戸 花 瓶	寸法 底径7.8cm	成形 ロクロ			胎土 胎芯	淡灰茶色	釉薬 緑色透明	滑掛け 焼成 良好
	50	瀬戸 仏 華 瓶	寸法 底径6.2cm	成形 ロクロ			胎土 灰白色	白色粒子含む	釉薬 外面体部中位	黒輪か? 高台より底部まで露胎 焼成 良好
	51	瀬戸 仏 華 瓶	寸法 最大径5.2cm	底径4.1cm	成形 ロクロ	外底部回転系切り痕	胎土 黄白色	砂粒 長石含む	釉薬 淡灰緑色透明	焼成 良好
	52	瀬戸 小 鉢	寸法 口径11.0cm	成形 ロクロ			胎土 灰白色	釉薬 胎釉	滑掛け 焼成 良好	
	53	瀬戸 小 鉢	寸法 口径11.0cm	成形 ロクロ			胎土 灰白色	釉薬 胎釉	透明 滑掛け	焼成 良好
	54	同 安 青磁 皿	寸法 口径9.2cm	成形 ロクロ			素地 灰白色	釉薬 淡青緑色透明	外面体部中位より下露胎	備考 露胎部分にノッキング痕残る
	55	竜泉窯 青磁 碗	寸法 不明	成形 ロクロ	文様	外面体部に蓮弁文	素地 暗灰色	釉薬 黄緑色半透明	焼成 良好	
	56	竜泉窯 青磁 碗	寸法 底径4.2cm	成形 ロクロ	文様	内底部に文字	素地 灰白色	白色粒子含む	気泡あり 釉薬 青緑色透明	高台内露胎 焼成 良好
	57	竜泉窯 青磁 碗	寸法 底径3.8cm	成形 ロクロ			胎土 灰白色	釉薬 淡黄緑色半透明	高台下位 内外面露胎	焼成 良好
	58	白 磁 口 兀 皿	寸法 口径9.2cm	底径6.0cm	器高2.9cm	成形 ロクロ	素地 乳白色	微砂粒含む 釉薬	乳白色 白濁	外面体部下位より底部露胎 焼成 良好
	59	白 磁 口 兀 皿	寸法 口径7.4cm	底径6.4cm	器高2.0cm	成形 ロクロ	素地 灰白色	釉薬 灰白色	白濁	焼成 良好
	60	白 磁 口 兀 皿	寸法 口径9.6cm	成形 ロクロ			素地 乳白色	釉薬 灰白色	失透	焼成 良好
	61	白 磁 子	寸法 不明	成形 輪積	ロクロ		素地 灰白色	砂粒 白色粒子含む	釉薬 淡青緑色透明	焼成 良好
	62	鉄製品 掛金	寸法 長さ10.7cm	幅0.65cm	厚さ0.5cm					
	63	鉄製品 鐵	寸法 長さ10.8cm	幅2.1cm	厚さ0.45cm					
	64	砥 石	寸法 長さ5.8cm	幅3.4cm	厚さ0.85cm	産地 鳴滌	備考	2面が紙面 文字が刻まれている	仕上げ紙	
	65	砥 石	寸法 長さ12.2cm	幅4.9cm	厚さ3.4cm	産地 天草	備考	4面が紙面中紙		
	66	カマド 支脚	寸法 長さ(15.5cm)	幅8.5cm	厚さ(4.5cm)	石材 シルト岩	成形 面をとって梢円柱状に切り出したもの			
	67	木 製 品 針刺し入れ	寸法 口径4.2cm	底径5.8cm	器高3.4cm		成形 ロクロ	内側に円柱状に削り その内側をロクロで削り出したもの	底部にロクロの跡に刺した痕残る	
	68	錢	景德元宝	北宋	初鑄 1004年	謀書				
	69	錢	元豐通宝	北宋	初鑄 1078年	行書				
	70	錢	皇宋通宝	北宋	初鑄 1039年	謀書				
	71	錢	至道元宝	北宋	初鑄 995年	行書				
	72	錢	元祐通宝	北宋	初鑄 1086年	行書				

表30 上層出土遺物観察表（3）

下層出土遺物		寸法	口径 (14.0cm)	成形 手づくね	成形後口縁部ナデ	
	1 土師器		胎土 針状物質含む	色調 灰褐色	焼成 良好	
	2 土師器	寸法 口径 (13.4cm)	成形 手づくね	成形後口縁部ナデ		
		胎土 胎芯灰褐色 砂粒 針状物質含む	色調 灰褐色	焼成 良好		
	3 土師器	寸法 口径9.2cm 底径7.0cm 器高1.6cm	成形 手づくね	成形後口縁部ナデ		
		胎土 砂粒 針状物質含む	色調 黄褐色	焼成 良好		
	4 常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積				
		胎土 長石含む	色調 暗褐色	焼成 良好		
	5 白磁 瓶子	寸法 不明 成形 ロクロ				
		胎土 灰白色 砂粒含む	釉薬 淡灰綠色透明	焼成 良好		
	6 灰釉陶器 皿	寸法 口径 (17.0cm)	成形 ロクロ			
		胎土 灰色 砂粒含む	釉薬 黄褐色半透明	ハケ塗り	焼成 良好	
	7 鉄製品 釘	寸法 残存長 (5.15cm)	幅0.45cm 厚さ0.15cm			
	8 鉄製品 釘	寸法 残存長 (8.2cm)	幅0.8cm 厚さ0.5cm			
	9 潜石鍋 軒用	寸法 底径 (17.8cm)	成形 体部外面ヘラ削り 内面櫛梳状工具による調整	底部に2か所穿孔	セイロか?	

表31 下層出土遺物観察表

採集遺物		寸法	口径10.0cm	成形 ロクロ		
	1 土師器		胎土 砂粒 白色粒 赤色小粒含む	色調 灰褐色	焼成 良好	
	2 土師器	寸法 口径8.4cm 底径5.7cm 器高1.9cm	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕			
		胎土 砂粒多量 針状物質 小石 云母含む	色調 灰褐色	焼成 良好	備考 板状圧痕あり	
	3 土師器	寸法 口径7.2cm 底径5.1cm 器高2.4cm	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕			
		胎土 砂粒 赤色小粒 針状物質含む	色調 灰褐色	焼成 良好		
	4 土製品 土器	寸法 口径 (15.6cm) 器高 (3.1cm)	成形 手づくね 内面 横位のハケ目			
		胎土 外面橙褐色 胎芯部暗灰色 微砂粒 針状物質 金雲母含む	焼成 良好			
	5 土製品 蓋	寸法 口径27.1cm 器高3.8cm	成形 ロクロ 口縁部横ナデ 外面へラ磨き			
		胎土 黄褐色 胎芯部暗灰色 赤色小粒 小石含む やや粗い	焼成 良好	備考 使用痕あり		
	6 常滑 こね鉢Ⅱ類	寸法 不明 成形 輪積				
		胎土 胎芯 暗灰色 針状物質 黒色粒含む	色調 赤褐色	焼成 良好		
	7 備前 すり鉢	寸法 不明 成形 輪積				
		胎土 赤褐色 小石 黑色粒含む	色調 黒褐色	焼成 良好		
	8 潜戸美濃 すり鉢	寸法 底径9.4cm	成形 ロクロ 外底部回転系切り痕 外面部横ナデ 内面条線1束11本			
		胎土 灰褐色 小石若干含む 釉薬 鶴輪(鬼板)	外面部ハケ塗り	焼成 良好		
	9 潜戸美濃 すり鉢	寸法 底径13.8cm	成形 ロクロ 外底部回転系切り痕 外面部横ナデ 内面条線1束15本			
		胎土 灰褐色 小石若干含む 気孔あり 釉薬(鬼板) 外面部ハケ塗り	焼成 良好			
	10 潜戸美濃 すり鉢	寸法 底径18.8cm	成形 ロクロ 外底部系切り痕 外面部横ナデ 外底部脇折痕あり			
		胎土 灰褐色 小石多く含む 気孔あり 釉薬(鬼板) 内面部ハケ塗り	備考 内底部磨耗が顕著			
	11 潜戸美濃 すり鉢	寸法 底径 (14.4cm)	成形 ロクロ 外底部回転系切り痕 外面部横ナデ 内面条線1束19本			
		胎土 肌色 石英粒 黒色小粒含む 釉薬(鬼板) 内面部ハケ塗りか?	備考 内面に重ね痕 外底面使用痕			
	12 土製品 瓶小土器	寸法 口径2.45cm 底径2.6cm 器高1.45cm	成形 ロクロ 内底部ナデ 外底部回転系切り痕			
		胎土 金雲母 鈍石小粒含む キメ細かい	色調 灰褐色	焼成 良好		
	13 潜戸花生?	寸法 口径11.5cm 成形 ロクロ				
		胎土 灰色 キメ細かい 微気孔あり 釉薬 透明度のある緑色	ハケ塗り	焼成 良好		
	14 志戸呂 小皿	寸法 口径7.75cm 底径3.3cm 器高1.75cm	成形 ロクロ 外面部下位ヘラ削り 高台削り出し			
		胎土 灰褐色 小石含む 気孔少々 やや粗い 釉薬 鶴輪 緑味を帯びた湯色	焼成 良好			
	15 志戸呂 小皿	寸法 口径7.9cm 成形 ロクロ 外面部下位ヘラ削り				
		胎土 肌色 キメ細かい 釉薬 灰釉 二次焼成により白濁	焼成 良好			

表32 採集遺物観察表 (1)

第四章　まとめ

遺跡の年代

縄文時代から近代までの遺物が出土している。中世では、鎌倉時代前期（13世紀前半以前）の土師器T種（手づくね成形）、竜泉窯櫛描蓮弁文なども含まれているが、国産陶器では、みてきたとおり、瀬戸の大半が古瀬戸前期の終わりから中期前半にかけての様式（藤沢良祐編年）である。また常滑も、13世紀前半のものから始まり、13世紀中葉から14世紀前半に主体をもつ。これはほぼ鎌倉時代後期～南北朝時代前半に相当する。そして、どうやら15世紀半ば以降からは人の往来が衰えるようである。

遺跡の変遷と性格

以上の出土遺物の状況を念頭に、検出された遺構のあり方を参照して、中世におけるこの遺跡の変遷をまとめると、次のようになる。

一、鎌倉時代初期に、この一帯に人の居住が始まる。

二、13世紀前半にはかなりの人の往来が見られるようになる。

三、13世紀後半には非常に賑やかな場所となり、おそらく倉庫のような港湾施設としての堅穴建物の立ち並ぶ場所となる。この繁栄は南北朝前期頃まで続くようだ。

四、次第に衰退はするものの、なお大体15世紀半ば頃まで人の往来は残る。

一については、鎌倉開府に統いて、港湾としての鎌倉港が機能をはじめ、それにともなってこの一帯にも開発の手が入ったことを示している。貞応二年（1223）に書かれた『海道記』にある、「東南角ノ一道」の賑わいとは、まさにこの辺のことを指しているのであろう。

二の状況は、ここから至近の距離にある和賀江港の築造が貞永元年（1232）に行われたことにともなっているとみみたい。

三の時期には鎌倉全体がもっとも繁栄したのであり、堅穴建物の群集することからも、ここが典型的な浜地の様相をもっていたことがわかる。また13世紀半ばから第3四半期にかけて、この付近には浄土宗系寺院が相次ぎ建立されるが、そのことも影響を及ぼしていたことは間違いない。

ところで、和賀江および浜地一帯を管理していたのが極楽寺であったのはいうまでもないが、四に述べた、15世紀半ば以降の遺跡地の衰退は、極楽寺だけでなく鎌倉全体のそれと軌を一にしているとみてよいのだろう。

出土遺物について

出土遺物の計数表を表35に示しておく。縄文・古代・近世以降を除き、総数4422点で、そのうち49.48%（2188点）が土師器である。統いて国産陶器38.56%（1705点）、貿易陶磁器2.49%（110点）となっている。この状況は、大倉幕府周辺遺跡や北条小町邸跡など都市中核部において土師器比率が90%を越えることが多いに比べ、際立って低い数値であるといえる。このことは幕府所在地や北条邸といつたいわば「格の高い」場所と、職能民のような中世の下層階級の人々の集住する場所との、土師器使用量の差を如実に示している。すなわち、前者ではしきりに土師器が使われ、後者では少ないということである。この背景について、筆者（馬淵）は最近詳しく述じたのでそちらに譲りたい（『食器にみる中世鎌倉の都市空間』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997近刊予定）。

土師器のうちR種（ロクロ成形）が89.90%（1967点）を占めているのは、鎌倉後期に主体を持つと

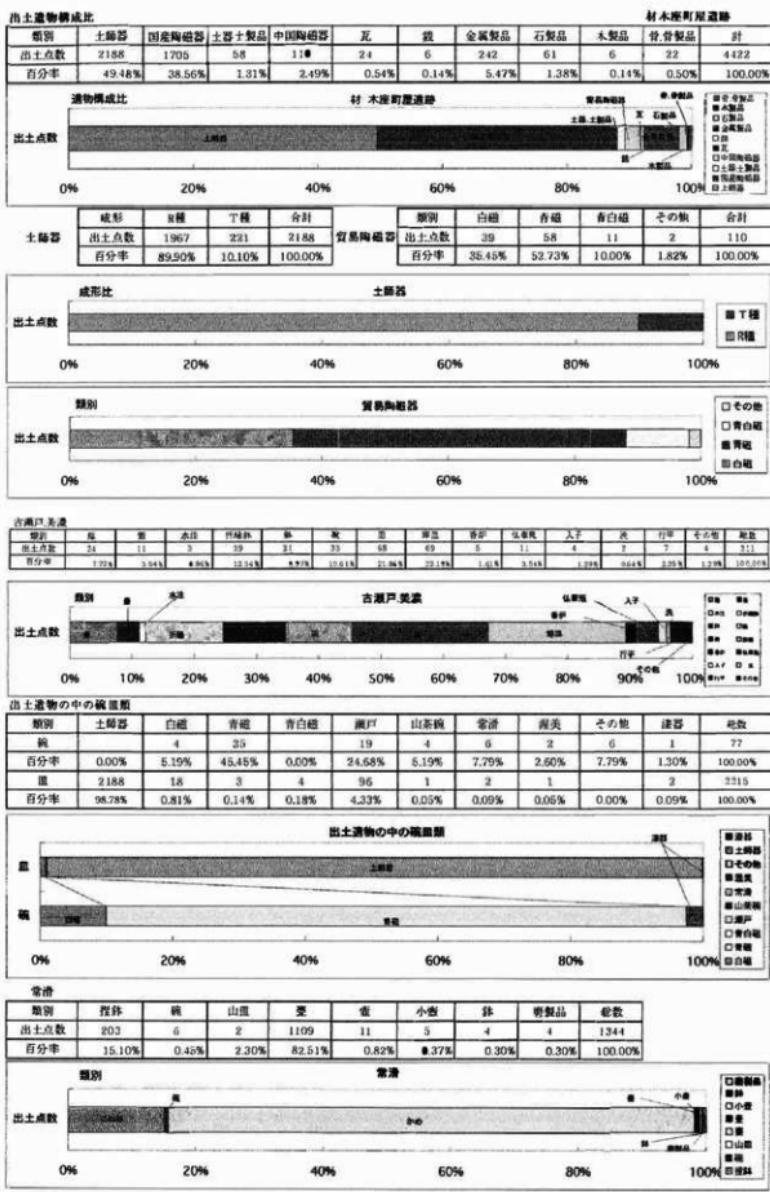


表35 出土遺物組成表

いう、この遺跡の年代的なものに由来するのだろう。T種（手づくね成形）の存在は、鎌倉前期からの人の往来を示す。

311点出土した瀬戸製品では鉢皿が22.19%（69点）でもっとも多く、食器類・折縁皿が続く。これはおそらく、市内の他の地域でも共通のあり方だろう。瓶子が7.72%（24点）となっているが、この容器の価値が実用性にあるのか、所持者の地位表象にあるのかによって、数値の意味が違ってこよう。この点はもう少し資料の蓄積が欲しいところである。

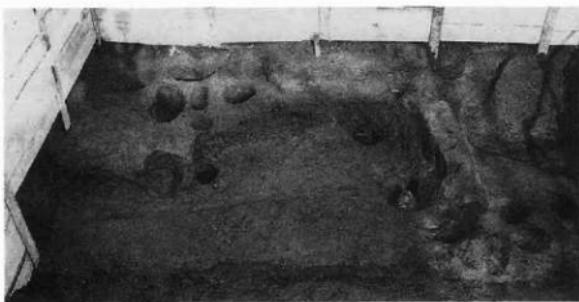
また金属製品が5.47%（242点）と、意外に多いことが注目される。おそらくその多くは鉄釘であるが、掛け金の出土について、簡単に触れておきたい。統計を取ったわけではないが、掛け金の出土は、都市中核城よりも浜地においてのほうが多いような感触がある。これは何らかの建物の戸にともなうものだが、浜に多いという状況がもし確かだとすれば、一帯にほとんど無数に建てられた堅穴建物のそれに使われたものである可能性が高い。掛け金の出土分布を精査することにより、今後堅穴建物と掘立柱建物、あるいは一般的な板附いの都市住居などとの構造差に言及することができるようになるかもしれない。

砥石や滑石鍋といったおもに九州から搬入された石製品も多いが、鎌倉時代後期という遺跡の中心年代を考え合わせれば、これらの製品の搬入量の急騰が、この時期の九州地方への得宗勢力の急激な浸透と関連があるとみたほうがいいだろう。これは本地点に限らず、全国的な傾向ではあるが。

水晶製の母指の出土は、一帯の宗教地帯化と無関係ではあるまい。水晶製五輪塔は、鎌倉時代後期の禪律系寺院に多いが、これは当時盛んだった舍利信仰に由来するのだろう。その背景には律の持っていた精密な石材加工技術が必要だが、本地点での母指の出土が、一帯の律宗勢力と関係する可能性はないだろうか。

写 真 図 版

1. 東端部上層遺構面（西から）



2. 同上 下層遺構面（西から）



3. 下層面全景（西から）



図版2



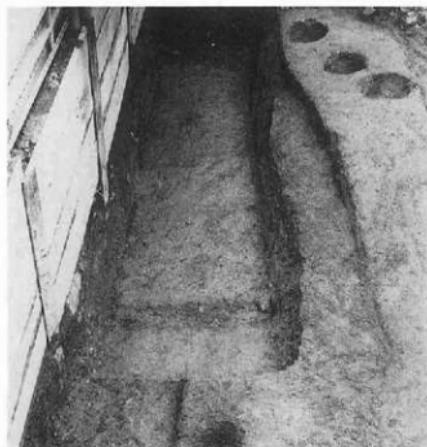
1. 南北土層断面（東壁寄り）

2. 井戸 1（東から）



3. 同上 内部の状況





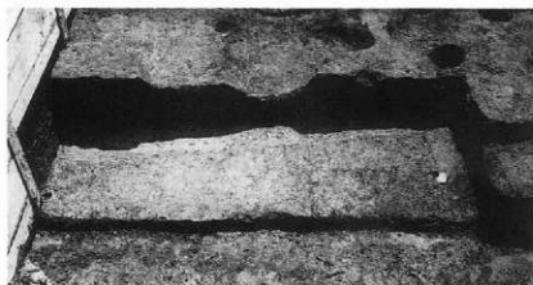
1. 壁穴建物1・4（東から）



2. 壁穴建物2（東から）



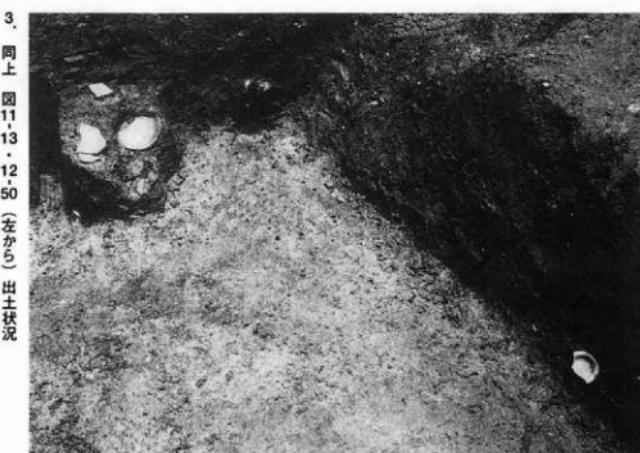
3. 壁穴建物8（東から）



1. 墓穴建物 6 東部
(西から)



2. 同上 西部
(西から)



3. 同上
図
11・13・
12・50
(左から)
出土状況





1.
中央部柱穴群（東から）



2.
方形土壙 1 南半部（西から）



3.
方形土壙 8（南から）

1.

圖17·4出土狀況



2.

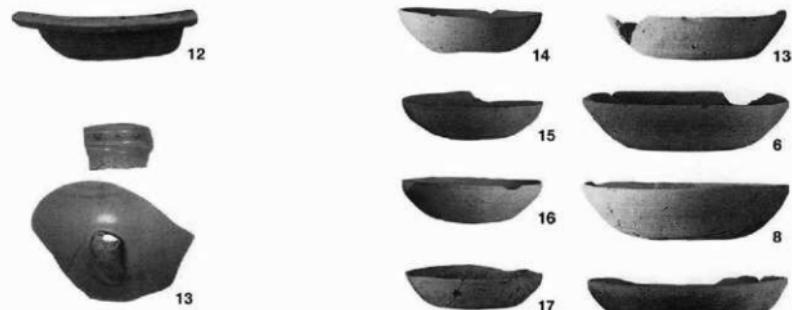
圖19·6出土狀況



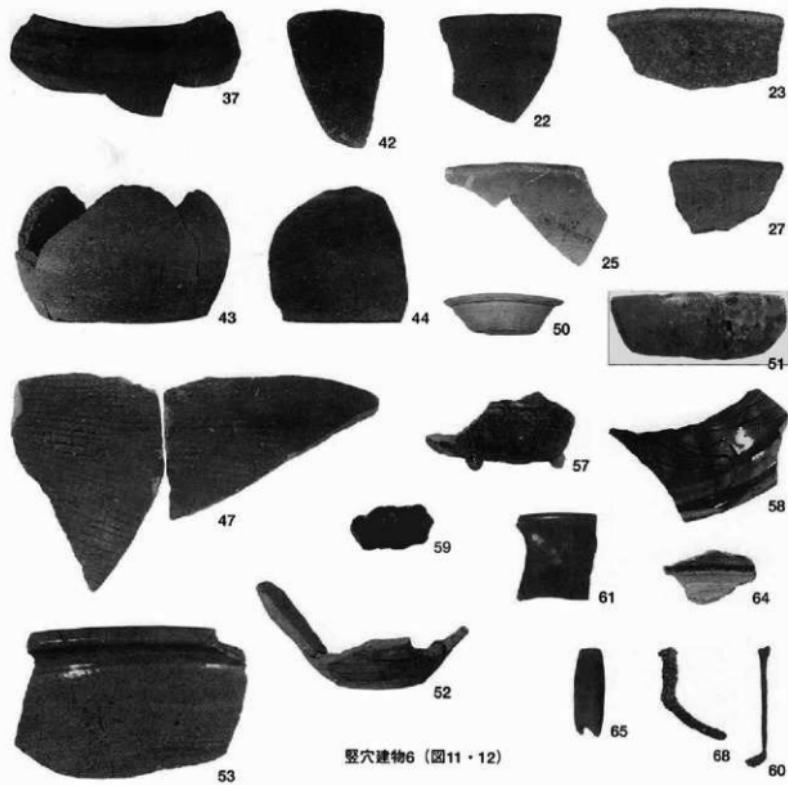
3.

圖13·6出土狀況





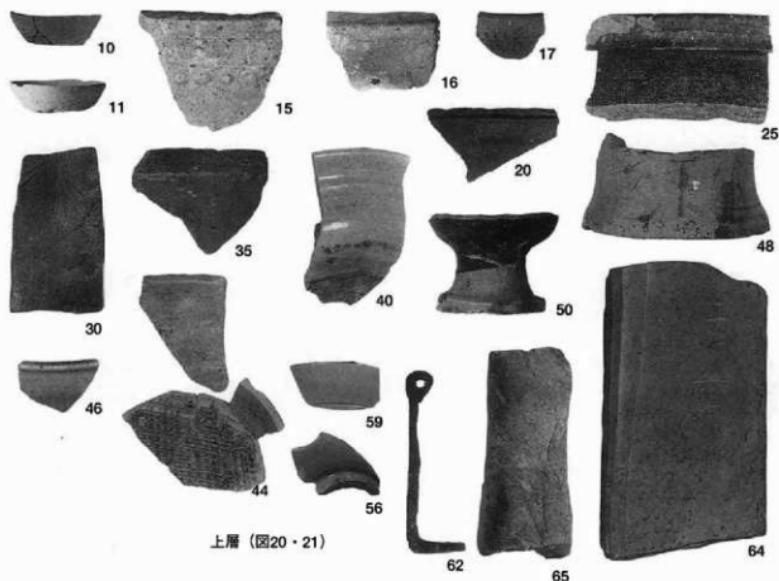
竪穴建物8(図8)



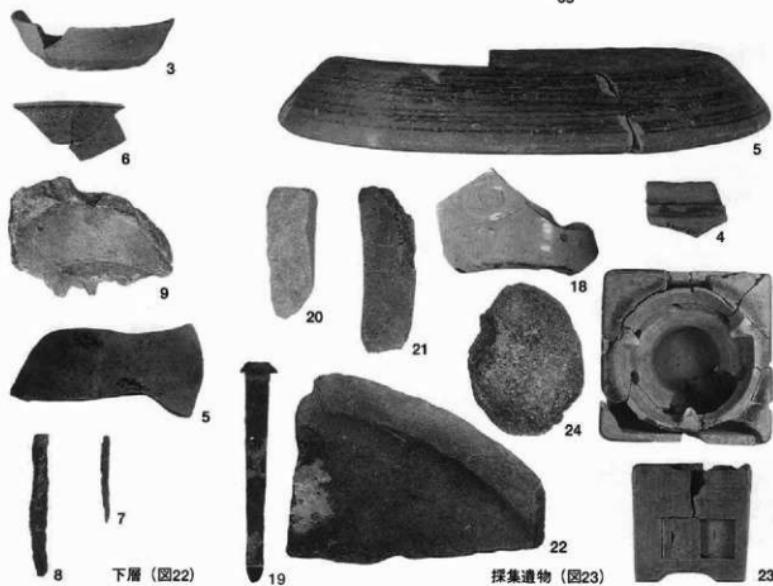
竪穴建物6(図11・12)



図版10



上層（図20・21）



下層（図22）

採集遺物（図23）

報告書抄録

ふりがな	ざいもくざまちやいせき
書名	材木座町屋遺跡
副書名	材木座三丁目364番1外地点
卷次	
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	13
編著者名	馬淵和雄
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1997年3月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北緯 市町村 遺跡番号	東経 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		14204						
ざいもくざ まちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけん かまくらし ざいもくざ 神奈川県鎌倉市 材木座三丁目364番 1外	14204	261	35度 18分 16秒	139度 33分 20秒	1995. 6.19～ 1995. 7.29	100	個人専用住宅 建設

所収遺跡名	種 别	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
材木座町屋遺跡	都市	鎌倉時代	竪穴建物 方形土壙 土壙 柱穴様小穴 小穴列 井戸	10 5 15 110 1 1	中世土師器・窓滑・瀬戸・備前・竜泉窯青磁・口はげ白磁・鉄釘・骨製品・近世土製品・志土呂・近世陶器・近世土器・その他	鎌倉時代後半期を主体に竪穴建物など浜地特有の遺構が連續的に作られている。 水晶製念珠(母指)出土

ようふくじあと
永福寺跡 (No.61)

二階堂字獅子舞603番 1 地点

例　　言

1. 本報は神奈川県鎌倉市二階堂字獅子舞603番1における、個人住宅造成に伴う永福寺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は調査対象面積128m²を国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が平成7年7月7日～同年9月22日まで実施した。
3. 本報の執筆は第1・2章・第4章を福田 誠が、第3章、出土した遺物を菊川 泉、神山晶子が担当し、編集は福田が行った。
4. 本報の資料整理には、福田、菊川、神山、岩野裕巳、汐見尚子があたった。
5. 本報に使用した遺構写真の内、遺構の全景写真は木村美代治がポール式高所撮影装置を用い撮影した。個別の遺構は福田が撮影した。遺物写真は菊川が撮影した。
6. 調査体制は以下の通りである。
調査主体 鎌倉市教育委員会
主任調査員 福田 誠（鎌倉市教育委員会嘱託）、木村美代治
調査員 菊川 泉、岩野裕巳、神山晶子、本城 裕
調査補助員 小西さつき、汐見尚子
7. 出土遺物、図面、写真等は鎌倉市教育委員会で保管している。

目 次

例言

第一章 調査の経過	204
第1節 遺跡の位置と歴史的環境	204
第2節 調査地の設定	206
第3節 層序	206
第二章 検出された遺構	206
第1面	206
第2面	207
第3面	207
第三章 出土した遺物	211
第1面	211
第2面	211
第3面	211
第四章 まとめ	217

挿 図 目 次

図1 遺跡周辺図	204
図2 調査地設定図	205
図3 土層断面図	206
図4 井戸見透し断面図	207
図5 第1面平面図	208
図6 第2面平面図	209
図7 第3面平面図	210
図8 1区第1面井戸出土遺物	212
図9 1区第2面・第2面溝覆土出土遺物	213
図10 1区第3面・炭層出土遺物	214
図11 2区第2面まで出土遺物	215
図12 2区第3面覆土出土遺物	216
図13 2区第3面覆土出土遺物	217
図14 2区第3面・第3面遺構出土遺物	218

図 版 目 次

図版1 1区第2面	223
図版2 1区第1面井戸	224
図版3 第3面全景	225
図版4 第3面礫石検出状況	226
図版5 1区第1面井戸覆土出土遺物	227
図版6 1区第2面・第2面覆土出土遺物	228
図版7 1区第3面・炭層出土遺物	229
図版8 2区第2面まで出土遺物	230
図版9 2区第3面覆土出土遺物	231
図版10 2区第3面覆土・第3面遺構出土遺物	232

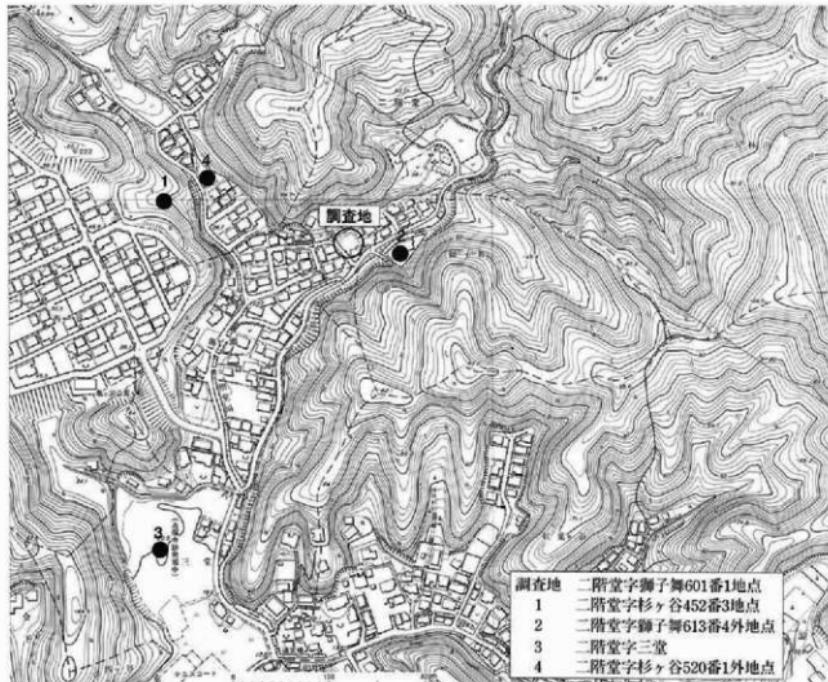


図1 遺跡周辺図

第一章 調査の経過

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市二階堂字獅子舞603番1地点に所在し、県遺跡台帳No.61「永福寺跡」に登録されている。本遺跡は、国指定史跡「永福寺跡」中心部から北約400mに位置している。永福寺の中心伽藍より北に延びる杉ヶ谷が、更に二股に分かれる分岐点にあたり、字名の獅子舞は、山頂に獅子がうずくまっているように見える（獅子岩）ところから付いた名と伝えられている。

永福寺跡は、源頼朝が奥州合戦の際に見聞した平泉の堂舎を模して建立したと伝えられる寺院で、文治五年（1185）に事始めを行い、建久三年（1192）に二階堂が、そして相次いで阿弥陀堂、薬師堂が完成し、建久五年（1194）には境内の伽藍がほぼそろったと考えられる。

幕府の御願寺として手厚く保護され、鎌倉幕府滅亡後も、頼朝縁の寺として、室町幕府からも保護されたようである。創建から約200年後の応永十二年（1405）の火災で焼け落ち、この後再建されず、15世紀中頃までに廃寺になったと考えられる。

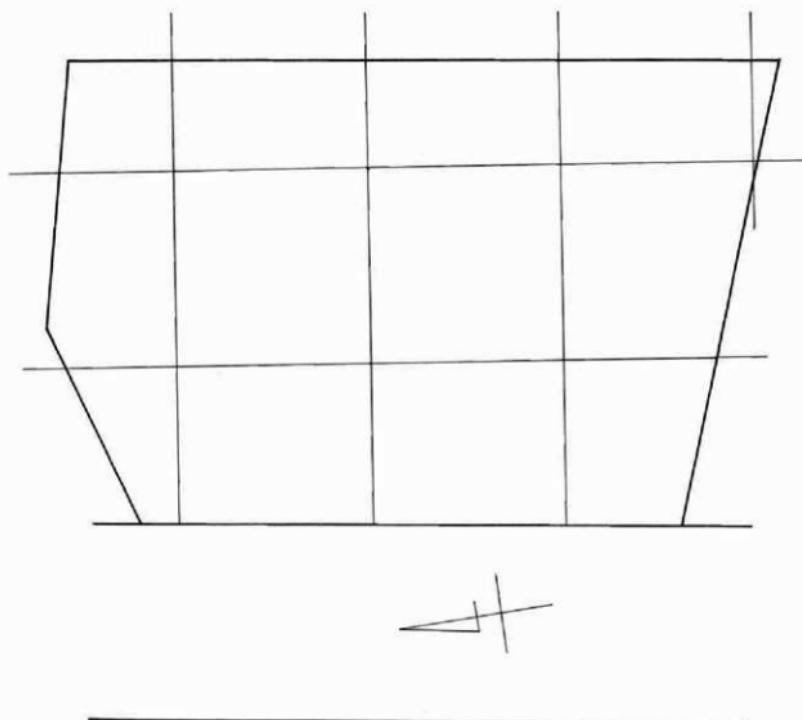


図2 調査地設定図

境内には中心の二階堂、阿弥陀堂、薬師堂の三堂の他、釣殿、鐘楼、多宝塔、惣門、南門、別当坊、僧坊が建ち並んでいたと推定される。本調査地点はこの内の僧坊跡が確認されると推定される地域である。

文献の中から僧坊に関する記載を抜き出して見ると、「永福寺僧坊」「真言院」「真言院北坊」「松本坊」「亀ヶ淵坊」「石井御坊」「二階堂草庵」等の名前を拾うことが出来る。ただし各坊の位置は特定されていない。

これまでの二階堂字獅子舞613番4外地点、二階堂字杉ヶ谷520番1外地点の調査で僧坊跡と思われる建物跡、井戸、石垣、道路等を確認している。

第2節 調査地の設定

個人住宅の造成に伴う事前調査として行った試掘調査で、地表下約60cmで中世の遺構面（第1面）及び遺物が確認され、造成に伴う切土の深さが約180cmに及ぶために本調査を実施するに至った。この試掘調査の結果を踏まえ、造成される128m²を対象に7月2日から約2ヶ月の予定で調査を開始した。

調査地は西面が市道路に接し、市4級基準点「B-108」がすぐ際に設置され、直線上に31.518m離れた位置に設置してある「B-109」間を基準線とし、「B-108」から基準線上に7m離れた位置に調査基準点を定め、これを用いて調査区の設定を行った。

本遺跡の緯度は北緯35度19分29秒、東経139度34分16秒である。

第3節 層序

現況の地形は、西面に接する市道の海拔は約26.9m、宅地の地表面は28.2mで、約1.3mの段差がある。調査で検出した井戸の北側は地表下約160cmで岩盤面が露出した。

検出した遺構の面数は3面である。

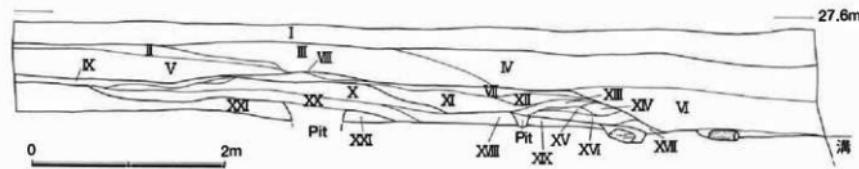
第二章 検出した遺構

第1面

地表下約80cmで第1面を検出した。面は暗茶灰色土層からなり、この土層を切り込んで柱穴1～9と井戸、落ち込みを検出した。

柱穴は規則性が見いだせないところから、建物とは考えにくいものである。

調査地の北東隅で井戸を検出した。検出した井戸の掘方は一辺が約2.60mと大きなものであった。土層は第1面より160cm掘り込んだところで岩盤となり、これより下は岩盤を掘り込んでいた。岩盤に掘り込まれた大きめの方形の穴の四隅にえぐりを設け、直径20～30cm、長さ2～2.5mの材を井桁に組んで土台としていた。第1面の遺構面から井桁の土台まで約160cmの深さである。井戸枠は、井桁に組んだ土台上に組み上げた、160cm×148cmの平面四角形の横桟支柱型のものである。岩盤を掘り込んだ部分に



- I. 暗茶灰色土（3～5cmの大土丹・炭を含む）II. 土丹版築面 III. 明茶灰色粘質土（よく縮る）
IV. 暗茶灰色土（人頭大の土丹多量に含む）V. 暗茶色粘土（土丹粒・炭を含む）VI. 茶褐色粘質土（土丹多く含み、縮る）
VII. 赤茶色粘土（鉄分が多い）VIII. 濁明茶色土 IX. 赤茶色粘土（鉄分が多い）X. 暗灰色土（炭を多量に含む）
XI. 淡明灰色粘土 XII. 明灰色粘土 XIII. 炭化層 XIV. 茶褐色粘土 XV. 暗灰色粘土 XVI. 土丹版築 XVII. 炭化層
XVIII. 灰色砂質土（土丹を含む）XIX. 灰色粘土（木を多く含む）XX. 灰色土（土丹を含む）XXI. 灰色弱粘質土

図3 土層断面図

について、近接する民家の土台と接近していたため完掘していない。

第2面

第1面の下約25cmで検出した面である。

遺構面上に柱穴1~8と面上に据えられている直径30cm大の礎石、第1面で検出した井戸の脇で南北方向に延びる溝を検出した。

柱穴にはこれといった規則性は見いだせなかった。

溝は幅約60cm、深さ20~30cmの南北方向に延びる溝で、一部井戸の掘方にかかるが井戸の方が新しい。

第3面

第2面の約30cm下で検出した面である。

第3面は調査地西側を南北方向に走る溝に向かって、全体的に西に緩やかに傾斜している。西側の溝より東に約3.5mの幅の中に落ち込み、礎石の入った柱穴、礎板の入った柱穴、溝が第1面で検出した井戸とは同じ方向で検出された。残りの東半分には、ほとんど遺構らしいものは見あたらない。

柱穴

柱穴は計22穴検出した。この内柱穴中に礎石（約45×35cm）を伴うものが4穴、礎板を伴うものが1穴、礎板の代わりに女瓦（永福寺Ⅰ期）を敷いたものが1穴、柱穴を伴わずに面上に置かれた礎板が3点検出された。

検出した礎石を伴う柱穴の内、礎1・礎2・礎3は南北方向に、約150cmの間隔ではば直線に溝に平行して2間並び、礎4は礎1の南側約110cmに位置する。4つの礎石はし字状に並び、他の柱穴や礎板も溝に平行か直交方向に配置され、建物の一部のようである。

溝

溝1は調査地の西辺を南北方向に走る幅推定約1m、深さ50cmの溝である。この溝に沿って柱穴、面上に置かれた礎板・土丹が並ぶ。この溝1に向かって流れ込む溝2・溝3がある。幅約30cm、深さ約30cmの溝で、ほぼ溝1や礎石に平行・直交し、柱穴と共に区画を作っているようである。

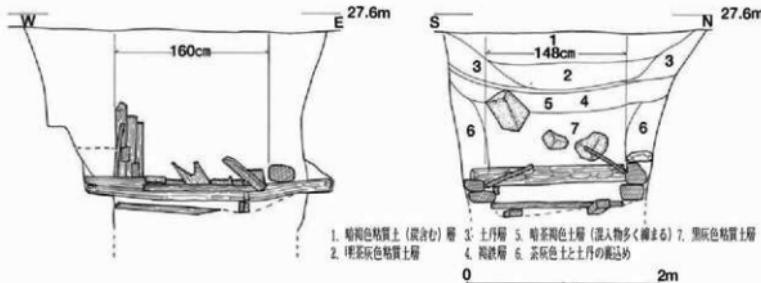


図4 井戸見透し断面図

B-108

基準点

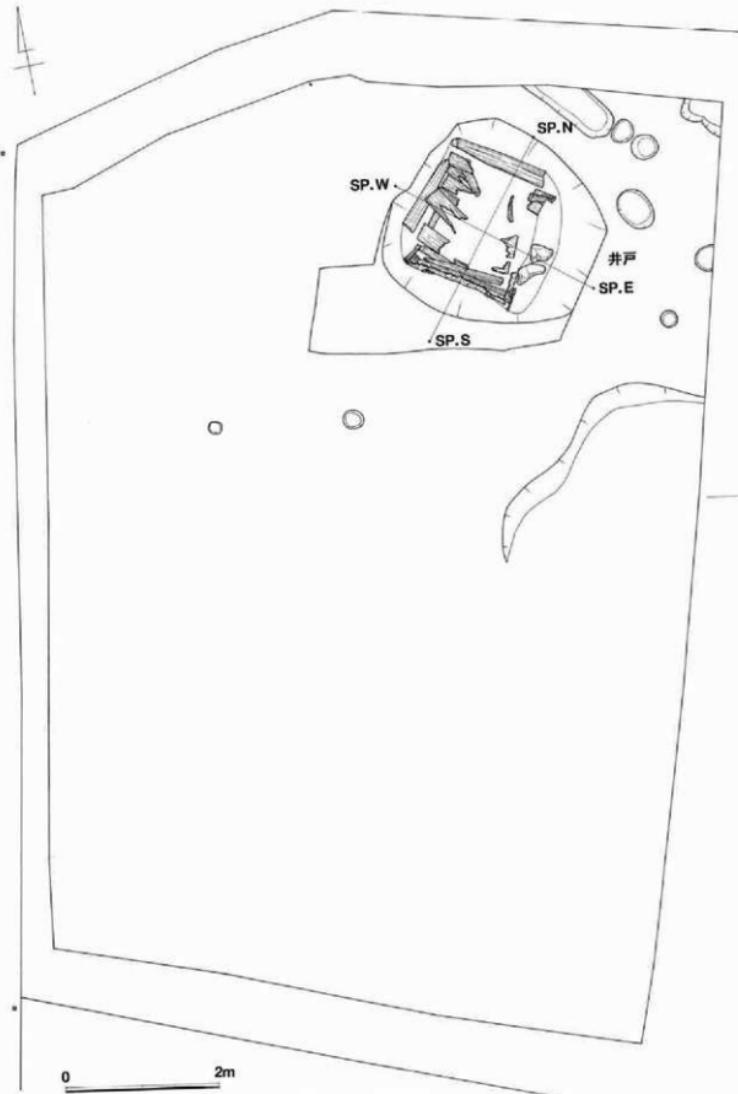


図5 第1面平面図

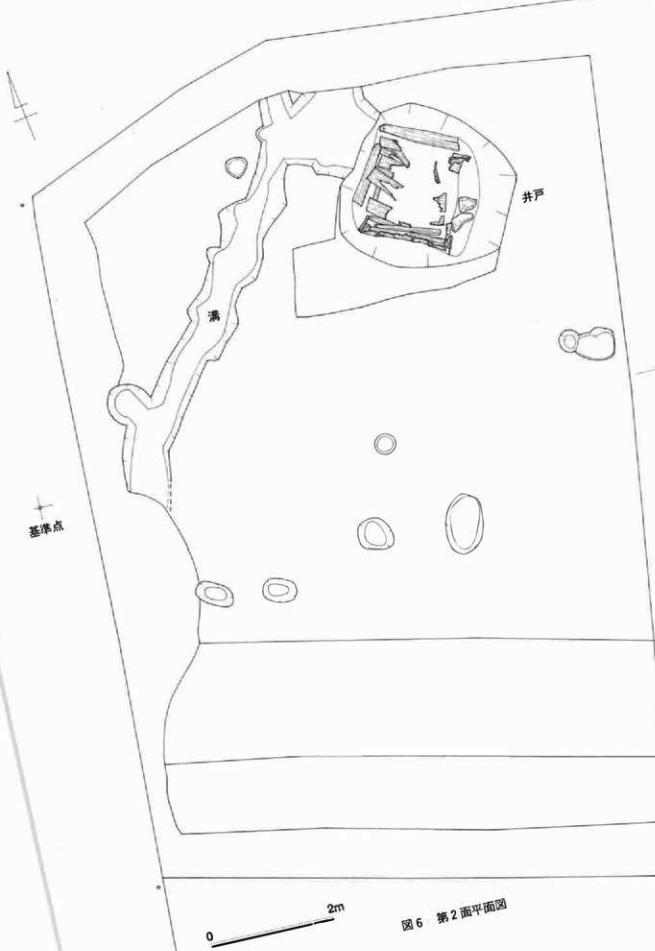


図6 第2面平面図

B-108

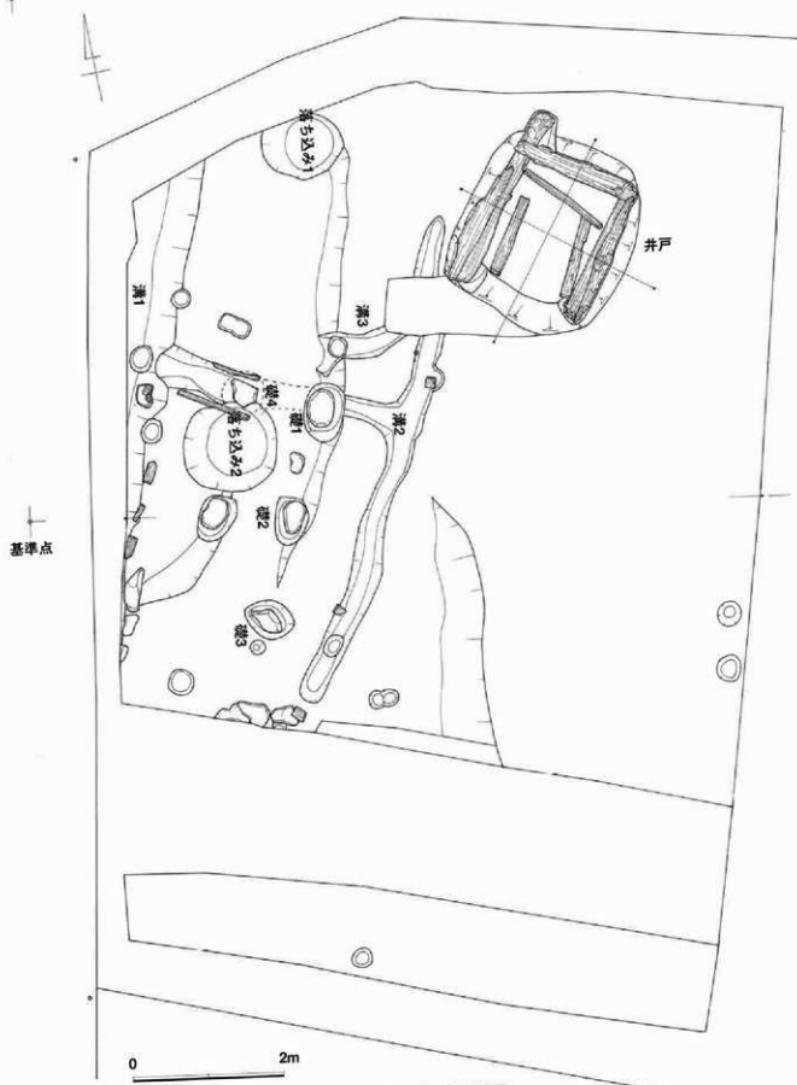


図7 第3面平面図

第三章 出土した遺物

1区第1面井戸出土遺物(図8、図版5)

1区の表土及び第1面包含層からは、ごく少量のかわらけ片等が出土したのみで、年代を示す良好な資料は得られなかった。

図1は第1面で確認した井戸の覆土から出土した遺物である。

1～4はかわらけ。いずれも器壁が均一的な厚みをもち、底径が小さく、体部は丸みを持って立ち上がる器形で、14世紀前葉の製品と思われる。井戸が埋められた第1面の年代はこの時期と考えられよう。

5～8は手焼り。5は菊花文をスタンプで施し、体部全体から口縁部内面にかけて丁寧に研いでいる。7とは同一個体か。6は鈎の部分の小片で、側面及び上面に菊花文をスタンプで施している。赤灰色を呈し、二次焼成を受けたものか。8は下体部の小片。外体部表面が剥離しており、成形の痕跡が観察できない。

9・10は常滑の捏鉢。9は粗い長石粒が多く含む堅緻な胎土。外体部は口縁部付近を横ナデで成形しており、刷毛ナデの痕跡も認められる。10は精良な胎土から成る。内面は磨減が著しい。二次焼成を受けたものと見られ、表面は気泡を生じている。

11は瀬戸の鉢。胎土は黄灰色を呈し、やや粗く、しまりが悪い。内底面に灰釉が施されている。

12～16は瓦。12は繩目のかわらけ。13は男瓦。14は女瓦。15は女瓦であるが、表・裏面とも端部を横方向の板ナデで調整している。16は男瓦。粗い砂粒を含む粗い胎土で、明灰色を呈する。表面は灰黒色。これらの瓦はいずれも本遺跡の南に位置する国指定史跡「永福寺跡」から多く出土する瓦と同種のもので、その編年に従えば、12から15がⅠ期(創建期・1192)に用いられたもの。16がⅡ期(寛元・宝治年間)の改修時に用いられたものと考えられる。

1区第2面・第2面溝覆土出土遺物(図9、図版6)

1～5は第2面覆土の遺物。

1はかわらけ。燈明皿として用いられたと見られ、口縁部から内外体部に煤が付着する。2は白かわらけ。3は常滑の捏鉢。口縁部はやや扁平な断面四角形を呈する。粗い長石粒を含む胎土で、ややしまりが悪い。4は瀬戸の鉢。鉢目は比較的細かく刻まれ、内・外面には灰釉が施されている。外面の釉は底面にまで及ぶ。胎土は灰白色を呈し、精良で堅緻。5は鉄製の釘。

6～15は溝覆土より出土した遺物。

6～9はかわらけ。10は手捏ね成形による白かわらけ。底面は丁寧な横ナデで、指頭圧痕がナデ消されている。11は酒会壺の蓋。釉は褐釉で外面全体に厚く施される。線刻によって草花文と思われる文様が描かれている。内面は二次焼成を受け変色が著しい瀬戸の胎土に似る。12・13は瀬戸の鉢。二点とともに全体に灰釉が施されているが、二次焼成によりかなり剥落した状態である。14は瀬戸の広口壺。胎土は灰白色を呈し堅緻。灰釉が全体に施されている。15は女瓦。繩目のかわらけをもち、全体に赤色を呈し、表・裏面ともに粗い離れ砂が付着する。東海地方産のもので、前述の永福寺のⅠ期の瓦。

溝の遺物は7～9のかわらけが14世紀前葉の製品と考えられるのを下限とする。この時期が溝の埋められた時期と考えられよう。従って、第1面と第2面は比較的短期間に構築されたものと思われる。

1区第3面・炭層出土遺物(図10、図版7)

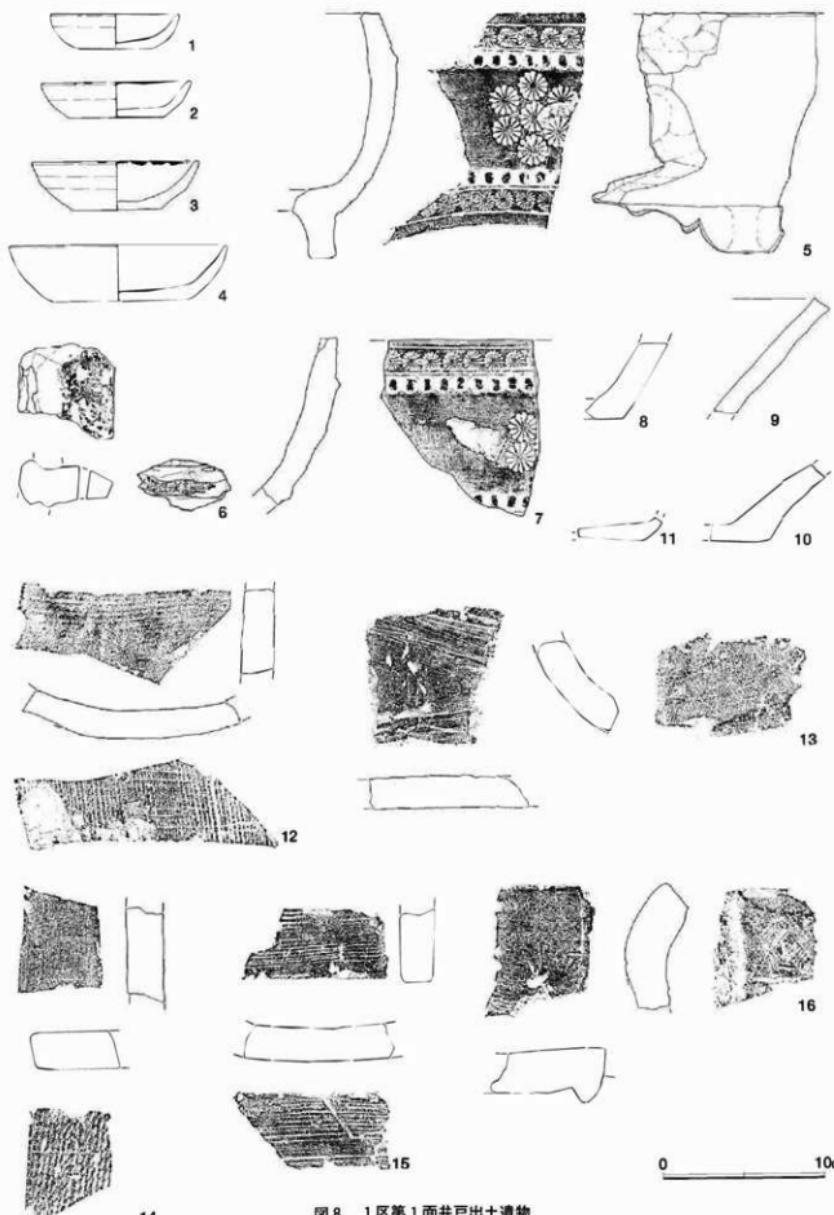


図8 1区第1面井戸出土遺物

1~12は1区第3面の遺物。1~7はかわらけ。この内2・3・5・6は二次焼成を受けて暗灰色を呈する。8は瀬戸の鉢。胎土は明黄色を呈し、ややしまりが悪い。内面及び外体面に灰釉がうすく施されている。9は盤。二次焼成を受けて釉が剥落し、縁部部分のみが残っているが、本来は二彩か。胎土は明黄色を呈し、砂を含む緻密なもの。10は常滑の甕。粗い長石粒を含む胎土で、ややしまりが悪い。口縁部を緑帯状につくっている。11は火舟。粗い砂を多く含みややしまりが悪い。体部は全体的に弱いナデによって成形されている。12は白磁口元皿の底部。

13~26は第3面炭屑層中の遺物。

13~20はかわらけ。1~7と同様に、總じて、底径が比較的小さい深形を呈し、器壁の厚みが均一的、体部は丸みをもって立ち上がるといった特徴をもつものが主で、概ね14世紀前葉のものと思われる。第1面から第3面の時期差もさほど無いと言わねばならない。21は常滑の捏鉢。長石粒を少量含む精良な胎土から成る。外体部には右斜め上にひきあげる板ナデ成形痕が認められる。22~25は常滑の甕。22は23と同一個体か。口縁部をN字状に折り、外周を緑帯状にナデして仕上げている。赤灰色を呈し、胎土は細かい長石粒を含みややしまりが悪い。24はやや外反させた端部を上下にひき出して口縁部をつくっている。胎土は精良で砂粒を多く含み緻密。25は10と同一個体か。26は縁部の盤の底部片。二次焼成により釉は淡色に変色している。胎土は明灰色を呈し、砂を多く含み緻密。

27~28は土壤1の遺物。27は白磁。水注等の体部か。釉は内・外面に施されており、淡水青色を呈す。28は砾石。黄灰色を呈する泥岩製。表面・裏面ともなめらかに研かれている。

29は土壤2出土のかわらけ。

30・31はPit1出土の女瓦。ともに凸面に繩目叩き目を有する、永福寺1期のもの。

2区第2面まで出土遺物(図11、図版8)

2区では第1面の遺存状態が悪く、最初に検出した構築面は第2面である。

図4は第2面覆土までの遺物。

1~18はかわらけ。やはり14世紀前葉のものがほとんどを占める。

19は瀬戸の皿。黄灰色を呈し、口縁部のみわずかに灰釉が施される。20は常滑の鉢。胎土は精良で緻

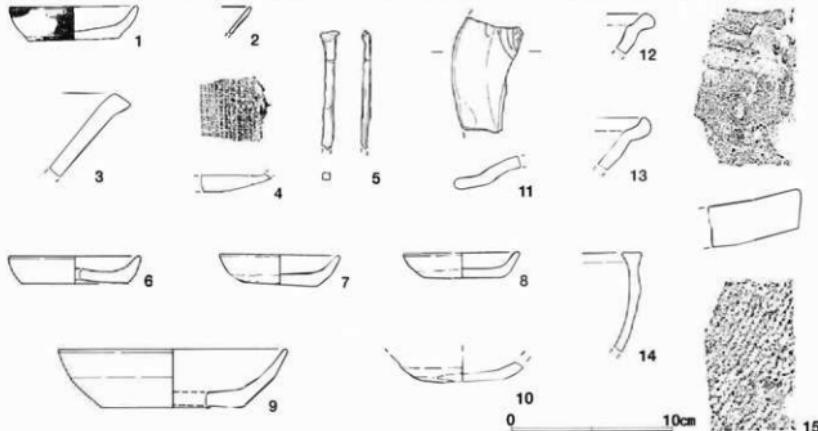


図9 1区第2面・第2面満覆土出土遺物

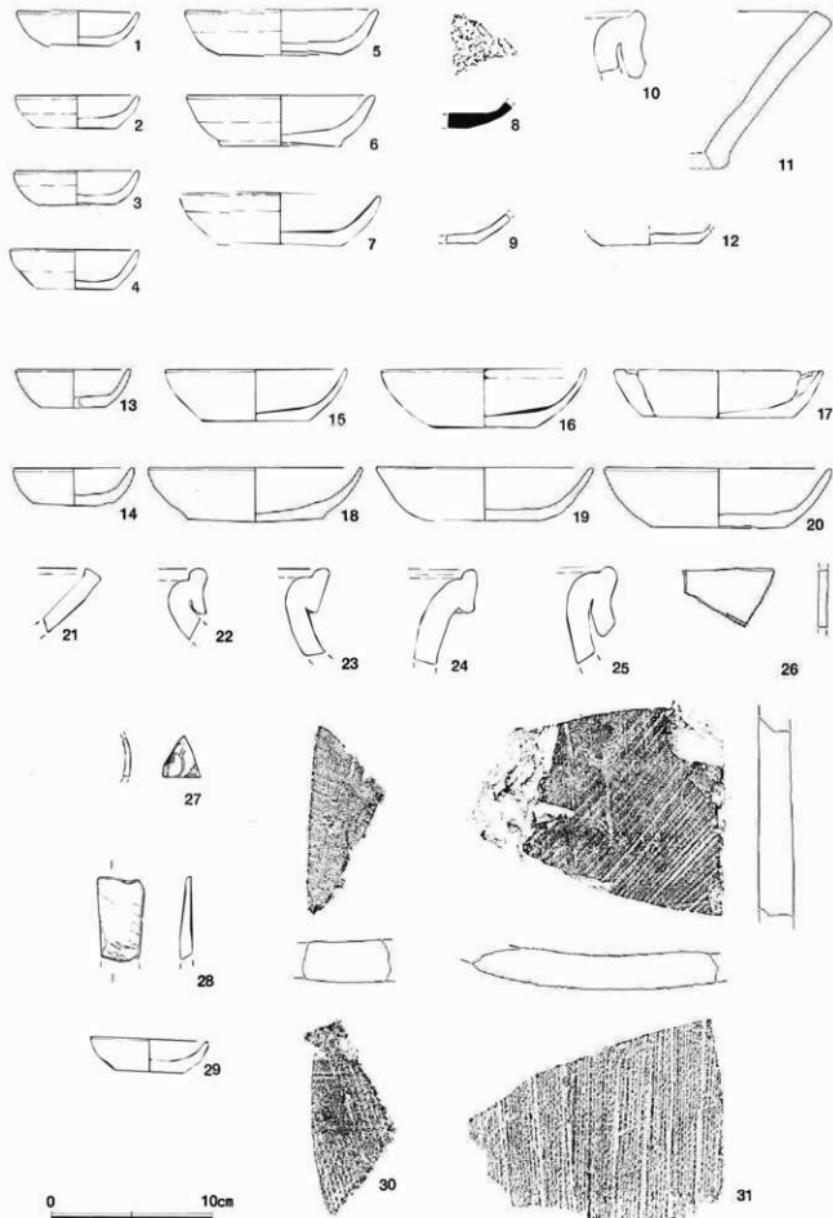


图10 1区第3面・炭層出土遺物

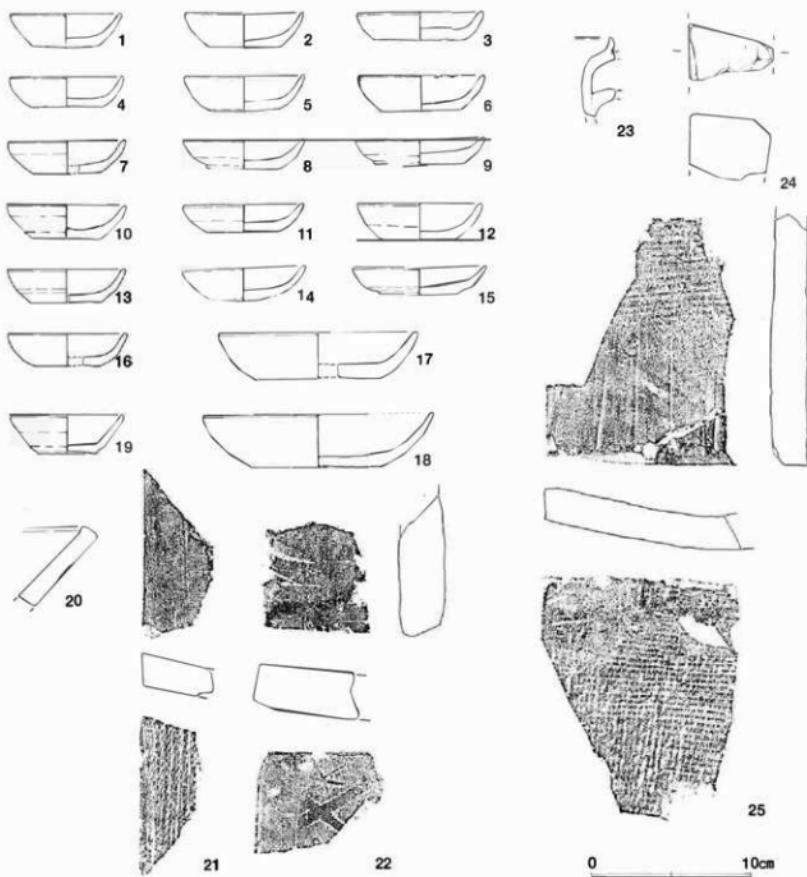


図11 2区第2面まで出土遺物

密。内面は丁寧な横ナデ、外面は口縁部のみをやや強い横ナデで成形している。21・22・25は女瓦。21と25が繩目の叩き目を有するⅠ期のもの。22は斜格子の間に「大」の字状の文様が入った叩き目を有する。埼玉県の水戸瓦窯の産と確認されており、永福寺Ⅱ期のものと考えられている。23は瀬戸の行平鍋。持手の付根部分の破片。胎土は黄灰色を呈し、ややしまりが悪い。内面・外面とも灰釉が施されているが、内面は特に釉を施す刷毛目が明晰。24は砥石。砂岩製で荒砥か。本来は四角柱のものと思われるが、欠損部分が多く、二次焼成も受けたと見られる。

2区第3面覆土出土遺物（図12・図13、図版9・10）

図12・図13は2区第3面覆土より出土した遺物である。

図12-1～21はかわらけ。1～6・10・11・13・16は、体部が直線的に立ち上がる13世紀中頃の様相を呈す。その他のものは、素地がきめ細かく、器壁が薄く丸みをもった体部で、14世紀前葉の特徴を備

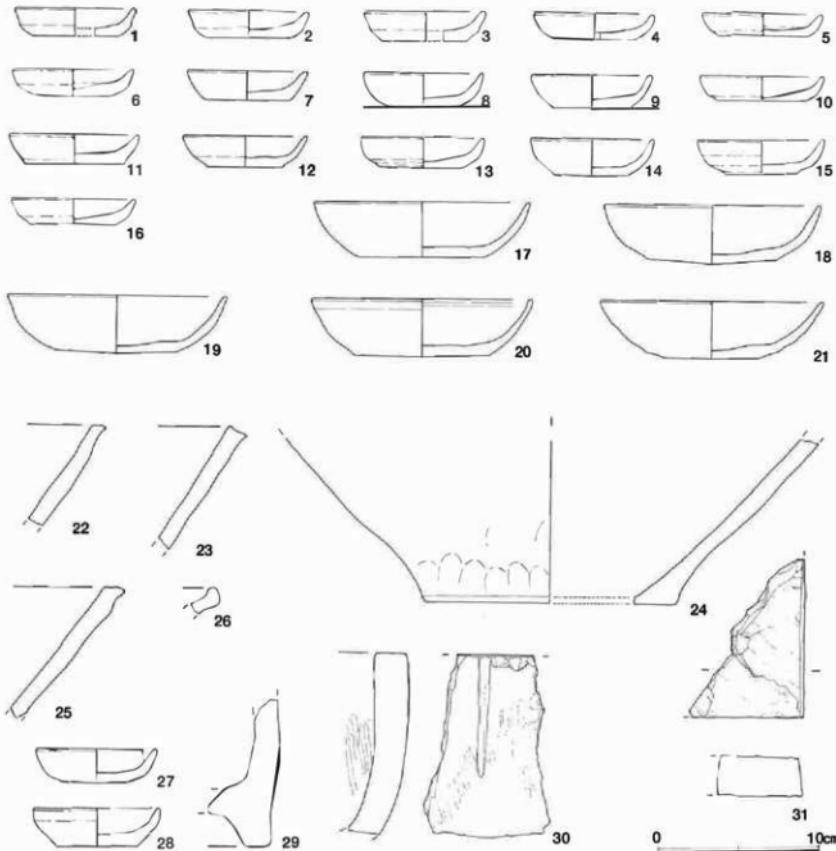


図12 2区第3面覆土出土遺物

えている。

22~25は常滑の捏鉢。体部に指頭調整痕が、外面口縁下部にはやや強い横ナデ痕が認められる。26は瀬戸の折縁鉢。胎土は精良で、緑灰色の灰釉が施される。

27・28は炭下層付近で出土したかわらけ。共に胎土はきめが細かく、形態は14世紀前半の様相を呈する。27は灯明皿として使用されたものか、内面にススが付着する。

29・30は火舎。29は脚部片。瓦質だが、体部を研いていない。30は内・外面とも上下方向に丁寧に研かれている。器形は輪花を呈する。31は硯の未製品と思われるもの。粘盤岩製。側面を切断しており、底面と硯面は未加工の状態である。

図13-1~3は女瓦。いずれも1期のもの。1は東海地方産のもの。表面に粗い長石粒が付着する。2・3は凸面に縄目の叩き目を有する。4は男瓦で、1と同様東海地方産。凸面は横ナデで成形されている。

2区第3面・第3面遺構出土遺物（図14、図版10）

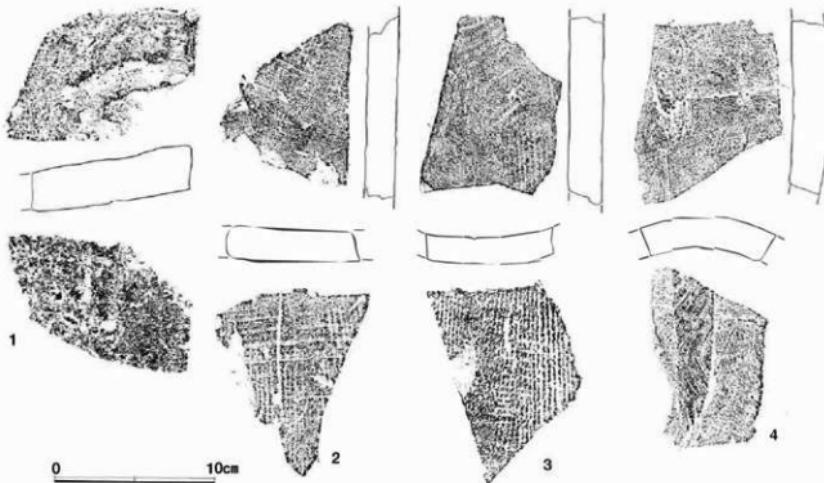


図13 2区第3面覆土出土遺物

1～3は2区3面上で出土したかわらけである。1、3は砂粒を含む似た胎土で、14世紀前葉の製品の形態。

4～9は落ち込み1より出土した遺物。4～6はかわらけ。4は灯明皿として使用されたもので、口縁部にススが付着する。3点ともやはり14世紀前葉の様相を呈する。7は山茶碗窯系捏鉢。胎土は非常にきめ細かく、精良。焼成も良好で堅くしまり、灰色を呈する。8は男瓦。東海地方産で、I期のもの。表には横方向の板ナデ痕、裏面には布目痕が残る。9は羽子板状の木製品。10は3面溝1から出土したかわらけ。11は3面pit1より出土した火舎。脚部片。12はトレンチ3面下炭層より出土した漆器の鉢。全体に黒漆を塗り、口縁部と、外体部に刻んだ二条の溝に朱漆を塗っている。内底面には亀甲花菱と思われる文様を朱漆で手描きしている。器形は口縁部が折れ曲がる浅形で、陶磁器の形状を模倣したものと思われる。

第四章 まとめ

調査地点は、国指定史跡「永福寺跡」中心部から北約400mに位置する。永福寺の中心伽藍より北に延びる杉ヶ谷が、更に二股に分かれる分岐点にあたり、僧坊跡が確認されると推定される地域であるが各坊の位置は特定されていない。

今回、特に注目される遺構は井戸である。井戸枠の組み方は横桟支柱型で、鎌倉市内の調査でよく見られるものであるが、井戸枠一辺の幅が148～160cmと、市内の調査でもあまり確認例がない大きな規模であった。また現地表下160cmで岩盤が検出され、井戸枠はこの岩盤の上面に丸太を井桁に枠を組み、この上に横桟支柱の井戸枠を組み上げていた。この下は岩盤掘り抜きの井戸となり、井戸枠は御神奥のように岩盤上面に渡された井桁の上に乗った形で、側面から観察すると井戸枠は宙に浮いた形になっていた。

二階堂字杉ヶ谷520番1外地点の調査では、母屋と思われる礎石建物と、付属の掘立柱建物、井戸、溝、庭が確認されている。この組み合わせが僧坊と関わり合いがあるならば、今回の調査で一部確認した、礎石、溝、井戸等の遺構の組み合わせはこれと類似している。確認範囲が狭く全体像がつかめないものの、谷戸内に位置していた永福寺僧坊跡の一端を検出したものと考えられよう。

今回の調査で杉ヶ谷内の調査は4地点目になるが、調査例が少ないために、文献から読みとれる僧坊跡の位置が特定されている訳でもない。永福寺の全盛期には、谷戸内を埋め尽くしていたと考えられる僧坊の今後の調査が待たれる。

最後に連日の猛暑の中、熱々と作業に従事して下さった作業員の方々、各種ご迷惑をかけた近隣のみなさまの暖かい声援で、調査を無事終了することが出来たことを記し、感謝する次第である。

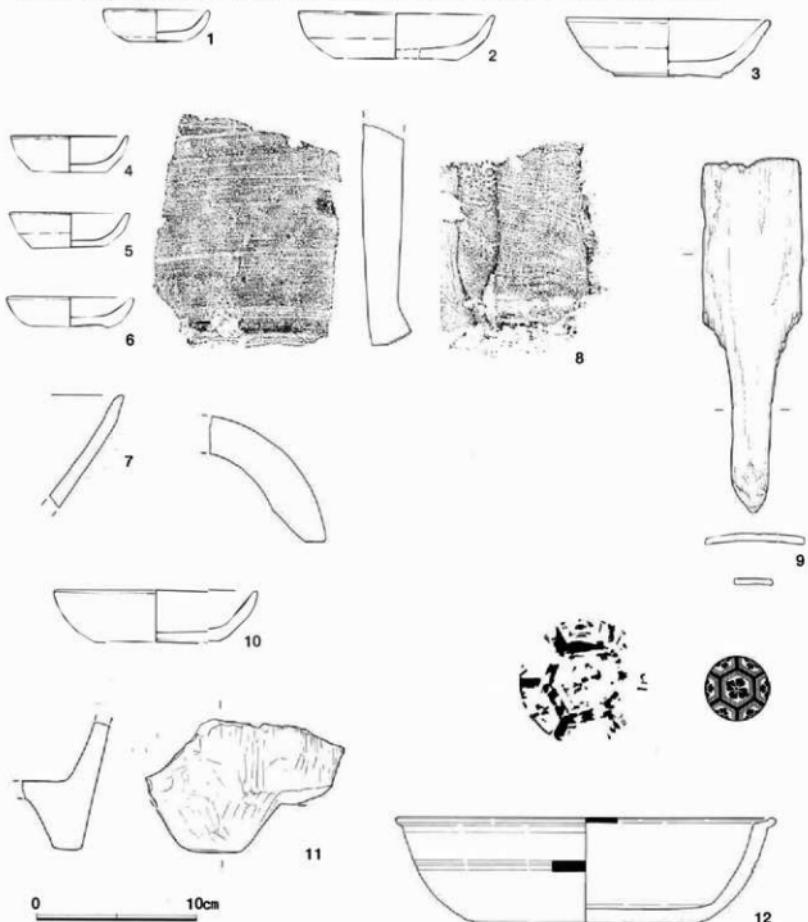


図14 2区第3面・第3面遺構出土遺物

遺物観察表

図8 1区第1面井戸出土遺物 (数字はcm)

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.4	4.0	2.2
2	かわらけ	9.2	5.9	2.2
3	かわらけ	10.3	5.5	3.0
4	かわらけ	13.4	8.5	3.5
5	手焼り	体部～脚部片 瓦質。体部外面に珠文・菊花文スタンプ。		
6	手焼り	鶴部片。瓦質か。側面・上面に菊花文スタンプ		
7	手焼り	口縁～体部片。5と同一個体か。		
8	常滑	下体部片。瓦質。		
9	常滑・捏鉢	口縁部片。粗い長石粒を含む。		
10	常滑・捏鉢	底部片。胎土精良。二次焼成。		
11	瀬戸・鉢	底部片。灰釉。胎土やや粗い。		
12	女瓦	胎土精良、明灰色、繩目の叩きで成形。I期。		
13	男瓦	胎土長石粒、砂多く含む。東海地方窯産。I期。		
14	女瓦	胎土精良、明灰色、繩目の叩きで成形。I期。		
15	女瓦	胎土精良、明灰色、表面端部板ナデ調整。I期。		
16	男瓦	胎土砂粒を含み、明灰色、表面黒色。II期。		

図9 1区第2面出土遺物 (数字はcm)

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.8	5.6	2.2
2	白かわらけ	口縁部片。胎土精良。		
3	常滑・捏鉢	胎土、長石粒を含みしまり悪い。口縁部片。		
4	瀬戸・鉢	底部～体部片。灰釉。胎土精良。		
5	鉄釘	残存長7.3cm。		

第2面溝覆土出土遺物

6	かわらけ	8.0	6.6	1.7
7	かわらけ	7.3	4.7	1.9
8	かわらけ	7.0	4.7	1.6
9	かわらけ	14.6	8.7	3.6
10	白かわらけ	底部片。手捏ね。丁寧な横ナデ。		
11	瀬戸・酒会壺・鉢	端部片。楕釉。線刻による描画、内面に二次焼成を受ける。		
12	瀬戸・鉢	口縁部片。灰釉。胎土緻密で二次焼成のため釉剥離。		
13	瀬戸・鉢	口縁部片。灰釉。胎土緻密で外側の釉は二次焼成のため剥離。		
14	瀬戸・広口壺	灰釉。胎土緻密で灰白色。		
15	女瓦	胎土精良。赤灰色。長石を含む離れ砂付着。東海地方産。I期。		
ナシ	チャート	淡橙色。1.9×1.9×2.1cm。		

図10 1区第3面出土遺物 (数字はcm)

No.	器種	底径	底径	器高
1	かわらけ	7.4	3.9	2.1
2	かわらけ	7.5	5.1	2.1
3	かわらけ	7.6	4.8	2.1
4	かわらけ	7.8	4.8	2.4
5	かわらけ	11.9	7.4	2.8
6	かわらけ	11.5	7.6	3.2
7	かわらけ	12.3	7.6	3.2
8	瀬戸・鉢皿	体部片。胎土は締まり悪く明灰黄色。		
9	盤	底部片。胎土は砂を含み緻密。二彩か。二次焼成で締め込み残存。		
10	常滑・甌	口縁部片。胎土は長石粒を含み、締まり悪い。縁帯状の口縁。		
11	手焼り	体部片。胎土は砂を多く含み締まり悪い。体部に弱いナデ。		
12	白磁・口元	底部片。底径6.0cm。胎土精良。		

第3面炭層出土遺物

13	かわらけ	6.9	4.0	2.4
	底部中央に径4mmの孔。灯明皿。			
14	かわらけ	7.2	4.9	2.3
15	かわらけ	11.1	6.6	3.2
16	かわらけ	12.5	6.4	3.7
17	かわらけ	12.7	9.3	2.9燈明皿
18	かわらけ	13.1	8.4	3.4
19	かわらけ	13.3	7.1	3.3
20	かわらけ	13.8	8.2	3.7
21	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土はわずかに長石粒を含むが精良。		
22	常滑・甌	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
23	常滑・甌	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
24	常滑・甌	口縁部片。胎土は砂粒を多く含み精良緻密。		
25	常滑・甌	口縁部片。胎土は細かい長石粒を含み、締まりやや悪い。		
26	盤	底部片。締め。二次焼成により淡く変色。胎土は砂を含み緻密。		
27	白磁・水注	体部片。水青色の釉。胎土精良。		
28	砥石	残存5.2×3.0×0.8cm。泥岩製。		

第3面土壙2出土遺物

29	かわらけ	7.1	4.4	2.0
----	------	-----	-----	-----

第3面柱穴1出土遺物

30	女瓦	胎土精良。凸面に繩目の叩き。I期。
31	女瓦	胎土精良。凸面に繩目の叩き。I期。

図11 2区第2面まで出土遺物 (数字はcm)

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	6.8	4.1	2.1
2	かわらけ	7.3	4.5	2.1
3	かわらけ	7.7	5.7	1.8
4	かわらけ	6.9	4.5	1.9
5	かわらけ	7.4	4.3	2.2
6	かわらけ	7.8	4.9	2.3
7	かわらけ	7.2	4.1	2.0
8	かわらけ	7.4	4.6	1.8
9	かわらけ	7.9	5.7	1.6
10	かわらけ	7.4	4.2	2.1
11	かわらけ	7.4	4.5	1.8
12	かわらけ	7.7	4.7	2.3
13	かわらけ	7.2	4.5	2.1
14	かわらけ	7.6	4.0	2.1
15	かわらけ	8.3	5.0	1.7
16	かわらけ	7.3	4.0	2.1
17	かわらけ	12.3	7.7	2.9
18	かわらけ	14.3	8.1	3.4
19	瀬戸・皿		6.9	3.7
		灰釉。胎土は精良。		2.5
20	常滑・鉢			口縁部。胎土は精良緻密。内面丁寧な横ナデ、口縁部にやや強い横ナデ。
21	女瓦			胎土は精良。繩目叩き。Ⅰ期。
22	女瓦			胎土精良。斜格子間に「大」字状の文様が入った叩き目。埼玉県水殿瓦窯産。Ⅱ期。
23	瀬戸・行平鍋			戸手付根部片。胎土綺麗やや悪い。黄灰色。灰釉、内面に釉の刷毛目。
24	砥石			砂岩、粗砥。3.5×5.3×4.2cm。
25	女瓦			胎土精良。繩目の叩き目。Ⅰ期。

図12 2区第3面覆土出土遺物 (数字はcm)

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	7.3	5.3	1.7
2	かわらけ	7.3	5.1	1.7
3	かわらけ	7.3	5.2	1.9
4	かわらけ	7.3	5.2	1.7
5	かわらけ	7.3	5.6	1.4
6	かわらけ	7.4	4.9	1.7
7	かわらけ	7.4	5.2	1.8
8	かわらけ	7.3	4.3	2.1
9	かわらけ	7.3	4.8	2.1
10	かわらけ	7.5	5.6	1.6
11	かわらけ	7.9	6.3	1.9
12	かわらけ	7.6	4.6	2.0
13	かわらけ	7.6	4.6	1.9
14	かわらけ	7.6	4.6	2.6
15	かわらけ	7.8	4.5	2.1
16	かわらけ	7.7	5.4	1.6
17	かわらけ	13.3	7.7	3.5
18	かわらけ	13.1	8.1	3.7
19	かわらけ	13.5	7.6	3.6
20	かわらけ	13.6	8.5	3.6
21	かわらけ	13.9	6.0	3.6
22	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土は緻密、灰色。		

23	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土は長石粒含み綺麗やや悪い。	
24	常滑・捏鉢	底部～体部片。胎土は長石粒多く含みやや粗い。	
25	常滑・捏鉢	口縁部片。胎土、素地はやや粗いが綺麗やや良い。	
26	瀬戸・折縁鉢	口縁部片。灰釉。胎土精良。	
27	かわらけ	7.4	4.3
28	かわらけ	7.8	4.9
29	手焙り	瓦質。胎土は砂を多く含みやや粘質。焼成や甘く、外面部磨き。	
30	手焙り	粘板岩。残存長9.8cm、巾7.2cm、厚み2.5cm。上下両面剥離。	
31	観・未製品		

図13 2区第3面覆土出土遺物

No.	器種	長石多く含み綺麗やや良い。東海地方産。離れ砂で長石多く付着。側面には自然釉付着。Ⅰ期。
1	女瓦	胎土は極精良。淡青灰色。繩目の叩き。Ⅰ期。
2	女瓦	胎土は精良。淡青灰色。繩目の叩き。Ⅰ期。
3	女瓦	胎土は精良。淡青灰色。繩目の叩き。Ⅰ期。
4	男瓦	砂粒、長石粒多く含み、粗いが綺麗やや良い。東海地方産。凸面横ナデ成形。Ⅰ期。

図14 2区第3面・3面造構出土遺物 (数字はcm)
第3面覆土出土遺物

No.	器種	口径	底径	器高
1	かわらけ	6.5	3.5	2.0
2	かわらけ	12.1	7.6	2.9
3	かわらけ	12.6	6.7	3.6

第3面落ち込み出土遺物

4	かわらけ	7.2	4.7	2.3
5	かわらけ	7.4	4.7	2.1
6	かわらけ	7.6	4.9	1.8
7	山茶碗窓系捏鉢			拓器質。口縁部片。胎土は精良緻密。灰色。
8	男瓦			長石粒を多く含み、綺麗やや悪い。赤灰色。凸面板ナデ調整、裏面は布目。東海地方産。Ⅰ期。
9	木製品			羽子板状を呈す。長さ22.2cm、最大幅6.3cm、厚さ0.4cm。
10	かわらけ	12.2	7.8	3.2

第3面柱穴1出土遺物

11	手焙り	脚部片。胎土は砂粒、石灰質粒を含み粗い。外面部磨き痕著。
----	-----	------------------------------

第3面下炭層出土遺物

12	漆器・鉢	口縁直径23.4cm。高台径13.9cm。高さ6.6cm。全体に黒漆。朱漆で描画(内底面に亀甲花菱文・外面部2条の線を影り込み上から6mm巾の線・口縁部)
----	------	---

写 真 図 版



▲1. 1区第2面全景

▼2. 1区第2面溝1



図版2



1.
井戸枠検出状況

2.

井戸枠検出状況



3.
井戸枠基礎材検出状況







1.
1区第3面墻石棟出狀況



2.
第3面墻石棟出狀況



3.
第3面墻石棟出狀況



図8-1



図8-2

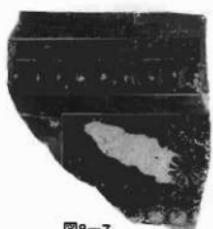
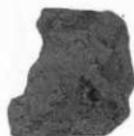


図8-7



図8-6



図8-8



図8-9



図8-5

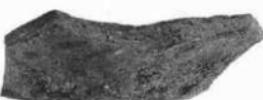


図8-10



図8-11

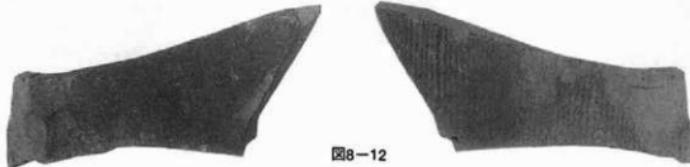


図8-12



図8-13

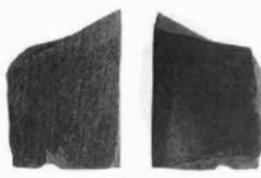


図8-14

1区第1面井戸覆土出土遺物



図8-15



図8-16

図版6



図9-1



図9-2



図9-3



図9-4



図9-5



図9-6



図9-7



図9-8



図9-9



図9-10



図9-11



図9-12



図9-13



図9-14



図9-15

1区第2面・第2面溝覆土出土遺物



図10-2



図10-5



図10-8



図10-3



図10-6



図10-9



図10-4



図10-7



図10-10



図10-11



図10-12



図10-13



図10-14



図10-15



図10-16



図10-17



図10-18



図10-19



図10-20



図10-21



図10-22



図10-23



図10-24



図10-25



図10-26



図10-27



図10-28



図10-29



図10-30



図10-31



図なし チャート

1区第3面・炭層出土遺物

図版8



図11-1



図11-2



図11-3



図11-4



図11-5



図11-6



図11-7



図11-8



図11-9



図11-10



図11-11



図11-12



図11-13



図11-14



図11-15



図11-16



図11-17



図11-18

図11-19



図11-20



図11-21



図11-22



図11-25



図11-23



図11-24

2区第2面まで出土遺物

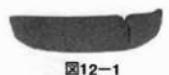


図12-1

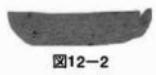


図12-2



図12-3



図12-4

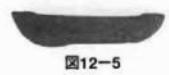


図12-5



図12-6



図12-7



図12-8



図12-9

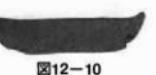


図12-10

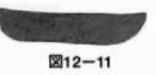


図12-11



図12-12



図12-13



図12-15



図12-16



図12-17



図12-18



図12-20



図12-21



図12-22



図12-23



図12-24



図12-29



図12-25

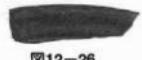


図12-26



図12-27



図12-28



図12-30



図12-31

図版10



図13-1



図13-2



図13-3



図13-4



図14-1



図14-2



図14-3



図14-4



図14-5



図14-6



図14-7



図14-8



図14-12



図14-10



図14-9



図14-11



2区第3面覆土・第3面造構出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ						
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書						
シリーズ番号	12						
編著者名	福田 誠、菊川 泉、神山晶子						
編集機関	鎌倉市教育委員会						
所在地	鎌倉市御成町18番10						
発行年月日	西暦1997年3月						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北緯 °°°'	東経 °°°'	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	道路番号					
ようふくじあと 永福寺跡	かながわけんかまくらしにかいどう 神奈川県鎌倉市二階堂字鶴子603番1	14204	61	35度 19分 29秒	139度 34分 16秒	19950707 ~ 19950922	128	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永福寺跡	寺院跡	鎌倉時代 ~ 室町時代	• 井戸 • 柱穴 • 磁石 • 溝 • 土壙	• かわらけ • 陶磁器 • 接器 • 瓦	

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 13

平成 8 年度 発掘調査報告（第 1 分冊）

発 行 日 平成 9 年 3 月

編 集 鎌倉市教育委員会
発 行

印 刷 朝日オフセット印刷株式会社